
バグ&バカとテストと召喚獣

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バグ&バカとテストと召喚獣

【Nコード】

N90790

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

明久には世間一般から色々と超越しすぎていると言われている妹が居た。幼少の頃からは比べられていたものの兄妹の仲はおおむね良好。そんな妹は今では言動だけ取れば不良娘。妹に振り回されながら自身が招きよせるトラブルによって……？

姫路・美波が好きな方は読むのを止めるか勉強合宿の前までで止める事を

推奨します。

プロローグ（前書き）

この小説には

原作崩壊・オリジナルキャラクター・キャラ設定改変

オリジナルキャラクター×原作キャラクターのCPなどが含まれております。

そういう要素に耐性がない方は退避を推奨します。

ブローグ

「チツ、トロトロ走ッてンじゃねエぞ、愚兄」

「一応兄扱いしてるのはいいけど”愚”って何さ!?”愚”って!?!」

「妥当な判断だろうがよオ」

通路路を走る二人の男女が居る。

一人は人相がバカな少年ともう一人は端正な顔立ちだが悪人面した少女だ。

会話からするとどうやら二人は兄妹のようだ——両方とも似ても似つかないのだが。

少年が前を向いて一生懸命走っているのに対して、少女は軽い動作で後ろ向きで走っている。

その地点で互角らしいのだが、少女は本気で走っておらず顔には余裕すら見える。

「そつちが早く起こしてくれないから遅刻してるんだろ!」

「目覚まし止めてるテメエが悪いンだろうが、待ってやっただけでもありがたく思えよ」

「相変わらず兄妹喧嘩か仲の良い事だな」

言い争いをしているうちに、どうやら校門の前にたどり着いたよう

だ。

校門の前には、隆起した筋肉を持つガタイの良い先生らしき人物が立っていた。

「おはようございます、t……西村先生」

「オハヨウゴザイマス、二十八号センセエ」

「吉井兄、何を言いかけた。そして吉井妹、お前は遠まわしに鉄人呼ばわりするな」

呆れながらも、二人の分の封書を探し出し差し出す西村教諭。
尚、この人物は生活指導教員であり、体育教師である。

「それにしても、妹はともかく、吉井兄は珍しいなこんな早い時間」

「え？」

「まだ七時三十分だぞ。そんなに早く結果を見たかったのか？」

西村教諭の話が一瞬理解できなかったのか思考が一時停止し、そのまま周囲を確認する。

流石に校門前には人は居ないものの（他の先生から受け取っている人が大多数）、

校舎内に入ろうとしている

生徒がちらほらと見受けられた、その光景を見て怒り任せに隣の人物を怒鳴りつける。

「百合子！！騙したな！！？」

「気がつくのがオセエ……ニュース番組も見てねエ奴に時間の指図をされる覚えはねエよ」

慣れた手つきで封書を破り、中身を覗きこむ吉井妹——吉井百合子。

ついでに紹介すれば怒鳴りつけた人物は吉井明久である。

百合子は封書の中身の紙に書かれた表記を見て適当に鞆に突っ込むとギロリというのが似合う

眼差して明久の封書を見やる。

「そういえば今だから言うがな、俺は吉井兄の事を

「ひょつとしてこいつ馬鹿なんじゃないか？」と思っていたんだ」

「くはは、正解だよ二十八号センセエ」

「いやいや二人とも節穴じゃないか」

「確かにな。こんな勘違いを起こすなぞ、俺の目は節穴だったとしか思えん」

そう言って、鉄人は深くため息をついた。

妹がせかし始めたので慌てて綺麗に封を切ろうとする明久が、中々苦戦しているようで開きそうに無い。

「そうですよ。そのうち、あだ名にふし穴が追加されちゃいますよ?。」

結局、きれいに開けることを断念した明久は、端をビリビリと破り出す。

「……吉井、お前への疑いは無くなった」

そして、中から折り畳まれた紙を取り出すとそれを開いて中を確認する。

当然とも言つかのように横から覗き込む百合子。

「吉井明久……Fクラス」

「お前は正真正銘のバカだ」

「二人してはもるな——！！！」

さし合わせたわけでもないのに息ぴったりのほり具合に明久は絶叫を上げた。

そして思い出したかのように、百合子へ尋ねる。

「ところでそういう百合子は何クラスなのさ」

「あア？Aクラスだがそれがどうしたんだ」

「……そうだね、百合子は僕と違って優秀だもんね」

「あア、褒めてるのはありがたいが答案用紙を落書き用紙に使ってたからなア」

「Aクラス入りでそんな落書きだらけの回答を出したのはお前だ」

けだぞ。

それなのに高橋教諭を軽く凌駕するとはどういう事なのか説明がほしいぐらいだ」

二人の様子を西村教諭は眉間に皺を寄せて眺めていた。

そして、忘れないうちに重要な事を言うべく明久に対して視線を送り。

「そうだ、吉井兄、裏側を見る」

「え、裏側って——」

への予定であつたが、学園最強の点数保持者のハンデとするためその者と同じクラスとする」

「——この扱いはあんまりなんですけど鉄人！！」

「素が出るほどなのはわかるが諦めろ、お前の妹がバグなのが悪い」

「喧嘩売ってんのかコラ」

裏面に書かれていたあんまりな宣告に明久の顔は沈んだ表情になる。ある意味ではFクラス入りの方がマシだったと思えるほどに、確かに最高設備であろうAクラスに入れば快適だろうが、扱いが酷すぎなのである。

「少しはテストで手加減してよ」

「私だけ大学レベルの問題をホイホイ出されてるんだが？」

「しかも問題が問題なだけに配点も高いからな」

「それによウ、落書きに時間かけてるんだから十分ハンデだろ？」

「どうしてその頭脳の一パーセントでもいいから僕に提供されなかったんだ」

「いいんだよ、愚兄はそのままの”良いバカ”で、点数なンざカ
ンケエネエ」

慰めるかのように一瞬優しい顔つきになったのを西村教諭だけは見逃さなかったが、その事は胸に秘めておいた。

「ツー訳で、とつと快適な施設に行くぞ愚兄」

「ちょ、耳を引っ張らないで千切れる千切れる！」

「安心しろ、別の方向にベクトル操作してるからな」

「あ、本当だ、痛くないってそんな問題じゃないからね！？」

そう言つてズルズルと耳が引きちぎれないような力加減＋ベクトル操作で

引きずって歩いていった。

先の表現で述べたため予想できるかもしれないが、彼女は超能力者である。

プロローグ（後書き）

あとがき

ふと明久の知能をそのままにAクラス入りを考えた。

尚、オリジナルキャラは明久の妹だけ

そしてチート能力保持者。ある意味では一番口調が難しい。

ここはこうした方がいいという感想受け付けてます（ペコリ）

プロローグ2（前書き）

やってしまった感があるがこの娘を明久の相手役として出したか
った

後悔はしていない。

プロローグ2

「——うわ、百合子凄いよAクラス」

「おい、愚兄」

何やら焦ったようなあからさまな態度に、哀れみの視線を送る百合子。

尚、Aクラスでは奇妙なものが存在している影響で騒がしかったのだが、

明久と百合子の姿が見えた途端納得したのか、全員が全員哀れみの視線を送っている。

「リクライニングシートにシステムデスク、個人用の冷暖房機に冷蔵庫がついてるよ」

「オウーイ、愚兄・通称吉井明久クウーン？」

百合子の声など聞こえないかのように、必死に中の様子を実況していく明久。

廊下を通る生徒は訝しげな視線を送りながらもさっさと他の場所へと向かっている。

「スクリーンもついてるよ………後はえーっと」

「そろそろ現実を見ろやコラ」

そう言って、教室の一角を指差す。

そこには、明らかに明久を対象とした設備がしかれてあった。
畳と卓袱台と座布団である。

「申し訳程度にノートパソコンと扇風機がついてるぞ、良かった
じゃねエか」

「とんださらし者だよチクショー」

「……百合子、おはよう」

「ンア？何だ翔子か、おはよう」

明久が打ちひしがれてorz状態になっているときに百合子に話しかける人物。

坂本翔子、致命的な間違いを犯しているように思えるが、確定事項だと思われるので

気にしない方向でいいだろう。

百合子の友人であり、その関係である程度明久とも親交があり、名前を呼び合う程度には仲が良い。

「やっぱAクラスか」

「……百合子がもう少し手加減していれば百合子が代表だったのに」

「獅子白兔って言うだろうが、オイ愚兄、そろそろ諦めて晒し者
になりに行くぞ」

「ふふふ、百合子が珍しく手を引っ張ってるよ……あ、おはよう
翔子さん」

「……おはよう明久」

「流石にこれ以上は哀れだろうが、つか、とっと戻って来いよ愚兄」

そのままズルズルと教室内に入る百合子・明久、その後ろをゆつくりとついていく翔子。

学園最強成績保持者と学年最低成績保持者、学年次席かつクラス代表が入ってくる光景に、

どういう反応を示せばいいのかわからないAクラスの面々だった。

明久にとって幸いだったのは、誰も侮蔑や嫌悪の視線を送ってこないところだろう。

が、やはり疑問に思われているのはしょうがないかもしれない。

「あ、意外とこの座布団座り心地が良いや」

「つか、シニールだよなこの場所」

「……寧ろ自由な姿勢で座れる分羨ましい」

明久専用のスペースである畳は、大きめな台の上に敷かれており、広さも十分ある。

二クラス分の人数が入っても十分な広さを誇る教室ならではの一人分の大きめなスペースで

ぶっちゃけ眠りこけるにも最適な広さがあった。

「布団運び込めば寝れそうだな」

「……ところで、理由はおおよそ判断できるけど何故明久が？」

「私のハンデ用員、詳しくは担任が説明すんだろ、詳細知らねえし」

その意見で、ようやくAクラス全員が明久のAクラス入りを認識した。

百合子の成績を知っている者達にしてみれば、確かにハンデでもなければ

他のクラスが挑んでくる事が無くなり、この学園特有の試験召喚戦争が

最悪成り立たないからだろう。

「単体科目最低点数が4000オーバーだったっけ？」

「イチイチ数えてねえよ」

「……目標が遠い」

「代表、あなたも十分異常だという事を理解してください」

余談ではあるが、百合子の影響なのか、翔子は触発されて点数がさらに跳ね上がっている。

相変わらず、とある”落とし穴”があるが、それでも高橋女史に匹敵する点数にまで届いている。

学年主席と次席に絶大ともいえる壁があり、次席と三席にも大きな壁が存在する。

正直、ハンデが無ければ誰も挑んでこようとは思わないだろう……大事な事なので二度言いました……それでも十分異常なのだが。

「皆さん、お早う御座います」

「才女センセーが来たぞ、愚兄とつと背筋伸ばせ」

「うちのバグ妹がスイマセン」

「もう慣れてます」

「噂どおり怖いもの知らずね、あんた」

ちなみに、百合子の席は窓際であり明久はその隣。

その隣には坂本翔子が座っており、その近くに木下優子が陣取った。

「本日から一年間、皆さんの指導をさせていただく高橋 洋子と申します。」

さて、皆さん。吉井君を除いて不備はありますか？」

「……皆と違うから後回しなんですネ」

「つつか、チェックすんのノーパソぐらいだろうが愚兄は」

そのような会話があったが、他には不備があるようには見受けられず、

誰もが手を挙げず不備はありませんと言う意見が上がっていった。

「さて、吉井君に不備はありますか？支給されているのはノートパソコンと扇風機と卓袱台、

座布団と畳スペースですが……それと、吉井君は吉井さんの冷蔵庫から限定ですが

受け取っていいですよ」

「愚兄、コーヒー以外ならイイぞ」

「うん、後で貰つとく……不備はありません」

「では、ハンドルのルールを言う前に自己紹介からしていただきましょうか。」

廊下側の方からお願いします」

「あ、はい私は――」

自己紹介の間、明久は頭を悩ませていた。

正直、馴染めるかどうかが不安だったからである。

妹である百合子と妹と親交のあった翔子とは面識があるものの、他とは完全にほぼ初対面である、木下優子はそれなりに知っているが正直会話経験は無い。

まあ、嫌悪的な視線に晒されていなかったから大丈夫だとは思うが、少し不安である。

「……坂本翔子」

「思わず流しそうになりましたが、きちんと”今の”姓を言うてください」

「……霧島翔子、趣味は読書」

「オイオイ、微妙に担任公認になってンぞ」

「やつぱりあの噂の原因は一途に雄二を思い続けているのが原因なんだね」

明久はいつの間にか置かれていた明久専用ドリルをやらされていた。これの出来によって明日の小遣いが決まる為か、必死に解いている。尚、今日の分の小遣いは昨日の総合点数〓 820円である。

ちなみにそのドリルの最大点数は5000点、その点数を取ればかなり余裕なのだが、

明久には随分と先の長い事になるだろう。

「工藤愛子です、得意科目は保健体育です。皆よろしくね」

「何か問題難しくなつてない？」

「気のセエだろ」

普通に私語は認められない時間なのだが、口元を押さえている上に声の向かう先に高橋女史は居ない……能力の無駄遣いである。

「あ、僕の番だ……えっと吉井明久です。場違いですがよろしく願います」

「ネタ無しかコノヤロウ」

「その突っ込みはおかしいわよ。木下優子です、今年一年お願いします」

「久保利光です、皆さんよろしく願います」

久保が自己紹介した折、明久に微かに悪寒が走ったのと百合子が目つきを鋭くしたのは同時だった。

「私は吉井百合子です。皆様これから一年間よろしくお願いいたしますわ」

『『その話し方は違和感がある（あるわ）（あります）（あるよ）』』』

「オイ、才女センセエも声を揃えんな。ち、吉井百合子だ。」

面倒臭エが一年ヨロシク」

敬語全開で自己紹介したら駄目だしされ、多少不機嫌になりつつもどっかりと座り込む。

その後、後ろの方の自己紹介も終わり、一人を除いて全員がそろった事を確認する高橋女史。

「あれ？姫路さんは遅刻かな？」

「愚兄、姫路は途中退出だ……つまり一人欠席か遅刻」

「すいませーん、遅れましたー」

教室に慌てて飛び込んでくる小学生ぐらいの少女を見て、全員が呆気にとられた。

当然だろう、どう控えめに見たとしても小学生にしか見えない少女が入ってきたのだから。

「構いませんよ、連絡は来ていましたから。それでは島田さん一度イイタイミングですの

自己紹介をお願いしますね」

「は、はい。島田葉月、11歳です！愛しのバカなお兄ちゃんのために

頑張って飛び級してきました！！」

『『吉井君、犯罪は駄目でしょ（だろ）』』』

「いやいやいや、そうじゃなくていくらなんでも小学生が飛び級してきた事実には驚こうよ！？」

「は、まさか貴様の仕業だな百合子！！」

「アン？ただ私はみっちりと飛び級できるように勉学を叩き込んだだけだぞ、

後はあの葉っぱ娘の実力だ」

自己紹介に飛び入り参加してきた島田葉月は、そのまま空いている百合子の席の

後ろへとトテトテと駆けていった。

その様子を微笑ましい笑みを浮かべて大半のクラスのものは視線を送る。

そして、少しして落ち着いた後、全員が気になっているであろうハンの話に移りだす。

「まず、スクリーンをご覧ください」

「吉井百合子……」

現代国語：9537点 古典：7043点 数学：17935点

物理：8672点

化学：7541点 日本史：7822点 世界史：7245点

現代社会：8042点

英語：7345点 保健体育：4008点

総合：85193点」

『『』……先生、本当にあの人間ですか？』』』

「天才のお姉ちゃん凄いです…！」

「……やっぱり遠い、でもいつかは」

「……クラスメイトにその反応は駄目ですよ皆さん。葉月さんと霧島さんを見習いなさい」

「点数見ただけで人外扱いかよ」

「相変わらず、保健体育は苦手なんだ？」

「いやいやいや、あの点数で苦手はおかしいから！十分異常だからね！」

クラスメイトの反応や高橋女史の反応にもう慣れたと言わんばかりに投げやりになっていると、
相変わらず、冷静に苦手な分野を指摘する明久とそれに突っ込みを入れる優子。

尚、葉月は眼を輝かせてその強大な点数を見ていた。

「とまあ、このように異常な点数を持ち、尚且つ凶悪な能力を召喚獣自体が保持

している為、ほぼ撃破不可能ですので、百合子さんのクラス限定である特殊な

ハンデが였습니다」

生徒に対して異常は言いすぎだと思っただが、正直誰も指摘しなかった。

そして高橋女史はキーを叩き始め、そのハンデの内容をスクリーンに映し出す。

そのハンデの条件はこう記されていた。

- 吉井明久が戦死した場合、吉井百合子も戦死するものとする。

また、代表を除く点数上位三名以外も戦死扱いとする。

- 吉井百合子が存在するクラスは他のクラスに対して宣戦布告をする事が出来ない

ただし、このルールはFクラスの設備である場合は除くものとする。

- 吉井明久は試験召喚戦争中、吉井百合子の半径20メートル以内に入ってはならない。

- 吉井明久の護衛は一人までとする。また、その護衛が戦死しても補充は出来ない。

- 吉井百合子はクラス代表の傍に居てはならない。

- 吉井百合子は自らが宣言して攻撃する事を禁ずる。

ただし、クラスの人数が5人以下になった場合は代表格以外への自分からの攻撃を認める。

●吉井百合子は自身が戦死し補修室送りになるまで補給試験を受ける事が出来ない。

ただし定期試験についてはその限りではない。

「このようなハンデとなります」

「面倒臭エ」

「まあ、私たちはAクラスだしそんなに出撃するような状況にはならないと思うわよ？」

「点数最下位だからってこの扱いはあんまりだ」

「大丈夫です！バカなお兄ちゃんに葉月が守ります！！」

「ありがたいけど、僕が情けない！」

「……明久の強さは点数じゃない」

「実質減った点数は定期テストでの回復だけかー」

ハンデの表示をして、次の授業の準備がありますのでといいながら、一定時間後に自動的に

切れるように設定し、高橋女史は教室から出て行った後、百合子と明久の周りに数人が集まり

他の者達もそれぞれが仲の良いクラスメイトと軽く雑談する。

正直、最初のハンデが大分厳しいものがある。

明久が戦死した地点で、ほぼクラスの全員が戦死するのはかなり痛いところである。

「うう、僕は弱点扱いか」

「いや、誰も責めないと思うわよ……妹さんの性能が高すぎるのが悪いような気もするし」

「上手く立ち回らせればいいだけの事だし。あ、僕の事は愛子でいいよ」

「皆さん、葉月の事は葉月でいいです！」

「……雄二、他の女の子にちょっかいを出すのは許さない」

「……代表（翔子さん）（綺麗なお姉さん）は急に何を言ってるの！！？」「」「」

「オイオイ、雄二のクラスで愉快的事でも起こってんのかア？」

ちなみに、久保は他の男子グループと話したため明久の方には来られなかった。

今の明久は傍目から見ればハーレム状態なのだが、それを腹立たしげに見る集団は居なかった。

これが他のクラスであればそうは行かなかっただろうが。

ともかく、予想していたよりも三人ほど多く話す人間が増えてホッとした明久であった。

突っ込みのタイミングが一致した事も合わさってなんだか仲良く慣れそうな気もした。

その頃、Fクラスにて

「すみません、遅れま「遅いぞ、とつとと座れうじむ……………すまん、

明久だと思っ たんだ悪気は無い姫路」……………グス」

『『『何で、姫路さんが……………？の前に坂本！姫路さんを泣かせやがってクロス！！』『』』

「ぐおおおお、明久のバカ野郎おおおお！！！！…って何か別の寒気があああ！！！！？」

「うう、何で妹に負けてるのよ、うちは」

会話中にこんなやり取りがあったそうなの。

プロローグ2（後書き）

実際の改変点やオリジナルキャラの説明はプロローグ3が
終わってからです。

次の投稿は明日辺りにでも

プロローグ3（前書き）

基本Aクラスサイドは今描写している方々で話が進みます。

ブローグ3

「……………ついていけない（です）」

「おら、わかりやくす纏めておいてやったぞ」

「ありがとう……………振り仮名まで振らなくても読めるよ!!」

「そっぴゃ、FクラスがDクラスに宣戦布告したらしいな」

「無視するな!……………うん、そうらしいね」

何やら、慌しく出て行った高橋女史に対していきなり初日に試験召喚戦争が

始まる事が判明して、情報を収集したところFクラスがDクラスに對して

今日の午後に戦線を布告する事が判明した。

Fの戦力やモチベーションを考えれば一か八かの要素が強いが余裕だろう。

ちなみにAクラスは他のクラスと違い、始業式初日から授業である。

「結局姫路さんはFなのかな」

「仕方ねエだろ、途中退出は0点扱いだぞ……………ま、いくらFクラスでも

姫路が居ると言う情報の前に攻めれば切り札を知られない状態だから

結構余裕だろうな」

「翔子さんは雄二の狙いわかる？」

「……多分、戦争を交渉で終結させてBクラス・そしてこのクラスに

何ならかの条件で挑んでくると思う」

（去年の様子からして明久を戦力として期待してたみたいだが大丈夫なのかア？）

観察処分者の利点、それは普段から雑用などで動かす事による経験力。

Cクラスまでなら、ほぼ敵無しでBクラスでも上位の相手で無い限りまず負ける事が無いと推測される。

つまり、百合子に課せられたハンデは実際には明久が弱点である事が前提なのだが、

その理由により一対一ではほとんど戦死させるのは厳しい能力なのである。

しかし、明久自体の脳のスペックが悪いのか二人以上だとほとんど利点が消えるのだが。まあ、結局のところハンデがある以上Bクラスが

最大の敵になるだろう。

「825点、明日の小遣いは825円な」

「結構出来たと思ったのに……！」

「出来ました、天才のお姉ちゃん！」

「3850点、まアまアだな」

「……私も」

「カンスト、もう少し上限増やす問題持つてくつか」

「採点はやいわね」

昼休み・明久以外にも問題を要求してきた二人に対してもほとんど高速に近い採点で点数をつけていく百合子。

上限が5000なのだが、それ以上の点数を取った翔子には簡単にカンストが可能である。

ちなみに補給試験のようなまとまった時間は取れないのでその分問題のランクを

落としていたり点数を上下させていたりして、昼休みの休み時間までにおおよそ

補給試験相当の量をこなせるように計算してある。

「翔子さんはまだしも葉月ちゃんに負けた」

「同じように教え込んだのに何でこうも出来が違ったんだろっな」

「のめりこみ具合の差じゃない？」

「否定出来ねエなア」

「うう、それでもテストの時はもう少し上だったんだよ？」

「それでもバカやつちまって最下位だな」

その時の明久は試験中に倒れた姫路を気遣いそのまま保健室へと運んだ為、

0点扱いで同率最下位である。

もつとも、実際に解けたとしても問題集のときよりも点数が下なのであまり意味はなかったのだが。

「……そういえば、補給試験どうするの」

「んー、今日の放課後に受けとく」

「二十八号センセエのところにやって来るンだったか？」

0点扱いの明久は補給試験を受けないと試召戦争を挑まれても明久は戦えず、

ハンデの内容の影響で最強も同時に戦死しさらに上位数名を除き戦死扱いとなる為Aクラスの戦力は軒並み脱落してしまう。

流石に戦っても居ないのに戦力大幅減少は避けたいので少なくとも今日中には回復させる必要がある。

「幸い、まだ挑まれてないから余裕はあるよね」

「……上位クラスは挑まれたら拒否できない」

明久0点の情報が漏れればあつという間に攻め込まれて脱落だろう。足止めして明久の補給の時間を作ればそれなりに戦えるが、万が一にも

挑まれてしまえばその地点で一気に数が減少してしまう。

「一クラスとまともに戦えるのはこの学園じゃ一人だけだし」

「何処のバケモンだそりゃア」

「『あんだだあんだ』」

「天才のお姉ちゃん、凄いです」

ちなみに今この場には明久・百合子・翔子・葉月・優子・愛子がそろっている。

会話している場所が畳の上、何故かAクラスの中でもそのスペースは好評だった。

畳の上で崩した格好で寛げるのが大きな理由を占めている。

もっとも、一番利用できるのが明久とその交友関係だけに絞られてしまうのだが。

そのせいなのか、隅の方に予備の畳までつまれ予約制で利用されているらしい。

「申請したら十数分で利用可能ってどうなのよ」

「それだけ優遇されてるって事だろ？」

「オォーイ、佐藤。テメエはFクラス覗いたんだよなア、どうだったんだア」

「え、吉井さん？あ、ええつと、なんというか……廃屋って感じだったよ」

佐藤の話を要約すると、こんな感じだった。

窓はひび割れており風通しが良さそうに見えた。
床は畳だが明久の座っているものとは違い、何か古臭かった。
チヨークがほとんど支給されていなかったらしい。
卓袱台の足が折れてるのも存在していた。
教室中の至るところに蜘蛛の巣があつた。
分度器や定規があちこちに刺さっていた。
粉碎されていた教壇を片付けているのが見えた。

「一部施設関係ねエな」

「分度器とかはただ単に争っただけだね」

「そういえば、お姉ちゃんもFだけど大丈夫かなあ」

「私も弟がFクラスなのよね」

「クラスに女生徒が二人だけって不便そうね」

さてと言いながら百合子は明久に適当に催促する。
その様子に呆れ顔をしながらも明久は自身の鞆から弁当箱らしきものを
取り出し、一つを自分のところに置き、もう一つを百合子に差し出す。
ちなみに、他の面々も既にここで食べる気満々なのか弁当を広げていた。

「……相変わらず百合子は作らないの？」

「面倒臭エだろうが、食う分には構わねエが作るんなら適当に

コンビニにおいてあるようなチョコやらチーズやらの味がする奴で十分だ」

「適当に野菜をそのまま齧ったりしてるしね」

一体どういう食生活を送っているんだろうと、優子と愛子は視線を合わせて思った。

少なくとも明久が料理を担当しているようなのでまともだと思うのだが。

「天才のお姉ちゃん、凄い食べ方」

「……って、箸を使いなさい！箸を、それが駄目ならせめて体の一部を！」

卓袱台を軽く小突きながら自分の分の弁当から飛んできた物をそのまま口を

開けて食べていく百合子。

奇怪な食べ方で、小突いたときの振動をそのまま凝縮させて食べ物を放出させそのまま口に向かうように計算しているだけだ。

「葉月もやってみたいです！」

「良い子は真似すんな」

「誰も出来ないから安心しなさい」

そのまま淡々と食事が続けていく。

そして、食事が終わった後、他の戦力分析の為なのか見てくると言い、

百合子はそのまま教室を出て行った。

「戦いに来るといったら来るのはBかCぐらいかしら、代表の言った事を除けば」

「……明久を集中狙いをされると少し厳しい」

教室では残されたメンバーが明久の支給された問題ドリルの点数を見ながら、戦い方や戦力を検討していた。

「オォーイ、ね・も・と・クウーン」

「ひ、何だよ吉井妹」

「吉井の妹が来た瞬間に恭二が窓の外に！？」

まずはBクラスだと笑いながら突貫したところ、根本が百合子の姿を認めるや否や瞬間移動もかくやという速度で窓の外に飛び出し、顔だけ覗かせると言った状態になった。

その様子と一緒に話していた友人は驚いた表情をしていた。
尚、去年の仕置きの様子を知っている生徒は恭二に対して同情的な視線を送っていた。

「やっぱ、Bクラスか」

「くそ……どうせこれが俺の素の実力だよ」

「まあまあ、それでも代表なんだからいいと思うんだけど」

「そうだよー」

「さ・て・と……今日は見学に来ただけだ、じゃアな」

そう言つて教室の人間をぐるりと見回した後、立ち去つて行つた。

「何しに来たんだ」

「偵察だと思うが……ハンデがあるが積極的に攻撃にはうつろつとは思わん」

「ふーん、そろそろ教室内に戻ってきたら？」

「腰が抜けた、引き上げてくれると助かるんだが」

『……………』

その後割りとすぐに数人がかりで根本は引き上げられた。
去年の仕置き事件の後、卑怯な事を行わなくなつた為それなりには人望があるらしい。

もっともその犠牲が極度のトラウマと交際相手との破局なので
代償はかなり大きいのだが。

「たっだいまー」

「え、早くない？」

「百合子はベクトル弄って速さ上げられるから」

「それにBクラスしか覗いてないからなア」

そして、どつかりと明久の畳スペースに座り込む。
今更だが、全員畳に上がるときには当然上履きを脱いでいる。

「Bって根本って奴のクラスよね……一年の前半辺りに色々やら
かして評判が

悪いつて言う」

「といっても百合子がお仕置きしたせいで大人しくなったけどね」

「え？お仕置き」

「愛子は知らないんだっけ。吉井君に危害加えたせいで町内が戦場と化したのよ」

「あ、もしかして二人戦争事変？」

二人戦争事変……文字通り戦争を行ったのは二人だけであり、その人物こそ

根本と百合子なのである。

流石に新聞上では名前こそ伏せられていたものの地球の自転が一瞬止まったり、

局地のみに大規模な地震が発生したりと規模が広がっていれば最悪死人が出ていたであろう事件である。

「最後には結局”リアル高い高い”をやって気が済んだから収まったけど」

「何、その”リアル高い高い”記事には普通に警察の説得でようやく止まったってあったけど」

「私も知らなかったわ」

「……………あれは見てる方もトラウマになる」

「えつと……………」

「説明しなくていい」

なんとなく察しがついたのか話すのを止める優子。

しかし、一つ妙な考えが浮かんできた。
それにもうすぐ昼が終わる。

「FクラスとDクラスの戦争か……どうせ授業は潰れるし見に行くとスツか」

「あ、葉月も見に行くです」

授業が潰れるのは簡単、教師が駆り出されるからである。

そのため自習になるのだが、せっかくの機会なので今学期初の戦争を見に行く事に

した百合子と葉月。

翔子や明久を含め誰も止めなかったので、仕方なく優子は一応自習の形は取っておいた。

設定（前書き）

この項目は追加される可能性が大きいです。

設定

吉井 百合子 <よいい ゆりこ>

明久の双子の妹。

外見的特長は眼差しが鋭いアキちゃんなイメージ。
髪は伸ばしている。

ベクトル能力で反射をしているのだが、別に白髪になっていたり赤い目になっていたりしない。

もともと多少白くなったり赤くなったり程度にはなっているが。

成績は学園最上位で、この世界では説明や解明が不可能な超能力を保持している者。

能力未使用状態でもそれなりの身体能力を持っているが、能力をほとんど使用状態の為あまり知られてはいない。

交友関係はほとんど兄依存で、自分から作った友人が

霧島翔子ただ一人だけである。大人よりも無邪気な子供の方を好むが、

最近大人の中でも数人だけに興味関心を持っている模様。

ついでに言えば、翔子を除き親しいものは自分で考えたあだ名でしか

呼ばない。

尚、趣味は株取引で無駄に演算能力を発揮させて

儲けまくっており、親の支援は無い状態でも十分に贅沢な暮らしが可能。

切れた時には対象を「三下」と呼ぶ。

その時には口調も下品なものが比較的多くなり、明久か翔子が止めにでも入らない限りはほぼ止まる事は無い。

好きなものや人（ ）は主にあだ名

兄（愚兄）、翔子、西村教諭（二十八号）、高橋教諭（才女）、

学園長（種別妖怪）、コーヒー、葉月（葉っぱ娘）、姉（キス魔）

ゲームや漫画（兄の影響）、何か（誰か）の為に頑張れる人物

嫌いなもの

特に無し・強いて言うのであれば親しい者に精神的肉体的に危害を加えるもの

あとはそもそもほとんどが無関心な為嫌いと言う分類にすら含まれない。

召喚獣の設定

明久の召喚獣を少女形態にし、髪を伸ばしたような状態で武器は無し。

さらに、反射設定は無いもののベクトル変換能力の弱体化バージョンまで

保持しており、精密な動きをせず加速させたスピードと点数で蹂躪するのを

得意とするタイプ。

腕輪の能力 不明・と言うよりデフォルトでついてしまった能力が

強力なので未使用状態

・本作の改変設定

・百合子と交流関係により、明久と翔子が名前を呼び合う程度には親しい友人。

・葉月が百合子の一年間にも及ぶ特訓により飛び級かつAクラス上位の成績。

・明久のFFF団未参加

・吉井家が多少豪華になっている、百合子の株の稼ぎの影響である。

明久は小遣いの関係上、漫画やゲームがほとんど買っていない。

・翔子が百合子と勉強した影響で原作よりもテストの点が上昇。

技術は劣るが点数自体は高橋教諭に匹敵。

・どこかの屑は調教済み……が、極度のトラウマを植えつけられている。

さらに言えば、交際関係は原作と違う。

・施設、BからEは独自に設定

問：1 Dクラス戦見学（前書き）

なかなか長くかけないorz

問：1 Dクラス戦見学

「オウオウ、やってやがる」

「これが試召戦争ですか」

「……今は他のクラスは自習の筈なのですが」

高橋教諭の後をくつついて戦争の風景を眺める百合子と葉月。尚、葉月が見渡せるように肩に乗せている状態である。

高橋教諭が呆れ顔で二人を見ているのだが、戦争中に傍観してはならないというルールは無い為、黙認している。

「雄二の奴ア居ないな」

「お姉ちゃんも見かけないです」

「お、木下弟発見……前衛部隊か、崩壊寸前だな」

ちなみに全員が戦争に集中している為なのか、百合子達の存在にはまったく気がついていない模様。

「そういや、才女センセエ……ハンデの通達って済ませてあるのか？」

「許可します！……代表には渡るように指示してあるので、

早いところではもう既に通達されていますよ。

おそくとも明日の朝でしょう」

担任じゃなくて代表に渡すという点では、戦争の意思を決める為には必要な手段だろう。

担任だけに渡っていては、いざと言ったときの確認がおろそかになる可能性があるし、そもそもEやF、特にFはでは板書するような行為すらも

苦勞するほどのだ。

「ほう、そうか」Dクラスの朝倉がFクラスの吉井に数学で勝負を挑みます」

「え？え！？」「吉井君はFクラスではないので許可しません」

……

愚兄も見学に来たのかよ」

「百合子、携帯忘れてる上に鳴ってる」

「誰だ？もしもウシ……………何の用だ種別妖怪。

『相変わらずそのあだ名かい、まあいいちょっとトラブルが発生したから

来とくれ』

あ”？ち、行けばイインだろ」

どうせスパコンの代用として呼ばれたのだろうが、生活態度を大目に見て

貰っている身としては行かないわけにはいかない。

面倒くさいと感じつつも、いつの間にか葉月を明久の肩に乗せて――

「って百合子ー！？いつの間に肩に乗せたー！？」

「んじゃ、葉っぱ娘に戦争風景を見学させとけよ愚兄」

「戦争関係者以外は廊下は走らないように………飛ぶのはどうしましょう」

廊下を走ろうとした百合子を止めようとしたが、普通に飛行状態に入った

百合子を見て、高橋教諭は規則の穴をついた百合子にどう注意したものか

悩んでしまった。

というより、人が空中を自分の意志で行動している事に対して、誰も疑問に思わないのは相手が百合子だった為である。

既に飛行は日常茶飯事の光景のようだった。

「吉井と葉月！？」

「あ、お姉ちゃんです」

「島田さん、戦争中によそ見しちゃ駄目だ」

「何故吉井君は私の背中に隠れているのですか」

前線部隊と入れ替わるようにして入ってきた島田が明久の姿を認め、召喚獣に指示を出しながらも意識をそちらへと向ける。

「そうですね、お姉さま。余所見をするなら私に視線を向けてください」

「げ、美春！そう言えばあんたDクラスだったわね」

「お姉さまに見捨てられはや数ヶ月。一日千秋の思いでこの時を待っておりましてわ！」

「お、お姉ちゃん……？」

「ち、違うのよ葉月！美春、うちの事はいい加減諦めなさい！！」

姉の話してくれなかった学園での一面を見て、目が点の状態で両者のやり取りを見ていた。
尚、明久は遠い目をしながらそのやり取りを眺めていた。

「そんな美春とのあの激しい夜は嘘だったのですか」

「激しい夜って何ですか、バカなお兄ちゃん」

「葉月ちゃんには知らなくてもいい事だよ。というより

どうかそのまま居てね」

「そんな事実はない！」

「仕方ありませんわ、力づくでも……Dクラス清水美春が

Fクラス美波お姉さまに化学で勝負を挑みます！！召喚獣召喚
！！」

「く、召喚獣召喚！」

——Dクラス・清水美春：化学94点　vs　Fクラス・島田美波：
化学53点——

教師によるフィールドが展開され、ふたりの掛け声と共にデフォル
メ化した
愛くるしい自身の分身が出現する。

「わー可愛いです。お姉ちゃん、頑張れー」

「葉月の応援が痛い……」

その後、葉月の応援効果なのか多少奮戦したが、点数差に押し切ら
れ、

一か八かの突撃も容易くかわされ、喉元に武器をやられる。

「さあ、ここまでですわ」

「ほ、補習はいやー」

「補習？まあ、確かに補習ですわね」

そう言つて島田の手を引っ張つてく清水。そこで傍観者の二人は
向かっている先が保健室である事に気がつく。

「さあ、お姉さま今の時間ならベッドは空いてますわ。」

美春との愛の補習ですわ」

「ちょ……！やめなさい美春！ウチはまだ人生を終えたくないわ！

そのDクラスの人、戦死させて」

「え？………さあて、他の相手は何処かなー」

島田の悲鳴を聞き、何事なのかと見るが、清水が運んでいる光景を見て

あからさまに視線を逸らして他の敵を探し出す。
ある意味では賢明な判断である。

「た、助けて吉井！！」

「ごめん、僕別のクラス」

「バカなお兄ちゃん、何で向きを変えて葉月の耳を塞ぐのですか？」

「いやあああああああ！！？」

そして、そのまま誰の助けも入る事無く、島田は保健室の中へと消えていった。合掌。

「Dクラスの連中が船越先生を連れてきたぞ！」

「落ち着け、坂本が作戦を出した」

全員が全員先ほどの光景を無かったかのように振舞っていた。

「作戦って何だろう」

その時、放送が入った。

「オラ、演算終わったぞ種別妖怪」

「さすが世界最高の頭脳さね、あんたを超える演算能力は

いつ出来上がるのかねえ」

「さあな、つとことここの部分を直せば障害は無くなるはずだ」

学園長である藤堂に呼ばれ、百合子は開発の作業を手伝っていた。

今、手を加えているのは今度の清涼祭の商品にもなる予定の”白金の腕輪”である。

不具合が無いかを確認する為にわざわざ戦争中ではないことを確認して

呼び出したのだ。

放送で呼び出しても良かったが、戦争している者の邪魔になるだろうと判断し、

百合子の携帯にかけて呼び出したのである。

「とにかく助かったよ、このミスを検索するのに下手すりゃ大会以降まで

掛かる予定だったからね」

「ま、大会で盛り上がっていざデモンストレーションしたら爆発ナンざ

イメージダウンにしかならねエからなア」

そついいながらも頭に浮かんである設計図を今の技術などと照らし合わせて

修理出来る箇所の補強の案を紙に書き記していく。

紙を見ずに精密かつ素早く書き記す様はもはや人間の域を超えているといえよう。

「出来たぞ、種別妖怪」

「助かったよ、ふむ……大会には間に合うね」

作業が終わってから、学園長に差し出されたコピーを受け取り、適当に開けて流し込んでいく。

「女の子が大口開けて飲んでるんじゃないよ」

「別にどう思われようが関係無エ」

そう言って、簡単に缶に振動を与えてそのままベクトル操作で

一滴残らず飲み干す。

「さて、続きを見に行くとスツか」

「はあ、邪魔だけはするんじゃないよ」

と、その時放送の合図が鳴り響いた。

一体何事だ？と百合子は首をかしげる。

『船越先生船越先生、——君が体育館裏でお待ちです。』

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「愉快的作戦だな、オイ。名前表示してねエのに行くわけが」

「そうでもないさね」

「アン？」

学園長に指し示され防犯カメラの映像を見ていると、

船越教諭が体育館裏へとイソイソと駆け出していく姿が発見された。

「……………なあ、うちの近所にルックスはいいが婚期の遅れた

おっさんが居るんだが、紹介しに行っていないかア？」

「戦争が終わった後ならね。でないとあんたが呼び出した事に

なっちまうよ」

船越教諭の行動に大人嫌いの百合子が哀れみの視線を送っていた。名前すら示されていないのに行くとは……。

「ま、それはそうと……そろそろ決着のつく頃だから

見に行ってくるア」

「ほいさ、行つといで」

そして、百合子は学園を後にした。

その手にポケットから取り出した電話帳の紙片を持って。

「あ、おかえり百合子」

「たっだいまア。葉っぱ娘、どんな感じが理解できたかア？」

「はいです」

戻ったときには、Dクラス代表が出張しているところで、さらには雄二も出てきており、最終局面であることは理解できた。

「確かに、このままじゃアウトだ……だから、頼んだぞ！姫路」

「えっと、平賀君」

「あれ？姫路さんAクラスはここを通らな……」

あ、吉井妹ならあそこに」

「いえ、違います。Fクラス・姫路瑞希がDクラス代表平賀君に

化学で挑みます！召喚獣召喚！」

「え、は、はあ、召喚獣召喚」

——Fクラス・姫路瑞希：化学385点 vs Dクラス・平賀源
二：化学184点

「え、あれ？」

「す、すいません！」

平賀が何が起こっているのかわからず混乱しているところに、
姫路の召喚獣が自分の倍はあるだろう大剣を振り下ろし、
今学期最初の戦争はFクラスの勝利で幕を下ろした。

「とまあ、代表が倒れたらその地点で戦争は終了ってわけだ」

「なるほど、理解しました！」

「そろそろ教室に戻りなさい」

NGシーン

「さて、続きを見に行くとスツか」

「はあ、邪魔だけはするんじゃないよ」

と、その時放送の合図が鳴り響いた。
一体何事だ？と百合子は首をかしげる。

『船越先生船越先生、吉井明久君が体育館裏でお待ちです。』

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「須川くウウウーン！！！！！！」

ア・ソ・ビマショオオオオオオオ！！！！！！」

その放送を聴くや否や背中に黒い翼を生やし音速を超えた速度で廊下を疾走しだした。

何気に周囲に被害が及ばないように衝撃波のベクトルは百合子の手に凝縮されている。

『え、吉井妹！？待て、何だその後ろの禍々しい色の羽は……』

しかも手から何か——ぎゃあああああ——プッ

「一体何やったあのジャリ娘」

数分後、校庭に首だけを出し目がうつろな状態の須川が発見された。

問：1 Dクラス戦見学（後書き）

描写が短かったりするのが目立つなあ……
次はもう少し内容が伸びるよう努力します。

問：2 宣戦布告？（前書き）

演算能力＋大気の流れで検索できると信じている。
と言っても流石に地域限定ですが。

問：2 宣戦布告？

「この子は天才だ」

「百合子ちゃんは素晴らしいわ」

百合子の子供の頃の夢……夢を見ている状態なのだが、百合子は、この状態を完全に夢だと理解しており不快な表情をしていた。そう言えば、この頃はまだ完全には捻くれてなかったと思いながら。

「なんて事だ、わが国のコンピュータではもう勝てない。」

なんて演算能力を持っているんだこの子は」

「ち、銃が効かない……おい、誰か対戦車砲を持って来い！！」

小学生の頃、この時には完全に能力が開花し、スーパーコンピュータの

演算処理能力を超えるように至った。

今でも上がっているような実感はあるが、この地点で既に異常な事態に

なっており、危険視した危険思考の大人が暗殺を試みたが、

能力も開花している状態なので、結局通用せず殺しはしなかったが、脳の電気信号を操って全て廃人にした記憶。

未だに生かされているものも多いが、その者達は生命活動に必要な行動しか実行せず、淡々と死を待ち続けるという異常な状態となっており、それにより世界の闇の組織は百合子に手を出すのをやめた。

一度家族を人質に取ったが、あっという間に奪取され殲滅されたのも

理由の一つとしてあるのだろう。

「おい愚兄、いつまで構ってくるんだ」

「ぼくはゆりこのおにいちやんだぞ！いもうとのめんどろを

みるぎむがあるんだ」

バカはたまに強いといったところで、百合子がいくら世間で異常と言われたり、天才ともてはやされていてもまったく態度を変えない兄。

どう演算処理してもまったく思考を計算できない兄に頭を抱えながらも

悪い気はしなかった。

「ねえねえ、ゆりこはたんじょうびになにがほしい？」

「あ？いら……そうだなア……あれが欲しい」

断つてもしつこく絡んでくると解かっていたのか適当にテレビで見た小鳥を欲しいとねだっておいた。

難しそうに眉間に皺を寄せていたので諦めるだろうと思っていたのだが。

そして、その日以降しばらくのあいだ、明久は行方不明になっていた。

早朝、吉井家にて百合子は汗を大量にかき、呼吸が荒い状態で飛び起きた。

「…………胸糞ワリイ夢見だ」

そのまま二段ベットの上の部分を八つ当たり気味に殴る。

その衝撃にもまったく動じず、明久は眠っていた。

兄妹が同じ部屋で寝るのは異常だと思うのだが、

明久の脳がオーバーヒート状態になるまで難しい単語の羅列を耳元でささやき、無理やり承諾させた。

それはさておき、そのまま跳躍し、明久の寝顔を見れるような位置につく。

「相変わらずのバカ面だな」

間抜けな寝相を晒している明久をたっぷり三十分近く眺めつつ、百合子はさっさと着替えてリビングへと向かった。

部屋から出るときに目覚まし時計を二十個ほど設置しつつ。

「あー、コーヒー切らしてたか、まあいい。牛乳だけでいいか」

「百合子ーーーーー!!!」

冷蔵庫を漁りながら飲み物を探していると、微かな騒音が聞こえその全ての音が止まるのを聞いた後、明久が怒りの形相でリビングに文字通り転がり落ちてきた。

「オハヨウサン愚兄」

「百合子！！お前か、二十個も目覚ましをセットしたのは！

お陰で夢の中で葉月ちゃんや翔子さんの顔が

目覚まし時計になったんだぞ！！

しかも雄二やムツツリー二達はいつも通りで！！」

「どういう夢だそりゃア！？」

セツトしておいて、そんな愉快な夢を見た明久に呆れつつも

驚愕の声を上げる。

ちなみにそれほどの目覚ましの音が鳴っても、

こんな大声で会話していても、

防音使用なので、外には音が漏れることは無い。

「まったく、そう言えばFクラスが今日はBクラスに

宣戦布告する予定らしいね」

「そりゃあそうだろ。ムツツリー二やDクラスに

指示を出すであろう室外機の破壊。奇襲を考えれば勝率として
は高めだしなア」

悪知恵を働かなくなり、正攻法で行く事を心がけている
根本では余計に通用するだろう。

が、一番心配なのがヒステリックな女の事だ。

「Dクラスを撃破した話は流れているだろうし、Cクラスを飛ばして

Bクラスを攻めるFクラスに何らかのアクションを起こしそうなもんだが」

「え、Eクラスは」

「あのクラスは部活の事で頭がいっぱいっばいだ」

百合子の言い方は言いすぎな面もあるが、実際にEクラスは設備に不満は持っておらず、戦争するぐらいなら部活しようぜ！という集団なのだ。

主に体育会系で構成されており、熱血クラスだが戦争はほとんど眼中に無い。

「そうなんだ……あ、百合子。翔子さんが来たよ」

「そーいや、今日は一緒に行く予定だったな。」

おい愚兄傘持っつけ、今日は降る」

「え、天気予報じゃ」一日中晴れであって、雲なんか出てくるわけありません。よって雨なんか降らないよバーカ」って言うてるけど」

「よし、テレビ局に苦情の電話を入れてくる。それに私が降ると言ったんだ。」

確かに降るんだよ雨が」

「百合子が言っんならそうだろうね」

「という会話があっただよ」

「それで、その傘？」

翔子の分の傘を貸し、その状態で登校していると、その途中で木下姉弟と合流した。

「やれやれ、いくら何でもこんな天気で雨なんぞ降るわけ無からう……」

吉井妹は何故傘を広げておるのじゃ、そして明久何故わしを傘に入れる」

「8、7、6」

「ねえ、冗談よね？道行く人が全員笑って……代表も傘を広げた！？

「……優子も入っていい」え、うん？」

「0」

その瞬間雨が降り始めた。

しかも大雨である……この雨はこの周辺だけでなくその周辺の県にも及んでおり、

道行く人が慌てて鞆などを頭上に掲げている。

何気に天気雨状態である。

天気予報での情報はかろうじて雲が無い部分だけが正解していた。

そして、進みながらだが沈黙が支配していた。

百合子がドヤ顔を晒しているのが印象的だった。

「……お母さん、洗濯物仕舞ったかしら」

「……疑って悪かったのう」

「たかが観測機程度で私の演算能力を超えられるわけが無エ」

そして、学園へと向かって行き、校門にたどり着くと西村教諭が濡れた状態のまま

仁王立ちしていた。

天気予報を信頼し、傘や雨具を忘れたのだろう……だが、生活指導の立場から

離れるわけにはいかず、物凄くシニールな光景だった。

「に、西村先生大丈夫ですか？」

「二十八号センセエ、そんな格好で大丈夫か？」

「大丈夫に見えるならお前達が問題だ、それと傘を差し出すな。

お前が濡れ……相変わらず便利だな吉井妹の能力は。

好意に甘えておくとしよう」

その様子に百合子は傘を乱暴に差し出す。

普通なら雨に濡れてしまっただろうが、ベクトル操作で雨自体を全反射するよう

演算しなおしておいた。

その光景を見て、つくづく異常だと思いつつも傘とタオルを受け取る。

「ねえ、代表・吉井君……妹さんって」

「うん、鉄人の事が好……愛してるんだよ」

「……絶対に叶わない恋と知っているけど諦められなかったらしい。

もっとも最近ではようやく踏ん切りがついていたみたいだけど」

「確かに、もう既に妻子持ちじゃからのう」

その光景を見ながらもヒソヒソと内緒話中である。

もっとも百合子も聞こうと思えば聞けるのだが、今はそんな状態で

はない。

好意的な感情を持っているからこそ西村教諭をあだ名で呼んでいるのだ。

何処のポイントで惚れたのかはいくら訊いても答えなかった為明久も理由は知らないようだ。

「うーん、流石に相手が居るんなら応援できないわねー」

「ちなみに鉄人の奥さんは既に知ってたりするんだよね」

「……………修羅場がおきんかったかの？」

「百合子が見ていて慕っているだけで良いと公言したから起きなかった」

「西村教諭……………意外と罪な男じゃのう」

「おい、とつとと教室行く……………何だその目は」

意外な新事実を知った優子と秀吉は優しげな視線を送っていた。ちなみに振り分け試験の結果がわかる当日にアプローチしなかったのは、単に明久の試験結果が気になったからである。

「つつても、あと二時間近くで止むがな」

「じゃあこの傘は置き傘にしておこうかな」

「あ、代表。坂本君と相々傘してみたら？」

「まだ恋人じゃないから駄目」

「一途だなア」

お前もなという言葉は全員口には出さなかった。

踏ん切りがついたと言う事はまた新しい恋でも見つけることだろう。願わくば、まともな人物であって欲しいと思った明久であった。

「ひどい目にあつたです」

「あ、葉月ちゃん」

「おい、葉っぱ娘。こつち来い」

「？なんですか？」

教室で適当に駄弁つてしていると葉月が教室に入ってくる。

他の者と同じようにずぶぬれ状態だった。

その様子に優子は吉井兄妹と合流できた事を幸運だと思った。

百合子は葉月を手招きする、呼ばれたので雨で濡れた体から水滴が落ちないようにトテと走っていくと、百合子が

片手で軽く制服を掴み、もう片方の手でデコピンの要領で服に向かって指をはじく。

「おお！！濡れていた制服が一瞬で乾燥状態になったです！」

「相変わらず便利だなその能力！！」

ちなみにその水分は何処に向かったのかというと、窓が開いておりそこへと

向かって放っていたのである。

その光景を見て、濡れていたクラスメイトがわらわらと集まってく。
鬱陶しながらも葉月と明久の説得により渋々同じ要領で服を乾燥させていく。

「一応訊いてみるけど、どういう原理で水分を飛ばしてるの？」

「弾いた時に振動を加えてその振動のベクトルを操って繊維に染み込んだ

水分を集めさせてそのまま放出させてるだけだ。

あんまり演算処理は必要無エ」

「か。はめ波！」

「テメエ、気持ちは分かるが遊ぶンじゃ無エ！！」

と百合子は言っているのだが、実際にはその男子生徒が手を構えだして

その構えを見てからそのように線上で放つように工夫したので、実際には遊んでいるのは百合子である。

「葉月もやりたかったです……！」

「僕ちよつと濡れてくる」

「待ちなさい、もうすぐH Rよ」

その間にも他の乾かしてもらった面々はかめ。め波の構えをして、

何人かは子供の頃の夢が叶ったと大喜びしていた。

「皆さん、おはようございます。急な雨でたいへん……」

何故誰も濡れていないのですか」

「水も滴るいい女状態だなア才女センセエ」

服の方は学園に予備を置いていたらしい為、着替えたのだが髪の毛は湿っていた。

完全に乾かすのに時間が足りなかったらしい。

もっとも、早くに学園に来なかったのか？と言う疑問もあるが。

「本日は寝過ごしてしまったのですよ」

「……珍しい」

「あと先生、濡れてないのは百合子さんの仕業ですので

それで納得してください」

「よくわかりました、それではHRをはじめます」

今に始まった事ではないので、高橋教諭は突っ込みを入れなかった。そして、FクラスがBクラスに宣戦布告し午後に戦争があるため自習であると

告げておいた。

たびたび戦争しては授業がなくなるんじゃないかと言う不安は、三ヶ月停止や

クラス数の関係上多くないとの事で問題はないらしい。

「お、もう止んでるか」

「ア”ア”、やっとやらなくてすむな」

「他のクラスや学園からも噂を聞きつけて駆けつけてきたからね
」

むしろ金をとつてもいいんじゃないかと言っぐらいの労働を行った
百合子は

雨が止んでホッとした。

中にはもう一回濡れてきて挑んできたバカが居たからである。

「いいじゃない、ある意味授業免除と言う報酬貰ってたんだから」

「学園全員が、という主語が抜けてンぞ」

そのときほど自分の能力を恨んだ事は無い。

しかも全員が全員、放系系の技の真似ばかりしていた為、
例を挙げれば世。末覇者だったり正統派格ゲー主人公だったり、
中にはわざわざ木刀を持ってからのエクスカ。バーだったり、

ロマンなのはわかるがいい加減にして欲しいものだった。

「頭使ってばっかだからコーヒーコーヒーっとウ」

「そこは普通甘いものじゃないの？」

「そういえば吉井君は補給試験いくつだったの？」

「な、700点ぐらいだった」

「小遣いドリルの時はもう少し上の点数取れてたわよね」

「下心の差だろうな」

ちなみに、明久の点数は最下位状態の総合科目702点。
明久の上の点数（須川）は総合科目742点である。

「もう少し勉学に力を入れるコラ」

「力を入れてもこれなんだよー」

「あ、あはは」

「大丈夫です、バカなお兄ちゃんは物凄く頭が悪い
ですけど葉月は好きです！」

「純粹さが痛いー」

「無自覚って怖エなオイ」

「あれで励ましてるの……？」

無自覚Sの攻撃に明久は微妙に止めを刺されていた。

その影響なのか、好きですと告白した部分は他の者にも完全に聞き流された。

そして、事件は放課後に近づいた時に起きる。

「何で短時間で組み上げれるのよ」

「くそ、数学魔王め。なんて問題を出してくるんだ」

『世の中は割り切れる事ばかりではないのだよ、勇者君？』

「そう言いながら、割り切れる割り算しか

出してこないのがシユールよね」

「バカなおにいちやんが負けそうです、回復問題………なんで

数学魔王なのに古典の問題を出してくるんですか!？」

事件が起きる数分前、Aクラスは自習時間中に今日百合子が組み上げた

ゲームで遊んでいた。

意外と浸透しているようで協力プレイをしている場所もある。

「木下優子……!?!」

「え、誰……Cクラスの代表？」

「……………なんで全員ゲームしてるのの前に、

さっきはよくも私たちを豚扱いしたり豚小屋がお似合いって

言ってくれたわね!!」

「……………何愉快な事してくれてんだ木下姉」

「いくら何でも豚扱いはひどいよ木下さん」

「……………優子、Aクラスからの宣戦布告は許可されてない筈」

「優子、恐ろしい子!」

「私そんな事言っていないわよ!?!」

「あれ?木下さん、ずっとここに居ましたよね?」

最後の意見は佐藤のものである、だが、その意見はCクラス代表・小山は聞いてはいなかった。

そして、Aクラス全員に聞こえるように大声で叫んだ。

「私達CクラスはAクラスに対して宣戦を布告するわ!!」

問：2 宣戦布告？（後書き）

Cクラスとの戦い開始。

勝敗自体は原作通りですけど過程とかは違うので
頑張りますので見てくださいーい。

鉄人って妻子持ちだったっけ？描写無いけど（流し読みだが）
きつと持ってるよね（汗）

百合子の相手役誰にしようかな

問：3 Aクラス初戦闘（前書き）

ちよつとハンデの部分に氣をとられすぎてAクラスらしく
無い氣がしますが、大丈夫かなあ？

問：3 Aクラス初戦闘

バカテスト：理科

地震が起きた時の対処法を答えなさい。

姫路瑞希の答え

：揺れが収まるまでは勤めて落ち着いて、火を消し、火元を閉めて、

ガラス窓や、倒れそうな戸棚、落ちてきそうなものがないところや、

頑丈な机の下で、頭をかばって伏せる。

先生のコメント

：正解です、その後は消防などの指示に従って避難場所に向かうのがいいですよ。その時には靴を履いていきましょう。

79

吉井百合子の答え

：地震の時に生じるベクトルそのものを奪い取り、そのエネルギーを宇宙空間に放り投げる。

先生のコメント

：そんな事が出来るのはあなただけです。
一応正解にしておきますが

吉井明久の答え

：百合子に任せる

島田葉月の答え

：天才のお姉ちゃんに任せる

先生のコメント

：気持ちは分かりますが他人任せでは無く自分に出来る範囲での答えを書いてください

「さて、配置にはつきましたね？」

「ええ、つきました」

配置とは吉井明久の位置や百合子の位置の調節の事である。
現在護衛を勤めているのは全科目平均的にこなしており姫路がない為学年第三席となっている久保である。

「葉月が守りたかったです」

「寝言は寝て言え学園四位、それに文系が壊滅的だろうが」

「あう」

「まあ、もつとも今回の作戦じゃ愚兄さえ逃げていればいいだけだからなア」

そうこうしているうちに、両者が戦闘態勢に入った。

格下が相手とは言えAクラスに緊張が走る。

実際二つ上のクラスを特殊な条件とは言え倒したDクラスという前例が

ある以上、油断してたら殺られる可能性があるのだ。

「では、試験召喚戦争Aクラス対Cクラスを開始致します！」

尚、BクラスとFクラスの結果は一時休戦という結果に終わっており、

先生達は全力を持ってこの戦いを支援する事が可能である。

「吉井兄を狙いなさい！そうすればその地点であのバグは戦死よ
！！」

「そうはさせません、島田葉月が数学で勝負を——」

「Cクラス山下清美が受けて立ちます！」

——Aクラス・島田葉月：数学1423点 vs Cクラス・山下
清美：数学120点

「なあ！？小学生みたいな小さい娘に点数で負けたあ！？」

葉月の召喚獣は何処かの良妻狐の衣装を纏った狐耳の召喚獣だった。
尚、葉月の体格のせいなのか他の者達と比べて小柄で、持つてる武

器は

八卦炉みたいな物だった。

しかし、ぶんぶんと振り回すだけで中々命中しそうに無い。

まあ、操作技術が0だから仕方が無いだろう。

腕輪は持っているのだが慣れていないうちに使っても自爆の可能性があると云っておき、使用させないでいた。

「ま、肩慣らしにやア丁度イイだろ」

「えい！えい！」

「は！？見とれてたら負けてた！！」

「アホかデメエ！！」

葉月の召喚獣のなれて無いせいなのか小さな体格で

よろよるとよろけつつ手をぐるぐる回しての攻撃に思わず対戦相手は見とれてしまい、

そのまま攻撃を貰い、即死である。

点数差があるため普通に一撃死が発生する。

初戦初勝利でうれしいのか葉月はピョンピョンと召喚獣と一緒に飛び回っていた。

（担当教師、微笑ましいのはわかるがようさつさとフィールド消さねエか）

「『黒崎以下突撃部隊が木下優子に総合科目で勝負を挑みます！』」

「これはヒデエ」

「ちょっとこの集中攻撃は厳しいんだけど!？」

——Aクラス・木下優子：総合3520点　vs　Cクラス4人平均1400点

「あー、援護できないからなア」

「ちょっと、いくら作戦だからって戦死早すぎない!？」

「見るとそこにはAクラスの人間が自分を含め三人しかいない光景でしたア」

「ナレーション風に言うな! ってあー!？」

——木下優子0点　黒崎トオル18点

「すげエ、一人で三人倒したじゃネエか」

「く、でも戦死よ……補習室行って来るわ」

ちなみに西村教諭はAクラスに対して連行する行動を起こしていない。

何故なら自分の意志で向かっているからである。

もとより勉強が出来る者たちにとって補習室は苦でもないので抵抗しないからだ。

「ここは私と葉っぱ娘だけか、オイ挑まれる前に引くぞ」

「は、はいです」

丁度Cクラスの面々も見えなくなっていたので、そのまま葉月を休憩させる為に

本陣へと文字通り飛んでいった。

「おっと、これ以上は接近不可能か」

「百合子」

Aクラスに入るとそこには翔子しか居なかった。

あまり代表の近くに行けば反則行為になってしまふ為、教室の外で止まる。

ちなみに翔子しか居ないのは今回の作戦の為に全員出陣した為である。

その時、百合子の持つてるハンデルール端末からアラームが鳴る。

「あー、愚兄が戦死しやがった。私は戦死だ」

「あう、作戦は失敗です」

「……そう」

上位三名は残っている人数からではなく、もともとの順位が該当する為。

明久が戦死した。久保利光戦死。

木下優子。上位成績者だが該当しない上に先ほど戦死。

吉井百合子・霧島翔子は該当しない為、残りは島田葉月と工藤愛子だけである。

「ハンデにこだわり過ぎてむしろ駄目な動きをしたこっちが悪い」

「だから忠告したんだろうが、バラバラにすんのは非効率だよ
ウ」

「でも、大丈夫……Cクラスが相手なら例え全員でも負けない……

行こう葉月」

「は、はいです！」

そして、今Aクラス代表が出撃した。

今回の作戦、それは……BとFとDが戦争後、Eは不参加表明の為
わざと戦力を削って百合子に押し付けちゃおう作戦。

結局、失敗に終わりCクラスはほぼ無傷で残ったが、
先ほどの翔子の自信の表情から不安は無いだろう。

「あー、補習行くか」

そう呟いて百合子はゆったりとした足取りで補習室に向かった。

数分前――

「大丈夫なのかな、ほとんど足止めの為に戦力分散になっちゃったけど」

「何、平気だろう。Aクラスは精鋭ぞろいなだから、それに

補習室行きにも抵抗など無い事だしさっさと妹さんを君臨させて

終了させるまでだよ」

駆け足気味で二人の男子が駆けていた。

一人はルール上のハンデ要員としてAクラスに在籍させられた明久。もう一人は男子では学年一位の久保利光である。

点数は平均的に上位なのでどのような科目でも安定して戦えるので護衛として採用されたのである。

「というか他のクラスだったら絶対に実現できなかった作戦だよ
ね」

他のクラスのものでは西村教諭の補習には耐えられない。

一方、Aクラスは勉強が得意な集団である為、補習は苦にならない。強いて言うのであれば施設が下がるのには抵抗があるぐらいだろう。なので、だせばほぼ勝ち確定である百合子の君臨の為わざと戦力を分散させて

明久を守る足止めをしつつ相手も減らしながら戦死しているのである。

「んーっと、あとAクラスの皆は10人ちよつとだね」

ちなみに明久は久保に護衛されている今この瞬間、妙な寒気が襲っ

ていた。

そして体が微かに震えていた。

これは久保の頼もしさから来る安堵の震えだと言い聞かせているのだが、

肝心の原因はさっぱりである。

「さて、そろそろ代表のいるAクラスにでも!？」

「残念ね、ここは行き止まりよ」

前方にはCクラスの集団が待ち構えていた。

その数、実に20人……ほとんどが数人でばらけていたAクラスを
集団で

翻弄撃破しながら、追い詰めていたのだ。

しかも後ろの側からも20人迫ってきており、絶体絶命の状況である。

「く、仕方がない。召喚獣召喚!」

「召喚獣召喚!」

「全員、掛かりなさい!!」

——Aクラス・久保利光：化学342点 v s Cクラス30人：
化学平均120点

——Aクラス・吉井明久：化学40点 v s Cクラス7人：化学
平均115点

高橋教諭が居ない為総合科目ではなく、連れて居た教師が化学担当

だったため、

化学の勝負になった。

久保の召喚獣に30人迫り、340点台の高い点数も、100点越えの点数の

集団相手には意味を成さず、両手に構えた鎌で翻弄したが奮戦虚しく散った。

明久も点数差がある相手に7人がかりでも善戦したが、その後に30人が

襲い掛かってきてあえなく戦死。フィードバックのダメージで悶絶した。

「あ、代表」

「……愛子は無事？」

「何とかね。この三人だけなの？Cクラスは後三十人近く居るよ？」

「……大丈夫、問題無い」

そうして、真正面を見る。Cクラスの残りの面々に囲まれながら向

かってくる小山の姿が

見受けられた。

最強バグが居なくなつた以上、残りの人数で突撃すれば勝てると踏んだのだろう。

「高橋先生、Aクラス代表・霧島翔子が目の前のCクラス全員に総合科目で

勝負を挑みます、召喚獣召喚」

「は？いくらバグを除いた学年首位だからってこの人数に勝てるなんて」

「許可します」

——Aクラス代表・霧島翔子：総合10845点

V S

Cクラス代表・小山友香 & Cクラス×32：総合1642点 & 平均1400点弱

『『『は？』』』

「……思つてる、私は百合子の親友だから」

実は勉強特訓を受けたのは葉月だけでなく、翔子も友人となつた際に教えを請い、

成績が跳ね上がったのである。

明久という例外こそあるものの、小学生レベルを高校生トップレベ

ルまでに

押し上げたのだ。

ならば、高校生トップレベルが努力を追加したならばどうなるのか。答えは先ほどの点数である。

もつとも小学生の頃からの付き合いだったが、実際に教えを請うたのは

学園に入学してからである。

尚、この点数を上回るのはこの学園の中では一人を除けば高橋教諭（12000点弱）

だけである。

その一人とは一人は言わずもがなチートの方の吉井である。

「でも、厳しいだろうから手伝いますよ、代表。召喚獣召喚」

「葉月も頑張ります！召喚獣召喚です！」

——工藤愛子&島田葉月：総合3622点&3792点

「あ、良心的に見える」

「そんな事言ってる場合か!？」

「後、腕輪の事に関してですが」

高橋教諭が淡々と説明し始める。

「総合科目の場合、全ての教科が400点以上の場合にのみ使用可能です」

『『『……『『』』』』

絶望の言葉を叩き込んだ。

後は言わずもがな腕輪の能力を振るい……勝負は一瞬で終わった。というより、これを遥かに凌駕する百合子は参加しなくても影響が大きすぎた。

「糞、Aクラスは化け物ばかりか！」

「単科目で1000点オーバーだったり文字通り桁違いだったり」

「でも葉月は文系が駄目駄目です」

「70点とか38点だっけ……なんで数学だけ？」

「天才のお姉ちゃんが得意なものを徹底的に磨き上げて絶対の点数にすれば

イイって言ってました！」

「うん、全面特化型が言っている台詞じゃないよね」

「とりあえず、どうして挑んできたの？」

仮戦死（明久戦死による強制組）が戻ってきた事による戦犯尋問。尋問場所は畳から見下ろせる場所であり、Dクラス代表は床の上で正座中である。

「……………冷静に考えたらあのタイミングじゃFクラスか」

「Fクラス？私の弟か……………う・で・お・り・か・く・て・い・

ね」

「落ち着いて優子！？その言い方だとあんたのキャラじゃないから！？」

「まあ、それなりに壊滅したが補給で復活かア」

補給試験終了組みも戻ってきた。
補習と一緒に平行してやっていた為なのか意外と早かったようだ。

「何とか723点になったよ」

「それでも低いからね、学年最下位」

「うぐ、でも点数差があっても7人持ったんだから褒めて

欲しいぐらいだけど……その後の30人は厳しかったけど」

「7人持ったのね……次は数学教師だけ連れて歩かせるようにして

葉月ちゃんを護衛に置いておけばいいかな？」

「はい！頑張りますー！！」

「文系もしっかりしておいてね。酷すぎるから」

「あう！？」

姉と同じく文系が駄目駄目な妹であった。
そして、帰りのHRが終わった後。

「あー、愚兄。そついや今日は早く帰るぞ」

「え、何で掴むの窓開けるの、ストップ！待ってせめて心の準備をおおおお

おおおおおおお！……！！？」

「きゃあああああゝ」

「……また明日」

「何でだろう、慣れてしまった自分が怖いって葉月ちゃんも付いてる！？」

どこか別の場所から「葉月……！！？」という悲鳴が聞こえてきたが該当者は

一人しか居ないだろう。

百合子達が着地した際に、まったく音が鳴らなかったのだが、百合子である。

どうせベクトル云々で解決したに決まっている。

「早く帰るときにはあれが楽」

「代表……」

もしかしたらFクラスよりもハチャメチャなクラスかもしれない。優子は弟の腕をどう折るのか考えながら溜め息をついた。

NG

「総員、同士討ち開始――!!」

『お――!!!!』

「え、ちょっと待ちなさい!」

――Aクラス、残り五人

『『西村先生、補習お願いします』』

「くそ、Aクラスの奴ら勉強が出来るからあの部屋に入るのが

怖くないんだっ!」

その時、召喚フィールドが廊下を覆った。

「才女センセエ、Cクラス代表を除いたCクラス生徒全員に対して

総合科目で勝負を挑む。召喚獣召喚!」

「承認します」

――Aクラス・吉井百合子：総合科目85193点

V S

Cクラス・49名：総合科目平均1400点台

「残念無念また三カ月後ーっと、テメエらの行き先は補習室への一方通行だ」

召喚獣が走り出す。ベクトル操作での加速で音速を超える速度で疾走。

その衝撃波だけで周りの召喚獣達は一気に全滅する。

「ちょっと、待ちなさいよ」……Aクラス代表霧島翔子がCクラス代表に

総合科目で勝負を挑みます「く！」

――Aクラス代表・霧島翔子：総合10845点

V S

Cクラス代表・小山友香：総合1642点

「何このいじめは!？」

九倍以上の点数差である、戦う前から勝敗は見えていた。そして勝負は一瞬で蹴りが付いた。

学園史上最速の試験召喚戦争の決着である。

問：3 Aクラス初戦闘（後書き）

翔子無双の回でした。

あれー？主人公の出番はー？（お前のせいだろ）

問：4 Bクラス戦決着（前書き）

PVいくつかなと覗いたら10000超えてた。

今更ながら感謝。

二次創作の中でもクズでしか定評が無い根本をかつこよく書こうと思ったなら女装の下りも欲しくてモブにクズ属性付けてしまった…

…orz

問：4 Bクラス戦決着

「さて、坂本達Fクラスはどう仕掛けてくるか」

「て言うよりも勝手に動く阿呆達をどうにかしないの？」

戦況をそのままに明日に持ち越す。

相手の最大戦力である姫路の弱点である持久力を責めず、寧ろ相手に有利な状況でしか無い交渉を行ったのだが、

これには訳があった。

幾人かの生徒が勝手に暴走し、人質は取るわ、相手の教室の設備を滅茶苦茶にするわ、Cクラスと繋がっている奴が居たわ、休戦条約を勝手に解釈して攻撃を仕掛けるアホが居るわで正攻法でもやりようによっては

姫路の存在が居ても勝てる相手なのにそのような卑怯な手段を用いた事による

一応謝罪の意味を込めての実行だったのだが見事にこちらの誠意は相手側に

逆の意味で取られてしまった。

といっても、仕方が無い面が強いし、もし自分達がやられたら間違いない

同じ感情になる。

「一枚岩じゃないのが痛いわよね」

「俺の味方が女子しか居ないのだが気に食わんのだろうな。

というか俺自体の味方は実質一人だと言うのに……」

「点数的には代表だからいいんじゃないの？」

「しかしクラスを纏め上げているのは律子とお前だぞ？」

「その片割れの私が恭二にべた惚れなんだから仕方ないじゃない。

律子は親友である私の恋を応援しているだけよ」

はあ、と溜め息を付き今のクラスの現状を憂う。

この戦争、正攻法でも搦め手を使ってももはや勝てない状況にある。そのため、反根本派は少しでも自分達が有利になるように勝手に暗躍している。

去年、根本が卑怯な行為や卑劣な行動を行っていたのでそれを蓑に白を切るつもりなのだろう。

「正直俺は元が腐っているから、もう恋人なんぞ出来んと

思っていたのだが」

「何処に惚れたかなんて私も知らないわよ……」

て、今はその話じゃなくて」

そう言つて、廊下に行く扉を見る。

Bクラスははつきり言つて押し込まれている状況である。

若干Fクラスに馴染み、こちらの卑怯な作戦に闘志を燃やし、明らかに点数以上の攻撃力をたたき出している姫路や、人質に取られその怒りをこちらにぶつけるかのように突進してくる島田。

数少ない紅二点に率いられ、命など惜しくないと言わんばかりに突っ込んでくるFクラスメンバー！。

その意志の強さに岩下律子率いる勢力はまでも反根本派は一気に戦死者を増やしている。

「そして、この暑さ……絶対窓を開けたら鉄人率いてムツツリー
二が

突っ込んでくる」

「あけなくても蒸し風呂状態で土気が駄々下がり……

もう詰みよね」

もう一度扉の方を見ると、岩下は姫路に打ち取られ、反根本勢力も崩壊したところだった。

「さて、仕方が無い……せめて戦場で散ってくる」

「はいはい、お供しますよ、代表」

「「Bクラス根本・菊入両名がFクラス姫路さんに対して現代国語で勝負を挑みます

召喚獣召喚！」」

「受けて立ちます！」

——Bクラス・根本&菊入：現代国語202点&178点

V S

Fクラス・姫路：現代国語399点

二人のコンビネーションで姫路の召喚獣の一撃は受け止めたが、次の一撃は受け止めきれず、根本の召喚獣が菊入の召喚獣を庇いBクラスの敗北が決定した。

「さて、嬉し恥ずかし戦後対談だが。一応Bクラスに猶予をくれてやる」

「狙いはAクラスか？」

「話が早いな、そうだ」

床に正座した状態で顔を上げて見える雄二の顔を見ながら根本は予想していた事に対して何の感慨も無く告げる。

「そして、代表にはこれを着て【Aクラスと戦う準備がある】と言ってくれればいい」

『我々総力をあげて実行させていただこう！』

『ああ、やらない手は無いな！それで施設は助かるんだ！』

Bクラスの設備はエアコンの他に、個人用とまでは行かないがクラ

ス共用の冷蔵庫。

それにクラス共用の一台のパソコンがあり、椅子も高さを調節できるような

オフィスによくある椅子になっている。

流石に机は通常の学校にあるようなものだが、それでも十分に優良な設備であると

言えよう。

それから一気に転落し廃屋のような施設にならないと喜ぶ反根本派。

「ふざ——」

「仕方ない、クラスの者の暴走を止められなかったんだ。

それで帳消しになるのなら喜んで引き受けよう」

切れそうになった菊入の口を塞ぎ、簡単に上半身の服を脱ぐ根本。と言っても下にはまだ制服用のシャツがあり半裸状態ではない。

「えげつない外見になるから耐性無い奴は見るな」

「そこまで否定する………すまん、確かにえげつない」

そう言つてとつとと着替えるように簡易的に作ったスペースに行くのを

見送りながら雄二は何にも言葉を掛ける事が出来なかった。

卑劣な行為の憂さ晴らしとはいえ実行犯そのものにやらせるべきだったか。

そして苦戦しているのか、時間が掛かっているようだ。

しょうがないと言つ表情をしながら菊入がスペースに入る。

途中根本の悲鳴が聞こえてきたが、数分後

「よし、行つて来るとしよう」

「ああ、とつとと済ませてとつとと着替えてくれ。」

言つておいて今更だが目の毒だ」

全員が目を逸らす中、おぞましい外見の根本の女装姿がBクラスを出て行つた。

インパクト十分だろう。

「さて、実は菊入。あそこに居る阿呆達にもこれを着て写真撮影+

アルバム製作をする条件も追加したいのだが」

『ちよつと待てー！ーい！！？』

「許可」

物凄い良い笑顔で雄二の提案を呑んでいた。

あんな姿を晒す事になった根本のそもその原因を恋する乙女は許すはずが無い。

「Aクラス代表は居るか」

「バカなお兄ちゃん、何で目を隠すですか？」

「……………」

「えーっと根本君だっけ、ナニソノカツコウ」

Aクラスは哑然とした表情でその可笑しい格好でやってきた根本からいつせいに目を逸らしていた。
大方、Fクラスの策略で宣戦布告する用意があると予測したのだが、その格好までは予測できなかった。

「BクラスはAクラスに対して戦争の準備がある。」

今日はその警告だけだ」

「それはわかったけどその格好は？」

「訊かないでくれ」

「なつてねエ」

「へ？つてあれ？根本君と妹さんは？」

「……あそこ」

いつの間にやらカーテンで囲いが作られており、その中で百合子が根本に対して何かを行っていた。

『……………』

その中で何が起こっているのか確認しようとする勇者は現れなかった。

最初にふぎゃ！という悲鳴が聞こえたところから気絶したらしいとは判断が出来るのだが。

そして、そのある意味地獄のような光景から数分後。

「なんじゃこりゃあああああ！！！！！！？」

「くは、全員にお披露目だア」

カーテンの囲いを崩して現れた光景に、全員が呆気にとられた。

「待て、いくら何でもおかしいだろ！？あんなオゾマシイ

姿をどうやってたらこんな美少女姿が出来上がるんだ！？」

『『お前さっきの根本か！！？』』

「女装するンなら半端な事してンじゃねエよ根本くウん？」

「可笑しいだろ、元が腐ってるんだぞ！？そんな素材を

どう加工してもこうなる筈無いだろうが!!」

「自分をそんなに貶める発言を堂々と宣言する人初めて見たわ」

根本は過去のトラウマも忘れて食って掛かる。

揺らそうとしたのだが掴んだ地点で反射で指がありえない方向に曲がりそうだったので諦めたのだが。

「私の演算に狂いはねエ」

「もうヤダこいつ」

「ツつーわけで、そのまま戻れ」

「畜生、恨むぞ坂本——!!!!!!」

咆哮をあげながら涙混じりに走り去っていく根本。

その姿に先ほどとは別の意味で目を逸らすものが数人ほど居た。

「あの美人なお姉ちゃんは誰ですか？」

「葉月ちゃん、訊かないであげてあの男の人権の為にも」

もう手遅れな感じがするのだが。

「さあかもとーーーー！！！！」

「お前誰だ！！？」

「Bクラスの代表の根本だよ！この野郎！！！！」

『Aクラスで一体何があつた！！？』

「大丈夫よ恭二、そんな姿になつても私は見捨てないから」

「ならそのカメラを仕舞え、根本が泣いてるぞ」

問：4 Bクラス戦決着（後書き）

10000突破記念&もうすぐ20000PV行きそうなので、
何かリクエストあったら募集します（こんな話を読みたい等）
締め切りはAクラス戦が終了時、その後の幕間の話が終了するま
です。

問：5 Fクラス宣戦布告（前書き）

百合子は学園に色々持ってきているが先生には黙認されています。
一応、寄付者の一人である為なのとゲームのような授業自体に
支障をきたすようなものではない為。

問：5 Fクラス宣戦布告

「一騎討ち？」

「ああ、このクラスの代表と一騎討ちをしたい」

「別にいいけど何が目的なの」

「勿論、俺達の勝利が目的だ」

翌日、Aクラスの教室に雄二達Fクラスが入ってきた。

何故か畳の上のスペースでの会話であり正座状態なのに目線が大して変わらないというシニールな光景になっていた。ちなみに、百合子は運び込んできた布団で絶賛狸寝入り中。

「うーん、別に一騎討ちでも負けるとは思わないけど」

「何だ、姫路の「ごめん、それを想定してもこっちの負けは揺るがないわ」

…… ああ、百合子のせいで恐ろしい事になってるんだった」

もつとも、雄二が教えた”あの事”は自身の最高の思い出として記憶のスペースに

入れてある為、そのところは変化はしていない。

尚、雄二はあだ名では呼ばれてないものの名前で呼ぶ事は許可している。

どうでもいいのだが、翔子と友人になった時期は小学生の後期だが、雄二と友人になったのは明久が雄二と知り合い交流を始めた時期と

かなりのズレがある。

何気にニアミスが多かったのだが、交流は無かったらしい。

「うーん……………」

「両クラス7人の対戦方式、それと科目指定権全部そっちでなら

受けてもイイぜ」

「百合子、随分お得な条件だな」

「その代わり、だ。オラ翔子」

「……勝った方は負けた方の言う事を一つだけ聞く事」

受け答えしていたのは優子だったのだが、途中で急に百合子が飛び起き、

条件を提示して翔子がその条件をさせる為の条件を提示。

尚、翔子の腕の中には自身の召喚獣のぬいぐるみが鎮座している。軽く押すたびにきゅうきゅう鳴いており可愛い。

「6回中4回勝てばいいわけか」

「既に一回捨ててる辺りが潔いいわね」

「ハンデのルール適用外だから百合子は出陣するだろうし、

百合子に勝てる奴なんてこの世界に居ないだろ？」

「学年どころか学園超えました！？天才のお姉ちゃんは

やっぱり天才です！」

「有利な条件でも結構不利よ、大丈夫なの坂本君？」

「俺の目的は世の中学力だけが全てじゃないって事を証明させる事だからな。」

上手く勝ってみせるさ…………百合子以外に」

「最後の台詞で全部台無しだよ雄二」

百合子の存在は始めから諦めている雄二だった。

確かに手を抜いているとは言え学園最強相手に勝てるなんて思わないだろう。

ちなみに本気を出す&とある特殊な方法を使えば宇宙の帝王の最初の戦闘力分の

点数を叩き出す事が可能らしい。

「ンで、試合はいつナンだア」

「明日の午前十時開幕だ」

「そうかい、そうかい」

「ところでスルーしてたんだが、あれは何だ」

教室の後ろの方に鎮座している巨大なぬいぐるみを指差す。

雄二の付き添いとしてついて来た面々も視線はそのぬいぐるみに注がれていた。

「人形召喚獣愚兄9/2サイズだつて」

「百合子の作品かよ!?!?4・5倍つて言えばいいんじゃないのか?」

「ちなみにあれは私の私物だからテメエらがこの設備を手に入れても」

あれは付かないからな?」

「「そ、そんな!?!?」」

「え、島田さんと姫路さんは何でそんな残念そうな表情を?」

「あだ名を鈍兄に変えるべきこりゃア」

クラス中の全員が気がついた出来事であるのに当人である明久がまったく気がつかない事に呆れつつ百合子が溜め息を付く。そんなこんなで放課後まで時間は流れる。

「……百合子」

「なんだ翔子」

「……勝つ為には」

「捨てなくてもいいだろ、予想できるだろうがそもそも

翔子にまで回さなければいいだけだ」

予想とは日本史問題の小学生レベル・上限ありの問題だろう。そして、ある意味では唯一の弱点である大化の改新の年号問題。

「大切な思い出なんだからそのまま大切にしろ。」

そもそも翔子を責める奴が居たら血流操作でも何でも

して”静かに”させてやる」

「物理的!？」

演算結果により翔子の勝率は坂本が勉強しなおさない限り大化の改新の年号が出て、100%。

総合的に考えて98%である。

尚、百合子の言葉を聞いたAクラス全員は顔が真っ青になっていた。

「愚兄が責めたら実行しねエけどな」

「……明久なら大丈夫」

翔子の振った男子の中には、吉井明久も含まれている。

姫路と出会う前で、百合子との交流で出会った折に一目ぼれ。

中学の頃に思い切って告白したものの轟沈。

以来少しギクシャクしていたが、百合子の機転で二人は元通り、一番の友人となっていた。

翔子の想い人を除けば、異性で一番仲が良い。

「はは、ちょっと複雑だなあ」

「大丈夫だろ、愚兄には”異性”で三人も候補がいるんだからよ
ウ」

「え？葉月ちゃんはまだしも後二人は？後何故異性を強調したの
？」

「……」

「え？何でクラス全員が呆れた目で見てきているの？」

「バカなお兄ちゃんはやっぱバカです」

周囲から見れば誰に好意を持たれているのかは駄々解かりの状態であるのに、

先ほどのぬいぐるみに対する反応とか、

（明久以外の種類も飾ってあるのに二人は明久の召喚獣のヌイグルミしか見てなかった）

ショックを受けたかのような残念そうな表情とか。

葉月についてはストレートに気持ちを伝えているのと子供特有の一種の懂れだと

思っているが、傷つけないようには言葉に気をつけていた。

そんな心境を察せられたのか葉月は頬を膨らませている、子供でも恋愛方面となれば

勘は冴え渡るものである。

「??????」

「こういうのも魅力の一つなんて言うんじゃないだろうな？」

「勿論です！」

葉月が力強く抱いた明久の召喚獣のヌイグルミがキュウと鳴いた。

問：5 Fクラス宣戦布告（後書き）

次はAクラス戦、やっと百合子の召喚戦争での戦闘書ける。

さあ、哀れな犠牲者は誰だ！！

明久の告白の下りはオリジナルですのであしからず。

独自設定が多すぎるけどネタバレ以外は大体設定の方で追加していきます。

ちなみに前回でも言っていたリクエストですが、流石に感想でも言ったとおり、こんな話を書いてくださいの意見募集中です。

流石に他の作者様とのクロスは厳しいですが（^^;;）

では、また次回！

問：6 AクラスVS Fクラス団体戦（前書き）

百合子の相手が不憫すぎる件。

問：6 AクラスVS Fクラス団体戦

「では、開始致します。代表者は前へ！」

高橋教諭の言葉を受け、Aクラスからは翔子・久保・百合子
愛子・明久・佐藤・優子が前に出る。

「おい、明久が前に出てるのは何でだ？」

「私が出るからだが？」

「サービス旺盛な事だな」

単に7人にした理由は、百合子が先ほどの戦争で戦えなかったから
であり、

その帳尻合わせとして明久を入れたのである。

まあ、それでも油断していたら狩られるので捨て試合と言うわけ
はないのだが。

明久の真価を知らない者に対する鼓舞としては最適だろう。

もっとも既に数人に危険性を伝えてある辺り用意周到そうだが。

「最初は私だが、相手は誰なんだ」

「よし須川死んで来い」

「くそ、せめて一撃は加えてみせる！」

明らかな捨て駒宣言にFクラス最下位の須川は悔しそうに拳を握り
つつ、

ちっばけな目標を宣言する。

「目標低イなオイ。教科は何だ？」

「……………坂本決めてくれ」

「どれを選んでも地獄だぞ？」

単体科目の最低点数だけで男子主席の久保以上の点数を超えている相手にどう挑めばいいのかわからない須川は、せめて惨めにならないように自分で科目選択する事だけを避けた。覚悟できていても自信満々の強化で挑んで負けてしまえば精神的なダメージはでかい。

「じゃあ、総合科目で」

「鬼か貴様！！」

——Aクラス・吉井百合子：総合科目85193点

V S

Fクラス・須川亮：総合科目758点——

「……………次は明久」

「相手は誰だろう」

「おい、分かってもスルーされるのは厳しいんだぞ！？」

点数が表示される前から、既に両クラスでは次の対戦に意識がうつっていた。
仕方が無いとは分かっているとはいえ須川は叫び声を上げざるを得なかった。

「ソーっと、ここをこうしてあれをあーしてっと」

「何してるの？」

「あ？せっかくだから全力攻撃で攻撃しようと思ってるだけだ」

そう言つて、召喚獣だけに影響があるフィールドの風を演算し始め、高電離気体を発生させた。

腕輪の能力ではなく、百合子のデータを入力した際に発生したバグみたいなものである。

どうやつても改善できなかった為、開発者がそのままでもいいかと匙を投げた。

「ちょ！？オーバーキルじゃねーか！！？」

「そらヨツと」

高電離気体を適当に投げ、須川の召喚獣は跡形も無く消え去った。ちなみに無防備に両腕を広げていたので、何とか攻撃を阻止しようとして突っ込んでいったのだが、突っ込む時にも風の影響のせいなのか、ゴリゴリと点数を減らされた上に近づく事すらままならなかった。

「成功成功ツと」

「百合子が敵じゃなくて良かったよ本当に」

全てがフィードバックするわけではないが、明久の召喚獣にあの攻撃を

当てられたら、過剰ダメージのせいで本当に死ぬかもしれない。

——勝敗：吉井百合子 • v s 須川亮 決着：擬似高電離気体

スクリーン上にはそのような表示がされていた。

決め技まで書かなくても良いと思うのだが。

そして今度は明久の出番となった……そこで百合子が急に不敵な笑みを

浮かべる。

「よし、行け愚兄……本当の実力を見せてやれ」

その百合子の言葉を聞いた途端、教室中がざわめいた。

「やれやれ、僕に本気を出せって事？」

「あア、もう隠す意味も無エ……全力で行けや」

『吉井って本当は頭が良かったのか？』

『そんな訳……待てよ、吉井はあの天才の妹と双子だぞ！』

今までのバカが実は仮の姿なんじゃ……！？』

そのクラス中の様子に対戦相手としてのぼった島田は驚愕の表情で明久を見ていた。

選択科目は自身の得意科目である数学だが、場の雰囲気から、何故か、敗北する未来しか見当たらない。

百合子の思惑を感じ取った数人だけが一名は面白おかしそうに、一名は無表情で見ていた。

「そんな、まさか吉井……！！！」

「ごめんね、島田さん。今まで隠していたけど僕――」

両者の召喚獣が登場し、点数が表示され始める。

「――左利きなんだ」

――Aクラス・吉井明久：数学95点

V S

Fクラス・島田美波：数学197点

「右手の時と比べて40点しか上がってねエぞコラ」

「おかしいなあ」

――勝敗：吉井明久 V S 島田美波 決着：喉元への刺突

「き、利き手に変えるだけで40も上がるのはおかしくない？」

「利き手で書いた方が書く早さがちょっと上がるんだよね」

「……解ける問題数が上がるだけ」

結局、明久は敗北。

ちなみに百合子が言った事はあながち間違いではなかった……利き手で書いた方が

点数が上がるため、ちゃんと本気なのである……と言っても劇的な変化ではないのだが。

明久はフィードバックによる喉の痛みを堪えながら戻ってきた。

動作性能の利点は戦争経験の点で覆され点数差で敗北。

ただ結局、島田の方も10点しか残ってなかったので奮戦したと言えるだろう。

「い、意外と危なかったわ」

「よし、ここからが本番だ」

「三番手は私よ」

「ふむ、ではワシが行こうかの」

木下姉弟の対決が始まった。と思ったのだが。

「ところで、秀吉。Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて？誰の事じゃ？」

白を切っているつもりだろうが、微かに見える冷や汗は誤魔化せてはいない。

「ちょっと来なさい」

「待て、姉上。対決は――」

Aクラスの外に出て行き、廊下で小さな会話が繰り返されている。

「あ、姉上、腕はそっちには曲がら――」

『『『……『『『』』』』』』

「――秀吉は急用で帰ったわ。誰か別の人を出してくれない？」

「いや……こっちの不戦勝でいい」

――木下秀吉・DEAD

「才女センセエ、勝手に殺すのはどうかと思っぞ」

「では、第4試合をはじめます」

その言葉を聞いた瞬間、土屋が勝負に向かう。
迎撃要員は工藤愛子だ。

選択科目は保健体育……両者共に得意科目である。

「そうだ、須川君。保健体育の授業を受けてみない？実技で」

『『異端者に死を！！』』

「ま、待て！ぎゃあああ！！？」

「遊んでんじゃねエよ工藤」

須川は召喚獣・自身の肉体共にオーバーキル状態である。

いくら何でも哀れすぎるだろう。

といつても召喚獣をオーバーキルしたのは百合子なのだが。

「ま、理論派と実践派の違い、教えてあげるよ。バイバイムッツ
リーニ君」

「————加速」

「え？」

「————完了」

百合子がもう一度意識を向けると、既に決着はついた後だった。
巨大な斧は振るわれた時にはそこには土屋の召喚獣は存在せず、
腕輪の能力によって加速した土屋の召喚獣が工藤の召喚獣を真つ二
つに

引き裂いていた。

「イチイチ思ったんだけどよう。グロテスクじゃねエか、この戦

い」

「それは言わない約束だと思うんだけど、あ、次は久保君か。

頑張つて」

何か別の試合が飛ばされているのは気のせいである。
その試合ではAクラスの勝利で終わった。

「ああ、是非とも勝つてみせよう」

『おい、久保が物凄いやる気だぞ!?!』

『一体、何があつたんだ……』

「ま、そのやる気も意味を持たんだろうな」

今度は総合科目、久保は前回の明久の護衛を失敗した事から大分
勉強に励んで居たらしいのだが、さて点数はどうなっているのだろ
うか。

——Aクラス・久保利光：総合科目4091点

V S

Fクラス・姫路瑞希：総合科目5012点

二日程度では伸びるはずも無かった久保は仕方ないとして、一体姫
路に
何が起こったのだろうか？

『凄い』

『代表や吉井妹に及ばないとはいえなんて点数だ』

「く、僕も上げたと思ったんだが、一体何が君をそうまで動かしたんだ……！」

「私、Fクラスが好きです」

「Fクラスが……？」

「何かに向かって頑張っているこのクラスが凄いと思ったんです。

だから私は頑張れます」

精一杯の笑顔でそう告げた。

空気を読まなくて悪いのだが、味方のFクラスがほぼ全滅していた。百合子はその決意表明をした姫路に対して僅かな憧れ交じりの視線を送っていた。

「……………」

「…………百合子の友人に一番欲しいタイプ」

「テメエもだろが」

何かの為に頑張る……生まれてこの方出来ない事は無かった者にとつては、

羨ましい言葉に聞こえるのである。

だが、その行動原理には好感を覚える……葉月を教えた最大の要因がこの”何か（誰か）の為に頑張る事が出来る”に惹かれたからだ。

「で、次は翔子の番だが準備は万全か？」

「……大丈夫、問題ない」

予測される小学生レベルの日本史、上限ありのテスト。学年主席の最大の弱点である、大化の改新の年号問題。間違えているとは分かっている、翔子はその言葉を雄二の次に大切にしていると言っても過言ではない。

向こうでは雄二が各々のメンバーに労いの言葉を掛けている。

「科目は小学生レベルの日本史、上限ありの延長戦ありだ」

「では、テストの問題を作ってきますので、少々お待ちください」

高橋教諭が物凄いスピードでキーボードを打ち込み……そして、いよいよ。

「不正行為は駄目ですよ」

「ああ」「……はい」

「はじめてください！」

そして、スクリーン上には問題が次々に表示されている。

——大化の改新で襲撃された人物名を一人答えよ

「何てニアミス」

「ここで出たって事は、もう出ねエ可能性がデケエな。

まあ、0ではねエ訳だが」

運命の問題が表示された。

—— 【】年 大化の改新 【】の中に入る年号を答えよ

「出たみたいけど」

「この世に0パーセントと100パーセントは無エからなア」

「でも百合子に勝てる成績の人が出るのは0だと思うよ？」

百合子は無言になった。

Fクラスの全員が先ほどの問題を見て、大歓声を上げた。

歓声の様子にAクラスは数人を除いて言い用の無い敗北感を味わった。

「まだ勝つても無エのにはしゃいでンじゃ無エよ」

「大丈夫かな、翔子さん。一瞬躊躇った様な感覚だったけど」

「翔子お姉さんはあの問題が苦手なんですか？葉月にも答えられますよ？」

「知らないから今のは聞き流すが、あれは翔子にとっては大切な

ものだ。

「バカにすんのは許さねエぞ」

百合子の優しく言い聞かせるような言い方に葉月は何か感じ取ったのか、

元氣よく首を縦に上下させた。

その様子に満足いったのかポンポンと軽くなでる百合子。

「3点問題って事ア97点……雄二の奴はいくつ取るかな」

そして、テストが終了しそれより少し後に採点が終わわり、結果が表示される。

——霧島翔子・97点 vs 坂本雄二・77点

Fクラスの卓袱台がみかん箱に、そして座布団がござに変わった瞬間だった。

そして、百合子は呆れた目で雄二を見る……お前結局油断したな、と。

問：6 AクラスVS Fクラス団体戦（後書き）

あれ？誰かの試合忘れた？……気のせいかな。
まだリクエストは受付中。

問：7 Aクラス決着・戦後（前書き）

副題を付け始めてみた。

内容とあわせるのが思ったよりも難しいのが
あるかもしれませんが今回は比較的簡単。

問：7 Aクラス決着・戦後

「殺せ」

「ようし、覚悟しろ。血流を逆回しにして心臓に収束させて

破裂させてやろう」

「待て！何でお前が来るんだ！？」

正真正銘の命の危険を感じたので慌てて立ち上がり、
その場を離れる雄二。

その様子にFクラスの面々は上履きを下ろした。

「雄二が小学生の問題だと油断していなければ危なかった」

「……言い訳はしない」

「じゃあ、約束」

その言葉を聞いた瞬間土屋が物凄い勢いでカメラを構えだした。
百合子は一瞬止めるかどうか考えたが、どうせ妙な勘違いでも
しているのだろう。

『霧島さんは吉井妹だけでなく、姫路さんまで手に入れる気だ』

やっぱ同姓主義者と勘違いされているらしい。

百合子と翔子は確かに仲が良い為、噂を鵜呑みしている者にとっては

出来ていると囁かれても仕方が無いのだが。
だが、間違いかどうかなんてすぐに気がつく。

「……雄二、私と付き合って」

教室中の空気が凍りついた。

Aクラスの面々は自己紹介のときに把握していたのでまったく
動揺はしていなかったが。

「やっぱりな……お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

諦めないって事は何度も告白をしたのだろう、その様子に百合子は
親友の幸せを願う為の演算を開始しだす。
幾重もの計画を練っている最中である。

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか
？ 明久とか」

「……私には雄二しかない。それに明久は一番の友人」

「オイ、結果は分かってただろうが。イチイチ泣いてンじゃねエ」

「改めて言われるとキツイよ」

明久の涙を堪えるような姿に自分もその一端を担っている事に雄二は
明久から気まずそうに視線を逸らした。

ここで謝罪しても明久に追い討ちをかけるだけである。

しかし、ここで翔子は一端言葉を区切って、一瞬だけ百合子の方へ

と顔を向ける。

「……でも、もし百合子が男だったら考えてた」

「百合子、俺はお前が女である事を恨む」

「性別にケチ付けられたのは生まれて初めてだ。そして土屋イクラ撮っても

私は写らねエからな」

「……く……また駄目だったか」

デジカメの映像を確認していたみたいだが、本当に写ってない事に驚愕の表情を浮かべていた。

理屈は簡単、自分自体の光の反射のベクトルをカメラに行かない様にして

写らないようにしただけである……最もカメラに向かわないだけにしている理由は

一種の空間把握の応用である。

公式であるクラス集合写真やイベント写真の場合は流石にその設定は切っているが。

「拒否権は？」

「……あるけどその場合雄二の身柄は百合子に一任する」

「そうだな。その場合、この学園生活が終わるまで女装し続けるという

洗脳を施してやるぞ。無論、可愛くしてやるから覚悟しろ」

「究極の二択！！？女装なんて似合わない……………根本の件があった！！？」

「あのゴリラさんは何故、翔子お姉さんとコーサイするのを躊躇ってるのですか？」

「雄二は何か意地っ張りなところがあるし、去年の言動から考えると

翔子さんを大切にしてるって分かるんだけどね」

「ちなみに世間一般ではツツケンドンだが好きな奴にはデレデレのツンデレだ」

「妙な言葉を教えない」

何やら雄二は頭を抱えて葛藤している。

とある事件から翔子と付き合うのは躊躇し、かと言って断ればあの根本すらも美少女に変貌させた百合子によって美少女姿を卒業、もしくは打ち消すまで続く。

後者は確実にソツチの道の人と認識されてもう戻れそうに無くなる。いや、翔子はきつと見捨てないだろうから、結局翔子と交際するしか選択肢が無くなる。

それなら、まだ社会的には死なない交際の方がマシである。

「分かった、翔子。あくまで名目上だからな」

「その内、本当にする……………じゃあ、今からデート」

ああ、言いつつ雄二は渋谷翔子の後続く。
名目上とはいえ交際宣言となり、しかも初回なので逆らわずに付いていくのだ。

「ところで、僕の畳のスペースがみかん箱と墓座になってるけど」

「実質Fクラスだからそれに対応するンじゃねエのか？」

それでも清潔なのだから文句は言えない。

ノートパソコンと扇風機はまだ健在であるし。

それに忘れてならないのが百合子の持ち込んだ布団一式の存在である。

座布団の代わりにはなるだろう。

「さてFクラス諸君、遊びの時間は終わりだ」

「二十八号センセ？」

「西村先生、Fクラス生徒に何か用なのですか？」

前回戦いの部分を省略された分の挽回なのか佐藤が台詞をもぎ取る。

「よろこべ、お前らは戦争に負けたおかげで、

福原先生から俺に担任が変わるようだ。

これから一年、死にものぐるいで勉強できるぞ」

『『何iiiiiiii!?!?』』

「なん、だと……負ければ良かった」

「百合子、Fクラスの場合だから私たちの場合は福原先生のままよ」

まあ、変わったとしてもAクラスの面子であれば一人を除いて耐えられるだろうが。

「明日から補習を通常授業に加えて二時間追加する。」

特に坂本と土屋、それに須川はミツチリとしこいてやる、

学園はじまって以来のA級戦犯と問題児と汚点組織の長だからな」

「先生、吉井はどうなのですか!!?」

「吉井はAクラスだろう、何を言ってるんだ須川」

Fクラス男子全員から怨念の籠った視線を送られる明久。

自分の西村教諭が担任ではないという幸運と視線に晒される不幸に葛藤した。

だが、明久の不幸はそこではなかった。

「明日からって事は、吉井！約束どおり今からクレープ食べに行くわよ！」

「え？そんな約束した覚え」

「駄目です！吉井君は私と映画を見に行くんです！！」

「姫路さん！？」

両側から二人の少女が明久を引っ張る。

明らかに肉体的攻撃を行っているようにしか思えないのだが、百合子はまったく動かなかった。

恋する乙女の猛攻を止めるなど無粋にしかならないと思っているし、何よりも。

「駄目です！バカなお兄ちゃんは葉月と天才のお姉ちゃんので

”ぶらり空中途中落下のデート”をするんです！」

「何その斬新かつ危険なデートは！！？」

見ていて面白いからだ。

今現在では葉月が大幅にリードしているように思えるが、それは子供特有の無邪気さによるストレートな好意の示し方の影響だろう。

「第一、小遣いに僕には余裕が――」

「愚兄」

百合子、その手にあるものは何？」

「三人侍らせてデート行って来い。これはその為の資金だ」

「何で軽々しくちょっとジュース買って来いって感覚で

5万も渡してくるの!？」

「はした金だからな」

貯蓄高は既に億越えどころか兆単位を達成している。
たかが5万など百合子にとって本当にはした金なのだ。

『鉄人先生!今すぐ補習を実行するべきです!!』

補習をすれば少なくともFクラス所属の姫路と島田は
デートに参加できない……成績的に姫路は参加しなくてもいいだろ
うが。

「お前らがやる気になるのは分かるが……少しは休まんな。」

特に女子には羽目を外させるのがいいだろう、こんな日ぐらい
はな。

お前達も相手を作ってデートしてみたらどうだ？」

「おのれ鉄人!俺達がもてない事をわかってての狼藉だな!？」

こうなれば卒業式の日伝説の木の下で釘バットを持って貴様
を待つ!！」

「なら俺はクリスマスの日、雪の降り積もる公園で鉈を持って待
ってやる!！」

「俺は貴様の誕生日の日にバイトの給料三か月分のノコギリで貴

様の家に向かう!!」

「斬新な告白だな、おい」

その後、抵抗むなく明久は三人に連れられて教室を後にしていった。

「…………ファミレスでも行くか」

そういえば一人になってしまったなーなどと思いながら百合子は廊下側を歩き、

今日の晩飯相当の物を考え、近場のファミレスへと向かっていった。帰宅後、何故かボロボロになって帰ってきた明久に対して相手は誰だど、

鬼気迫る表情で迫ったのを明久は必死に宥める事になるのは余談である。

そしてその頃一人のツインロールの少女に悪寒がはしっていた。

問：7 Aクラス決着・戦後（後書き）

百合子は基本、温厚（？）です。

言葉遣いが粗暴だったりするけど温厚（？）だと言い張ります。

その分切れると厄介なわけですが。

何か約一名に死亡フラグが立ってる気がしなくも無い。

ちなみに翔子の「男だったら」の下りは親友となった過去編でのフラグによるもの。

もつともG Lの域にまでは達してないですが。

ちなみにAクラスが敗北した場合、明久もFクラス設備に向かうわけですが、

明久だけAクラス設備になります。

汚い空間に一つだけシステムデスクやら何やらがあるシニールな光景。

設問：1 幕間1（前書き）

オリジナルで書くの厳しいな！。

設問：1 幕間1

「で、だ。何なんだこの状況は？」

「それはワシが知りたい」

「いいから黙って」

百合子は現在、木下姉弟に連れられて映画館に来ていた。
近場には工藤愛子の姿も存在している。

せつかくの休日なのに駆り出された事に百合子は若干不満げな表情をしている……といっても明久は出かけているのでやる事が無いのだが。

そして何やら優子と愛子は何やら腕章のようなものを付けている。

「”代表の恋を応援しよう組合”だア？」

「構成員は私と愛子と秀吉、それに百合子よ」

「内容は簡単、代表の幼少の頃からの好きな相手との恋を

完全成就させようと言うスローガンだよ」

「ワシ、入った覚えはないのじゃが？」

「そもそもそんな組合に入らずとも翔子の応援ぐらいするんだが」

優子と愛子は何やらノリノリで話すと、溜め息混じりに

構成員に入らされている二人が呆れた表情で見ていた。

「つか、愚兄も合流してるんだが」

「三股デートとは……」

「しかも一人は年齢的にアウト」

映画館の柱の影より覗き見していると、三人の少女に

引きずられているかのような…… 実際引きずられている明久の姿が見えた。

微かに二人の少女に厳しい視線を送る百合子の姿に誰も気がつかない。

「……………」

「ところで小姑候補としては誰が明久とくっついて欲しいのかの？」

「葉っぱ娘」

先ほどの視線を思い出し少し自身の頭を冷やす為に

面倒臭そうに別の風景を眺めていると、秀吉が声をかけてきた。

その問に対して間髪入れずに答えを出す。

「思考すら無しって…… 理由を聞いてもいいかしら？」

「そもそも他の二人は知らねエ」

「え？葉月ちゃんと交流あるならお姉さんの方も知ってるんじゃない？」

あ

「勉強する時は大抵図書館だったし、何より一回もエンカウントしてねエ」

つくづく擦れ違いが好きと言っていいのではと言っほどの交友関係の狭さである。

「そういえば吉井妹は、ワシと雄二のほかに親しい異性の友人はおらんのかの？」

「あんたの交友関係って代表以外はほとんど吉井君関係ばかりよね？」

「作るのが面倒臭エ。つーか、異性で親しい奴なンぞ、

家族を除いたら、全部拳げられたから答えようがねエ

……って何だその哀れむような目はア」

狭いって言うレベルじゃなかった。

ある種の箱入りに近い状態の交友関係の狭さである。

「第一よう、今でこそそれなりに認められてる訳だが、昔は完全な化け物扱いで、そもそも馴れ合いなンざした事が無エよ」

吐き捨てるように言った言葉は誰の耳にも届かなかった。
常識の範囲内であれば優れた能力でも英雄扱いだが、度が過ぎてし

まえば

それは悪魔や悪人の如き扱いを受ける。

幼少の頃の決定打となってしまうたのは殴ってきたガキ大将が反射によって

二度とその腕が使い物なくなつたときである。

「さアつてと、いい感じに空気が重くなつたところで

あの映画でも見に行くかア？」

「あれ？そう言えば代表は？」

「だから、あの映画を見に行つたつてんだよ」

映画「恋人達の沈黙」……タイトルからしてデート用の映画とは思えない。

「上映時間で選んだな翔子の奴は」

「え？」

上映時間：8時間

「大方授業中一緒に居れない分の埋め合わせだろうな」

「明久達も入っていったのじゃが……同じ理由かの」

そういえば三人を連れてる中、葉月以外は明久と別クラスだった。それはさておき、長つたらしい時間だが面白いのだろうか？
と言つか確かに恋人達は沈黙するだろう……あまりの長さに。

「じゃあ、見るとして……高!!?」

「どうしたの優子……高!!?」

「お一人様15000円……普通に払えるわけなかつ」

「代表は確かいいとこの家だったからまだしも、吉井君……」

あ、問題解決した」

「おい、もう払ったんだからとつと来い」

一般的な高校生が払うにとしては財布事情に厳しい料金を
四人分で何の躊躇いも無く払った百合子。
明久に一体いくら渡していたのだろうか。

「このブルジョアめ」

「訂正しろ、成金だ」

「そちらの方が言い方が酷いと思うのじゃが?」

「実際、成金だろうが。私の代で荒稼ぎしたんだからよう」

百合子は何気に親に仕送りをしている。
働かなくても暮らしていける量の額を、だ。
どっちが養っているんだか分からないほどである。

「飲み物やポップコーンは」

「流石にそれは自分で出すわよ」

「ンア？気にしなくてもはしたg」

「はいストップ、友達だからってそんな簡単にポンポンと金を出さない。」

言葉遣いや態度はこの際いいから友達との付き合い方をよく考えなさい」

ドンドンとズバズバ意見を言う優子に対して百合子は鳩が超電磁砲を喰らったような表情をしていた。

と言うより、友達と言う言葉に何故か戸惑っているような気がする。

「いつ友達になった」

「あんだ、頭が回る割りには分からないのね……」

友達になるのに小難しい理屈は要らないのよ」

「……………そうかよ」

何やら思案顔で後頭部をかき回していたが、結局全員が買うのを待って、

自分の分のポップコーン及びコーヒーを大量に買い込み、三人の後ろを

追っていった。

その際、一瞬だけ後ろ二箇所を睨みつけて。

「おのれ薄汚い豚め！今日こそは始末させて頂きますわ！」

数メートル先にて盗聴器（何処に仕掛けた）から会話の内容を聞き、怒り心頭で映画館の入り口を見る清水美春。

「お姉様だけでなく、可愛らしい義妹さんまでコサエテいいご身分です事！」

何気にもう一人の同行している人物は完全スルーである。

そして、いつの間にか葉月の事を義理の妹扱いである。

と、ここでどう狙えばいいのか場所を探す為に双眼鏡を構えたのだが……

「ギピ！」

写ってはいけない者が写ってしまい慌てて見えてない事に気がつかず、

物陰に隠れる。

可笑しな悲鳴が漏れてしまったのだが幸いにも周りの通行人には急に隠れた方が不審である為その点にしか触れていない。
まあ、見ない振りをしているのが大きいのだが。

「何故、薄汚い豚の妹君がここに!？」

あれでは明久に危害を加えた途端、自身の身が危うい。

西村教諭であるならまだ怖くは無いが、あの化け物だけは別格である。

無茶苦茶な超能力”ベクトル操作”。

地球の自転を奪ったり、地震のベクトルを奪い、風を束ねた羽で空を舞い、

常人には出せないほどの速度で疾走したり……

「と、とにかくばれずにどうにかして攻撃できる位置を……」

そうしてもう一度双眼鏡を構えた。

目が……合った。

「きよ、今日のところは退散いたしましょう」

そそくさと脱走した。

「何あのラスト、納得がいかない」

「確かに殺しは良くないと思うけどあの主人公に救いが

無さすぎよ。どんだけあの主人公が嫌いなものよ、監督は！！」

「そんな事より満席だったという事実にも誰も突っ込まねエのか」

席は偶然にも明久や翔子達の真後ろだった。

途中、何度か葉月や雄二に気が付かれたが、スルーされた。

他の者達はそれどころではなく、翔子は雄二の腕に絡みつки（no
t間接技）、

明久は両側から何故か関節技という地獄を味わっており、

明久はひたすらに謝罪している声しか聞こえなかった。

尚、両隣に居た明久に好意を抱いている少女達は腕を組む状態で
緊張状態に入り、聞こえていなかった。

そして、百合子の席では両隣が生きた心地がしていなかった。

許容するかないかと言う呪詛が延々と百合子から流れていたから
である。

「と言つかお前らは何しに来たんだ？」

「呼び出し喰らった」

「無理やり連れてこられたのじゃ」

「えーっと「優子達は出歯亀だろうが」「こらそついう……え？」

「「お？」「へ？」「は？」「あれ？いつの間に親しく？」

「え？」「あれ？」「ん？」「……」「」

「えーっと、妹さん？今、なんて言いました？」

「別に百合子で構わねえよ、優子達は出歯亀だろうが、つつただよ」

「え、うん、ありがと百合子……あれ？」

何か釈然としない事だが、名前で呼ぶ許可を貰ったので呼んだわけだが、
まったく理解できない。

「た、大変だ！百合子が自分の名前で呼ぶ権利を許すほどの

友人が四人になった！今日はお赤飯にしなきゃ！」

「そこまで目出度い事なのか！？ってか少ないな人数！！」

「……雄二、私、優子……あと一人は誰？明久」

「え、葉月ちゃんだよ？まあ、天才のお姉ちゃんとか呼んでないけど」

一体、何が琴線に触れたのだろうか？

優子は自身の行動や言動を思い出していたのだが、よく理解できなかった。

「何でしょう……物凄く疎外感があります」

「あはは」

「ワシはどのぐらいかかるのかのう」

「秀吉？」

溜め息混じりに呟いた秀吉に島田は視線を移したが、一瞬だけだったようで、

気のせいかと思い、再び明久達の方へと視線を戻した。

設問：1 幕間1（後書き）

百合子の友好関係度・現時点

LV6（絶対友好）：明久・翔子

——未来永劫越えられる事はほぼ不可能な壁——

LV5（超友好）：家族・雄二・葉月・優子・西村教諭・学園長・
高橋教諭

——越えられる可能性はあるが宝くじで三等以上を当てるぐらい
の確立——

LV4（大友好）：該当者なし

——越えられるのか？な壁——

LV3（強友好）：秀吉

——険しい壁——

LV2（異友好）：なし

——運要素含努力——

LV1（低友好）：明久の友人・クラスメイト・姫路・島田

——要努力——

L V O（無友好）：上記以外

ちなみに作者はL V O

この域だと用も無いのに話しかけると程度によつては
骨折られます……あ、百合、いえ吉井妹！こつち来るん

血で滲んでいて後は映像が読み取れない

設問：2 幕間2・百合子の試験風景（前書き）

今回、ある意味百合子無双？

設問：2 幕間2・百合子の試験風景

「特別定期試験ねえ」

「教室丸々貸し切つて、一体何をするんだ？」

「さあ？」

放課後、百合子の特別定期試験の為に一つの教室が貸し切られ、教師はかなりの人数が動員され、教室の床には裏返しのテスト用紙がびつしりと敷き詰められている。

尚、この為だけに机や椅子は外に出されている状態だ。

『これより、吉井百合子限定の特別定期試験を行います。』

不正行為は無いと思いますが、した場合すぐさま失格ですので

その点に気をつけてください』

『いいからとつととやろウゼ、才女センセエ』

そして、百合子の横には墨汁のような黒い液体が入ったバケツが鎮座しており、百合子の手には漫画家が使うようなペンが握りこまれていた。

寧猛な笑みを浮かべ、今か今かとテストの開始を待ち受ける。

『それでは始め！！』

瞬間、教室に衝撃が響き渡った。

百合子が全力で床を踏みつけ、その衝撃のベクトルを操作していき、答案用紙を表にしてい

「おー」

「無茶苦茶よね」

このテストは中継されており、テレビのある教室であれば、教室にいな

テストの様子をリアルタイムで見ることが出来る。

この状態であれば百合子は光の反射のベクトルを切り、普通に映るようにしている。

そして、百合子の次の動作は単純だった。

さっと全体を見回した後、ペンをバケツに突っ込み、そのままペン先から

黒い液体を投げつけていく。

「……………あつという間に数十枚以上が答案済みに!？」

「あ、ドンドン回収してまた置いていつてる……………確かに回復試験やったら一人で

答案用紙が消えるわね」

百合子が回復試験を受けられない理由の一つ、それは書き込み速度の速さ。

鉛筆やシャープペンシルのような消せる事前提のものではなく、あくまで

数をこなせ、多くの答えを書き込むためにGペンやらスクールペン

を使用し、

一瞬で終わらせてしまうからである。

まあ、それを防ぐ為なのか遊びで落書きを書き込んでいるのだが（ほとんどが担当教官の顔）。

『そらそらそら、もう全部終わっちまうぞ。これでも抑えてんだからとつと回収しろよ』

ノロマア！！！！』

「あんたが早いだけでしょうが」

「一体何点とるきなんだろう？」

「天才のお姉ちゃんの腕が途中で見えなくなるです……」

あつという間に十数秒で体育館いっぱい似合った空白の答案用紙は、空白が埋まった状態になり、教師達は慌てて、しかし確実に答案を入れ替えていく。

「た、大変そうですね」

「今回の特別試験って確か試験の試験だよな？」

Aクラスの教室だが、別他クラスの生徒が居座ってはいけないという

校則はない為、テレビを見る為に、雄二達Fクラスの主力メンバーが集まっていた。

「まあ、点数は一応換算されるらしいけど……あれでまだ本気じ

やないって

教師達涙目だよな」

「鉄人だけは流石だな……あの速度の回収や置きかたは人間並みではないな」

それでも間に合っていないのだから、自重中とはいえどれほど規格外なのか……

次の試験召喚戦争は本当に短期決戦の為にわざと同士討ちしようかと悩む優子であった。

『おらア!!』

「あ、教師が邪魔だからって放物状にインクを」

「うわ、それでもちゃんと答えを書き込めてる」

「……………一瞬の判断で情報を処理し終えてた」

ベクトル操作、世界最高の頭脳を誇り、どのような演算機器ですらも凌駕する情報処理能力。

勉強だけに集中しても完全に頂点に君臨し、本当の戦争でも軍隊を相手取っても敗北は恐らく無いと思われるチート具合。

そして、一時間後、ついに教師にとっての地獄の時間が終了する。

「つたく、かつたりイッたらありやしねエ」

「お帰り、たかがテストなのにテストに見えなかったわ」

もはや何処の戦場だと言わんばかりの筆捌きとテスト回答力だった。ペンを振るうたびに答案用紙の空白が埋まっていき、最終的には二刀流まで使い出したのだ……。そしてあれだけ液体を飛ばしたにもかかわらず、

教室は一切汚れていなかった。

「後は点数表示を見て終わりだな」

「一体、何万点とったのよ。見た限り一枚が私達が受けている

テスト分の問題数や空白があつたわよ……。難易度はともかくとして」

「さあな、もうすぐ表示されンだろ」

もつとも採点にも多大な時間が掛かるようだが。

その間暇になるので、せっかくだからと葉月の提案で似顔絵スケッチ大会を開いていた。

「終わったぞ」

「まだ始まって数秒しか経ってねーぞ!？」

「さっきのペン持ってるって事はそれで書いたのね」

百合子はあるという間に描き終わり、他の者達のスケッチが終わるまで

ジッと暇そうに佇んでいた。

「うわ、百合子の絵白黒写真まんまみたい」

「……正確無比」

「採点が終わりましたよ……何をしているのですか皆さん」

高橋教諭がテスト結果を疲れ果てた様子で持ってきたときには、そこは百合子の白黒写真風絵画展に変わっていた。

「吉井百合子……」

現代国語：43250点 古典：42250点 数学：1200
00点

物理：58720点 化学：55420点 日本史：48225点

世界史：46557点 現代社会：41235点

英語：58098点 保健体育：16245点

総合：530000点」

「私のテスト力は53万だ」

「そのネタの為に手を抜いたのですかあなたは」

「相変わらず保健体育が他に比べて酷いわね」

「そういえば、何であんな方法で書こうなんて思ったのよ」

圧倒的な点数に呆れつつもそこは百合子からの一言で済まされた。あの方法でテストを行えるのであれば、その内に何処かのフロアが広い

建物を貸しきって、一気に回答を済ませてしまいそうである。

「あ？愚兄の読ンでた漫画にそういう事をしていた奴が居たンで

真似てみた」

「もしかして四部の方？確かに異常だったけど」

「そう、吉井君のせいなのね」

フィクションの漫画の技術を試そうなどと普通は思わないだろう。だが、天才とバカは紙一重である。

たまにバカな真似を行うのも百合子の特徴なのだろう。

「つつてもアイツはベクトル操作無しであれだぞ？自分自身の実力だぞ？」

だからフィクションってのはあながち間違いが無エと思うぞ」

「黙れフィクションの塊（超能力者）」

「そうだった、私ってフィクションの塊じゃねエか」

「自分で自分自身に驚くところ！？」

こうして、結局百合子が点数最大値を出せる為の実験はひとまず終わりを告げた。

完全な本気を出してはいないものの、普通のテスト形式よりも大幅な点数上昇に繋がった。

とはいえ、結局のところ百合子限定でしかないわけだが。

「じゃあ、今日は大丈夫なんだ」

「……たまには友人との交流も大事」

「ま、結局俺も居るわけだが……デートじゃないだけマシか？」

「決まったところで目的地まで行くとスツか」

教室を出た後で昇降口で一端合流し、学園のすぐ前にある屋敷に移動する一行。

「おい、ここは何だ」

「あ？表札が見えないのか？」

「吉井家・別荘」

「おかしいな、確か家がちゃんと少し先の地区自体に実家があるよな？」

「即刻遊びたい時に遊ぶ用の屋敷だ」

「め、メイドさんがたくさんいます」

「と言っても、使うのは数ヶ月に一回だけだね」

「維持費が勿体無いじゃない!？」

「実質メイドハウスにしてるから問題無エ」

「そうか、あそこに居るボディビルダーに出るとでも言わんばかりの」

筋肉を保持しているパツンパツンのメイド服を着ているおっさんもメイドか？」

しかも後ろにぞろぞろとメイド達が付いて歩いている。

「古株のメイド局長だよ。見た目以外は完璧なメイド」

「局長？」

「メイド新撰組つてのを遊びで作っちゃってて」

新撰組に今すぐ土下座するべきである。

そんなこんなで気にしてもしょうがないと思ったのか、全員家の中へと入っていった。

ちなみにメンバーは吉井兄妹はもとより、木下姉弟、坂本夫妻、土屋、島田姉妹、

姫路の一行である。

工藤は用事があるとの事で先に帰ってしまった。

「おい、何かおかしくなかったか？」

「気のせいだろ」

設問：2 幕間2・百合子の試験風景（後書き）

テスト風景。

バカみたいな点数でこれでも遊んでるんだぜ？

一枚平均して100点換算すると5300枚書き終えた事になる。まあ、保健体育が苦手なせいでもう少し多いかもしれませんが。うん、机でガリガリ書くんじゃ普通に無理。

明久の相手が決まってきたのでそろそろ、次回辺りに情報を書き換える必要がある。

実は構想している人物が二人居て、一人はほんわかだけど

もう一人は暗い話になる……まあ最後ハッピーエンドなのは共通事項ですが、ふはは予想してみるがいい、あと近親ネタではないから

百合子は無いからな！

……失礼しました、次回辺りからアンケートをとってそれによつて

二つ書くか一つに絞るかを完全に決めたいと思います。

清涼祭はもう少し先ですね

設問：3 幕間3（前書き）

特にトラブルは無し？

設問：3 幕間3

「中は綺麗だな」

「この広さを一日60人体制という贅沢な布陣ですし、少なくとも百合子様が来るまでに綺麗にしておけば多大なボーナスを貰えますから」

「へ？いくら渡してるのよ」

「一人頭30万だったか？」

副メイド長・土方さん（偽名）に案内され中の綺麗さに感心していると、

坂本の疑問に答えてくれた。

なんだそのボーナスは……しかしよくよく考えてみれば待遇などはどうなっているのだろうか。

「待遇ですか？えーつとですね、月に口座に50万、有給休暇が月に六日で持ち越し無し。育児休暇などの福祉衛生は平均以上の待遇ですね。」

それと使用人達は全員で120人おります」

「おい、何だその良待遇は。有給が一年で72日もあるじゃないか」

「そ、そんなに払ってて大丈夫なの？」

「寧ろ、減る額よりも増える額の方が多くなってやがるから、こ
ういう所で

浪費させてんだよ」

浪費じゃない、とは誰も突っ込まなかった。

ところで良く見るとメイド服を着ているのは副メイド長と外に居た
集団だけで後は私服が多かった。

「ちなみに私服勤務可能です」

「あ、ご主人様。こんにちす」

「そしてタメ口も許可してるんだよ」

「職場としてはいいかもしれないけど、いいの？」

「少なくともこの一年はトラブルが無エな」

普通の一軒家で、庭が多少広い程度だが、八時間毎に交代。

そして百合子達が居ない間は置いてあるゲームなどを壊さない限り
自由にやっていいとの事。

「なんつー羨ましい職場」

「さて、着きましたが正直ここにある機器は

メンテナンス出来ませんので」

「心配すんな、査定で差っ引く事は無エ」

部屋を開けたらそこには重々しいほどの雰囲気包まれ、ゲーム機がいくつか設置されており、いくつかのコンピューターで接続されていた。

「ようこそ、ゲームルームへ」

「おい、これ全部ゲーム機器か？」

「そうだよ、確か市販の物よりはスペックが高かったけど」

と言っても企業に直談判して販売しないと言う条件付での改造である。

普通の市場に出回っているものよりは動作速度も色々なものも。

「読み込みの遅さで定評のあるソフトが一瞬でロード完了だとい！？」

「スパコン四台（二世代前のだが）を並列に繋いで

読み込んでんだから当たり前だろ」

スペックの高い市場に出回る事の無いゲーム機を動かさせながら、百合子はメンテナンスの為なのか簡単にスパナを回しながらスパコンの群れに紛れ込んでいた。

「ところであの凄そうな機械は何処から？」

「全部百合子の自作」

「……もう突っ込まんぞ、その内ドラ。えもん作ったと

言っても信じるさ」

「それは流石に無理があると思うわよ？」

（……………四次元ポケットの研究してるなんて言えないよなー）

もつとも不可能だと分かっているのだが、やる事も無いので
未来の奴が何とかするだろうりの気持ちで論文やら研究やらを
まとめてあつたりする。

「おい、何だこの格闘ゲームは……見た事のある奴しか出てないぞ」

「えーっと、百合子が片手間の趣味で作った格ゲーだよ。」

ちなみに百合子が最強で、どの技からでも永久コンボがあるから
「ら」

「酷いバランスだな、現実で既に最強なんだからゲームでぐらい
弱くなれよ」

「でも僕と翔子さんのキャラでやると動きが鈍るんだよね。」

攻撃力も防御力も激減しちゃうし」

「…………可愛いところあるじゃない」

「ンだその目は、いいだろうが趣味で作った奴なんだからよオ！」

実際に動かしてみたのだが、攻撃しようとしたらあらぬ方向に攻撃が向かったり、防御なんてせず一方的に殴られてばかりだった。その分、他のキャラクターが相手だと無双状態であり特に姫路と島田相手に対しては、操作もしていないのにがんがん攻撃を加えているような錯覚が起っていた。

「気のせいかウチと瑞希が弱すぎない？」

「バランス調整なンぞ適当だからな」

とはいえ貸してみると言われ百合子が操作したのだが、かなり強い部類で百合子操作をしていた雄二が手も足も出ないで居た。

曰く、未来でも見えてるんじゃないのかと、いうぐらいに攻撃や防御を完璧に読みきっていたのだ。

「オラ、雑魚でもやりようによっちゃ関係無いンだよ」

「今雑魚呼ばわりしなかった？」

島田の言う事を軽くスルーしてコントローラーを軽く膝の上に置くように投げる。

「ンじゃ、ちと使用人になンか飲み物用意してもらってくる。」

オレンジでいいな？」

「あ、じゃあ」

その後全員がそれぞれ別のものを頼み、雄二が冗談半分で野菜炒め納豆風味ジュースを頼んだ時も軽く流して了承していた。

「……………明久、俺はどうすればいいんだ」

「腹くるしかないと思うよ？最悪翔子さんのジュースを二人で見分けるしか無いと思うし」

「……………雄二、口移し」

「俺は野菜炒め納豆ジュースが大好物なんだ！！」

そこまで拒否するような事なのか？

翔子是不満げな顔をしていたが直接的な暴力は行っていない。

……………流石に浮気したら行われるだろうが、一応表向きには付き合っているのだから。

そして、百合子が飲み物を持って戻ってきた。

一つだけ妙に毒々しい色の液体が混ざっているが。

「……………」

「炒めんのに手間が掛かった」

「炒めてからミキサーに入れたんだ」

全員が何の罰ゲームだ、と言う表情で雄二の手元に渡った
ジュースを見ていた。

（雄二よ、姫路の弁当よりはマシだと思うぞ）

（そうだな、死ぬ事はないよな）

ヒソヒソと内緒話。

ちなみに弁当とは、姫路がクラスとの交流を深める為に
Bクラス戦の当日の時に全員に差し出した食物兵器である。
全員が全員、その驚異を味わったが何とか完食し、気絶した。
そのためBクラス戦は予定より少しだけ遅くなったそうである。

「ええい、ままよ！！！」

「一気に流し込んだ！？」

「ゆ、雄二大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ……………」

塩胡椒の味が確りときいていて辛く、納豆特有のネバネバで不
味い」

飲みきった雄二に対して全員が賞賛の眼差しを送った。
そして、百合子がソツと隠し持っていた飲み物を出した。

「口直しに丁度いいだろう」

「抹茶かよ」

だが、口の中に残った奇妙な後味を消すには丁度いいと思ったのか
それも一気に飲み干した。

ふう、と一息つき、結局その後もゲームやら何やらで盛り上がり、
特筆するような出来事も起らないまま一日が過ぎ去り、
全員帰宅した。

設問：3 幕間3（後書き）

さて、前回でも言ったルートについてのアンケート
作者が書こうと思っている明久の相手は……

1・葉月ルート

全体的に平和、百合子の相手が秀吉になる。
葉月ちゃんの可愛さを全開で書く作者が
悶え死ぬ可能性があるルート（ロリコンじゃないです）
ただ百合子が主人公（笑）になる可能性有。

2・翔子ルート

人死にが出るルート。メインは主に百合子。
オリジナルキャラが多数登場し、変な組織も追加。
ちなみに百合子が誰とくつつくかは内緒。
全体的に鬱なので作者的にはある意味で挑戦ルート。

3・両方書け（順番指定してください）

作者殺しルート。

出来ればご遠慮願いたいけど、希望があつたらやるしかない。
い。

更新ペースが落ちる可能性大。

アンケート締め切りは勉強合宿に入る前まで。
では、また次回！

問：8 清涼祭・準備（前書き）

Aクラスは全員まじめなので、四人抜けたところで準備に支障は無いです。

百合子が後から挽回出来るというのもありますが

問：8 清涼祭・準備

「よう、雄二クウン遊びに……………何だ学級閉鎖か？」

「違うぞい、全員外じゃ」

秀吉の言葉に百合子が外に視線を送ると、雄二を筆頭にして
Fクラスは野球をしていた。

「ちなみに何で来たの？そっちもまだ決める時間のはずよね」

「あ？もう終わらせた。全員私に一任してきたから

【メイド喫茶】にしておいた」

「……………資材もメニューも話し合いが終わってる」

Fクラスに普通に遊びに来た四人、と言っても百合子は
翔子の付き添いで翔子は雄二に会いに来ただけである。

葉月は葉月で姉に飛びついて、元気な事だ。

Aクラスの教室ではクラスメイト達は作業中……………畳の使い道の為の。

「すまん、少し遅れ……………何故ここに吉井兄妹と霧島・島田妹が
居るのかは

置いておくでしょう。どうせAクラスはほとんど終わってるん
だろうからな

……姫路、坂本達はどうした」

「え？えっと」

「外で野球してます」

島田が姫路のフォローをするように話しかける。
その言葉に西村教諭は外の様子を見て。

「まったく、あいつらは……丁度いい吉井妹も手伝ってくれ」

「了解っと」

「……行つてらっしゃい」

「……鬼だ（ね）（じゃな）……」

学園最強の武力制圧コンビ、出撃……窓から。

『貴様ら、何をしている！！』

『坂本！空から鉄人と女の子が！？』

『げ、鉄人と百合子だと！？なんて最悪な組み合わせだ！全員散

……

何でいきなり竜巻が！？』

ベクトル操作で風を操っただけ。

「制圧はやいわね」

「百合子が自然災害まで引き起こしてるしね」

もはや、百合子に対して常識と言う感覚が麻痺したのか、誰も動揺する事無く、学園自体は今日も平和だった。

「えー、今から清涼祭に向けての話し合いをするわけだが……」

何故翔子達も居るんだよ」

「別にイイだろうが」

「……西村先生から見張りを頼まれた」

と言っても一応切羽詰っている状況なので、流石に遊ぶような真似はしないだろうが。

「まあいい、誰か委員を決めてそいつに全部任せる、以上」

そう言って、雄二はさっさと席に戻ってみかん箱の上に伏せた。

「興味無いのには完全無視かよ」

「誰が委員を引き受けるですか？」

全員が全員目配せ合戦を始めた。

ぶっちゃけ、面倒くさい事をやる気は無いのである。

そして、結局――

「オイオイオイオイ、何だこの状況はよう」

「僕が書記か」

「バカなお兄ちゃん頑張れー」

「百合子、ファイト」

Aクラスのメンバーであるのに委員として任命された百合子。

ちなみに補佐できるのは二人しか居ないとの事でそのうちの一人の明久が

書記として配置に付いたのである。

とはいえ、議事進行役だけなので、これが終われば秀吉に回す予定なのだが。

「一応、ここはFクラスだ。てめえらの意見からとってくぞ。

意見のある奴は手を挙げる」

その言葉を聞き、土屋康太が挙手する。

碌な意見が出てこないと分かっているが、とりあえずは指名する。

「土屋」

「……………写真館」

「何だてめエ、恋人の工藤の写真でも飾る気かア？それとFFF、会議邪魔したら

クロス」

先日、工藤が来なかった理由の一つは土屋とのデートが理由だった
りする。

土屋自体は否定しているが、工藤の方は積極的に攻勢に出ているらしい。

恋人発言に土屋はその事実はないとブンブンと首を振り、百合子の言葉に

FFF団が動こうとしたが、百合子の脅しに屈し矛を収める。

「まあ、意見は意見だ」

「うん……………」

【写真館「学園長の華麗な日常」】

『『『誰が得するんだ！？』『』『』

Fクラスの全員が声を揃えて突っ込みを入れる。

確かにどう考えても誰も得しない。

明久は全員の反応に満足したようで書き直す。

尚、明久の行為は会議の邪魔なのだろうが百合子は華麗にスルー。

友好レベル6に対しては超寛容なのである。

【写真館「秘密の覗き部屋」】

誰も突っ込みを入れなかった。
しかも会議は進行する。

「近藤だったか？」

「メイド喫茶は既にAクラスで実施されるそうなので、
斬新さを狙いウェディング喫茶を発案する」

「まあ、斬新だろうが……………」

資金面や動きやすさを考えると不便そうだが。
それに男子が完全に裏方になると思うのだが。

【ウェディング喫茶「人生の墓場」】

「結婚は人生の墓場とはよく言われてるが、タイトルにすんな」

「次の意見の人ー！」

「いつの間に来た葉っぱ娘」

葉月が元気よく促したところで須川が手を挙げる。

「須川」

「俺は中華喫茶を提案したい」

「ほう？何だ、チャイナ服を着た姫路や島田姉や秀吉の姿を見た
いのか？」

「何故自然にワシの名前も出るのじゃ」

秀吉がそう言うのと優子と瓜二つの顔と体格なのに何を言ってるんだ
という目で見られた。

「男だけど似合ってるからだと思っよ」

「納得がいかぬ」

【中華喫茶「桃園の誓い」】

「待て愚兄、誰が劉備で誰が関羽で誰が張飛だ、

ちなみに雄二は曹操だと思っぞ」

「突っ込みどころはそこじゃないでしょ!？」

「よし、お前ら決まったか？」

そこに西村教諭が入ってきて、黒板を眺める。

「……補習の時間を倍にするべきかもしれんな」

『『先生！違っんです、吉井が勝手にやった事なんです!!!』』

「私にケチつけたア、いい度胸だな」

百合子の苗字は言うまでも無く吉井である。

その事にウンテンポ遅れて男子生徒（・雄二）は顔を青くする。

「ばか者！そもそも他クラスの生徒に任せるといふ判断自体が

バカだと言っんだ！！」

「……………売り上げで設備をまともにするという案もある」

「霧島の言うとおりだ」

『『『そうか！その手があつた！！』』』

「オラ、指針が決まったところで今ある案の中で決めておけよ。

異論があるなら私と喧嘩で勝て」

異論を上げる者など居なかった。

そして投票の結果、中華喫茶に決まる事となった。

それを見届けた後で、後は秀吉にバトンタッチである。

「では、厨房を担当したい者は須川とムッツリー二に、

ホールを担当したい者はワシのところに集まるように！」

「じゃあ、私は厨房に」

その瞬間、クラス全員がどうやって自然に厨房から離すか悩んだ。

寝ているはずの雄二も心なしに震えているような気がする。

「え、姫路さんは綺麗どころの一人なんだからホールにした方が
良いよ」

「え、そ、そうですね。じゃあホールでも頑張りますね」

事情は知らないのだが、単純に思ったことを口にする明久。
クラス全員が心の奥底で明久に感謝の意を示した。

顔を赤くしている姫路の姿に百合子は完全に愚兄を鈍兄に変えるベ
きか

くだらない事を考え始めた。

「う、ウチも厨房にしようかなー」

「島田さんも可愛いんだから出来ればホールがいいと思うけど？」

「か、かかか可愛い！？」

「うん、一部分を除けばだけど僕の間接はそれ以上曲がらないい
！？」

危害が加わっているが、百合子は手出しをしない。

今のは流石に明久の自業自得な部分がある為である。

が、ドサクサ紛れなのか姫路も攻撃に加わっている事に

訝しげな表情をしていたのだが……島田を可愛いと呼んだ事が

理由なんだろうが、自分もその前に褒められていただろうと訝しげな
視線を送る。

まあ、今はそれよりも……

「おい、とつとと行くぞ鈍兄」

「そうです、早く行きましょうです鈍いお兄ちゃん！」

「いつの間にか呼び名が変化してる!？」

（（（気持ちは分かる）））

葉月の機嫌が悪くなっているが、他の女性に綺麗だとか可愛いだとか言った事が原因だろう。

まあ、攻撃しないだけマシではあるのだが。

「明久、大丈夫？」

「え、あ、うん平気」

明久の曲げられていた間接を異常が無いか触りつつ確かめる翔子。心の奥底では完全に吹っ切れているわけでは無い明久は顔こそ赤くなっていないものの完全に緊張状態だった。

具体的には全ての神経が翔子の手に集中しているくらいには。

「……どういうフィルター設定してるんだ翔子の奴は、

……ん？どうした葉っぱ娘、楽しそうな顔……前だと？」

葉月が好きな者が他の女性に触られている最中だというのに若干楽しそうな表情を

しているのが気になり、指差された方向を見る。

そこでは雄二が片目だけ開けた状態で複雑そうな表情をしていた。どう考えても嫉妬の目をしているのは明らかなのだが。

葉月が機嫌を悪くしない理由は、翔子が雄二に好意を抱いていて、明久との距離も友情止まりだと知っているからである。

まあ、物凄く不機嫌になっている二人も居るわけなのだが。

「ツンデレだな」

「ツンデレです」

（うるせー）

問：8 清涼祭・準備（後書き）

アンケート結果

現段階で、

1が三票

3が一票

やっぱり、バカテス世界に血みどろの惨劇（鼻血除く）は似合わないのか、まあ作者としては楽ですが。ちなみにアンケートはまだまだ募集中。

詳細は

設問3 幕間3

のあとがきにて

それと設定データ多少更新

問：9 清涼祭・準備&大会参戦（前書き）

投稿が一日遅れて申し訳ありません。

問：9 清涼祭・準備&大会参戦

「召喚大会だア？」

「そう」

Fクラスでの一件から一日。

流石にまったく手伝わないのは色々と失礼だろという事で、
パツパと寸法を測り、次々にメイド服を別荘にある使用人が趣味で
着ていくのを何着か想定し紙にまとめていると、
翔子からお誘いが来た。

「あー確か種別妖怪がんな事言ってたなア」

「優勝商品が欲しい」

大会の詳細が書かれたビラを百合子に見せる翔子。
それには二人一組で出場し、それぞれの科目毎の点数で
戦いあう予定と書かれている。
尚、教科は実際に行われるまで不明で、実質Aクラス
でなければ突破できないだろう。

「商品は」如月ハイランド・プレミアムオープンチケット」と

” 白金の腕輪”……………よし承諾しよう」

白金の腕輪は自身が解析を頼まれた折にその効果を知っている。
代理召喚機能を持っている筈である。
バグなどを直している筈だし点数消費も問題にならない。

「わ、天才のお姉ちゃん達も出ちゃうですか!？」

「何だ葉っぱ娘、誰と……鈍兄とじゃ少し厳しくないか？」

ちなみに完全に鈍兄として固定されてしまったようである。
明久は気にしていないようだ。

「ま、いいけどよう。せめて決勝まで昇ってこいよ二人とも」

「大丈夫です！天才のお姉ちゃんとの特訓は伊達じゃありません

………数学だけ」

数学だけなら学園で一位（百合子除く）なのだが、他がほぼ壊滅的である。

まあ、姉の上位互換であるとも言っておこう。

「ま、それはさておきBクラスの奴のところに遊びに行くかな」

ちなみに百合子は他のクラスの情報まで掴んでいる。

二年だけの例を挙げれば

Aクラス・メイド喫茶「ご主人様とお呼び！」

Bクラス・男女逆転喫茶「私が俺で俺が私で」

Cクラス・魔法少女喫茶「翡翠屋」

Dクラス・妖怪喫茶「お化け屋敷」

Eクラス・和風喫茶「巫女神社」

Fクラス・中華喫茶「桃園の誓い」

二年は全員喫茶店らしい。

「ついでに副代表の奴にも代表のメイクを頼まれたし」

「あの二人、本当に交際してるの？」

どう考えても根本が尻に敷かれているようにしか思えない。

「さあな、交際の形なンざ人それぞれだろうが」

「はあ……まあ、そうかもね」

「さて、ちつとばかり練習スツか……誰か客の役をシテくれや」

百合子がそう宣言すると、あからさまに親しいもの以外が逃げさった。

その理由は百合子の明らかな外面用の接客態度のせいである。

「失礼ですわ、こんなにも一生懸命に尽くしてますのに」

「……普段のあんたを知ってるとサバイボものなのよ」

「……独特の話し方も殺してるから物凄く違和感がある」

「ん」や小さなア行を基本的に片言のように話す百合子の話し方を知っている身としてはそのように丁寧な物腰で話す様子に違和感を感じ取れないのだ。

性格を知らないものにとってはそれでいいかもしれないのだが。

「F組の木下秀吉じゃ、吉井妹と明久・霧島に話があるのじゃが」

「え、何の御用ですか？」

「……………すまぬ、教室を間違えたようじゃ」

「安心なさい秀吉、教室はあつてゐるしそれは

百合子の接客用の態度よ」

「まったく、これでイインだろこれで」

「うむ、それでこそ吉井妹じゃ」

「それより僕と百合子と翔子さんに何の用？」

何かFクラスで揉め事があつてそれを収めて欲しいのだろうか？

それならば西村教諭を呼べば済む事なのでそれとは別の用事なのだろうが。

よく見ると島田も来ていた。

「実はね、坂本のやる気の無さをどうにかして貰いたいのよ」

「あア、設備の改革の為には必要だろうな」

「……………えっと、翔子さんだけでよかったんじゃないの？」

「いや、吉井と坂本が愛し合つてゐるって噂を聞いたから」

「僕もつお婿にいけない！」

「大丈夫です！葉月が貰つてあげます！」

今はそんな話だっけ？と思いながら、施設道具のためだけにしては雄二を呼ぶ理由にはならないだろう。

それはそれとして百合子の機嫌が先ほどから下降中。

「で、一番の理由は何だ？そこが分からんのに手伝うほど

御人好しじゃねエぞ」

もつとも理由無しでも明久と翔子が相手ならば簡単に手を貸すが。

「うーん、瑞希には内緒って言われてるけど……」

話を要約すれば、姫路の父親が自分の娘に対する扱いに今頃になって切れて、

転校しようとの話になったらしい。

その際にFクラスの事を悪く言ったらしく反抗しているらしいのだが。

「健康を阻害する設備・勉学を向上させうる仲間・後は道具関係か」

「二つ目に関しては私と召喚大会に出てその対策にしようと思ってるけど」

「優勝は無理だぞ」

「吉井妹も出るのね……まあ、流石に誰もが仕方ないって諦めるでしょうから

そこは問題ないと思いたいわ」

「道具に関しては雄二をたきつけて売り上げをどうにかすればいい訳だし」

「……施設に関しても直接的ではないにしろ雄二の協力が必要」

「っツー訳で捕まえてくるわ」

数分後、そこには大人しく百合子の後ろを歩いてくる雄二の姿が。

「鉄人ならまだしも百合子相手に逃げられるわけないだろ、

で、何の用だ」

「えっと、実は……………」

簡単にかいつまんで雄二に話す明久。

その言葉を聞き、思案顔になる。

ちなみに翔子がいつの間にか横のポジションを取っているのを誰も突っ込まなかった。

と言うよりも雄二自体もあまりにも自然だった為気がついていない様子。

「そうか、姫路が転校か」

「ツー訳で学園長のところへ行く。付いて来い」

「さっき案内すればよかっただろ」

「一応、クラスの事を積極的になる様子を見せたかったただけだ」

そこまで言って百合子は雄二を翔子の許可を得た状態で連れて行く。

「邪魔すんぞ」

「あんた、本当に教頭が嫌いなんだね」

中から聞こえてきた会話で誰が居るのか理解した百合子はノックを無視して

扉をベクトル操作で吹っ飛ばした。

飛ばした扉が教頭の後頭部にぶつかり、そのまま教頭ごとま壁に激突した。

「で、何の用だい」

「流していいのか教育者」

壁にめり込んでいるという一昔前のアニメのような状況になっている
教頭に対して二人が無視しているのだが、雄二はその光景に
目がいつていて話し合いに集中できそうにない。

「おい、雄二。テメエが話さねエと始まらねエだが」

「あ、ああ」

結局教頭はそのまま放置される運びとなった。
哀れ、教頭。

「で、要求はFクラスの設備の老朽化の改善、と。

まあ、いいさね。忙しかったから手が回らなかったが、

流石に生徒自身に害が及ぶんなら考えるしかないね」

「気がつかなかったのか？」

「経営全般その教頭に任せていたさね。私は結局開発で忙しい
んだよ」

「よし百合子、そいつをもっと深く埋めてくれ」

「……これ以上は死ぬ」

流石に会話が聞こえていたのか、教頭が話す。
心なしか声が震えているのは気のせいだろう。

「ま、そういうわけだ。施設自体はともかく健康を阻害しない程度には

直しておいてくれクソババア」

「おい、種別妖怪にどういう口聞いてんだ」

「種別妖怪も十分悪口さね！」

いつでも直す気は無いだろうが、一応一喝しておいた。そして、一応……本当に一応だが教頭を救助した。

「ああ、それと坂本と言ったかい？」

「ん？どうしたクソババア」

「いや、一応交換条件みたいなものを付けさせてもらっていいかい？

まあ、聞かなくてもいい事だがね」

「一応、聞いておくか……百合子は何やら興味を持ってるようなんでな」

本当に面倒くさそうな表情だが、百合子があるのか聞きたそうにしていたので

話を聞くだけ聞いておくことにする。

尚、教頭は既に退避しており、部屋には三人しか居ない。

「いやね、竹原の奴が勝手に妙な契約のチケットを

召喚大会の優勝商品として出したらいいのさ」

「如月グランドパークのプレミアムチケットの事か？」

「まさかと思うが、そのチケットで入ると企業が計画していて

学生から一気に結婚までストレートに持っていく

契約してるんじゃないエだろうな？」

「ははは、流石にそれは——」

「正解さね」

「何だと——！！！！？」

百合子の話を肯定したところで雄二が叫び声を上げる。

ちなみに百合子は予測していたのかその声を反射しており、自分の声が丸々返ってきた雄二はしばらく悶絶した。

「デケエ声上げてんじゃないエぞ、思わず反射しちゃったじゃねエか」

「被害丸々こっちにきたんだよ！！そうじゃなくてその話は

本当なのか！？」

「本当さね、まあ私も可愛い学生が企業の思惑で勝手に

そんな事をさせたくないだけだからね。

そのチケットを回収して欲しいのさ」

「こ、こうしちゃいられねえ！！？ババア、絶対回収してやる！

クソ、パートナーは！！」

そう言って学園長室から立ち去っていった雄二。

どう考えても一番の戦力になるであろう百合子を放置して、それほどまでに焦っていたと考えるべきなのだろうが。

「ンじゃ、”この大会”のチケットは回収しておいてやるよ。

私と翔子が出るからな」

「あんたは白金の腕輪かい……まあバグを直してもらってるし、

あんたに使ってもらうのが一興か」

「データ収集はやっておいてやる」

既に勝つ気満々の百合子だった。

結局、百合子は翔子とタッグを組んだ。

問：9 清涼祭・準備&大会参戦（後書き）

アンケート結果（今現在）

葉月（7） 翔子（0） 両方（2）

やっぱ翔子は雄二の嫁で確定か。

それとアンケート追加で百合子の相手。

前のままだと秀吉になっちゃいますが思い切って
もう一人候補を増やす為二択でお願いします。

イ・木下秀吉

ロ・鉄人の息子（オリジナル・名前は参考程度に募集）

問：10 清涼祭準備・最終調整（前書き）

今回は短め！

問：10 清涼祭準備・最終調整

話し合いも終わり、Aクラスに戻る途中、修羅場を発見してしまった。

翔子が明久と葉月に宥められている途中である。

そして何故そのような状況になっているのか問題源となっていそうなFクラスを盗み見る。

雄二がFFF団に詰め寄せられ秀吉が顔を赤くしていた。

「どういう状況だコラ」

「え、えっと」

「……雄二が男相手に浮気したのをどうすればいいのか悩んでる」

その瞬間なんとなく理解した。

雄二が相方を探し、百合子に相談すればよかったと思い直し、とりあえずAクラスで待ち伏せしようとAクラスに向かい、

既に翔子と出場を確定しており、明久も葉月と参加予定との情報も集め、Aクラスはこれ以上人数を減らせないと理由で頼れず、召喚戦争で色々恨みを買っている可能性がでかいので他のクラスには頼れないからFクラスに戻り、姫路・島田姉が出る事を念頭に置き、戦力となりそうな人材を探した結果、土屋の一点特化型を諦め、平均的に役に立つ秀吉に頼み込もうとした。

その時に何か焦りのせいで可笑しな事を口走ったのだろう。

「予想できる台詞は」秀吉、俺と（召喚大会出場の為に）付き合ってくれ！」か？」

「……おおむね正解」

「で、お前らはFクラスに遊びに来たと……準備は終わったのか」

「もう既に終わってます、後は簡単に清掃だったり接客だったりの
訓練だけです」

「で、雄二のやる気になったFクラスを見たいという翔子さんの
話に乗ってここに来たらさっきの百合子の言ったとおりの台詞
が」

「オイテメエら、○臍飛び散らされなくなったら雄二を解放し
ろ」

純粹に殺すと言われるよりも生々しい迫力にFFF団は一気に解散
した。

流石に軍隊相手にリアル無双可能な人間と真正面から討ちあう勇気
がある者など

普通はいないのである。

ちなみに。は好きな言葉を入れてよし、”心”でも”肝”でも。

「召喚大会に付き合ってもらいたいとの意味で言ったんだよ。

言葉を端折り過ぎたらしいがな」

「なんじゃ、そついう訳か」

事情を聞き、秀吉は腕を組み悩む。

チケットなどの事情は伏せたが、Fクラス改善の為に召喚大会での活躍が必要で、それには純粋にFクラスの实力で固める必要があるとの事で

姫路や翔子・百合子には頼めず平均的に戦える秀吉に頼もうとした。

——と、百合子がさもそうであるかのように説明した。

「ふむ、そういう条件であるならば仕方があるまい。

ワシも一肌脱ぐでしょう」

「カメラ構えンな」

何処から沸いてきたのか土屋に対して馬場チョップで突っ込みを入れる。

ただの突っ込みにしては空気を裂くような音が響いたが、気のせいだろう。

事態が落ち着いた事を確認しつつ、百合子達はAクラスに戻る。

その前に——

「それとだな木下弟」

「ん？」

「さっきのような反応をするから”男”に見られねェんだろが」

「……………なん……………じゃと」

「ふう、これで準備は完璧ですわね」

「ええ、そうね……ほとんどダウンしている以外は

準備万端よ」

「うう、そろそろ慣れていただきたいんですけど……」

「やめて、上目遣いで瞳を潤ませないで！普段とのギャップのせいで

被害が、被害が――！！」

サバイボ現象はなくなったものの、今度は普段とのギャップ差のせいで大幅に

精神をガリガリ削られ、まともな精神を持つものでも耐えられず、ほぼ壊滅状態。

様子を見に訪れた高橋教諭が何事ですか！？と驚いたぐらいだ。

「つつても、いい加減慣れねエとどうにもならねエだろうが」

「この作業が一番大変よ」

「だから自己紹介の時にあれをやって慣らそうかと思ったんだが？」

まさかの伏線である。

実はこの事を想定しての挨拶だったのか。

「それ、嘘でしょ」

「勿論だ」

優子の指摘に百合子はあっさりとはらす。

まったく悪びれていないところがなんとも言えないのである。

「はあ、慣れていくしかないのよね」

「ええ、そうですわね」

何かを企んでいるようにしか思えなかった。

普段の行動がどれだけ影響するのか実感した瞬間である。

問：10 清涼祭準備・最終調整（後書き）

百合子の口調大幅変化（接客時のみ）

ちなみにこの小説で根本はちよい優遇されましたが、他の悪役として出てくるキャラに優遇は無い（キリ）

そして、アンケートの結果に関係なく今出さないとタイミングが遅すぎるので鉄人の息子登場予定。
ちなみに鉄人の息子は別の高校です。

鉄人の息子が一步リード。結果はどうなるのか？

現在のアンケート

明久の相手

1・葉月 2・翔子 3・話分割で両方

百合子の相手

イ・秀吉 ロ・鉄人の息子

締め切りは勉強合宿に入る前まで！

問：11 清涼祭 一日目・1（前書き）

百合子に天敵はいませんが、少し苦手な人物はいます。

明久と共通ですけどね？

今回登場の”あの人”です。

阿弥陀籤で決めた結果、オリキャラの名前は”清十郎”で決まりました。

エミ様と他の名前候補を出してくださった方、
どうもありがとうございます。

名前の方は締め切りです。

問：11 清涼祭 一目・1

「お、可愛いね 안타」

「ありがとうございますご主人様。今2 - Aの教室で

メイド喫茶をやっておりますので是非いらして下さいね」

「お待ちしておりますーす」

清涼祭当日、百合子と葉月は呼子をしていた。

それも学園を徘徊するような形で、だ。

百合子の態度に対して普段の様子を知っている者は

驚愕の視線を送り、そして知らない者は仲の良い姉妹のように
歩く二人の様子に微笑ましいとも思ったのか
行ってみようという気を引き起こした。

尚、百合子が教室に留まらないわけはたった一つ。

『そのほうがダメージが低いのでお願いですから外に

行つて宣伝してください』

ある意味戦力外通知をされた為である。

そして、翔子と明久・葉月以外の全員が土下座してきたので
と言うのも理由の一つだろう。

さし合わせたわけでもないのに一斉に無駄なく揃った土下座など
そうそう見られないだろう。

ルックスや態度なら十分上を狙え、戦力の一人なのだが。

そして葉月も作業を手伝うには少し実力不足とされ、

百合子と共に出陣中。

明久と離れる事に不満げだったが、明久がなでるとすぐに了承。

「他の教室を見た限りでは私達のところが一番ですわね」

「天才のお姉ちゃん、まだ演技続けるですか？」

ぼろが出ないようにつつと演技継続中。

普段の凶悪な表情も今では立派な笑顔に……

だが、普段の百合子を知る者達にとっては

その表情に少し影が付いているように見えて、

余計に怖い。

そんな中、奇妙な光景が見えた。

一人の男がタイヤを引き摺りつつ、重りにでもしているのか、亀の甲羅を背負いながらグラウンドの出店で買った物を頬張りながら歩いていたのだ。

清涼祭に遊びに来ていた何人かがその光景を目が点となった表情で見ている。

「……………何をしているんでしょうかあの人は」

「知ってるですか？」

「二十八号の息子ですわ」

「む、そこに見えるは吉井さんか」

百合子の言つ事を正解とするかのように、微かに声色が西村教諭のもの

酷似しており、更にはどこことなく顔つきも似ている。

「清十郎、アメリカの体育系の大学に飛び級した筈だろうが」

「え！？それって凄くないですか！？」

周りの反応、確かにそうかもしれないがお前が言っな、と学園の生徒は心を一致させた。

それはさておき、男の名前は西村清十郎、西村教諭の息子であり、父親から受け継がれた身体能力で渡米して挑戦するほどまでに達した男である。

「いや、偶然にも日本に来る知り合いが誘ってくれたのでな。

せっかくだから両親の顔を見に私も来た」

「オイ、その知り合いってまさか」

『姉さん！？何やってるの！！？』

『アキ君の様子を見に来たのとゆりちゃんを見に来ただけですが』

『何で巫女服で来てるのさ！！？』

『もしかしてバスローブ姿の方が良かったでしょうか？』

理由なんて簡単ですよ先日日本に訪れた知り合いが日本はどうなっているのか

説明してくれまして、アキヒーサ・ユリーコ・巫女服と言って

おりましたよ?」

『巫女服のところだけ何でそんなに流暢なんだよソイツ!』

『それよりも先に挙げられた三つに突っ込みなさいよ。』

絶対知り合いか知り合ったかのどっちかでしょ」

嫌な予感が的中した。

と言つかあの野郎なんて事を吹き込んでやがるといった表情で眉間に皺を寄せる。

「積もる話もあるが、今少し一大事だ」

「葉月も戻りたいですつてもう消えてる!!?」

「この人ごみの中では確かに空中がベストだろうが、

女としての恥じらいは無いのか」

顔をさりげなく下に落としながら呟く清十郎。

通行人の数人がスカートの中を覗き込もうとしたが、

スカート自体のベクトルを操っているのか、

中がぎりぎりで見えないようになっており落胆していた。

『寧ろそのギリギリさが良い……ぎゃ!』

妙な事を口走った男は何処からともなく飛んできたボールで制裁を加えられた。

「何、愉快的な事をしに来たんだこのキス魔ア！！」

「素が出てますよゆりちゃん、お客様にそのような態度は――」

「何を可笑しな真似をなさっておられるのですかお嬢様」

「私が悪かったです、すいませんからいつものゆりちゃんです」

家族にすらもサバイボものだったらしい。
普段の行いがよく分かる出来事であった。

「で、本当に何しにきやがったキス魔」

「アキ君にも説明したのですが、

あなた達二人の様子を見にきただけですよ」

「そうか、今から服を調達してくつからその巫女服は止める。

翔子、ちょっと休憩取ってくる」

「……お土産は雄二が良い」

Fクラスで雄二に悪寒が走った。

「今清涼祭の途中だ……そっぴゃ一回戦はどうなってるんだ？」

観客に見える試合になるまで翔子が一人でやると言い出したので百合子は任せたのだが、結果はどうなっているのだろうか。

「……私一人で十分」

「確か全員三年のAクラスって聞いたんだけど」

総合科目10000オーバーは伊達じゃない。

まともに相手にしたければ姫路クラスは必要である。
数学なら葉月も勝てるのだが。

「そっぴゃえば、僕と葉月ちゃんも試合だ……」

百合子、姉さんの相手頼んだよ」

「あ、コラ逃げんな鈍兄！」

教室に丁度戻ってきた葉月を回収して明久は試合に向かうと言う名の逃亡を開始した。

葉月のちよっとうれしそうな叫び声が印象に残った。

「ところでゆりちゃん、お帰りのチュウをしてください」

「何でそうなる、そして何処から沸いてきた土屋アー!!」

「どうして拒否をするのですか、女同士なのだから問題ないでしょう」

天井から音も無くカメラを構えてシャッターを切る土屋。

だが、カメラ自体の視線を感じたので既に対策は打ってあった。またもや撮れなかったことに落胆し、土屋は膝を付く。

その姿を工藤が慰めていた、もう実は付き合ってるだろお前ら。

「毎回毎回、私と明久に迫ってくんなっつってんだろが」

「アキ君は異性として好いていますし、ゆりちゃんは可愛い妹なのですから」

問題ありません」

「”可愛い”妹……？」

「ちよつと頭を冷やそうか優子」

「普通この状況だと客は引く筈なのにむしろ増えてるのはどうしてだ？」

百合子が玲に食って掛かり、玲は反撃し、優子は疑問に思い、百合子が噛み付く。

その状況は久保が溜め息混じりにしながらもお客さんを裁くように指示を出す。

ちなみに男子は執事服である。

「そういえばゆりちゃん、アキ君は成績があがりそうですか？」

「少しずつなら上がってるようだが、無理だ……小遣い以外にも何か

あれば話は別だろうがな」

問：11 清涼祭 一日目・1（後書き）

現在の投票結果

明久の相手

1・葉月ルート	10票
2・翔子ルート	0票
3・話分割で両方	3票

百合子の相手

イ・秀吉

4票

ロ・清十郎（鉄人の息子） 3票

ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理）

まだまだアンケートは募集中です。

というか葉月ルートはもう決定っぽい（汗）

問：12 清涼祭一日目・2（前書き）

常夏コンビ登場

他に書く事多分無い

問：12 清涼祭一日目・2

「で、何で姉さんも手伝ってるのさ」

「メイド服しか緊急で調達できなかったし、別に外見的には通用するだろうが、あくまで注文を取らせるだけだな」

「アキ君、似合ってますか？」

似合ってるから困るんだよと、頭を抱えて百合子の肩に手を置いて頂垂れる。

「そっぴや、試合はどうなった？」

「葉月達の勝ちです!!」

「古典だったけど2・Eの人達相手だったし、

なんとか僕がフォローした」

「どつりで痣が付いてたわけだ」

流石に百合子は公式の試合で受けた傷に関しては寛容です。そつでない場合恐ろしいですが。

「今日は三回戦まで行って、その三回戦目が客に見せる試合だね」

「まあ、そうだな。鈍兄が私達に当たった場合、怪我が少なく済むように

加減してやらア……清十郎は何してんだ」

「食事の邪魔になるので隅に寄せてもらっていただけだ」

隅っこの方にはお前は一体何しにこの学園祭に来たんだというぐら
いの

特訓セットが並べられていた。

日本に一時帰国する時の荷物の九割がダンベルなどの筋力トレーニングで

使用されるもので構成されていた。

「まあ、いいけどよう………？」

ふと視線を感じたのかサツとベクトル操作で仕事の邪魔にならぬよ
うな

コースで教室の外を覗く百合子。

訝しげな表情で見ていたが、特に変わったところは見受けられない。

「気のせいかな？つと何だ？」

マナーモードにしているとはいえうるさく振動する携帯を構え、

電話に出る百合子。

電話の相手は勿論――

『ジャリ娘、少し相談があるんだが』

百合子は仕事を一端抜けると言い、学園長の待つ学園長室へと

向かっていった。

その表情はいつものような醜悪に歪めたものや演技のものではなくどこか真剣な表情だった。

学園長室に辿りつき、簡単にノックを済ませそのままの状態で返事を待つ。

ほんの少しだけしか待っていないが待つてる間に扉が直ってる事に対して仕事早いな、などと下らない事を考えた。

「はいつでも大丈夫さね」

「さて、今学祭の最中なのに呼び出したのはどういう用件だコラ」

【教頭の野郎の盗聴器がある、筆談と平行するぞ】

「ふむ、単に学祭がどういう風に進行しているのか聞きたいだけさね。」

研究一筋とはいえ学園の長だからねえ」

【やっぱり会話の内容を予測してたかい、腕輪の不具合の偽情報を

餌にしてるのさ】

筆談といっても、ペンの音が普通漏れるものだが、その音の振動ベクトルを別の場所に放ち、ただ単に会話しているよ

うに

しか聞かせていない。

尚、教頭の隠しカメラが無いのは既に確認済みである。

「へえへえ、友達がいねエのかコラ。仲の良い教師の一人ぐらい

普通いるもんだろ、そいつに聞けや。

もしくは生徒会長さんによー」

【泳がせてンのかよ】

【筆談でもその話しかたかい……決定的な証拠を

掴むまでの間さね】

「教師連中に聞いても意味が無いし、やっぱり生の声を

聞かせてくれる生徒の声の方がいいんだよ」

「へーへー、友達の少ない種別妖怪の為に一肌ぐらい

脱いでやるさ」

【私の方でも動向は探っておくが、期待すんなよ？】

「で、どうなんだい？」

【じゃ、この話は一応仕舞いだね】

「あ？順調だよ順調。特に二年のフロアが大盛況だな後は――」

【ところでこの監視カメラは一斉にとまったりすんのか？】

長話をしている最中に百合子が視線を軽く移す。

ちなみに自分が出なくても美男子美（幼・少）女揃いの2・Aなら平気で運用できると知っているからであり、中で戦力にならないからである。

【いや、そんな筈は無いさね。一台が止まっても隣り合わせにあるのが

起動する仕組みになってるしね。メンテの為に片方は休ませたりするから】

「……ちと店が心配だ。一応私も戦力だからなア」

「そうかい、そうしときな。悪いね年寄りの話に付き合ってもらって」

「別に構わねエ」

そっついながら少し早めに歩きつつ、学園長の部屋を出た地点で窓から空へと舞い
一気に見渡す。

不自然に怪しい客やガラの悪い人物の姿は見受けられない。

「そりゃそうか、木を隠すなら森。

これだけの木々の中にまぎれるならそれ相応の格好だろうしよ

ウ
」

万が一そんな格好をしてきた者がいれば、それは玲のように少しネジが飛んでいて常識が無い人物か、囧か。

「腕輪の嘘を餌にしたら、見事に釣れたな……」

後は決定的証拠を掴むだけか」

下から騒ぎが聞こえ始める。

百合子が視線を下に向けると騒ぎの源は三箇所。自分自身と2 - A、2 - Fの辺りだ。

「空飛ぶのはマズツタか」

急いで戻り2 - Aをサツと確認した後、ただの大盛況ぶりによる騒ぎだった為、2 - Fへと向かっていった。

「オイオイ、どうなってんだこりゃ」

遠目から確認するとどうやら中で騒いでる阿呆がいるらしい。恐らく店の妨害をして召喚大会に集中できないようにする作戦なのだろうが。

やり方がせこすぎる。

と、ここで後ろから――

「百合子か、どうしたんだ」

「雄二、勝ったのか？」

「ああ、もつとも秀吉の方が俺より操作に慣れていたお陰も

あるんだがな」

DクラスBクラスの戦いの時、結局雄二は戦っていない為、最前線に何度も参加したベテランの秀吉の動きをサポートする側に回った。

「それより店はどうしたのじゃ」

「私の方か？それともお前らの方か？」

「あ、坂本代表。ちょうど良かった助けてくれ。

変な客が来てるんだ」

「須川か、どうしたんだ？」

『マジできつたねえ机だな！これで食べ物扱っていいのかよ！？』

須川に連れられ入ろうとした教室から3人を出迎えたのは、騒ぎの声だった。

『うわ……確かに酷いな……パンフレット通りだ』

『クロスでごまかしていたみたいだね……』

見た限り厨房は綺麗に見えるけど』

『すいません、胡麻団子5つと紅茶三杯おかわり』

周りの客も、それを見て自身のテーブルのクロスを捲りあげる。
確かにそこには小汚いみかん箱が重なっている為、衛生上良くない。
そんな事を気にせずに胡麻団子や紅茶に舌鼓を打ってる客もいるが。
しかも、御替わりまで頼んでいる。

「ここでこの悪評は拙く無エ？」

「そうだな、秀吉ちよつと」

雄二が秀吉に何かを耳打ちする。

「一応用意はできるが……あつても2つ程度じゃぞ？」

「構わん。少なくとも今は、アピールできさえすればいいからな」

「了解した」

「私の方でも少し手伝ってやろうか？」

少なくとも客として入って同じ客として注意できるしな」

「ああ、助かる……が、お前のクラスの店はどうした」

「戦力外通知を食らったのですわ、こんな口調で営業したら精神が耐えれないそうなので」

「よく分かった。客はともかく従業員が耐えられないな」

雄二と別々に入るように百合子は店にさっさと入っていった。
ちなみに学園長に会いに向かう時には制服だった為メイド服ではない。

「いらっしやいませって吉井妹か」

「あいつらの席の近くで頼む」

「……了解した、じゃなくてかしこまりました」

百合子の思惑が分かったのかFの男子生徒はモヒカンとハゲの二人の
近くの席を選び、案内する。
適当に胡麻団子と紅茶を注文し、さてどうしてやろうかと思いが
ら、

指を鳴らした。

……少し離れた席に座る竹原教頭に対して見せ付けるように。

問：12 清涼祭一日目・2（後書き）

暴力行為は無いですよ（ネタバレ）

その代わり、百合子があらかじめ仕掛けた策が発動します。

といつてもFクラス全般に対するフォローですが（1・2・3年の）

根本は微妙な救済あつたけど他は基本救済無しだと思う。

現在の投票結果

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 11票 |
| 2・翔子ルート | 0票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

イ・秀吉 6票

ロ・清十郎（鉄人の息子） 3票

ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理）

現在、葉月・秀吉リード中

問：13 清涼祭一日目・3（前書き）

まだまだ直接的制裁にはほど遠い。

問：13 清涼祭一日目・3

「責任者を呼べ責任者！」

「後ろでギヤアギヤア喚くんじゃねエ、

飯が不味くなるだろうが」

「な、でも本当に……」

「それにここの客は全員それを承知した上で入ってるんだぜ？」

これ見よがしに持参していたパンフレットを目の前のモヒカンとハゲの

座っている席の机に叩きつける。

きちんと”Fクラス概要”の欄を見せ付けるように。

その欄にはあらかじめFクラスの施設の酷さとそれに対する学園祭時のフォローが書かれていた。

少なくとも料理関係を出す店には衛生関係でのみFクラスでも十分にフォローする事とする。

そのため、3・Fクラスも食事関係なのだが厨房スペースは学園の配慮がなされている。

まあ、結局上位クラスの方が道具などは優良のものが使われているのだが。

「な！！？聞いてないぞ！！」

「おやおや、全校生徒に配られた筈なんだが？」

『胡麻団子おかわり』

「あの客いったいいくつ食う気だ」

既に皿が取り替えられてはいるのだが、それでも十皿置かれていた。
閑話休題。

「つまり、だ……そういう事を踏まえて入った客に対して

テメエらの方が失礼な行為を行っているんだよなア？」

『おかわり』

「空気を読んでものか読んでないのか分かりづらいお客さんね」

「ま、それだけ味は素晴らしいとの証明になる事だしいんじやないか？」

美波の呟きに雄二は答える。

雄二は自分の交渉術を披露が出来ない事に少々悔しげだったが、その分、完全に周りが敵と化したあの二人の姿にすつきりしていた。そそくさと立ち去っていく竹原教頭の姿に百合子以外は気がついてはいない。

「ンじゃ、勘定を払ってとっとと出て行けモヒカン禿」

「くそ、覚えてろ！」

モヒカンが周囲の視線に負け慌てて立ち去っていくと、その後に続くようにしてハゲが追いかけていった。

「雄二よ、持って来たぞい」

「よし、ならさつさと並べて……二つじゃなかったのか？」

「それが……先生方が普通に供給してくれての」

「一方通行アクセラレータの名義で発注されたらしく

1・2・3年のFクラスに送られてきたらしいぞ」

「百合子だろ」

「あ？私の名前は百合子だぞ。一方通行なンぞ知らん」

他のクラスよりは劣るものだがそれでもミカン箱や卓袱台よりはマシな代物。

「そういう事しておくが、どうして清涼祭前日とかに

着くように手配しとけよ」

「文句は一方通行に言え」

学園長との約束により、全Fクラスに送るのは良いが学際の期間中かつ、

調達に動いた時だけにしろと言われ、そのように手配しただけだ。

勿論、その机などは後で孤児院やそれ関係の施設に送る予定である。

「ともかく、これで少しはマシになったな。」

すまん、ゆ……一方通行」

「ふむ、礼を述べさせてもらうぞ、よ……一方通行」

「心臓と脳、どっちを撒き散らしてほしいか言え」

百合子をからかう場合は命を捨てる事を覚悟しよう（明久・翔子除く）。

「そちらはまた一人だけですか」

「別にイイだろ」

「く、嘗めやがって」

「いくら総合八万オーバーだからっていい気にならないでよ！」

百合子はある後、第二回戦だという事を思い出し、翔子をそのまま店にいる様に頼んだ後出場していた。

「学内テレビぐらい見とけよ」

「「は？」」「」

「何でもねエよ、召喚獣召喚」

「「召喚獣召喚!!」」

——吉井百合子・2 - A : 物理 58720点

V S

香川愛媛&徳島高知・3 - B : 物理 195点&188点

——

「さて、ご教授願えますか？先輩方」

8万の地点でも絶望的だったのだが、何かしら勝算は組んでいたの
だろう。

だが、どう考えても絶望な結果に二人はお互いに顔を青ざめ——

「「棄権します」」

「点数だけが全てではないとはいえこれは仕方ありませんね」

仮に百合子の攻撃が一切当たらないと想定しても
物凄く時間が掛かりすぎる。

実際に戦ったとしても瞬殺だろうが。

「くっだらねエ」

「あなたと霧島さんは百分の一と二分の一の表示に変更すべきでしょうか」

それでも十分に高い点数な訳なのだが。

「終わったぞ、相手が棄権しやがった」

「……それは当然」

「あの点数を相手に勝てるなんて普通思わないわよ」

それはともかく、これで百合子・翔子ペアはベスト4の中には残った事となる。

次は準決勝であり観客も入る試合なのだが……

「流石に二人とも出ねエと拙い、か？」

「対戦相手が泣くけど規則なんだから観客が入る試合ぐらい

二人で出なさいよ。ついでに宣伝もよろしく」

宣伝などしなくとも十分に客入りはあるのだが。

「葉月達が勝ったら、次の相手は雄二さん達とです」

「数学を引けるように祈っとくんだな」

「はい！」

と言っても、まだまだ次の対戦が存在しており、気が抜けないのだが。

尚、まだ雄二達は戦っていない為本当は結果は不明のはずである。

「それより……さっきよりも客入りが少ねエな」

「確かにもうお昼時だし、来ない方がおかしいわよね」

と、ここで電話に連絡が入ってくる。

相手は雄二。

「なんだ、雄二」

『そっちの客入りはどうなってる』

その電話の様子からFクラスでも客入りが少なくなってるのだろう。ときおり聞こえるおかわりコールが多少不安だが。

「まだあの客は食ってやがンのか」

『ああ、途中清算した後、30分後にまた来た』

食いすぎだ。

の、前に。

『ムツツリーニ……土屋からの盗聴情報でBクラスで

何か妨害が起ってるらしい』

Bクラスと聞いて眉をひそめる。

既に半根本派はその勢力を大幅に弱体化している筈だし、根本派はむしろ協力者側といっても過言ではない筈である。と、ここで……

「すいません、吉井妹さんはいますか？」

「岩下か……そっぴや男女逆転だったな」

『こつちには根本が来たぞ、ムツツリーニが必死にカメラ撮ってやがる』

岩下の男装した姿に確かBクラスは男女逆転喫茶だったなと思い出しながら、

何でこつちに根本が来なかった、と舌打ちする。

「じゃ、切るぞつと……何の用だ岩下」

「あ、ちよつとこつちに嫌な客が来てAとFに対して

悪口を言いまくってるのよ。何とかしてくれない？」

まだ続けていたらしい。

確かにその状態ではパンフレットに書かれたとしても行く覚悟の無い客の足を完全に途絶えさせる事も可能だろう。

AクラスはともかくとしてFクラスにとっては多大な損害である。

「愉快的な事をしてくれたじゃねエか三……モヒカン禿が」

「き、切れる寸前だ」

「アキ君と翔子ちゃんしか止めれないと

思うので付いていって下さい」

心なしが百合子の周りの風が渦巻いている印象を受ける。

ベクトル操作が微妙に暴走を引き起こしているのだろう。

口調も一瞬だが、前暴走した時の敵に対する差称を言いそうになり、一般人が見ても切れてることは用意に分かった。

「よし、案内しろ岩下ア」

「な、なんか混ざってない？」

三下と岩下が混ざったような言い方になっている。

不安である為、クラスの戦力を落とさない為に明久だけが同行する事になった。

問：13 清涼祭一日目・3（後書き）

流布標的にAクラスを追加した哀れな二人。
次回、ついに直接制裁開始？

現在の投票結果

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 12票 |
| 2・翔子ルート | 0票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

イ・秀吉 8票

ロ・清十郎（鉄人の息子） 3票

ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理）

葉月ほぼ確定？ & 秀吉大幅リード中

問：14 清涼祭一日目・4「嵐の前」（前書き）

ベクトル操作で電気信号って弄れるよね？たぶん、な今回の話。
今回のサブタイトル、次の話の伏線っぽいにおいがプンプン！

問：14 清涼祭一日目・4「嵐の前」

「よう、来たぞ」

「あ、吉井妹。丁度良かったわ、あれよあれ」

『だから二年のAクラスとFクラスには行くなって話だよな!』

真ん中の席にてどうどうと喋っているバカ二人。

その光景を後から来た雄二と秀吉率いる2・F主力メンバーがやってきた。

暇だった為なのとついでだから昼休憩と言う意味合いもあるのだから。

「根本の野郎はどうした」

「暫くクラスを転々として宣伝や休憩だそうだ」

明らかに百合子から逃げている事は丸分かりである。

「で?どうするんだ」

「また脅してやっても良いんだが、

懲りてないみたいだから……服はあるか?」

「仕方ねエな、オイ鈍兄」

「うん、百合子が男装して僕が女装するんだね」

「以心伝心って凄いわね」

伊達に16年ちかく双子の兄妹をしている訳ではない。
ちなみに明久は百合子の傍にいる為に女装する。
ここが男女逆転喫茶でなければよかったのに、と
心の中で思っていた。

「さて、本人だとばれない様にしねエとな」

そう言っただけ更衣室を借り、着替え＆化粧を施す。
その時間、僅かに二分弱。

「さて、とつとと向かうか」

「どういう作戦なの？」

男装し、美青年に化けた百合子と玲に少し近いように化粧を
施された明久があまっていたらしい服を着込んで、
モヒカンとハゲ……三年の先輩の待つ席へと向かう。

「私が女である事と能力を武器に使う」

「お水をお持ちいたしました」

「おう……男装が様になってるな、てか声野太!？」

「そっちの君も女装が似合ってるね」

「どうもありがとうございます」

明久は内心で笑いを堪えていた……秀吉ほどのバリエーションは無いが、

それでも十分に自分の声を誤魔化すほどの変声技能。と言っても結局のところベクトル操作で音の振動を弄くってるだけである。

現在、百合子は若。の声で流暢に喋っている。

中性的な容姿とのギャップに周りの客が危つく噴出しかけた。

「少々宜しいでしょうか、肩に糸クズがございますので」

「あ、ああ」

そして、肩に触れた瞬間、ベクトル操作の本領を発揮させる。

体内の電気信号のベクトルそのものを操作し、モヒカンの体の動きを操る。

そして、モヒカンの手を百合子の胸に向かわせ、揉ませた……他の客全体に見えるように。

「きゃあああああああ」

「おい貴様!!男装しているとはいえ

公衆の面前で女子の胸を揉むとは

どういう事だ!!」

「さて、ぐぎゃああああ!!」

そこをすかさず雄二が蹴りを入れる。

他の客もそのモヒカンが急に胸を揉んだところを目撃していた為、むしろ雄二が応援されていた。

『この女の敵!!』

『羨まし、不埒な真似をしゃがって』

『いいぞ、その男そのままぶちのめせ!!』

完全にアウエー状態。

と言うよりもまだモヒカンは今起っている事を理解できていない模様。

「く、くそ……逃げるぞ夏川!!」

「お・おい、待てよ常村、何であんな事したんだ!!?」

「あれで済んで良かった……僕が来た意味ないじゃん!？」

百合子の制裁が比較的温厚な方向だった為、

押さえ役に来た意味が無かった明久。

わざわざ女装までして百合子の傍に来たのに散々である。

「さて……追い詰めンぞ」

「追いかけるじゃなくて追い詰める！！？」

そう言つて、サツと一瞬だけ明久に目配せすると百合子はそのまま突風のように駆けだしていった。その後を雄二が追従する。

「今のは学内で行われているゲリラ演劇の一種です！

お楽しみ頂けたでしょうか！！」

「吉井君、それは無理があるんじゃない——」

『スゲー、今年はそんな事もやってるのか』

『ゲリラって事はランダムで他のところでもするのか？』

Bクラスで少し乱闘があった為、そのフォローをしると指示されたので

明久は咄嗟に思いついた事を発言する。

瑞希や他の追跡していない面々は呆れかけたが、それを信じた客の方が

非常に多かった。

「ま、これでこの店にはあの変な客は来ないんだな」

「根本ちゃんいつの間に」

「ちゃんは止めてくれ」

「入場料だ、釣りはチップにしろ!!」

「ちよ、10万円の小切手貰っても困るわよ、へぶ……」

現金10万円も困るわよ!!?」

三年Aクラスに逃げ込んだ常夏コンビを追いかけて入場していく。
入場金未払いでケチ付けられても困るため、適当に引つつかんだ
金額を放り投げた。

余談だが、秒間瞬間売上高一位を記録した三年Aクラス。

「迷路になってやがんな」

『クソ、あいつら追ってきたぞ』

「ぶっ壊してもいいンだが、それでこのクラスの努力を

水の泡にするのもあれだな」

「捕まえられるんなら俺は別に構わないが……なんだ?」

突如、缶を撒き散らしたような音が響き渡り、
部屋中に伝染して行つた。

そして音が収まった頃……

「ち、必要な音を探すのに手間取った……撒かれた」

「壁を倒す手段に出なかったのか、あいつらは」

流石にその行為を行えば自分達にその壁が向かってくる事は
理解しているらしい。

しかもベクトルの反転＋自身の操作で威力などは倍以上だろう。
仕方なく迷路を攻略し出口から出て行く。

「仕方無い、次は俺は試合だからな」

「そうか、相手はどこなんだ？」

「姫路達だよ……」

「そうか、まア決勝の相手よりは気軽だろうが」

「……………無駄だと分かっても足掻かせてくれ」

チケット奪取率が極端に厳しく、大変な事態だと言う事には
試合に参加してから気がついた事である。

それでも、一応姫路の転校を阻止する為にはFクラスでの勝ち上が
りを

見せる必要があり、姫路がいなくなれば戦力の大幅ダウンは避けら
れないのだ。

勿論、クラスの仲間である為完全に駒という見方はしていないのだが。

「まあ、教室の設備の改修の為だからな」

「そうか……私の方から無理やりには誘うなと言っておく事にすらア」

「出来れば頼む」

チケットを入手したとしても絶対に行かなくてはならないという約束は交わされてはいない為、拒否は出来るが、最初からそういう選択枝の余地を選ばせて貰えるなら都合が良い。

意外にも翔子は百合子の言う事なら雄二関係でも意見を考慮に入れてくる傾向にある。

「じゃ、行ってくる」

「私も教室に戻る」

そう言つて二人はそれぞれ別の方角に歩き出した。

そして百合子は2-Aクラスに戻つてきて数人の姿が見当たらない事に

気がついた。

妨害も無く大盛況という状況なのにも関わらず、ルックスで大戦力である翔子と

微笑ましさによる葉月、実質切り盛りしている優子の姿が見当たらない。

「よう工藤……明久・翔子と葉っぱ娘・優子とキス魔はどうした」

「え？葉月ちゃんはお花を摘みに行ったし、代表と優子も

先生に呼び出されてちょっと出たし吉井君は一緒じゃないの？

後、君のお姉さんはあそこ」

百合子の背筋が僅かに冷えた。

杞憂であつて欲しいのだが……………。

その時、放送で姫路と島田の呼び出しが行われていたが、

百合子は突つ立ったままその場を動く事は無かった。

そして、この日最大の恐怖が哀れな患者達に訪れる事を示していた。

問：14 清涼祭一日目・4「嵐の前」（後書き）

うん、次回百合子の恐怖が訪れます。

残酷表現タグの本領発揮……まあ、その部分だけ別の話で
隔離しますが——サブタイトルでも警告を入れておきます。

さて、現在のアンケート結果は

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 13票 |
| 2・翔子ルート | 0票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

- | | |
|-------------------------------|----|
| イ・秀吉 | 8票 |
| ロ・清十郎（鉄人の息子） | 4票 |
| ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理） | |

葉月ほぼ確定 & 秀吉リード中……

問：15 清涼祭一日目・5 喉元過ぎれば熱さを忘れる（前書き）

次回は色々と注意！

今回もちよつとだけ暴力あります。

問：15 清涼祭一日目・5 喉元過ぎれば熱さを忘れる

「落ち着け、そオだあの神父のように素数を数えるんだ

2 3 5 7 1 1 1 3 1 7 1 9 2 3 2 9 3 1 ……

効果ねエ、くそ」

「どうしたの、吉井ちゃん」

急に高速で素数を数えだした百合子に心配そうに
工藤が声をかけるが、百合子の耳には届いていない。

「そうだ、鈍兄と葉っぱ娘はもうすぐ試合だ、もしくは終了した
後か？」

そして翔子ももう試合会場に向かつてるンだろ……

そうだ、だから起きる筈が…… オキルハズガ……」

学園長室で見た監視カメラが一斉に止まっていた光景。

それが教頭の意図した事だったら？

この時まで百合子は教頭を多少は信じていた。

他の学園や学校に出入りしている噂や異動することを考えているとの
情報があったので異動を考えるなら教育者として非道な行いは
しないのだろうと…… 精々が先ほどまで起っていた集中力を乱したり
するような可愛い行いだけしか行わないと想定していた。

「く、はは…… 私もあの鈍兄に影響されたか？」

もしくはやっぱり双子だったってエ事かア？」

「よ、吉井ちゃん！？く！！」

「駄目、今のゆりちゃんは全ての声を認識していない」

突然壊れたかのようにフラフラ動いて教室の外へと向かう百合子を押さえ込もうと掴むが、ベクトルの反転により折れ曲がりそうになったため、

慌てて離れた工藤……離れた後も指自体が極められたかのように痛みを

伴っており、しばらく抑えて、様子のおかしい百合子を見るしか出来なかった。

その工藤を介抱しつつ、妹の変貌振りを悲壮な眼差しで見る玲。だが、本当の恐怖はここから起きた。

『吉井百合子さん、霧島翔子さん……既に試合時間ですので

後10分後までに試合場に来てください。繰り返します――

ザザ、ガ……ザザアーーーーー

放送器具が砂嵐状態のテレビのようにしか流さなくなった。

他の客は幸い故障でもしたのだろうと思っていたのた。

百合子の能力を把握している面々も能力射程に入っていないから故障だろうと

思っていたのだが……

「オイオイオイオイオイオイオイ！」

可笑しいだろうが、翔子が時間を間違っ等が無エ！！

あれか？私が来ねエから、ンナでたらめな放送を流してンですかア！！？」

『おい、ムツツリーニ。今の百合子はヤバイ、俺達だけで

内密に解決に動くぞ！！』

『…………（コクリ）』

『そうじゃな、姫路達や明久達の事も『！？バカ』——』

——百合子ノ視線ガギョロリト声ノ聴コエタ方角ニ向イタ——

その瞬間、その場には百合子は居なくなり、雄二達の前に移動していた。

——音が後から鳴り響き、窓は偶然開いていた為、割れこそしなかったものの急激な振動が加えられ、突風が廊下を襲った。

他に通行人が居なかったのが幸いだろう。

「愉快的な台詞が聞こえたんだが、私の気のせいかな？

雄二とその他ア」

「そ、その他じゃと？」

「すまん、秀吉静かにしてくれ……翔子の言った通りか……」

ならまだ俺の話を聴く猶予はギリギリあるか、止めれないだろうが」

「あア？何ボソボソ喋ってやがる」

百合子の普段以上の態度の悪さから、相当来ている事を感じ取り、雄二は下手に隠すと危険が訪れる事を察知し、諦めて話す。

「実は、島田や姫路が試合時間になっても現れなくてな、

疑問に思いムツツ……土屋が慌てて駆け寄ってきて攫われたとの情報を得た」

「そうか………で？」

「土屋の盗聴器のお陰で場所は把握したが、

そこで翔子と明久の声を同時に聞いたんだ」

「雄二の怒りっぷりは凄まじかったのう、あれで好きではないと

言い張るのも疑問に思うんじゃないが」

今現在雄二の怒りは微妙になりをひそめている。

目の前の核爆弾、もしくはそれ以上に危険な存在のお陰である。そのお陰で冷静になったのだ。

下手すれば誘拐実行犯達の身柄が精神崩壊になってしまう。
殺しはしないと明久と約束していたらしいが、
下手すれば殺した方が幸せな程の制裁だろう。

「……………土屋、この誘拐事件が終わったらずい少しい個人的に話がある。

色気のねエ話だが、テメエにとっては結構有利な話だぞ」

「……………？」

「百合子、聞かないだろうが一応言っておく……

（犯人の精神を）殺るなよ」

「ソイツは聞けねエ相談だ」

百合子達は土屋の情報を元に、とある一室に辿り付いていた。
と言っても土屋のナビゲートをもとに秀吉・土屋・雄二を抱えての
百合子による空中疾走だった。
空を疾走するというあまり遭遇する事の無いシチュエーションだが、
その感動を噛み締めている暇などありはしない。

「せめてあのちびっ子が救出されるまでは抑えてろよ」

「そこは心配すんな、人質が居る状態で行使する気は無エ」

翔子に聞いた限りでは、小学生の頃、翔子自体の誘拐時、助け出される時に犯人全員を精神を破壊したらしい。

肉体的暴行を何度も加え、心を圧し折り、ベクトル操作による電気信号の制御で言葉に出来ないほどのナニ力を行ったそうだ。

「けどよう、人質救出したらとつとここを離れる。

黒幕を暴く………今もなア………限界なンだよウ………!!」

それは見て分かったといった様子だ。

風の制御ベクトルは乱れところどころカマイタチや静電気が発生し、その影響で髪が多少逆立っている。

怒りに呼応するかのように百合子の周囲は重力の力が乱れ、

光が妙に屈折しているのかところどころ見えなくなっていたりする。顔や全身が血管浮き彫り状態になっており、急激に緩急がついているのか

音が聞こえてきそうなほどに脈打っている。

『さて、どうする？ 坂本とこの吉井の妹か……？ そいつら、

この人質を盾にして呼びだすか？』

『待て、坂本は下手に手を出すとマズい。

坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』

『それに吉井妹って、あの殲滅墮天使だろ？ 俺たちだけでそんな奴ら、

どうやれってんだよ？』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……』

『気持ちは分かるが、そうもいかないだろう？』

依頼は木下秀吉を含めたその三人を、足止めすることなんだからな。

それに平和ボケでも起こしてるのか、吉井の妹はそれほど恐怖は無いはずだし、上手くいけば名を挙げれるチャンスだ』

そのような会話が聞こえているのだ。
仕方が無いだろう。

「殲滅墮天使とは何じゃ？」

「……………裏世界での私の通称だよ、昔のなア」

本当に面倒くさそうに話す。
だが、それ以上は話す気が無いらしい。

『ひつく、バカなお兄ちゃん』

『おいおい、こんなガキにバカ呼ばわりされるたあ、

随分とバカなんだな』

『葉月に触るな変態！！！』

『くそ、せめて葉月ちゃんだけでも解放しろ!!』

『そうよ、小学生を攫っていい気になるなんて

大人気ないわよ!!』

『……少なくとも明久はあなた達よりは頭がいい』

『何だとテメエ!! 少しばかり可愛いからって

いい気になるんじゃないぞ!!!』

中から水をぶっ掛けたような音がした。

誰が掛けたのかは知らないが、誰に掛けられたのかは容易に想像がつく。

『木下さん!!?』

「あ?」

予想とは違った悲鳴が上がった。

声からして姫路の悲鳴なのだろうが、
あいにくと百合子は興味を持たない。

だが、木下という事は優子が代わりに水を
被ったという事だろう。

『テメ、動けたのかよ……っ! か、水に濡れたいなんて

変な趣味だな』

『……優子』

『……………』

理由は分からない。

なんとなく、百合子自身は不良達を庇ったような感じを受けた気がした。

（くっだらねエ、私の行動を把握してンのかア？

だからってそいつらを庇う必要なンざねエだろうが）

『あーあー、呼ぶ予定まで少しあるし……………』

お前ら、好きにヤレ』

『『『そうこなくっちゃ』『『『

その瞬間、百合子の意識は掻き消え、扉は吹き飛ばされた。

その扉が不良の一人に当たりそのままの勢いで壁に打ち付けられる。教頭の時のそれとは違い、それを受ける衝撃は和らぐようには設定していない為、

不良はそのまま意識を失った。

おそらく、その不良は一番運が良かったのだろう……………悪夢を見る事無く

意識を刈り取られたのだから。

「な、なんだテメ「黙れ三下ア」」

瞬間、不良たちは全員床に叩きつけられた。

よく見れば百合子の背中には黒い羽のような噴射が発生している。
おそらく、能力そのものの射程をあれで増幅させているのだろうが、
まったく理解する事が出来ない。

「雄二とその他……鈍兄と翔子、葉っぱ娘に優子とその他を連れて
とつとどこから離れる」

「……明久、翔子……止められるか？」

「……その場合、他のところに八つ当たりが発生するから

発散させないと止まらないよ今の百合子は……」

「……百合子、殺しも精神崩壊も駄目」

「……尋問するだけだ、リーダー以外に手は出さねエから

安心しろ。

それと、後で種別妖怪と一緒に謝罪しに行くから

2 - Aの教室で待機してろ」

全てを精神崩壊させないだけマシだと判断したのか、
全員この場を急速に後にした。

葉月はかなり疑問に思っている様子だったが、
残酷な現場を知るには精神がまだ幼すぎると判断し、
少し懲らしめるだけだと明久が言い聞かせた。

問：15 清涼祭一日目・5 喉元過ぎれば熱さを忘れる（後書き）

次は隔離問題です。

完全にヤバイ表現は避けたものの、

大丈夫かどうか怪しいので注意してください。

自分的には大丈夫だとは思いますが……。

さて、現在のアンケート結果は

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 13票 |
| 2・翔子ルート | 1票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

- | | |
|-------------------------------|-----|
| イ・秀吉 | 10票 |
| ロ・清十郎（鉄人の息子） | 5票 |
| ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理） | |

葉月ほぼ確定 & 秀吉大幅リード中……

翔子ルート単体初投票……無理なきもするけどorz

隔離問題（前書き）

注意・暴力や下品な表現が出現します。
そういう表現が嫌いな方はバック！！
空白大量

「さアってとウ……リーダーは誰だア？

ソイツ以外は助けてやらア」

明久達を見送り、他の客・従業員に何かを言った後百合子は部屋に戻り言葉を発する。

そう言つて重力のベクトルを操作し、一気に不良たちの足に負荷を掛け続けていく。

折れるか折れないかの瀬戸際の圧迫にたまらずあつさり不良たちのほとんどが一人の男を指差す。

「……そ、そいつだ！！俺達はソイツの計画に

乗っただけなんだよ！！た、助けてくれ！！」「……」

「！て、てめえら」

「そうかいそうかい、ありがとよ」

そう言つて約定通りリーダー格以外の足の重力を
押さえつける程度に変更する。

「な！？解放してくれるんじゃない——」

「助けてやるとは言つたが誰も解放するとは言つてねエだろ」

確かにそうである。

尚も言い募ろうとようやくここで不良達が百合子の顔を見たが、
その瞬間、言葉が詰まった。

表情は笑っている狂おしい程までに清清しく美しい表情で、
そして目も笑っている、笑っているのだが、だからこそ
異様な恐怖が全身を襲つた……………そして理解したのだ。

敵に対する見かけは慈愛のある表情・黒い翼のような噴射、
まだ他にも理由は存在するのであるが、

【墮天使】の異名は間違いなくここから来たのであると……………。

「さつてつと、楽しい楽しい拷問の始まりだ……………すぐに逝くんじ
やねエぞ

三下ア!!!!!!!!!!」

瞬間百合子が軽く腕を振るい、巨大な風の塊が男を襲つた。

その一撃は乗用車が80キロ近いスピードで突っ込んだ衝撃に匹敵
する。

通常ならよくて失神、悪くて即死だ。

だが……………

「が、ああああ……………」

それでも失神も即死も起ってはいなかった。

男が激突する壁付近にも男の衝撃を和らげるように百合子の噴射の一部が待ち構えており、それで助かったのだ。

「さつてと、首謀者は誰だ？」

「が、ぐががgggg」

「おいおい、頼むぜ本当……これやってる私も心が痛むんだぜ。

何せ弱い者虐めはやっちゃいけない事なんだからなア」

話せないほどまでに衝撃を与えておきながら、さも自分の責任では無いと言い張る百合子。

無慈悲だ……誘拐した中に明久と翔子がいなければまだ優しい方向で最初の地点で首謀者だけを聞きだしてそれでお仕舞いだっただろう。だが、男達は……そして首謀者ですらも百合子の唯一の弱点である
としか

認識していなかった。

確かにそうだろう……だが、もう一つの意味合いの方が強いという事は、

百合子自身と対象である翔子・明久、話を聞いた事のある雄二と吉井家。

そして百合子の態度から直感的に悟った優子しかない。

「そうだ……いいことを考え付いた。

鬼ごっこをしようぜ……それで30秒間逃げ続けたら全員解放してやる。

だが、逃げられなかったら少し厳しい仕置きをしてやる」

そう言つて男を床に叩きつけ、これ見よがしにストツプウォッチを取り出す。

「私は歩くだけだア、それならテメエみてエな三下でも逃げられンだろ」

スイッチを押した。

瞬間リーダー格の男は全身に力を籠め慌てて逃げ出したが、恐怖で縛られているのか中々部屋の外に……扉に向かうことすら上手くいってはいなかった。

「あ、あひ……かひゆ……」

「ンだア！その逃げ腰はア！！！！」

愉快にケツ振りまくって誘ってやがんのかア!!!!?」

[illegible]

それでも男は速度を上げられなかった。

余計に恐怖で身が竦みついいには体の動きが完全に停止したのだ。

「オイオイオイ、根本のようないく下でも逃げるぐらいの

根性はあるやがったぞ！ テメエらの悪ぶった態度は

「ただの張りぼてかア！！？」

かつて、百合子は明久に非が無いのに手を挙げた根本に対して似たような行いを行った。

その時は両腕の間接を外した状態だったのだが、それでも火事場の馬鹿力でその時は人間の限界速を超越したスピードで逃げることに成功したのだ。

もつとも、その時には歩くというハンデはなく、空中を駆けた百合子にあつという間に捕まってしまった訳であるが。

「さアってと、ウラア!!」

「ゲブウ!!?」

天井に叩きつけられ、不可解なベクトルの力で押し付ける。額を切り、ようやくこの日初めての出血を出した。

「嬉しくもなンともねエアングルだなアオイ」

そう言つて床に叩きつける。

勿論、殺さないようには配慮してある。

「た、竹原だア!!!!!!」

「ンあ?」

いざ、更に追撃を掛けようとして突然、聞いた事の無い声が聞こえた。

リーダーを吐けと言ったときに沈黙を守っていた人物である。

今まで全員と同様に恐怖に身を竦ませていたのだが、急に叫びだしたのだ。

全身全霊をもつてして。

男はすぐさま理解したのだろう、吐かせる為の拷問だとは言っていたが、

そのリーダー格の男がやられれば次はここに居る全員を標的にするのだろうと。

その光景に百合子はポカンとした表情をしたが、すぐさま、レコーダーを取り出しリーダーの男を投げ捨て、叫んだ男に接近する。

「く、くかかか、依頼内容と依頼主を吐くんだな」

「あ、ああ……………」

そして、その内容を録音し、満足のいく証拠を得た後、男達をあつさりと全員解放した。

教頭の竹原が誘拐事件に関与したという事実を得たのである。そして、百合子が一人外に向かう途中、何かに気がついたように振り返った。

「もし次姿を目にするような事があつたら容赦しねエ……………」

その時は死んだ方がマシだという目に遭わせてやる」

そこら辺においてあったペットボトルを軽くはじき、ベクトルを操作し……………中の液体を一気に散乱させる。

「さて、お前は話さなかったなア

精神破壊は翔子達との約束どおり勘弁するが……………」

「ひ、な何をする気だ！やめろおおおおお……！」

その光景を目撃した男達は自分達がいかに日常に居たのかを理解した。

そして、百合子自身が破壊こそしなかったものの。

その男達の精神は壊れこそしなかったが傷を負い、

一人で居る事を拒絶し、女子を見れば光景がフラッシュバックする
と言う

悪夢に魘される羽目になる。

……… 最初に肉体的損害だけで済んだ壁に埋まった男は
本当に幸運だったのである。

そして、数年後になるのだが壁男以外全員が世捨て人となり、
その後の消息を知る者はいなかったという。

隔離問題（後書き）

大丈夫な範囲だよね！。

百合子の切れ具合を明かす回です。

翔子と明久に手を出すところになります。

……小説の前書き（姫路・美波）の注意の参考にでもしてください。
い。

問：16 清涼祭・一日目 終了（前書き）

短め！

そして、タイトルがずれてた――

問：16 清涼祭・一日目 終了

「謝罪って言ってたが、何か裏でやり取りでもしてたのか？」

「そうだ、偽情報を餌にして教頭の悪事を暴こうとしていた」

百合子が教室に戻ってきた頃には既に夕暮れ時、
召喚大会は現在、明日の決勝を待つばかりであり、
決勝の組み合わせは雄二・秀吉（大会にはギリギリ間に合った）組と
常夏コンビである。

腕輪の事は偽情報な為、別に常夏が優勝したところで
何の問題も発生しないのだが。

「一応、教育者としては信頼してたんだがなア」

「……………あたしもだよ」

疲れたような老人の声が響いてきた。

今回のことで百合子と同様に完全に負い目がある為
いつも以上にしっかりとした服装で来ている。

「出たな妖怪ババア」

「学園長に何言ってるのよ！」

「別に構やしないよ。何処かのジャリ娘で慣れてるさね。

それにそう言われても何も文句を言う資格なんて無いさね

……結局生徒の事に構ってる暇なんざ無かった事と

少しの油断が今回の事件を招いたんだ」

「私も同罪だ。いくら秘密裏とは言え、少なくとも

関係者には伝達すべきだったんだよ」

見通しの甘さと、人材不足が招いた今回の件。
教育者として信頼してしまった過ち。

「本当に済まなかった」

「え……？」

教室に残っていた巻き込まれた人物は完全に息をする事すらも忘れた。

学園の長である人物と世界最強である人物が二人揃って頭を下げ……
それどころか土下座をしているのだ。

学園長も、それどころか百合子も並大抵の覚悟では無いだろう。
下手すれば生徒達の心身ともに傷を負わせてしまう可能性もあった
のだから。

「……謝罪はいい」

「そ、そうですよ天才のお姉ちゃんも頭を上げてください！」

「ぶ、無事だったんですからそんなにしていただかなくても」

「それは結局結果論に過ぎねエンだよ……私の超能力じゃ

結局のところ居場所を把握出来るわけねエし、犯人達の思考を

私自身の演算能力で割り出してもそいつ等の思考を完全に再現
できねエ以上

正答率はわりイ……それに万が一にも遅れたらアウトだったン
だぞ」

百合子の超能力であるベクトル変換能力は破壊活動や、自身の守り
においては
無敵に近い性能を誇るものの、誰かを守るといふ行為に関してはか
なり弱い。

今回のように攫われてしまえば現場を見ない限り音速を越えたスピ
ードも

空中を駆ける事も出来る性能も無意味と化す。

「それは……」

「結果がいくらよくてもなア……過程や方法が駄目な場合、

結局のところ駄目なんだよオ」

完璧主義とはいかないまでも、今回は少しのミスが

そのまま最悪トラウマを負わせる可能性がある。

今回の場合、葉月が一番心に傷を負う可能性もあったのだ。

最初の一撃、扉毎吹っ飛ばした相手、あれの光景は偶然にも
島田が襲ってくる男から庇っていた為見えていなかった。

その後の光景にしても切れてたとはいえ少し違えてしまえば

葉月や明久・翔子が居た状態でも不良達を廃人にする可能性はあった。

『『………』』

「百合子、齒を食いしばって」

「明久？」

「………」

この中で一番交流が長く、兄妹である為にどれだけ許そうとも絶対に妥協はしないだろうと判断した明久は百合子に近づく。

「おりゃああ！！！」

そのままハリセンでぶっ叩いた。

その勢いをそのまま逆方向に向けながら。

綺麗に間抜けに教室にスパーンという音が鳴り響いた。

先ほどまでの空気が微妙にしらけた。

「僕についてはこれで良し。皆もいい？」

「……別にいい」

「………うん、百合子の間抜け顔見ただけでも

儲けものだから私もいいわ」

「おい、愚兄」

「あ、暫くぶりな呼び方です」

「さっきまでの空気を返せええエエ！！！！」

そう言つてハリセンだけを急速に集めた風の圧縮で発生させた高電離気体で灰にした。

明久自体に攻撃しないのはもう本能レベルらしい。

「すげえ、見事にハリセンだけを灰にしやがった」

「吉井君に傷一つありません」

「突っ込みどころが違エだろテメエらア！！！」

もう先ほどまでの空気に戻れないと分かつてるのか、うがああと奇声をあげながら頭を掻き耨る百合子。

尚、この状態でさすがに学園長も呆れた表情で顔を上げている。

「あんな目にあつたにしては随分と軽すぎやしないかい？」

「あんたらは教頭の悪事を暴こうとしてたんだろぅがババア。

なら、責めるべきは教頭であつてババアと百合子じゃない」

「坂本君、せめて学園長と言う努力ぐらい見せなさい」

「ただし、巻き込まれたんだ。

最後まで巻き込んでくれや」

「……………そうするわね」

おまけ：

「土屋、テメエに言ってた事だが」

「……………」

「私に一言言えば更衣室の中・シャワー室の中・トイレ以外の場所
所に

盗聴器・隠しカメラを設置する事を許可してやる」

「……………！！？（ブンブン）」

「そんな否定しなくてもいいだろう。」

テメエの技術を買っての事だからな、ま、女子の裸とかの写真
や動画を

撮らない限りは完全に学園側で許容してやる」

誘拐犯の事が分かったのも土屋のお陰なので、保険の為に
その技術を活用しようとする百合子であった。

尚、何気に学園公認である。

ちなみに百合子は理事会の一人であり発言力は理事長以上だった。

「……基本的には明久と霧島？」

「そオだよ……あア仕掛けた場所は明かさなくていいからな。

仕掛ける前に言えばこっちで承認してやる。

あア着替え中は下着や見せない場所の素肌が写らないようにするなら

デメエのところで販売してもイイぜ」

ムツツリ商会が学園側に秘密裏に公認された瞬間である。
ちなみにこの会話は二人だけで行っていた。

問：16 清涼祭・一日目 終了（後書き）

おまけの反応が物凄く怖い。

ちなみに機材とかはすべて百合子がバックアップします。

アンケートは変動無しのため未掲載。

そろそろ締め切りが近い。

問：17 清涼祭二日目・1 雄二包囲網（前書き）

雄二爆発しろ！

……失礼、オリジナル要素満載かな？

「今日は色々あったね」

「そオだナ」

あの後、百合子が適当に台車を持ってきて、全員を送り届けると言い色々大変だった……説得が。結局全員の家に回りながら帰ろうという事で収まり、最後に翔子・雄二を送り届けたところで今現在帰宅中である。

「なんだか、数日ぶりの気がするよ」

「そオだナ………鈍兄、何か忘れてないか？」

「え？………うーん、何にも無かったと思うけど」

「翔子と鈍兄に気をとられすぎて私も」

何を忘れているのか思い出せねェンだが」

そついいながらも何かしこりが残ったように思いながら、玄関の前にたどり着く………瞬間あらゆる思考が失われた。

「あら、やっとお帰りですかアキ君、ゆりちゃん」

「姉………さん？」

そういえばあれからまったく姿を見かけないと思ったら、もう家の前に居たのか、納得納得って。

「何故バスタオル一枚なんだこのキス魔ア！！」

「これじゃご近所から見たら僕達が虐待してるみたいじゃないかあ！！」

「玄関前で騒ぐなんて非常識ですよ二人とも、それにバスタオル一枚

なわけ無いじゃないですか」

まさかバスタオル一枚で玄関前に居座る人物に常識を追求されるとは思ってなかった。

それはともかく、玲はバスタオルをはらりと取る。

目を隠す暇も無くあられもない格好の姉を見る事になると思いきや

……

「水着を着てますから」

「確かに水着なら外に居てもおかしくないわけあるかア！！！」

「と、とりあえず家の中に入るよ！！もう手遅れかもしれないけど

これ以上被害が広がる前に！！！」

玄関に放置してあった荷物と共に家に飛び込む。

忘れてたとはいえ鍵ぐらいは渡すべきだった、と今更後悔。

正直あの時はそこまで頭が回る状況では無かったのだが。

「で、一体全体どうしたんだ。ホテル泊まりかと思ったんだが」

「確かにあの事件が起こるまではそう考えてましたよ？」

あの子の父親の西村教諭の家に泊めてもらうという案もありましたが……

先ほど、両親と話し合って決めました」

「ちッ、掃除ぐらいはするが荷物の整理ぐらいはテメエ自身で

やるんだな」

「ねえ、百合子……もしかして……」

「これから一緒ですよアキ君」

その日、吉井家に大絶叫が響き渡った。

一人は諦め気味に、一人は微妙な絶望感で……。

「くそ、これは想定外だ」

「反射が仇になつてゐるね百合子」

「ゆりちゃんが起きないからですよ」

明久と翔子以外の声を反射する百合子、さらにはベクトルの存在する攻撃も

すべて反転させる為よほどの技術でないと肉体にダメージを与えるのは厳しい。

そのため、声をかけても起きずゆすつてもその衝撃がすべてゆすうとした本人に反射される。

「おはようございます」

「さつさと離れるキス魔ア!!」

よつて、玲に起こされようとしても起きれず、いつもの時間に目が覚めると、

玲が百合子と同じベッドで明久と共に川の字状態になっていた。

寝込みを襲う行為はしないものの起きてる時は襲撃されるので微妙にマズイ

状態である。

「ゆりちゃんアキ君、おはようの——」

「よし、鈍兄が着替えるから女の私達はとつと部屋を出るからな、

いいな、分かったか、喋るなよキス魔」

「うん、さっさと着替えて部屋を出るから外で待っててね」

行動は迅速だった。

というか吉井家にはマトモな女（百合子自身も含め）が居ないのかと呆れつつも玲の首根っこを引っ掴んで退出する百合子だった。

「……そんな事があったの」

「そうだよ、その後もいつてらっしゃいのキスをしますやら何やらで

大変だった」

「お陰で朝っぱらから空中疾走する羽目になった」

「どこでも家族は苦勞するものだな」

何で家に滞在するのか問い詰めたところ、明久の答案用紙が出現した。

親達にはテストの成績が百合子滞在でも変化無いので玲も居候するとなったらしい。

そして、一番恐ろしい事が……

「学園に教師として赴任するんだとよ」

「しかも学年主任で忙しいだろうからって高橋先生のクラスの副担任まで」

勝ち取ったらしいんだ」

高橋教諭のクラス＝明久・百合子在籍の2年Aクラスである。

そのため、一時は本当に不登校を考えたが、学園で問題行動を起こされても困る為、登校するしかないのである。

「でも、玲お姉さんは優しいですよ？」

「そりゃ、お前……イイか」

葉月は玲と学園祭以前に面識があり、その時には優しい姉の部分しか見えてない。

確かに常識のねじが部分的に飛んでいる事を除けば優しい姉なのだが……

明久を異性として愛している玲は明久に近づく女性（妹の百合子と親友の翔子除く）に

対して妙なフィルター（男の娘認識）を張っているが、葉月に関しては張られていない。

以前、疑問に思い百合子が尋ねたところ「義妹」に欲しいらしい。吉井家の明久との交際に突破する為の二つの大きな壁のうち、二つを無自覚に

突破している葉月（二壁＝玲・百合子）。

他の明久に好意を抱いている少女達よりも大幅にリードをつけている状態である。

「なんだろう、葉月に負けてる気がする……勝ってるの歳だけな気が」

成績でも明久からの好意感情でも葉月に差をつけられっぱなしの島田の意見でした。

ちなみに今登校している風景には百合子・明久・翔子・雄二・島田姉妹が並んでいる状態である。

「ところで雄二よ、決勝については大丈夫なのか？」

「問題ない、今朝まできっちり勉強に励んだからな……」

後は補給試験で補充するだけだ」

雄二たちの決勝相手は常夏コンビ。

片方は百合子のせいであつと社会的に女性の敵でその影響か、観客に見せる試合の時、ブーイングの嵐だったらしい。

「完全アウェー状態の相手に負ける気は無い」

「ま、勉強するに越したことは無いわよね」

「優子に木下弟か」

「木下さんに秀吉、おはよう……秀吉大丈夫？クマが出来てるけど」

優子もクマが出来ているが多少化粧で誤魔化してるように見受けられたので、

明久は秀吉の心配をした。

その様子に島田が多少視線を鋭くしていたが、暴力行為に至っていないので、

百合子はスルー……だが、秀吉は男だろ、とは思ってたらしいが。

「少し厳しい、今朝方まで姉上に徹底的に知識を叩き込まれておったからのう」

心なしか声も眠気が混じっているらしく、多少ふらついており、優子が肩を貸している状態だった。

「正直、やりすぎたわ」

「木下弟、大丈夫か？」

「吉井妹が心配するなど珍しいの」

「そこまで薄情な人間じゃねエぞ」

もつとも、秀吉の友好度が3である事も影響しているのも大きいが、尚、1レベルだとそんな状態でも心配はするが声をかけたりはしない。

「仕方ねエ、鈍兄肩を貸してやれ。女の優子にずっと寄り添いさせるのも

あれだろうからな」

「そうだね、木下さん、いい？」

「お願いするわ、私も疲れてたし」

ちなみに雄二に頼まない理由は翔子関係ではなく、純粋に雄二も欠体力が低下していそうだからである。

島田の機嫌が悪くなっていたが、暴力行為に及んでないので百合子はスル―。

「雄二もだが、Aクラスに休憩スペースで布団が敷いてある。

暫くはそれで仮眠を取れ」

「何で布団があるん……………そういや持ち込んでやがったな」

宣戦布告しに向かった時、百合子は布団に包まっていた。

「流石に一セットしかねエから、秀吉がそれ使って、雄二は

畳の上に毛布と翔子の膝枕でいいだろ」

「そうさせて貰……………なんて言いやがった？」

「問題ない、雄二、私の膝を使うといい」

「いや、翔子……………仕事があるだろ、それに一番綺麗なんだから

大戦力だろうが」

「雄二、今さらりと凄い事言ってるよ」

「問題ねエよなア優子」

「そうね、百合子の違和感の感じる敬語は無視すればダメージは少ないし、

忙しい時間帯は決勝戦の後だしね」

両者が目配せして、にやりと笑う。

「代表の恋を応援し隊」活動開始である。

ちなみに既に教室に居るらしい工藤にはメールで布団スタンバイと送っている。

雄二は完全包囲され、諦めた。

まあ、その前に補給試験があるわけなのだが。

問：17 清涼祭二日目・1 雄二包囲網（後書き）

雄二爆発しろ！

大事な事なので前書きと一緒に二回言ってみました。

さて、現在のアンケート結果は変動無しです

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 13票 |
| 2・翔子ルート | 1票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

- | | |
|-------------------------------|-----|
| イ・秀吉 | 10票 |
| ロ・清十郎（鉄人の息子） | 5票 |
| ハ・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理） | |

葉月ほぼ確定 & 秀吉大幅リード中……もう確定じゃね？これ

もうすぐPV10万いくけどなんかやった方がいいのか……

何かの番外編でも書こうかなあ（ボソリ）

問：18 清涼祭二日目・2 主人公は百合子です、念のため（前書き）

PVが10万超えた！

ありがとうございます！！

「よう、至福な時を邪魔するようで悪イが

そろそろ時間だから起こしに来たぞ」

「ん、雄二起きて」

「……実はな…… 30分前に起きてたんだ。

だがな…… 翔子が離してくれなかったんだが」

「奇遇だな、私は30分前から扉の前で待機していた」

「さっさと起こしに来いよテメー!!」

殴りかかろうとして止める。

相手はか弱くはないが女であるし、殴ったら殴ったで反射で腕が折れると判断した為である。

「オイ木下弟、女つばい寝方してねエでとっと起きろ」

「んむー……あと5分……」

「翔子、目を隠すな。男にはしる興味は無い」

「……今の木下弟は少女そのものだから不安」

「仕方ねエな、荒療治と逝くか」

「オイ、”いく”が間違ったように聞こえたぞ」

百合子が物騒な事を言いながらドアの横においてあったバケツを振り回しながら持つてくる。
ベクトル操作でこぼれてはいない。

「ま、まさか……！」

「起きろ」

そのままぶつ掛けた。

「ひゃあああああ！！？」

「お前、男として見られる気ねエだろ」

少女にしか聞こえない絶叫に百合子は呆れつつも、
ようやく起きた事に満足する。

ちなみに悲鳴自体は店の方へと向かっていない。

「つつつつ冷たいぞぞぞい！」

「ほれ、さつさと起きろ」

そう言つて秀吉を引っ張り起こし弾いて水気を全てバケツに戻す。
布団に対しても同じような行動をする。

「すっかり目が覚めたわい」

「そりゃ、あれで覚えなかったらおかしいだろ」

濡れた後すぐに乾燥した状態の秀吉を見ながら百合子の行動に呆れる雄二。

基本的に百合子は明久と翔子最優先で他への対応がそれに比べるとお粗末なのだ。

「ワシ、怒っても良いと思うのじゃが」

「諦めろ、直接的な攻撃じゃないだけマシだったと思え」

そついいながら、去年の出来事を思い出す雄二。

授業中寝ていた少し不良な男子生徒と女子生徒に先生が注意した時、まったく起きず、その先生が気弱だった為、誰かに任せた。

明久に頼まれ渋々移動し、両者の股間を蹴り上げた。

その時の抗議が「男子はまだしも女子にまでそんな場所を蹴るなんて酷い」

というものが上がったが、「男女差別はいけねエだろが、男女平等だ」

その時の授業は日本史かつ、ちょうど男女差別撤廃についてだった。

「う、うむ……あれは嫌じゃ」

「ただ、その男子暫くの間ちょっとあれだったらしいがな」

変な性癖に目覚めただけである。

交際相手と別れなかったところを見るとその交際相手はSだったのだろうか？

「さつてと、それじゃ勝ってくるぜ」

「……雄二、チケットはどうするの？」

「お前に渡す、ただし俺と一緒にいくとは限らんからな」

「ワシはどうしようかの……適当に誰かに売るとするか」

雄二は下手に誰かに渡すとそのまま包囲網攻撃を喰らい、

碌な事にならない事を予測し、最初から翔子の手へ渡っておけば、こっちで対処出来るはずだ。

「ま、決勝相手が私で無いだけマシだろう」

「ああ、おかげで勝率が0%から90パーセント以上に上がった」

「一応、相手は三年の先輩じゃぞ？」

「百合子に比べりゃ余裕だ」

比較対象がおかしすぎる。

冗談を交えながらも雄二と秀吉は会場へと向かい、

翔子も雄二の活躍を見る為に抜けた。

どうせ決勝の後が一番込み合うのだからそれまでは好きにさせておこうとは

百合子の弁。

そして、優子も勉強を手伝った事もあり、弟の事を応援しに会場へ。

結果――

「仕方が無いから私が仕切るが、多分客は決勝に釘付けだ。」

今のうちに清掃をしつかりしておくぞ」

『『『はい』』』

「頑張ります！」

「葉月ちゃん、箒はあまり使わないから」

ちなみに百合子達も決勝を見るのだが、撮影は土屋に任せてのテレビ観賞である。

「いくら試合前だからって女ばかり写してんじゃねエよ」

「え？写ってないよ？」

「もう一つのカメラの事だ」

どうやら客全員が会場に向かっていているらしく、何処の教室もが空き状態らしい。

「お、雄二の奴だな」

「モヒカン先輩とボウズ先輩も出てるね」

テレビの方できちんと名前が表示されているにも関わらず、ふつうにモヒカンボウズ呼ばわりの明久。

「あ、木下さんや翔子さんが写ってる」

「こっち見んな、手を振るな」

「言っても聞こえないと思います」

『さあ、決勝戦に登りつめた一組目は、なんと！成績優秀なAクラスを

差し置いての登場のFクラスの二人です！

いくつかの試合は残念ながら不戦勝で勝ち上がったようですが、なんと1回戦・2回戦ともに対戦相手はAクラスのコンビでした！！

これはFクラスが最底辺だという認識を改める必要がありますね！」

「ほオ、いい事言うじゃねエか」

「姫路さんのお父さんにも良い印象が与えられるね」

収入により、施設の道具は改善、施設自体も生徒の健康を阻害するような箇所は改築すること（その間はAクラスで授業らしい）であり、そして、ここでFクラスの印象を良くしておけば転校阻止は容易だろう。

『しかし、続いての二組目は3・Aクラスの生徒！

先輩の貫禄とAクラスの実力を見せる事が出来るのか、

そこが注目です……………ってあ———!! 貴様はあの時の

いたいけな少女の胸を揉んだ女の敵———!!!!!!」

『ちょ、誤解なんだよ! 俺の意思でやったんじゃない!!』

「あの作戦が妙な方向で役に立ったな」

「相方の人も心なしか他人の振りしてるね」

会場全体が雄二たちを応援していた。
完全にアウエー状態である。

「さて、追い込まれた哀れな羊が狼を噛めるか見せてもらうか」

「それ、無理でしょ」

「先輩、大丈夫か？」

「うるせー！！畜生、こんな事になったのもあの教頭の口車に乗ったせいだ！」

「おい！バカ！！」

観客には幸い聞こえていないらしいが、雄二は軽くポケットを確認して

ニヤリと笑う。

証拠は押さえたらしい。

「さて秀吉、営業妨害された恨みをここで晴らそうぜ」

「そうじゃな、結局制裁は百合子がやってしまったからの」

「待て、これ以上コイツを追いつめないでやってくれ。

家族に半分勘当されてるんだ」

「何だと？」

「そ、それは哀れすぎるの……」

「話し相手が近所のお婆さんしかいなかった俺の気持ち」

「わかるか……！！……！！」

そついいながらも召喚獣を召喚する。
二体とも特徴的な召喚獣だが、正直言つて秀吉や雄二の方が
見栄えが良い。

——常村 勇作&夏川 俊平 総合科目 2555点&2480点

「どうだ、Fクラス風情にはあまりお目にかかれない点数だろ」

「Fクラスとは出来が違うんだよ」

「百合子や翔子に比べれば可愛い点数だ」

「「あんなバグどもと比較するな!!」」

2-Aクラス付近で突風が発生した。
テレビに生放送で映っているのである。

——坂本 雄二&木下 秀吉 総合科目 2435点&2144点

「成績上げたな秀吉」

「一夜漬けじゃから次は無いがの、雄二も上がっておるではない
か」

「ああ、次の戦争では負けられないからな、

もつとも山があたつたのもあるが」

「な、何で一晩でそんなにも変化しているんだ!!」

徹夜による一夜漬けである。

この決勝の為にだけに一晩だけで良いからと知識を叩き込んだのだ。観客席に居る教頭は一瞬焦っていたが、どちらにせよ目的は達せられると気がついたのか安堵の溜め息を吐いた。もつとも、それが罫だとは気がつかずに。

「それではじめてください!」

「正面から叩き潰させてもらおう!!」

問：18 清涼祭二日目・2 主人公は百合子です、念のため（後書き）

うん、普通に点数は一時的なものです。

なので通常時は普通にFクラス並ですよ？

……正義側補正とでも解釈してください。

つか常夏コンビの総合点はこれで大丈夫か？

あと、10万超えたので感謝の為に番外編を書こうと思うのですが、

無謀にもコラボに挑もうか、IF世界観（明久の相手が百合子（従妹設定））

で書こうか悩んでいます。

どっちが良いのかアンケートで決めようと思いますので

コラボの場合は作品名＋絡むキャラも明記、

IF世界の場合はIFと書き込んでください！

締め切りは短めの清涼祭終了後まで。

明久の相手と百合子の相手アンケート

明久の相手

- | | |
|----------|-----|
| 1・葉月ルート | 13票 |
| 2・翔子ルート | 1票 |
| 3・話分割で両方 | 3票 |

百合子の相手

- | | |
|--------------|-----|
| イ・秀吉 | 10票 |
| ロ・清十郎（鉄人の息子） | 5票 |

八・無効票1票（下手すると4通りも作る羽目になるから無理）

葉月ほぼ確定 & 秀吉大幅リード中……もう確定だと思うので
次回で締め切りにしようと思います。
変動は起こらないかな？

問：19 清涼祭二日目・3 すべての決着へ（前書き）

更新先取り！

うん、教頭の設定捏造しすぎて誰この外道状態。

まあ、いいや……原作でも警察沙汰みたいなこと仕出かしてたしその後登場してないしね（オイ）

問：19 清涼祭二日目・3 すべての決着へ

正面から叩き潰すとは言ったものの、流石に相手のほうが年季があり、

尚且つ雄二の方が圧倒的に操作経験が少ないので単に挑発まがいの行動で

かく乱してその差を補おうとしたのだが――

「オウオウ、どうしたんだ先輩方。」

そんなカタツムリみてエな遅さで捕らえられる訳ねエだろうが
よオ」

「この、このおおお!!」

「落ち着け、冷静になれ常村!!」

「よそ見してる暇無いぞ、ボウズ先輩!!」

試合は驚くほどに秀吉のペースで進んでいた。

多少百合子の入れ知恵と明久の”観察処分者”としての

召喚獣の操作技術の助言

冷静に動かせなければ、運用が荒くなるらしいと聞かされた

秀吉は百合子の許可（貰ってないと後が怖そう）を貰い、

百合子の声真似で常村から冷静さを奪い、精密な動きを大幅に削り
取った。

「くくく、弱すぎンぞデメエ!!」

「うおおおおお！！貴様のせいで俺の人生は滅茶苦茶になったんだーーーー！！！」

秀吉のせいではない、百合子のせいであるという突っ込みは誰もしなかった。

と言うよりも、台詞はとにかく可憐な外見の秀吉の召喚獣が比較的醜い外見の常村の召喚獣を翻弄する様は見ているものにとっては

気持ちの良いものである。

何度か冷静にさせる為に夏川が度々フォローに入ろうとするが、その度に

雄二が妨害し、点数を削り取っていく。

尚、こちらへの声援はほとんど野太い声のものが比較的多かった。

一人だけしか女子の応援がないという悲しい状態。

——三年Aクラス：常村 勇作 総合科目 755点

——三年Aクラス：夏川 俊平 総合科目 922点

vs

——二年Fクラス：木下 秀吉 総合科目 2181点

——二年Fクラス：坂本 雄二 総合科目 585点

結果がまるわかりの状態になってきた。

雄二の戦闘は結局妨害がメインとはいえ、流石に年季の差に負けているのか、多少不利な状態に。

とはいえ、時間をかければ有利なのはダメージの少ない秀吉のお陰で雄二達の方である。

そして、常村は極端に単純な動きとは言え点数が減りすぎである。

「何故か、心が痛むのじゃが」

「ならその演技を止めてくれ、流石に友人なんだから発狂したり

自殺したりは見たくねえ」

「よし、秀吉止めてやれ、ここからは純粹に俺たちの実力でいくぞ」

「了解じゃ！」

明らかに卑怯なほどの点数差なのだが、観客は寧ろFクラスの奮戦に観客は

大興奮していた。

と言うよりも完全に常村が責められていた。

……そして秀吉の一閃でケリが付いた。

点数の差がつき過ぎたのである。

そういえば最後に常村が秀吉を見ていたが何なのだろうか？

「決勝にしては呆気ないのう」

「盛り上がりには欠けるんじゃないのか？」

「心配ないさね、本番はこれなんだから（証拠は掴めたかい？）」

「そういえば、デモンストレーションだったな

（掴めた、レコーダーは百合子に回しておく）」

百合子に保管しておけば少なくとも戦略兵器でも使わない限りはレコーダーは破壊されない。

「じゃ、デモンストレーション……頼んだよ。

商品の白金の腕輪さ」

「最後が呆気無かったな」

「まあ、あの点差で尚且つ、技術がちょっと劣ってる程度だしね」

「あ、綺麗なお兄ちゃんの召喚獣が二体に増えました」

「雄二の奴は召喚フィールド形成か……アー、あれがあれば

葉っぱ娘の修行になったのによオ」

「点数消費だよ……って消費点数考えたら百合子にはあまりリスクじゃないね」

総合53万で数十点程度の浪費は砂場の砂粒を多少取った程度なので何の問題も無い。

「ま、イイか……雄二たちはレコーダーに録音したみてエだし、こつちもこつちで

ようやく裏も取れたしな」

そう言つて、何処の悪人だと言いたいほどに顔を歪める。
今の百合子は”一つの事”しか考えていないのだ。

「さて、と忙しくなりそうだし、僕達もさつさと代表や優子が来るまでに

準備を終わらせてようか」

「掃除なら全部終わってンぞ」

百合子が指差した先にはホコリや食べかすの山が！

その山を丁寧丁寧に何人かの生徒が掃除機で吸っていく。

掃除機までついてるとはこういう鼻屑なのだろうか。

どうでもいいのだが、掃除機は全てダイ○ン製だった。

「……ただいま」

「戻ったわ、いそいでお客さんの相手をしましょう。Fクラスに

取られそうだけどね」

二人が戻ったところで店の方にもチラホラと客が訪れ、
応対に回った。

尚、百合子は素の口調で客と応対したが、意外にも
外見とのギャップが良いと評判になり、最初から素で対応しろよ、と
Aクラス全員に心で突っ込まれた。

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。』

各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「……何で姉さんが放送を」

「最初の仕事が放送かよ」

「……Fクラスは大変だったでしょうね」

「そうだな、休む暇が無かったらしいぞ」

放送から玲の声が聞こえた時には、二人が一瞬硬直した。
その雰囲気や和らげようと、優子が話題を提供する。

『これでAクラスだけに放送がいくのですね……ゆりちゃん、』

学園長が呼んでるので、坂本君と木下君を率いて学園長室に

向かってください』

「さて、最後の大事な仕事だ……鈍兄達はAクラスにいるよ、決して少数で

行動しようとするな」

「分かってるよ」

「……頑張つて」

おう、と言いながらさっさとFクラスへと向かっていく。
その後姿を眺めながらも、明久達はさっさと片付け作業に集中しました。

「雄二・木下弟、呼ばれたぞ」

「うむ、了解した……すまぬが島田、後は頼む」

「しっかりね」

「さて俺も行くか……ムツツリー二もしっかりよろしく頼むぞ」

「……任せろ」

そして、二人を伴って学園長室に向かう。

その途中百合子はつけてくる二人の気配に気がついたが、捨て置いた。

勿論、秀吉達も百合子の様子により存在を把握した。

「何で、キス魔を採用しやがった」

「何、どうせこの後の為の補充をしなきゃならないんだ。

さすがはあんたの姉で、優秀さね……常識以外は」

「じゃあ、雇うんじゃないよ（証拠は揃ったが、この後はどうするんだ？）」

「ふむ（まずは、ドアの外のバ力をその二人で取り押さえて、

奴、後のことは……教頭の事は全部あんたに一任するさ……竹原の

知り合いにとんでもない奴が居てね、警察に行ってもすぐに出てくるさね。

それに、例の誘拐もあんたのところで組織は判明してるだろ？

バカ言うんじゃないよ、高橋教諭も戦争時には駆り出されやすいんだ。

副担任をつけるのも当然さね」

「そオカよ（本当に私に全部委任して良いんだな）」

「そうさね（構わないさね、他の過去の被害者もそれで浮かばれるだろうさ）」

教頭の竹原はとある誘拐組織の一員であり、その最後の幹部と言っ
情報が

百合子の手元に渡っていた。

何故あるのかは分からないが、教頭の過去の罪はどうでもいいが、
明久と翔子を誘拐した制裁を黒幕にぶつける事が出来るのだからそ
のついでに

はらしてもいいだろうとも思っている。

「随分とまあ、学園長にズケズケとものを言えるのう

（経歴が物騒すぎるのじゃが、全部本当なのか？）」

「（同情出来ないなこりゃ、そろそろいいか？）ま、それだけフ
レンドリーな

学園長って事で評判が良いんじゃないのか？」

雄二達も教頭の過去の出来事について、まとまった資料を読んでい
て、

何で悠々と教育者の立場に居るのか分からないといった表情だった。

「（作戦「蛆虫殲滅作戦」決行だ）オイオイ、種別妖怪はフレン
ドリーじゃねエぞ」

「ま、それはさておき、約束どおり教室施設の回収についてです
が！――！」

その言葉を言ったと同時に雄二と秀吉が駆ける。

百合子が一気にドア（また壊されたー！？）を蹴破り、逃げようと

していた人物を

叩きつける。

知らない顔……どうやら手駒の一人だったようだ。

「吉井妹、今姉上から連絡があった……妙な輩が現れたらしいぞい。」

もともとAクラス全員で対処したらしいが」

「あんたの姉は西村教諭が護衛しているさね、お行き！」

その言葉を聞き、百合子はこの事件の最大の黒幕を捕らえに、そして……大切なものを攫ったという事実の報いを受けさせる為に疾走した。

明久との誓い、殺すなは守るが……それ以外は容赦する気など一切無い。

問：19 清涼祭二日目・3 すべての決着へ（後書き）

はい、隔離問題はちょっとチャレンジ！

微妙にホラーっぽくしましたけど大丈夫かな？

それはさておき、相手役のアンケートは締め切りで

明久の相手：葉月 百合子の相手：秀吉で決まりました！

イツエーイ、作者殺しがなくなったぜコノヤロー。

……… 完結した後で書けとか無いよね？

続いて10万PV突破記念ですが、現在では

IF… 2票

コラボ… 3票

『バカとテストと召喚獣〜ツインズ〜』の吉井夕希

『俺と彼女と召喚獣』のありす・あかり・綾菜

『バカとテストと介入者』の石川力哉、石川薫、石川琴

ちなみにコラボを希望する場合、自分の作品を持ってないもしくは自分の作品は出してほしくないけどコラボやれって方はコラボと書くだけで結構です。

さて、次回はちょっと更新が遅くなるかもです。

では、次回をお楽しみに！

隔離問題2・教頭制裁 前編（前書き）

ちよつと暴力表現っぽいので一応隔離。

心臓の弱い方注意？

それ以外の方は部屋を暗くして窓のある部屋で一人で見てくださいね♪

ごめんなさい冗談です

隔離問題 2・教頭制裁 前編

「クソ、あのバグめ!!」

教頭の部屋にて教頭……竹原が慌ててドアをこじ開けようと奮闘していた。

百合子が学園長室を出てから数秒。

既に隠れていた幾人かの部下を盾に逃げる算段はついて部屋から逃げようとしているのだが、何故かドアがビクともしなかった。

「腕輪の情報はニセモノだったとは……!!」

これではただ単に他の学園に自分の無能さを伝えただけではないかと

焦りながらもドアを必死に開けようと努力していた。

が、まったくビクともしない……このドアは一方向にしか開閉せず、しかも向こう側から押さえられれば出られないような造りだ。

「誰か外で抑えてるのか!」

『その通りだ』

『あんたはこの部屋から出さねえ』

「その声は……常村と夏川!!」

自分と手を結んでいた二人が何故外で押さえ込んでいるのか知らないが、

教頭はその事に激怒した。

役に立たないどころか、今度は自分の邪魔までしてくる存在に、だ。

「何のつもりだ、大学の推薦の話なら——」

『その話のもういい……今はそれよりも常村の社会的立場の

復活……いや、勘当取り消しの方が重要なんだよ』

「どういうことだ？」

『俺を社会的に追い詰めたのはバグだが、そのバグだからこそ

俺の誤解を解いてくれると約束してくれたんだよ……

あんたをここに足止めするという条件でな！——』

くそ、心で毒づきながら、隠し持っていた拳銃をドアに向け発砲する。

その一撃はたやすくドアを貫通し、二人ともいとも容易く撃ち殺される。

—— 筈だった。

「ぐあああああ!!?」

突然拳銃が暴発した……いや、確かに拳銃の弾は発射されたのだ。だが、ドアのところで反射された。

「は、反射だ?!?ま、まさかあのバグが……」

その時、外に密接する窓がコツ、キュ、コツコツコツと叩かれた。途中で引つかいたような音になったが、確かに叩かれた。その音に、そうだ、窓から紐か何かでつたって降りれば良いじゃないかと
思い直し、あまりの馬鹿馬鹿しさに少し狂ったように笑いながら窓を見る。

――紅イ手形ノヨウナモノガ窓ニベタバタ張り付イテイイタ

「ひい！！？」

まるで、血を連想させるかのような紅い紅い色に悲鳴を上げドアを背に窓を

凝視する……瞳孔が開ききったような状態で……。

そして、窓に変化が訪れる。

手が……少女のものと思われる手がゆっくりと伸びてきて窓を叩き始めたのだ。

キュ、コツコツ、キュと静かに。

「窓に……窓にい！！！！？」

ば、バグか！？そうなんだろう！！！？」

返事はない……手はただただゆっくりと窓を叩くだけ。

ゆっくりとキュ、コツ、キュキュキュ……と。

あまりにも単調な動き……だが、それが逆に恐怖を誘う。

「はあ、はあ、はあ……」

がちがちと拳銃の引き金を引く、当然ながら弾など出るはずも無い。

既に破壊され、撃つ事が不可能なのだから。

その行動をあざ笑うかのように手はゆつくりとキュ、コツ、キュと窓を叩き・掻く。

手は何もしない、ただただ同じようにキュ、コツ、キュと窓を叩くだけ。

「くそくそ、くそ!!」

そのうち教頭は狂ったかのようにドアを蹴り始めた。だが、その蹴りは衝撃が反射され足が動かなくなる。

その様子をあざ笑うかのように手はキュ、コツ……キュキュ、コツ、キュ、コツ

と相変わらず、無作為に叩き、掻く。

その行為が竹原を焦らせると同時に怒りを招く。

「何のつもりだ!! 殲滅墮天使イ!!」

百合子の過去の異名を叫び、姿を見せるように挑発する。

その声は一切こたえず、手はタダタダ、キュ、コツ、キュ、コツ……コツ、キュキュキュ、コツ……コツ、キュとまた叩き、掻く。

そういえば、外の二人の声が聞こえない。

「おい、常村……」

聞こえない……代わりに窓からキュキュ、コツ、キュ、コツと音が響く。

「夏川! ドアの外に居るんだろ!!?」

返事が無い……代わりに窓からコツキュ、コツキュコツつと音が響

いてくる。

更に付け加えるかのように、コツキュキュ、キュと鳴り響く。
まだまだオマケとばかりにキュキュキュキュと連続して音になる。

「くそくそくそ！！なめおつて！！」

窓に書物の一つを投げるが反射され竹原の顔面に命中する。
それをあざ笑うかのようにゴン、ギュリゴン、ギュリ！と荒々しく
鳴り響き、落ち着くかのようにキュコンキュコンキュとなる。

「……………何か、おかしいぞ？」

先ほどから窓の音は相変わらず手で鳴らされているのだが、
どうにもリズムがあるような錯覚に陥ってきた。
その思考中にもキュキュキュ！と軽快に鳴り響く。

「あまりのおかしさに私の頭までおかしくなったのか？」

馬鹿馬鹿しいと笑いながら、キュコンキュキュ、コンとなった音を
聞く。

と、ここでもうやく手の持ち主であろう少女の顔が見えた。
……………見えたのだが……………

「ひいいあ！？」

素っ頓狂な悲鳴になったのも無理も無い。
窓から見えるその顔は……………いや、顔そのものが口以外が
見えないように円形に消えていた。
冷静になって考えれば、それは百合子が光の反射をその部分だけ
阻害したと考えるべきだっただろう。

だが、さきほどの奇妙な現象に慌てていた教頭はその事を考える暇など無かった。

そして、残っていた口が音を発せず、くちばくで動かされた。

”私のメッセージは受け取れたかア、三下ア……”

その瞬間、教頭は謎のリズムの全てを理解し、頭を掻き篁り、狂ったように

笑いをあげた。

百合子が部屋に入り込みゆっくりと手を向けている間もずっと……
ずっと……

隔離問題2・教頭制裁 前編（後書き）

うん、自分は怖いけど、他の人は多分平気だよね。

友達もぜんぜん怖くないって言いながら声が震えてただけだし。
次回更新はいつになるかなー

隔離問題3・教頭制裁 後編（前書き）

「前回の隔離問題2でのメッセージ、答えは載せねエが、

ヒントはくれてやる、モールス信号だ。

コツとゴンが短点”・”で、キュとギュリが長点”-”

そして、そのモールス信号の一覧表がこれだ。

特別に使用した文字だけ載せてやる」

イ	・	-	ニ	・	・	・	ル	・	・	・	・
ヲ	・	-	-	ワ	・	・	-	レ	-	-	-
オ	・	-	・	マ	・	・	・	コ	-	-	-
エ	-	・	-	サ	-	・	・	シ	-	・	・
セ	・	-	・	ン	・	-	・				

あんな状況で読めた竹原は凄いような気がする（苦笑）

本編投下はまだ無理ですが、教頭制裁。

今度こそちよつと注意かな？

まあ竹原だしいいよね？

しばらく空白――

「知ってるか？普通の人間は痛みが限界を越えとなア、麻痺を引き起こして

寧ろ痛みがなくなるんだよ」

「ぐ、ぬあ……かふ……」

「もつとも、今のテメエはその麻痺自体も感じられねエだろオがな」

徐々に徐々に百合子は教頭を踏みつけている足に重力を加えた力で圧迫させていく。

既に教頭は四肢の間接をどんな医者だろうが治せないほどまでに外しまくっていた。

碎いてないのは内出血を発生させず、殺さない為であり、そして、電気信号のベクトルを操作し、自殺をさせないように洗脳の要領で弄くつてある。

「さて、ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

「な、何をする気だ」

「決めたぞ……」

そう言つて、竹原の髪をすべて引き抜いていく。
一本一本ではなく、皮膚が剥がれるほどの量の、だ。

だが、それも血が出るほどではなく、出血を防ぐかのようにベクトルで操作していた。

「ぎゃあああああ」

「オウオウ、前よりも男前になってンぞ三下ア」

勿論、男前になったわけではなく、数本だけ残した状態なので、むしろ最悪な状態である。

だが、ここには結局それを指摘するものなど居ない。

百合子が主導の裁判で弁護人は無く、寧ろ最初から有罪判決と言う、今の裁判制度に喧嘩を売っているようなものであるのだが、百合子は気にしない。

百合子にとって大切なのは”常識”では無く……いや、一般常識こそ尊重はしているのだが、大切なのは親しい者達だけ、手を出したものに

対して一切手心を加える気などない。

殺すなど昔に言われた時には散々悩んだものなのだが、今ではその方が都合が良いと考えている。

死など、結局一瞬の恐怖でしかない……肉体的に破壊し傷つけ、精神を破壊しつくしてこそ報いを与えた事になると悟りを開いたのである。

殺してくれと懇願されても決して聞き入れない。

何故なら、自分の大切なものに手を出した罰なのだから……

「さって、次はどうコーディネートしてやるかね」

「殺せ……いつそ殺せー！ー！ー！」

「うるせエなア……そうだ、歯を全部抜くか」

竹原の口の中に手を突っ込む。

そして、そのまま一本一本、出血しないように丁寧に歯を抜いていく。

その間にも竹原は噛み付いているが、反射で逆に歯が折れる始末。何本か入れ歯があり、永久歯が抜けたのかよ、と呆れつつも鼻歌交じりに全部抜き出していく。

「そーいや、アメリカじゃア枕の後ろに歯を置けば金と

交換されるってあつたなア……私にとっちゃはした金でしかないが、

試してみるか？……やめた、こんな三下の歯じゃ交換する奴が可哀そうだ」

竹原に一切の憐憫の情もわず、むしろ交換する妖精の事を心配する百合子。

ちなみに乳歯しか該当しないと思われるので意味などない。

「おしゃぶり上手な面構えになっちまったなア？

残念だが私相手にそれは駄目だからなア」

「は、はが……わはひほははああああ」

「何て喋ってんだよ、しっかり喋れや三下」

そう言いながら蹴っ飛ばす。

両腕両足が間接を外されている為、曲がってはいけなような

軌跡を描きながら体全体が妙な放物線を描き、落下した。

「さつてと……そろそろ打ち上げがある筈だから、今日は勘弁してやるか」

「はあはあはあ……」

ようやく解放されるという安心感から息を荒くするが、そのせいなのか重要な部分を聞き取る事を忘れていたのだ。百合子が言ったのは”今日は”である。ならば、この拷問がまだまだ続く事を予期していた。

「おい、土方ア……回収しろ」

「かしこまりました」

百合子が適当に指示するところからともなくメイド……いや、忍者服の女性が現れ、竹原を適当に縛り上げ、袋に詰め込む。

何が起きているのかわからず暴れようとするが四肢が既に動かせない為、体の部分だけしか動かず弱弱しくしか動けていなかった。

「殺すなよ……例の部屋に適当に放り込んでけ」

「では、あの者は解放するのですか？」

「あア、もう壊れているだろうから、一応しかるべき施設にでも送り込んでけ」

どうやら竹原の前にも誰か監禁されていたらしい。

「では、私は屋敷に戻ります」

そのまま、窓を飛び出しワイヤーを駆使して、グラウンドに降り立ち、

人目がつかないようにさっさと立ち去っていった。

百合子は少し頭を掻いた後、ドアを強引に内側に開けた。

隔離問題3・教頭制裁 後編（後書き）

うん、結構自重してるけど、まだ冒険中。

境界は何処だろう？ 「禁書」の小説レベルまでならセーフかなあ？ 皆さんの意見を参考にしたいので、何処までが境界なのか教えてください。

問：20 清涼祭二日目・あれ？（前書き）

前回までの暴力の口直しにどうぞ！

作者の声が小説中に漏れてますがスルーしてください。

問：20 清涼祭二日目・あれ？

「な、中で何をしてたんだよ」

「さあ？取りあえずはその先輩の勘当を取り消してもらう方が

先だろうが」

「どうやって晴らすんだよ」

「何、鈍兄に聞いたんだがあれはゲリラ演劇なんだろう？

ならそういう事にしておけばいいだけだ」

噂の一人歩きは怖いもので、明久の言ったゲリラ演劇に関しては
広まる事無く、常村が胸を触ったと言う事実だけが世間に広まった
のだ。

ならば、当人達により……この場合被害者立場にある百合子が
弁明すればそれだけで済む事である。

「ああ、これで両親にどこかの勇作さんって言われなくて済むの
か」

「ま、信頼回復に関しては後はテメエの努力しだいだ」

そう言って、常村の家に行く予定を伝達した後、百合子は翔子達の
待つAクラスの
教室へと歩いて向かっていた。

「何で合同で打ち上げをしてんだコラ」

「改修作業中なんだとき、こんだけ広いんだから

別に構わないだろ……暫く合同授業なんだしさ」

「まあ、それはかまわねエが……なんであの一角は微笑ましい空
気と

剣呑な空気が混ざり合ってるんだ？」

剣呑なオーラを放っているのは二人と集団。
姫路と島田＋FFF団。

微笑ましい目で見ているのはAクラス全員。

「ち、予想はついたが……何やってんだ。あの二人は

付き合ってるわけでもねエのに拷問かよ」

手にしてる拷問セットの様子を見て百合子の機嫌は段々と下降して
いく。

もし、今明久に拷問アクションを取ったら間違いなく恐ろしい事にな
る。

「誰かが冗談で酒を混ぜてやがったんだよ。

それを運悪くちびつ子が引き当ててしまつてな」

『みゆふふー、明久さーん』

「ほ才、本心では鈍兄の事をああやって呼びてエのか」

顔を赤らめ目は潤み、上目遣いという色気たつぷりな状態で明久にしなだれかかっている葉月を見て、明久はワタワタと慌てながらも、嫉妬の炎に包まれた二人を冷や汗混じりに見ている。

「ところでお前は酔わないんだな」

「渡したの酒か、反射だ反射。必要な量しかアルコールは

受け入れねエよ。

それに、万が一酔っ払って能力暴走したらどうすんだ」

「…………俺はあやつく学園を地図上から消すところだった」

「オイオイそんなに範囲小せエのかよ。

ま、実際問題どうなるかなンぞ知らねエけどな…………

雄二、お幸せにな」

「ん？どういう事だ…………雄二」どうした翔子顔が赤い…………

誰だあ！！？翔子に酒を飲ませた奴はあ！！？

待て翔子、抱きつくな、迫ろうとするなあ!!」

FFF団は百合子に睨まれており行動不可能。
明久の方面に向かわないのも同じ理由。

「百合子」

「あん？優子か、ユートーサーとしちゃあ許せねエってか？」

「どれがお酒か分からないし、買い直しに行くのも面倒よ

………教頭はどうなったの？」

「”転勤”したぞ」

何故かヒグラシの鳴き声が聞こえたが空耳だろう。

「さて、酒の肴になる出来事も起きてる事だし

一緒に飲まねエか？」

「そういえば、百合子は判別できるの？」

「いんや、ただの勘だ」

そう言いながら、酒だと判明している飲み物をキープして、
自身の大切な者達の様子を観察していく百合子。
先ほど竹原を壊していた人物とは思えないほどの優しい顔つきにな
っていた。

「ねえ、あきひしゃさーん」

甘い声＋舌足らず気味の声で明久に迫る葉月。

幼い少女特有の声、潤んだ目の状態で上目遣いで顔を赤らめ、それらと矛盾するかのような艶のある仕草。

鈍感な明久も好意をストレートにぶつけてきて、かつ常日頃から好きだと公言している葉月の行為に関しては流石に気がついており、正直、今やばい状態になっている。

自分はロリコンじゃないと連呼しているが、いずれ理性がぶっ飛ぶだろう。

「おのれ神よ！これから不幸な目に遭うぞという予告だな！！？」

こんなおいしいイベントが僕に発生するはずなんて無いんだ！

！

「みゅふー」

明久が絶叫を上げている間も葉月は明久の胸元に頬を摺り寄せ、幸せそうな表情をしている。

と、そんな時。

「ひよひくん!!」

「よしいい!!」

「何!?! って姫路さんなんで抱きついてくるの、島田さんも急に何!?!」

顔が赤いよってまさか!!?!」

「あははは、意外と効果あつたみたいねー」

工藤が二人を宥める為にジュースと偽り酒を飲ませたところ、見事に出来上がってしまい、暴力的ではなく好意感情全開で明久に抱きつく両腕に姫路・島田、正面には葉月が擦り寄ってくるという一種の天国が完成していた、明久その場所変われ。

「ま、まさかこのまま動けないようにしてから僕に不幸を

与える算段か!! 葉月ちゃんとはかく島田さんや姫路さんが

僕に抱きつくほどの好意がある筈なんてない!!」

『ハア……断言しやがった、だから鈍兄なんだよ』

百合子の呟きが聞こえてきたが、明久はそれどころではなく、右腕に感じる柔らかい感触や、左腕に感じるなさそうでもしっかりと感じられる柔らかさ、そして正面からの頬擦りに精神が瓦解しそうだった。

辺りを見回すと雄二も一人だけしか居ないとはいえ似たような状況

に陥っており、
その相手を認識した時に胸がチクリと痛んだが、素直に幸せを祈っていた。
ちなみに視線に一人黒いオーラを発生させながらも百合子の方をチラチラと見て
動けない人物を見かけたがスルーした。

「ひよひくん「よいい」「あきひしゃさん」「」

「な、何……って寝ちゃった」

以前の映画館で起こった腕に掛かる圧力は無いものの
完全に動けない状況になった。

三人とも幸せな表情で明久に寄りかかっているので
起こそうにも起こせそうに無い。

「雄二」

「ガツチリホールドしたと思ったら膝枕か……」

朝とは逆だな」

雄二は膝を翔子に使われていた。

翔子は幸せそうに呟きつつ、堅く頼もしい膝の感触を
楽しんでいた。

「雄二」

「なんだ、翔子」

「……呼んだだけ」

顔を紅潮させ、頬は緩み、雄二を見上げる形で見ている翔子は百人中百二十人が見ても幸せそうだと断言するだろう。

そんな翔子を邪険に扱うはずも無く……いや元より邪険に扱う予定の無い

雄二は翔子の好きにさせていた。

『早く結婚しろ、そのバカップル』

「カップルじゃない、百合子……無理か」

「オイオイ、そんな綺麗な彼女が居るのに他の女に

目をやるなンざ失礼だろうが」

茶化しながら言っている百合子。

既にこの会場内にある酒を全て掌握したのか、酒は全て百合子の脇に放置されてある。

「明久も雄二も羨ましい状況じゃの」

「だったら男にでも走ったらどオだ？」

「ワシは男じゃ！」

「朝の様子を写したビデオを見たんだけど、秀吉……」

これじゃ、否定できないわよ」

「なん……じゃと……こんな声で叫んでおったのか」

「素だったのかあれは!？」

自分の素が女に近づいてきている事実、秀吉は床に手をついて落ち込んだ。

その際、体勢に気をつけて女性的にならないように……。

「どうにかしてあげたいんだけどね……」

「ふむ、だったら彼女でも作ったらどうだ？」

そうすりゃ少しは男らしく、を意識するようになるんじゃないか？
「」

「恋する乙女になりそうで怖いわよ」

「それに、じゃ……何故か女生徒と交際できそうに無い気がする」

「私じゃ姉としてしか意識しそくに無いし」

「いっその事、百合子が付き合ってくれんかの？」

「別にいいぜ、合わなかったら別れるがな」

そっじゃの、と言いながら適当にジュースを飲み干す。
会話を聞いていた数人が固まった。
秀吉も飲み干してから疑問に思う。

「いかん、姉上。初デートは何処にすべきか」

「商品で獲得したチケットでも使えばいいじゃない」

「ふむ、雄二。あの企みはこっちで潰しておくから、

心配はしなくてもいいぞ」

「そうか……ところで秀吉と木下姉よ、気がついてるのか？」

「何がじゃ……あ」

「なによ……って、あ」

百合子と秀吉の交際スタートはムードも何も無かった。

問：20 清涼祭二日目・あれ？（後書き）

今回はグランドパーク編、ダブルデートになるぞ。

最後の方……どうしてこうなった。

グランドパーク編・過去問をやった後で、

コラボが勝ったのでコラボで。

コラボ…3票

『バカとテストと召喚獣〜ツインズ〜』の吉井夕希

『俺と彼女と召喚獣』のありす・あかり・綾菜

『バカとテストと介入者』の石川力哉、石川薫、石川栞

順番はランダムで……まあ、過去問の後だから

まだ先になりますし……怒られないようにしっかり予習しな

や
（汗）

では、次回のダブルデート編をお楽しみに

問：21 如月グランドパーク・1（前書き）

シナリオ自体は百合子重視。

翔子達は同じように少し違うデート。

問：21 如月グランドパーク：1

「なるほど、最初に記念撮影と……最後のウェディング体験クイズだけには

参加しろって事なのか」

「そオいうこった。ま、そのクイズがあるのはディナー時だし、

翔子の弁当も無駄にならねエぞ」

百合子の運転する車に乗りながら、目的地の”如月グランドパーク”へと

向かう、百合子と秀吉、雄二と翔子。

助手席には秀吉が座り、後ろの座席は翔子と雄二が並んで座っていた。

「免許証の数を見たときは驚いたぞい」

「まさか、バスや個人飛行機のライセンスを取得してるとは

思わなかったな」

「まあな、ちなみにこの車、燃料積んでねエから」

小型船舶操縦免許証、大型自動車、自家用操縦士などなど乗り物に関する

免許が所狭しと並べられた際には年齢はどうしたと突っ込みたくな

った。

それはさておき車の動力についてだが、進む時は運動量のベクトルを常に一定に制御し、止める時は地球の自転を奪う要領で急停車が可能。その場合、再発進する時には再びそのベクトルを使って動かすだけだ。

「……地球に優しい」

「エコ過ぎるだろう」

排気ガスは一切放出しません。

その代わりに車内での冷暖房が使えない欠点があるのだが。そこは少し応用したものがある。

「自転車発電を参考にした自動車発電による電気エネルギーを使った」

冷暖房機ねえ」

「百合子じゃないとこの車使えないから盗難防止にも役立つな」

そついう他愛も無い会話をしながらも目的地の駐車場にたどり着いた。

ありえない運転技術で回転させ、両隣に車があるにもかかわらず、衝突を起こさないまま駐車できた。

「あの運転で中に影響が無いのはどういうわけじゃ」

「百合子だからと諦めろ、きつと気が楽だ」

「人が少ないな」

「そりゃ一部にしか配布してねえからだろ、完全オープンしたら

こんなもんじゃ済む筈が無え」

ちなみに雄二は翔子に腕を組まれており、抵抗していない。

諦めたような表情の雄二と幸せ全開の翔子とはたから見れば、

不良に連れられている名家の令嬢にしか見えない。

そして百合子と秀吉は腕は組んでいないが恋人繋ぎをしていた。

照れがまったく無く、はたから見れば仲の良い女友達か姉妹にしか見えない。

「何故自然体で居られる」

「別に恥ずかしがる要素など無いだろ」

そう言って秀吉に引かれるように移動し、入場ゲートへと向かう。

エスコートするのは男性の役目、という事なので百合子は今日の行動を

秀吉に一任してある。

入り口までは一緒だが、中からは二組は別行動である。

「いらっしやいマセ！ 如月グランドパークへようこそ！」

グランドパーク入場ゲートにて。

受付のアジア系の係員が、片言のなまり日本語で

雄二達を出迎えた。

というより、他にも日本人がいるんだからそいつが来ればいいのに。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」

「……はい」

「はい」

「拝見しマース」

係員は翔子のチケットを取り出したチケットを受け取り、
二組の顔を拝見し、何やら他の職員にも指示を送っている。

「最初の撮影か？」

「そオだな」

「ソノ通りです、スミマセンがご協力をお願いします」

そう言われ二組がそれぞれさつきと同じようなポーズで
撮影を受ける。

雄二も強引な結婚コースが無いだけマシだと納得させ、出来うる限り

最高の笑顔を浮かべた……。

「雄二の奴、内心では楽しんでおらんかの？」

「ま、ただ単に素直じゃねエってだけだしなア」

そう言いながらも百合子と秀吉の二人はニツコリと

笑顔を浮かべる……やはり中の良い女友達にしか見えない。

一応秀吉の格好は男性モノなのだが、男装の麗人にしか見えなかった。

「どう見ても恋人に見えんの」

「別にどうでもイイだろ、今は……ンあ？」

程なくして、係員が写真を持ってきた。

雄二は渋々、翔子は嬉しそうに、秀吉はどんな感じが気になり、百合子は雑に受け取った。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「ある意味記念になりそうだから、了承だ」

「せっかくじゃしの」

男性二人が答える。

100人いれば100人がその写真に見惚れる事間違いないだろう。特に翔子と秀吉の笑顔に。

「ああ！ 写真撮影してる！ アタシらも撮ってもらおうよ！」

「オレたちの結婚の記念に、か？　おい係員、オレたちも映つて
やんよ！」

そこへ偉そうな態度で、チャライカップルがやってきた。

「すみません。こちらは特別企画でスので……」

「ああ！？　いいじゃねーか！　オレたちやオキyakusamaだぞコ
ルア！」

「きゃー。リユータかつこいー！」

百合子達は適当にその場を離れた。

あの手の連中は下手に相手にすると執拗に絡んで来ることが多く、
面倒でしかない。

こっちには今百合子が居る……万が一翔子に危害が及べば、
この施設の評判がガタ落ちになる事が発生する。

「ああっ！？　グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について

投書すつぞゴルア！！」

「そーよ！　アタシたち、オキyakusamaだからね！」

宣伝のためのイベントでこういう客が来るなんて、
如月グランドパークも縁がないな。

と思いつつ、その場を去って行く雄二と秀吉だった。

「で、秀吉。何処へエスコトしてくれんだ？」

夕方に集まる予定のレストランまでは別行動ということで、
集合場所を決めて二組に分かれた。

「そうじゃな……無難にあれかの？」

”音速ジェットコースター”

「出る訳ねエだろ」

「それだけ早いという宣伝じゃろ」

とりあえずそこへと向かってみる。

乗客はどうやら二人しか居ないようだ。

「ジェットコースター、つったらもう少し人が居る

モンだと思うんだが……何してんだあいつ等は」

ジェットコースターから見えた風景……翔子と雄二の前に
このテーマパークのマスコットキャラの、キツネのフィーが
身振り手ぶりこみで何やら話しており、
その数メートル先には見知った顔が並んでいた。

「あの首が180度逆なのは鈍兄だな」

「子供にはトラウマじゃの」

『中々集まらないようなので、もう発射させマス』

「またおまえか」

ジェットコースターが発進した。
ベクトルで計測し、演算した結果、4秒弱で540km/hの速度で走っているようだ。

「一応世界最速だな、どんな技術だア」

「……………」

何で話せる余裕があるのかと秀吉は言いたいのだが、走行する時の風のせいでうまく話せない。

「ま、せつかくだから音速にすつか」

「……!?」

秀吉の手を軽く握り、衝撃もまとめて緩和したところで、完全に演算完了し……ベクトル能力を発動させる。
ジェットコースターが音速を超えた。

「きゃ……うわあああああ!!?」

「オオ、途中で悲鳴変更したか、その悲鳴なら男っぽいぞ」

秀吉はそれどころではなかった。
百合子に握られていて、衝撃のベクトルや風の影響は大幅に緩和されているのだが、周りの風景が何よりも恐ろしかった。
と言っよりも音を置き去りにして走っている光景が何よりも恐ろしい。

「お、もう到着だ」

そして一気に急停車した。

……あの変なカップルよりも百合子の方がこの施設にとって災難かもしれない。

「オーウ、どうやら故障みたいデース」

「安心しろ、私が勝手に加速させただけだ」

普通の人に乗ったら間違はなく重圧と衝撃で死ぬ。

秀吉は暫く腰が抜けて立てなかった……男女関係無く、音速超えの景色を見たらそうなって当然だろう。

「すまん、チィとばかり調子に乗り過ぎちゃった」

「速度に関係ないもの速度に関係ないもの速度に関係ないもの」

必死に速度に関係が無さそうなアトラクションを探す秀吉。

また悪ふざけが出てしまっではかなわない。

コーヒーカップ……回転数が恐ろしいことになる。

観覧車……これは普通デートの最後なので、却下。

百合子も遅さがうりだと分かってそうなのだが。

「そうじゃ、お化け屋敷じゃ」

「お化け退治か」

お化け役の人逃げてー！！？

「いやいや、いくらお主でも実態の無い奴は――」

「お化けなンぞ、過去に退治した事あんだよ」

心霊スポットを明久と巡り、高電離気体で掃討していたらしい。
本当に居た事にも驚いたのだが、それを殲滅している事にも驚いた。

「攻撃が効かない奴は反射でしか倒せなかったが」

「……冗談じゃよな？」

「何だったら、今晚ぐれエに潰してねエ心霊スポットにでも行くか？」

「遠慮するわい」

もしかしたら真正正銘の除霊師も居たりするかもしれない。
そんな事を考えながらも、無難に迷路に挑戦し、迷う事無く攻略した二人だった。

問：21 如月グランドパーク・1（後書き）

幽霊の退治方法、絶対間違ってるけど気にしたら負け。
さて、バカップル（人間的にバカなカップル）の終焉の
カウントダウンだ……！

問：22 如月グランドパーク・2（前書き）

阿呆なカップル終了のお知らせまで
あと少し（隔離問題）

問：22 如月グランドパーク・2

「で、結局そんなものだけか？お前らの昼は」

「んな事言ったってよオ、その弁当は雄二の為に翔子が

丹誠籠めて作ったものだろオが、

だったら私らが食うよりも翔子たちで食った方がいいだろが」

「それにここのホットドックは結構美味じゃぞ」

「……雄二、お箸」

お昼ごろに丁度鉢合わせたのでせっかくだから一緒に昼食を摂る事になり、

百合子と秀吉は秀吉の奢りでホットドックを食べていた。
あーん、と言うシチュエーションを期待していたのだが、
無理やりにしても雄二は食べてくれないと理解しているのか、
きちんと味わって欲しいらしく、普通に箸を渡す翔子。

「微妙に残念そオな表情だな」

「そんな訳……無い」

「素直じゃないのう」

その会話の間にも百合子は呆れた表情である一角を見ていた。

草葉の陰に見える桃色の髪の毛や見慣れた髪の毛、
ピョコピョコ動いているようなツインテール、十中八九明久達だろ
う。

土屋の気配も感じ取れている。

お陰で写真に写らない設定を常時起動したままだ。

「さつて、食い終わったから私らはお化け屋敷にでも」

「危害は加えないようにしてくれんかのう」

「わりと無理だ」

お化け屋敷でお化け役が絶叫する事態が発生した。

「観覧車つてのは随分退屈なもんだな」

「雄二と霧島は向かい合いじゃ無くて隣り合いらしいの」

「顔がこっちに見えるように座ってるな……」

「ブスツとしてるつもりだろうが、顔がにやけてやがる」

「ふむ、雄二の過去に何があつたかは知らんのかの」

その質問に百合子は知らねと面倒くさそうに答える。

翔子からの話を統合すれば予測は出来るが、雄二の気持ちまでは
判別できない。

「ま、学力だけが全てではないと証明できりや

素直になンだろ」

「そこが鍵なんじゃな」

百合子は答えなかった。

人の過去を詮索するのはあまり好きではない。

その様子に秀吉も何も言えずそろそろ地面だなと視線を逸らせば…

……

「そのまま抑えるのじゃ姉上、今見つければその二人が危ない」

聞こえてないだろうが必死に叫ぶ。

百合子も何事かと視線をやれば、女子中学生のグループの写真を撮っている明久に

今にも飛び掛らんとしている島田と姫路を押さえつけている優子の姿があった。

「写真を撮ってくださいと頼まれて、その時に手でも握られたか」

「どついう状況判断じゃ……」

ふむ、島田の妹も来ておるようじゃの」

頬を膨らませて明久を見ている葉月の姿が目に入る。

直接的攻撃に移らないだけマシなのだろうが。

それよりも優子が二人を抑えられるパワーを持っている事に驚きである。

「伊達にいつもワシに関節技は仕掛けておらんからの」

優子の視線がこちらへと向いた。

地獄耳にも限度があるだろう。

目が合ってしまった秀吉はプルプルと震えながら、

百合子に弱めにしがみ付いた。

思い切りしがみ付けばその衝撃が自分に襲うのである。

「今日限りのアルバイト、ねエ」

「う、ウン……そうだよ」

両腕を抱きつかれ（極められ）、冷や汗だらだらで百合子に抑えるように

目線を送っている明久。

ちなみに葉月は出遅れてしまい、二人を羨ましそうに見ながら優子と手を繋いでいる。

明久が必死に耐えて表情に出していない為か葉月には嬉しそうにしているように

見えるのだ。

感じ取れる感触ならそうなのだが、実際にはただの関節技である。

「じゃあ、今日の豪華ディナーは葉っぱ娘以外は食えねエなオイ」

葉月もアルバイトに望んだのだが、年齢制限に引っかかった。

飛び級は出来ても流石にこればかりは無理である。

その為一緒に行動できない事に微妙に泣きかけたのだが、その光景を如月グループの会長が目撃し。

『幼子を泣かせるとは何事也！！幼子に似合うのは泣き顔にあらず！！』

そう、幼子の笑顔は太陽の如く―――』

と二時間近く演説し、優子達と同行する条件付の下、入場を許可された。

スタッフ達は疲れきり、明久達は呆然とし、葉月は笑みを浮かべたらしい。

「その会長さん、自分で自分の事を”変態と言う名の紳士”であると言いながら、

”幼子は触るものではない！見て愛でる存在である！”って言うって、

最後には奥さんと娘さんにダブルアッパーカットを食らってたわ」

その時の光景を思い出したのか遠い目をする優子。

何となくその光景を見たかったと思いつつ百合子は姫路達を見て機嫌を急下降させていた。

レストランの中はクイズ会場のようなものになっていた。
男女のカップル（夫婦も含むらしい）で訪れた方限定でクイズを行
い、
優勝者は”ウエディング体験”をする権利が与えられる。
ちなみにディナーだけあってテーブルには豪華な料理が並べられて
いる。

「今日来た人間はこれだけなのか？」

「本当はもつと人数が居たけどプレミアムチケットの中でも特別な

意味を持つものじゃないと招待されないみたいよ」

一応今日限定とはいえスタッフとして話を聞いていた優子は雄二の
疑問に答えるように話す。

「さて、そろそろ準備に向かわないと……吉井君を極めてないで

準備に入るわよ、二人とも」

ちなみに葉月は百合子達について歩いている。

「そっぴゃ、小学生ぐらいの年齢の子供は

葉っぱ娘しか来てねエのか？」

「みたいです」

葉月はいくつかのアトラクションは回っていたそうだ。

ジェットコースターの時に重ならなくて良かったの、と秀吉が遠い目をしていたのは今日の事を思い出してのことだろう。

『皆様、本日は如月グランドパークの

プレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございました！
す！』

司会がアナウンスを告げる……葉月が言うには会長らしい。
会長直々に何をやってるんだ、と思って見ていると奥さんに連行されていった。

『——企画させていただきました！ 題して、

『如月グランドパークウエディング体験』プレゼントクイズ！
』

『本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題する10問のクイズに答えて頂き、

見事一位に輝いたカップルには弊社が提供する最高級のウエディングプランを

体験していただけるというものです！ もちろん、ご本人の希望によっては

そのまま入籍という事でも問題ありませんが』

大ありである。

まあ、それをするカップルも居るには居るだろうが、先ほどから一

角がつるさい。

百合子が雑音として一定空間から反射しているので雄二達には聞こえてないようだ。

<それでは参加希望の皆さん！ 前方のステージへとお進みください！>

当然、雄二達は強制参加である。

登録作業こそしてないものの、既にネームプレートが置かれてあった。

「……ウエディング体験……頑張る……！」

「まあ、あくまで体験だからな」

「では、こちらです」

やる気満々の翔子と、何かを考えているのかそれに同行する雄二。

「秀吉はむしろウエディングドレスの方が似合いそうだな」

「主はタキシードの方が似合いそうじゃの、言動的に」

くだらない冗談を吐きながら百合子と秀吉も向かう。

他にも老人夫婦や地味な印象のカップル、体育会系の夫婦に、文科系のカップル

<検閲削除>があり……一組ほどおかしいが、以上七組が参加していた。

『それでは【如月グランドパークウエディング体験】プレゼント

クイズを始めます！』

問：22 如月グランドパーク・2（後書き）

ふはははー、ちょっと原作と違うイベントだぜ。

ちなみに百合子はほとんど答えない

問：23 如月グランドパーク・3（前書き）

次回・百合子による制裁、百合子が居たのが運のつき。

後悔してる分八つ当たりもされそうだ（苦笑）

……前書きの地点で次回予告っておかしいですね。

問：23 如月グランドパーク・3

『では第一問！ヨーロッパの首都は何処でしょうか？…すいませ
ん、変な問題が——』

ピンポン！

司会が問題を変えようとしたところでボタンが押される。

翔子達は呆れて押せず、百合子はそもそも翔子たちに権利を
渡そうと思っているので押さなかった。

「ヨーロッパだ」

「きゃーリユータてんさーい」

『……………不正解です』

ヨーロッパは国ではない。

当然国ではないのだから首都が存在するはずが無い。

「世界は広いの、明久以上に学が無い奴がおるとは」

「でもま、一応勉強を叩き込んだらどうだ。念のためだが」

「……………学力に関しては否定しねエが、あんな屑になる訳ねエだろ」

その後老人夫婦が「なし」と答えた事で次の問題に移った。

第二回答権は他の者が呆れていた為二番目に密かに押されていたボ
タンが

反応したらしい。

『では第二問！吉井百合子さんの能力は何を制御する能力でしょうか？』

ピンポーン！

体育会系の夫婦が押した。

「「筋肉！！」」

『不正解です』

「人の能力を改ざンするな」

ピンポーン！

呆気にとられていたせいで翔子達が押しそこね、また老人夫婦が。

「りんご」

『不正解です』

「可愛い超能力じゃの」

「つか、りんご制御してどうやって反射するんだよ」

と言うよりもさきほどの「なし」も果物のなしだったのだろうか？
翔子がボタンを押さず、ジッと百合子を見る。
百合子は仕方なくボタンを押した。
ピンポーン！

「ベクトル」

『正解です』

流石に自分の能力で答えないのは駄目だろうと目で訴えられたので仕方なく押した。

『では、第三問！PKOとはなんであるかを答えなさい』

急にマトモな問題で驚いた。

が、すかさず翔子がボタンを押す。

タッチの差で文科系が負けており悔しそうな表情をしていた。

「……P i a s e K e e p i n g O p e r a t i o n の略称であり、国連の勧告のもとに

加盟各国によって行われる平和維持活動のこと」

『正解です、では続いて第四問——』

そんなこんなで問題は続いていき、ついに最終問題。

接戦にはならず、百合子に戦闘意思が無いためか翔子の独壇場が続き。

『正解です！それでは、最終問題です！』

本来なら十問以上用意していたのだが、翔子の気迫に負けたのか、誰も答えられずに、既にコールドゲームに……翔子が答えられても答えられなくても勝敗がわかるレベルになってしまった。

「こりやヒデエ」

「最初の老夫婦と百合子以外全部答えおった」

『坂本雄二様、翔子様。おめでとうございます、

【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします』

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」

「……すごく嬉しい」

「喜んでいただけて光栄です。お2人にとって忘れられない、そんな1日にさせて頂きマス」

「やれやれ、百合子が参加しないんじゃ出来レースじゃないか」

「ではウエディング体験の準備がありますので、こちらのスタッフについて行ってもらえますか？」

スタッフの後ろから、30前後の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。

如何にも業界人と言った風貌の人で、如月グループが用意した人員である。

「はじめまして、あなたのドレスのコーディネートを担当させていただきます。」

一生の思い出になる様なイベントにする為、お手伝いをさせてください」

「おいおい、随分と本格的だな？ まさかスタイリストまで付けて来るなんて」

「体験とはいえ当グランドパーク初の式ですし、お2人の記憶に残す為にも

相応の物にしなければ申し訳ありません」

グランドパークとしては、アトラクションよりもウェディング体験こそが真の狙いだったりする。

だからこそ、文月学園をターゲットにジnkスを作ろうとしたわけだが……。

まあ、それでもウェディング体験によるお披露目でも大きな宣伝になると考えたのだろう。

「つてことは、俺は長い時間待たされるのか？」

「我慢しとけ、報酬を考えれば安いモンだが」

そして、数十分後会場にて。

『それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験で

す！

皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！』

司会のアナウンスにより、園内全てに響くかという位拍手が響き渡った。

ちなみに百合子はうるさいのか反射設定にしており、その影響を秀吉と葉月がもろに受け、目を回していた。

「やれやれ……まあ、あくまでもタダの体験だしな。適当に付き合って、さっさと終わらせるか」

雄二がやけに大きく返事をする。

「さあ、どうゾ」

「あいよ」

トントンと小さな階段を上り、雄二はそこから見える光景に少々面食らった。

「おいおい……なんだよ、このセット」

数え切れないほどのスポットライトに、ライブステージの様な観客席。

スモークやバルーン、花火に至るまで設備が整っているように見えており、そこから見える電飾に幾らかかっているかすらも雄二には想像できない。

百合子に聞けば大体の予算ぐらいは分かるだろうが。

『それでは、新郎である坂本雄二さんのプロフィールの紹介を…
あくまで体験ですので省略します』

「さつさと終わるからいいが、いいのかこれで」

思わず雄二は、小声でツツコンでしまった。

あくまでデモンストレーションの意味も強いので、

ここで新郎のプロフィールの紹介がある、という説明なのだろう。

「ま、紹介なんていらねえよな」

「興味ナシ」

「ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな」

「だよな」

そこへ小声でだが会話する2人組が。

それは、入園時から横柄な態度をとる、先程のアホカップルである。
妨害するほどの声量じゃないだけマシなのだろうが、
場所を考えるべきである。

『それでは、いよいよ新婦のご登場です』

司会のアナウンスが終わると同時に、会場の電気が消えBGMが流れ始める。

スモークが足元から放出され、雰囲気が高まってく。

『本イベントの主役、霧島翔子さんです！』

アナウンスと同時に行く筋ものスポットライトが、壇上の一点に集中。

そこには、純白のドレスに身を包んだ翔子がそこにいた。

「……………綺麗」

誰ともわからないセリフが漏れ、静かな会場に響き渡る。

ゆつくりと翔子が雄二のもとに歩み寄るのを、静かに会場中が注目する。

「……………雄二」

「翔子、か？」

「……………うん」

雄二の口から、言わずもがなな質問が出て来た。

その姿に見惚れ、動揺しているのだから無理もない。

「……………どう……………？ 私、お嫁さんに、見えるかな……………？」

「……………ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

雄二としては、そのセリフが出ただけでも上出来だろう。

今の心境ではセリフですらも出てこない可能性があったのだから。

雄二の心境を把握しているのかニヤリと笑う百合子の姿が見えたが、正直気が回っていない。

「……………雄二」

「お、おい。翔子……？」

「……嬉しい……」

翔子はそれ以上言葉を発することなく、静かに震えだした。その様子を見て、見惚れていた司会はハッと意識を取り戻す。気持ちは分かるがしっかりしろ司会。

『ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えませんが？』

「お、おい。どうした……？」

観客から静寂の代わりに、ざわめきが生まれ始める。

一部で欠伸なんかしてる阿呆が居るが、無視。黙っているだけまだマシである。

そんな中、彼女は小さな、しかしはつきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと……夢だったから……」

『夢、ですか？』

「……小さなころからずっと……夢だった……私と雄二、二人で結婚式を挙げる事……」

私が雄二のお嫁さんになること……私1人だけじゃ、絶対かなわない、小さなころからの私の夢……」

口数の少ない女性が、ぼつぼつと懸命に紡ぐ言葉。

それに込められている強い感情は、誰よりも目の前の男性が良く理解はしている筈だった。

けれど、どういうきっかけで自分への気持ちに至ったかを知っているだけに、

尚更に雄二の中では大きな疑問がわき上がる。

何故、そこまで強い気持ちを持つことができるのか、と。

「……だから……本当に嬉しい……他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこからは言葉にすることができずに、彼女はまた静かに泣き始める。

会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえ始め、神聖な雰囲気包まれていく。

司会も目を伏せて乱暴に拭くと、表情を引き締める。

心中では台本も無い状態で嘘偽の無い演出だと思っているようだが、同時にそんな感情は無粋だと言いつけている面もある。

『どうやら、嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方ですよです……』

さて、花婿である坂本雄二さん。お応えをどうぞ』

雄二の返答を待つために、会場が固唾をのんで見守り始める。
しかし雄二の中では……

「翔子、俺は……」

「あーあ、つまんなーい！ マジつまないこのイベントおー」。

人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い？」

「だよな〜。お前らの事なんかどうでもいいっての！」

そこへ、場の空気を読まない罵倒が投げかけられた。

一部で空気が……光が……音が……屈折し始める。

近くにいる秀吉には被害が及んでいないものの、誰が見ても怒っているのは

火を見るよりも明らかだった。

「ってか、お嫁さんが夢ですって。オマエいくつだよ？なに？キヤラ作り？」

ここのスタッフの脚本？バツカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよー！」

「純愛」こつこつでもやってんの？そんなもん観るために

貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお〜。あのオンナ、

マジでアタマおかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドお〜！」

『お客様、イベントの途中ですのでお静かにお願いします！』

司会が必死に沈黙化させようと少しだけ声を荒げる、が聞くような客であるなら

最初から黙っているはずである。

ふと見た先では、壇上から花嫁は姿を消しており、ブーケとヴェールだけがその場に残されていた。それを雄二がゆっくりと拾い上げ、少し湿って重くなったヴェールの重みを感じて一言。

「……はあつ、やれやれ」

「霧島さん！？ 霧島翔子さん！ みなさん、花嫁を探してください！！」

スタッフがバタバタと駆けだし始める。

大がかりな準備等をしてきたのに、たかが2人の所為で中止にまで追い込まれた以上、

お偉方は顔を青ざめるだろう。

「坂本雄二さん！ 霧島さんを一緒に探してください！」

スタッフが1人、雄二に駆け寄って説得し始める。が、興味なさそうに一言。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？しかし——」

「よう、雄二。チツとばかり一緒に花でも摘みに行こうぜ」

そう言っつていつの間にか接近していた百合子が一角を示しながら言う。

ちなみに秀吉は葉月の目と耳を塞ぐ役目を任されている。

もう止められない事を悟っており、おそらく明久も止める気が無いだろうと

思っているのだろう。

「いや、マジでさっきのウケだな！」

「うんうん！ 私……結婚が夢なんです……どう？ 似てる？ 可愛い？」

「ああ、似てる！けど……キモいに決まってるんだろ！」

「だよー！」

似てるわけ無いだろうが、と獰猛な笑みを浮かべる百合子。

その様子を見て、雄二は笑みを浮かべた。

その目が笑っていないのはかつての雄二に戻ったという事だろう。

「……そうだな、女子は女子トイレ、男子は男子トイレであるべきだな」

その光景を見てスタッフは何か悟ったのか、見なかったことにして何も言わずに立ち去った。

「さて……この衣装、ボロボロにしちまうな。弁償とかしなきゃいけないか？」

「大丈夫だろ、いざとなりやこっちで何とかするぜ」

雄二は百合子に運搬を頼み……会場から物凄い速さで四人の人間が去っていった。

問：23 如月グランドパーク・3（後書き）

さて、隔離問題かいてる間に
過去編・コラボ編も書かないと。
てわけでまた次回！

隔離問題4（前書き）

このぐらいなら大丈夫だろうけど、いつものように
暴行表現なので隔離ー

暴力描写が嫌いな方はそのままバックを推奨

隔離問題 4

「な、ここは!？」

「よう」

「なんだてめ——」

男が言葉を紡ぐ事は出来なかった。
体重を乗せた一撃で鋭く鈍い音が炸裂し、
男が吹き飛ばされたからだ。

「今日の新郎役の男だよ」

「ふ、ふがg」

「おい、この程度でおねんねか？まだ【パンチから始まる会話術】
が

始まったばかりだぞ」

不意打ち気味に放たれた一撃に対して碌な対処法も無く、
男の鼻っ柱は押し折れ、歯は数本ほど欠けていた。
そんな男の髪を掴みながら視線を合わせ、一昔前の自分自身を
思い出しながら相手を睨みつける。

「そっういや、お前は男でよかったな」

「ふが？」

「今頃お前の連れは人間としては壊されているだろうよ」

その言葉と共に雄二は拳を振り下ろした。

尚、ここは如月グランドパークの中ではなく、少しはなれた場所の山中である。

「オイオイ、どうした？一発でも当てれば見逃してやるって

言っただのによオ……勝手に折れてンじゃねエよ」

「あ、ぎい……わたしのう、うでがかおがああああ」

百合子が行った事は至極単純、相手が自分の事を知らないという事（名前は知名度はあるが、姿の知名度が極端に低い）なので、単純に相手から攻撃させた。

何の考えもしていないその女はその場に落ちていた太い木の枝で殴りかかったのだが、完全に当たる前に枝は折れて顔にぶち当たり、出血が酷いことになっている。

尚、百合子が一瞬だけ細工したので数時間後までに病院に搬送すれば命に別状は無いだろう。

腕に関しては言うまでも無く運動量の反射をもろにくらい、百合子が細工したベクトルの影響によって、腕は骨が全て砕けており軟体動物のように

どのように曲げる事も出来るようになった。

尚、声が出ている事からわかるようにそれでも命には別条が無い。本当にまずい場合には声すら出す事が不可能なのだから。

「ンあ？テメエ、さっきより随分と美人になったじゃねエか。

良かったな、さっきのあの三下彼氏君に褒めてもらえンじゃね？」

「あああああ」

百合子の言葉など既に届いていない。

痛む腕を押さえそのたびに悶絶し、痛む額を押さえようとして上手くいかずに転げまわる。

さきほどから似たような行動ばかりしており、

百合子はつまらなさそうにその光景を凝視している。が、その光景を見ながらも手頃な不法投棄の中から鋭利なものを見繕い、針山を作っている。

「さて質問だ、三下。私はクソヤローなテメエにこれから

一体何をするでしょオか？……って何勝手に一人で逝ってやがるンだ。

まだまだお楽しみはこれからだぜエ？」

そう言いながら痛みของあまり失神した女の髪を掴み強引に引き上げる。顔を引っ掴み、沈み込むように力のベクトルをかけ、骨をきしませる。

更に、脳内電気信号のベクトルを乱雑に操作し、無理やり覚醒状態

にする。

「ふいいいい」

指の痕がくつきりと残り顔は変形し、もはや先ほどの人物であるとは似ても似つかない外見にまで成り果てた。

「さつて、今からテメエには根本の奴も受けた素敵な素敵な

拷問を行ってやる。

あア、死にはしねエから安心しろや……」

そう言つて女を上空まで蹴り上げた。

そのまま勢いのまま上昇していき、高さ10メートルほどまでに上昇する。

木々にさえぎられ周りからは見えず、何が行われているのかは百合子とその女しか居ない。

音によつて雄二は把握できているかもしれないが。

そのまま上に向かつていたエネルギーは重力と相殺され、

一瞬だけ空中で停止する。

……僅か一瞬だけ。

「ああああああああああ」

そのまま人間が空を飛ぶのはやってはならないと宣告するかのようになり重力に従い下へと落下する。

頭から落下しているのだが、ふと見えた視線の先には先ほど百合子が作り上げていた針山が――

った。

あの後意識を強制的に起こし、投げ、つかみ、投げと何度も何度も行った結果、女の場合は壊れ、乾いた笑いを浮かべるだけの存在となった。

「根本はそれを耐え切ったのか」

「おう、百八回中一回も気絶せずに乗り越えやがったぞ」

雄二が痣だらけの男を引き摺りながら百合子に話しかける。
途中から見えていたらしい。

「その後が気持ち悪かったがな、この世に生けるものが愛しいな
ンて

状態になっちまってた」

「あー、あれか……それが原因で小山とは別れたらしいな」

まるで一つの宗教を作るかのような勢いだった、と溜め息混じりに話し出す。

「屑の評価を訂正したのは乗り越えたからか？」

暫くの間根本の事を公言していたが、制裁されたらしい翌日には根本の事を根本と呼ぶようにはなっていた。勿論、友好関係にはなっていないが。

「雄二も超えれるンじゃね」

「止めてくれ」

冗談だと言い、搬送してくるから車で待ってろと言い2人を担ぎ上げ、病院に運ぶ準備に入る。

「長くするからごゆっくり」

「……どういう意味だよ」

その後、車の前に立った雄二が翔子を見つけ、そういう事かと呟き……
翔子を慰めた。

自分の気持ちも伝えず、冗談交じりに好きになった相手が違つと笑いながら。

病院に搬送された2人は拷問時の記憶を失い……その後別れ、女の方は

本能が恐怖を訴えた状態で死ぬまで孤独に過ごしたらしい。

隔離問題4（後書き）

次回から過去話を少々やってコラボ話ー。

この小説、ぜんぜん召喚しないなー（苦笑）

過去問：1 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その一（前書き）

夢にしては長く見すぎだろうという突っ込みは無しの方向で。

過去編1 始まります。

過去問：1 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その一

これは夢だ、何故ならこれを夢と認識しているからであり、
見ているだけしか出来ない。

「明久が攫われた」

この時は確か前に見た夢の続きだろう。

誕生日に小鳥が欲しいと指差した時から明久が
失踪して数日。

いつも構ってくる兄が居ない……知らず知らず兄の姿を探すという
奇妙な

感覚に襲われながらも適当にコーヒーを飲んでいると父が青ざめた
表情で

言ったのが印象に残っていた。

姉は卒倒し、母も泣き崩れ、父も母と同じようだったが……
百合子は冷めていた……表面上は。

「で、話は終わるかよ面倒くせエ」

「百合子!!」

母が殴りかかろうとして止めた……反射の設定があったのと、
いつもの様子と違うという事に気がついたからだ。

「百合子、フォークが逆よ」

「……………」

一人だけ食事している百合子がフォークを逆にして食べている状態を見て

動揺している事を理解したのか責めなかった。

「要求は五百億だ」

「一般家庭如きに、なんともまア無謀な金額を吹っかけるなア」

「……………遠まわしにゆりちゃんを要求してますね」

研究機関にでも渡せばそれだけで五百億など挽回できるだろう。

超能力の存在を解明できれば、超能力者を量産する事も出来るかも知れないからだ。

出来ないなら出来ないで、脳の仕組みだけ理解して後世に託せば良いだけの事。

非合法な闇の技術ならクローンでも作ってそこから解明していくだろう。

「で、どうすんだ？」

「居場所」

「私じゃ探れるわけねエだろうが……………あくまでベクトル操作・制御だけだぞ」

そもそもの誘拐の発端が小鳥を指し示した自分の責任もあるのだろ

う。

自分の責任だからこんなに心がざわめくんだと無理やり納得させて、家族会議に混ざる。

この時には能力こそ所持した状態であり、演算能力もずば抜けていたのだが、

経験が無いせいなのか、それほど状況分析などを行えず、

そもそも犯人の特徴が分からないのだから思考など読み取れるはずも無い。

などと思考にふけっていると……

「ただいまー」

全員机に頭をぶつけた。

百合子がぶつけた箇所は陥没して更に穴まで開いた。

「あ、明久……？攫われたんじゃない？」

「え？しんせつなおじさんがことりとってくれるのをてつだってくれて

そのあとそこでやすんでたけど、かえらなきゃいけないから

はなしてからでいいこうしたらでんわではなしててそのまま

かえってきたんだけど？」

拘束すらしなかった誘拐犯（笑）に明久と百合子を除き、家族全員が明久の無事を喜び、しかりつける。

知らない人について行ってはいけませんと言い聞かせながら。

「そうだ、ゆりこ！はい！！」

そう言つて明久は小さな瓶を差し出す。

空気穴が空いている瓶で中には百合子がテレビにて指差した小鳥が入っていた。

「……………」

それを無言で受け取る。

つぶらな瞳で百合子の顔を見ながらピピ、と鳴く雀。

家族は複雑かつ微笑ましげに見ていた。

百合子は蓋を開けると雀の頭を軽くなぜる。

そのまま窓から逃がした。

「えー！ー！！？せつかく捕まえてきたのに……………」

雀はすぐ傍の木にとまってピピ、と鳴いた。

百合子は食べ途中であつたトーストを掴み、パン耳の部分の一部を雀の傍に投げる。

雀はそれを突つつき咀嚼した。

「狭い中に居るよりは外の方がいいだろ」

そう言つて、百合子はさつさと外に出た。

途中で、母親にすぐ戻ると言いながら、

引きとめようとしてもベクトルにより反発するので

止められず、百合子は適当に靴をはき……………外に出た。

「何でついて来るんだよ」

「ぼくはおにいちやんだぞー！」

その後ろには家族全員が揃って柱の影に隠れながらついて来ている。近所の恥さらしだと言っ事に気がつけ。子供が指差してるぞ。

「スイマセーン、アナタチナニシテルノデスカー」

外国人風で喋るどう見ても日本人のお巡りさんにまで声をかけられて職務質問にあっていた。

他人の振りをするため、さっさとその場を離れる。

その様子の百合子に明久は駆け足気味で追っかけた。

「どこいくのゆりに」

「何処だっていいだろオが」

撒こうと思っても撒けず、最終的には胸に妙な不安が渡来した為、歩幅を下げて付いてこれるように調整して歩く百合子。

「おい、ボウズ」

「あ、しんせつなおじさん！」

「どこほつつきまわってやがったー！！！」

公衆の面前で明久が殴り飛ばされた。

百合子にはその光景がスローモーションに見えた。
心のざわめきが大きくなった気がした。

「はあっはあ……まあ、いい目的のガキを連れてきただけで

マシだと思おう……おい、ついて来い！」

そう言つて百合子を掴み、その指が折れる。

百合子の能力をまつたく知らない者の反応だろう。

男はただ、百合子を連れて来いとしか命じられておらず、

反射の能力も攻撃しなければ発動しないものだと思い込んでいるようだった。

「……」

何の感情もなく光を失つた瞳で男を見て腕を振り上げた。

男の腹部に命中し、そのまま男は吹き飛んでいく。

壁に埋まりこみピクリとも動かなくなった。

「……………イライラすんな」

ゆっくりと痛みを堪えて立ち上がった明久を見て、
百合子は胸に妙な感覚が浸透してくるのを自覚し、
八つ当たり気味に男に向かって、音速の三倍以上の速度でもって

小石を投げつける。

コントロールを度外視しているのか、その石は一切男には当たっていないかった。

周りの大人は誰も止めようとしなない……。

人を軽々と吹き飛ばし、今も石を恐ろしい速度で投げつける少女を前に

誰もが足が竦んで動けず……警察に連絡を取ることすら出来なかった。

「やめ……てよ、ゆりこ」

「あア!!!?」

明久にズボンの端（百合子はズボンを好んでいた）をつかまれ、百合子は石の投擲を中断する。

「何で止めるンだよ、あの屑が先に手を出したンだから、当然の権利だろうが」

それは違うと、誰も指摘を入れようとはしない。

全員、下手すればあの男のようになるのでは無いかと不安になっているのだ。

全員が全員自分の事を化け物を見るような目で見ている光景に百合子は

先ほどとは別の理由で心をざわつかせる。

「ぼくはへいきだから」

ふと、自分を化け物の目で見ない人間の事を考える。

家族は特に化け物扱いはいらないが、特別扱いしてくる。

他人は圧倒的な能力を化け物扱いし、恐怖で見る。

……自分の兄の明久はどういう目で見ているのだろうか？

「どうしたの？」

「……………」

明久の言葉を見殺して百合子は歩き始める。

進行方向上には他人が居たが、まるでモーゼの奇跡の如く、道が空けられる。

「ねえねえ、どうしたの？」

「しつこい」

話しかけられると胸がざわついてくる……先ほどの感情とはベクトルが違うが、

自分はいらっているのだろうか？と疑問に思う。

「ねえねえ」

「うるせえってんだろ、このバカ！！」

「バカっていったなあ！！バカっていったほうがバカなんだよ！

ゆりこのバカ！！」

「自分で矛盾してるって分かってて言ってやがんのかこのバ……」

「アホ面ア！！」

些細な下らない理由での喧嘩、その部分だけ見ればただの子供の喧嘩なのだが、

百合子はあまりにもその能力が圧倒的過ぎた。

つい、軽く小突いてしまい、明久が吹っ飛ぶ。

百合子の頭が冷えた時には明久は地面に打ち付けられたところだった。

無意識に手加減していたのだろう……でなければ明久も先の男と同じように

吹き飛ばされ……最悪死んでいただろう。

明久の死を連想した時、また心がざわめいた。

「いったー、やったなーゆりこー！」

明久が殴りかかるが当然”反射”される。

子供の力で殴った分、反動も少ないが、それでも痛いのか、

明久は百合子をふくれっ面で怒ったまま、痛まない腕を振り上げ、宣言した。

「ぜったいにいつかいなくってやるからな！」

そのときはひとつだけいうことをきいてもらっぞ！」

「……………出来るンならやってみる明久ア！！」

ここに百合子と明久の兄妹の歩んだ軌跡でこの後も小さな喧嘩はあったが……

最初にして最後の大喧嘩が繰り広げられる事になる。

過去問：1 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その一（後書き）

この小説の明久は超能力も特殊能力もありません。
当然、幻想殺しも未所持。

身体能力は一般的な同年代の子供と同じくらい。
さて、この喧嘩はどうなるんでしょうか（汗）

百合子は転生者じゃなく精神が子供だし、兄妹なんだから一回は
大喧嘩ぐらいするはず……喧嘩するほど仲が良いって言うしね。

さて、また次回。

召喚獣の出番はまだまだ先だなあ。

過去問：2 百合子と明久・最後の喧嘩！ その二

「そのムテキバリアーずるいぞゆりこ！」

「ずりイわけねエだろが、私の力の片鱗なンだからよ」

家についてからもこの調子で喧嘩状態であり、明久が一方的に突っかかつては

弾き飛ばされると言うループが何度も起きていた。

「いつしゅうかんいないにぜったいにかってやる」

「はいはい、一撃入れればソツチの勝ちだからな」

そう言いながら適当にコーヒーを飲み干す百合子。

家族は帰ってきていない。

あの後、家に帰り暫く待っていると、警察署から出所してきますと言う

電話が入った。

職務質問から何でそんな段階まで行ってしまったてると呆れつつ、今日のことは話さず、家で待ってる事に。

「何してやがる」

「おもいテレビならばはんしゃできないだろうとおもって

もちあげようとおもっただけ」

必死に持ち上げようとする明久。

どう考えても不可能であるのだが、必死に努力して持ち上げようと奮闘している。

仮に持ちあげて投げつけたとしても避けるまでも無く反射でそのままそのテレビが明久に襲い掛かるだけである。

「とみせかけておりゃああ」

「私の意思関係ねエンだよ」

明久が奇襲気味に攻撃を仕掛けるが、あっさりと返す。

百合子が無意識のうちに設定してるので、奇襲は効果無しである。

「てがいたいー」

「懲りたら諦めろ」

それでも諦めるつもりは無いらしく、急に何か思い至ったのか……

「どら。ん。ーる、さがしてあつめてくる！」

「どうやってだ？一週間以内に集まんのか……」

いや、それ以前に存在しねエよ」

「ほく。しんけん！」

「仮にあつたとしても一週間じゃ無理だろ……」

第一ほぼ打撃だから反射は通用するぞ」

「うつら。ん！」

「だから打撃とかが主体なんだから」

本当に喧嘩してるのかと疑うぐらいに、呆れた会話が続く。

「グングニル！」

「……投げる前から当たる槍か……イイ案かもしれねエが

無理だろ？そもそも神話の武器にたよんな」

一瞬、因果の反転の事を考え矛盾が生じてどうなるのか結果を考え
たが、

概ね反射できるだろうと予測し、そもそも真面目に考察するのも
あほらしいと判断したのか突っ込む。

……もう一度言うが、二人は大喧嘩の最中である。

会話自体は馬鹿馬鹿しいのが多いのだが、しっかりと剣呑とした雰
囲気で

睨みあっている……ただし憎いとか恨めしいとかの負の感情は無く、
ただの言い合いの発展だけである。

「ちきゅうごとぶつこわすー！」

「どうやって破壊する気だ、世界中にある核を集めたとしても

そこまでの破壊は起り得ねエぞ」

地球が破壊されても数秒は生き残れる自信があるのか、そんな事を

のたまう百合子。

空気を圧縮し、集中させれば酸素はもつだろうという計算である。まあ、結局酸欠で死ぬだろうが。

とはいえ、子供の発想は微妙に残酷である。

「諦めろ、この私に一撃入れる事すら不可能なんだよ」

「そのおもしろいあがりをぶちこわす!!」

再び飛び掛って攻撃を仕掛けるが反射で普通に吹っ飛んだ。適当に床を蹴り、クッションを明久の落下地点にやって、自分の行動に驚いていた。

「何やってんだ、私……今喧嘩中だろオが」

自分でも無意識にしていた行動に自分の手をもう片方の手で叩き、後頭部をガシガシと搔いた。

——翌日

「いいからそこをつくなよ!」

「はいはい」

公園の隅に立ち、その反対側に明久が立って駆け足の体制をとっていた。

大方、スピードで突進してその運動エネルギーをぶつける算段だろう。

どうやって緩和させるのか考え始め、どうしてそんな事を考えるんだと、

また心の中が分からなくなったので後頭部をガシガシと掻いた。

「うおおおおおおお！！！」

そのまま走ってくる明久。

全力疾走であるが、当然その速度は遅い。

「おおおお……おお」

声を張り上げていたせいで余計に体力を消耗したのか、走りよってくる速度も比例するかのように遅くなる。

「くらえええ……」

ペチン、と間抜けな音をして反射された。
当然、百合子に一撃を加えられていない。

「阿呆」

「ぜえ……ぜえ……」

仕方なく回収し、持ってきていた台車で運搬する。

『……さつき雄二が話していた、”大化の改新”っていつのこと

？
』

『三年生にもなつて、まだそんなことも知らないのか？

翔子は馬鹿だなあ
』

『……まだ習つてない。雄二の頭が良すぎるだけ
』

ふと公園で話している二人の少年少女が見えたが、百合子は気にも留めなかった。

この時は対して興味を持っていなかった為スルーし、記憶にも残っていない。

夢を見ている百合子は「こんなところでニアミスしてたのかよ」と呆れ半分に

自分自身に突っ込んでいた。

『——625年だからな
』

『……わかった。きちんと覚えた
』

『よし。忘れるなよ
』

『……大丈夫。絶対に忘れない
』

記憶には残っていないようだったが、潜在意識には残っていたらしい。

間違つて覚えた事に対して多少なりとも意識が向いたせいもあるのだろうか？

「おい、明久……」大化の改新は何年だ？」

「え？不事故だから………245年！！」

「……不事故じゃなくて無事故だからな」

二人の少年少女には聞かれていなかったようだった。

……言うまでもなく、名前にも出ていた通り雄二と翔子である。
そして重ね重ね言うが、百合子と明久は喧嘩中である……説得力が
無いが。

呆れつつも百合子は台車を引き、明久はどなどなーと歌っていた。

——翌日

「やきゅうをしよう！」

「ピッチャーがデッドボールになる野球か？」

明久の狙いを察知したらしく、即座に反射されるぞと警告する。
凶星だったらしく、明久は明後日の方角を向いていた。
この日は結局明久も仕掛けては来なかった。

「で、結局明日が最終日になるわけだが」

「あれ？」

一週間という期限を設けていた為、明久はずっと百合子に攻撃を開始していた。

「ロードローラーだ!!」と言いながら自転車ごと落下（自転車だけ落とす予定だった）

してきたり、「食らえ氷水!!」と言いながらでかい氷を投げつけて（拳を振るって真下に叩き落した）

きたり……どう考えても百合子を殺す気できているとしか思えない。その事を一回指摘すると。

「ふつうのこうげきじゃとおらないからおもさをくわえてるんだ！

それにゆりこならぜんぶおおけがしない!!」

「……それは化け物って意味か？」

「え？なんではけものなの？ゆりこはゆりこじゃん」

化け物ではなく、明久の中で新カテゴリーで種別：百合子が作られたらしい。

曰く、ウルトラ。ンや仮面ライ。ーみたいな正義のヒーローと言っ

ているが、
どう考えても悪人の能力だろ。

「ゆりこはぼくのいもうとなんだからじぶんからはぜったいきず
つけない！！」

「こころやさしいおんなのこなんだ！」

「そう思える理由は何なんだよ」

「ぼくのいもうとだから！！」

「理由になつてねエぞ」

実際に百合子からアクションを取ったことは一度も無い。

この時にはたいていが明久や家族が自分が危害を加えられた時にしか
能力行使による攻撃を行っていない。

過剰な正当防衛だが、当然百合子が圧倒している場面しか人々の記
憶には

残らないので、百合子が無闇矢鱈に力を行使する危険児としてしか
見えていないのだ。

「うーん」

「漫画なンざ見たって私に一撃入れる方法なンてねエだろが」

一週間近く喧嘩（？）していれば、剣呑さも薄れるようで、
明久が漫画を読んでいる横で百合子はコーヒーを飲んでいた。
無糖コーヒーであり、今の明久には苦すぎて飲めない。

「ゆりこ!」

「何だ」

「明日、文月タワーの下で待ってくれる?」

「別にいいけどよオ」

流石に文月タワーから落ちてくる阿呆な事はしないだろうと、
このときは思い、承諾した。

過去問：2 百合子と明久・最後の喧嘩！ その二（後書き）

文月タワーはオリジナルです。

高さは東京タワーより低めです。

コラボの方は順調に挫折^{オイ}中

というのは冗談ですけど、やっぱり他のキャラの
魅力を殺さないようにするのが非常に難しいorz

では、また次回

過去問：3 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その三（前書き）

何かタイトルサギになってますが、

明久と百合子の中で一番大きな喧嘩って事で。

過去問：3 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その三

「たかいね」

「そりゃ200メートルだしな」

文月タワーの最上階展望台の下を覗き込むと、想像以上の高さだった。

その景色を見て「だいじょうぶだ、もんだいない」とか「あいきやんふらい」

とか色々とかいてる。

何はともあれ、これで重力落下の攻撃は加えては来ないだろう。

明久に近寄ってきた明らかに表の世界の住人じゃない人間を蹴飛ばす。

「ところで、その馬鹿でかい鞆を落とす気だったのか？」

「え、あ、うん」

何かもったという事は何か別の狙いがあったのだろう。

「うう、ちょっとトイレ」

「外で待つてるからな」

出口にまで到達した時、トイレに行くと言い出したのでさっさと外に出る事に、

そして念のため、全てを見渡せる広い空間で待ち伏せする。

たとえ明久を誘拐できてもこの位置であれば補足できるとの確信を持って。

「そういや、明久が負けたときの罰則を考えてなかったな」

実際どう足掻こうが百合子が勝ってしまうので、決めてなかったのだが……。

「別にいつか」

何人かが百合子の周囲から意図的に離れていく。

その光景を見て百合子は相変わらずの化け物扱いに顔をゆがめた。

『またせたな！ゆりこ！！』

「……何してんだ、明久」

子供用きぐるみ変身スーツを纏った明久（？）が出てきた。
やけにでかい鞆を持っていたと思っただけならあんなものが入っていたのか。

『あきひさなどではない！すーぱーかめんだ！！』

「じゃあ、すーぱーかめん……頭が逆になつててシユールになつてンぞ」

『……どつりでまえがみえないわけだ』

あわてて頭の部分を脱いでイソイソと被りなおす”すーぱーかめん”。

『またせたな！ゆりこ！！』

「本当にいろんな意味でな」

着替えとか、その後にカンペを見るような仕草とか。
周囲の人間が先ほどとは別の意味で離れた。

『きょうがさいしゅうびだということで、ヒーローパワーを
もってしてゆりこにいちげきをいれてみせる！！』

「市販のスーツ着ただけでヒーローパワーが得られんなら

世の中苦労しねエよ……………」

「いくぞ！シームーンパンチ！！」

何の工夫も無く、少し高い位置から百合子に飛び掛る。
拳をおもいつきり後ろにやり、確実に打ち抜くといった表情で
百合子に向かう。

（何か考え付いたのか？）

疑問に思う事無く、避ける動作も行わないまま、真っ向から受け止
める姿勢をとる。

そして、明久の拳が触れた――

見ていた通行人も、黒服を纏った闇の住人らしき人物も目の前の光景を信じれなかった。

明久が地面に倒れて悶絶している様はまだ分かる。

だが、その先には子供の体格とパワーとはいえ飛び掛った一撃をマトモに受けて

吹っ飛んだ百合子の姿があった。

「ぐ、がア……な、何が起きた？」

「いったー！！、すこしっばいしたー！！ぼくのうでがちよつといたいー！！？」

ごろごろと転げまわる明久を見ながら先ほどされた攻撃の内容を分析する。

確かに明久の拳は百合子を守る膜に触れた。

そして、そのまま反射され、後方に思いっきり吹っ飛ばされたように見えた。

ここまではまだいい……実際に何人も同じような光景を見たのだから。

ならば、本当にヒーローパワーとやらが宿ったのか？

否定は出来ない、百合子のような超能力が具現するのだ、そんな力がポツと出てきたとしても

おかしくはない……が、結局攻撃にもベクトルが存在するのだから

反射は出来るはずだ。

「……さてよ？……失敗した？」

「うう、ようやくいたみがおさまったー」

後方に思いっきりぶっ飛ばされた……自分でわざと引き戻した？

「……明久に感謝だな……こんな下らねエ弱点があつたとはなア」

考えてみれば百合子の反射はあくまでも膜自体で全ての向きを反転する。

ならば、その膜に触れ、そのまま引き戻せばその衝撃は百合子自身に返ってくるではないか。

単純な発想……普通の人間であれば気がつくであろう出来事でも実行にうつそうなど

とは思わないだろう。

当然、百合子の反撃が襲い掛かってくるだろうと簡単に予測できるからである。

それ以前に百合子は反転そのものを反射するとしか認識してなかったので、

月日がたてば気がついていただろうが、この時にはその攻撃方法は優良だったのである。

「ベクトル反転の設定を組みなおして……いや、戦いの最中に

相手の動きを見て臨機応変に……」

「ゆりこー！」

「あ？」

ぶつぶつ弱点のフォローをするための設計を考えていると痛みから解放された明久が満面の笑みで接近する。

「ひとつだけ言う事を聞くんだったけか？ 一体何を――」

「ぼくをおにいちゃんとよべ！！」

地面が陥没した。

「マテ明久コラア、たったそれだけの為だけに危険なまねを

やってたのか！？

「え？ そうだけど？」

馬鹿と天才は紙一重と言う言葉があるが、確かにそうかもしれない。ある意味では明久は天才だった。

……ハンデありの一对一の戦いでも、妙な意味でも百合子は明久にその日、敗北を喫した。

「……………愚兄」

「けいって、あにつていみだっけ？ ……ひびきがかっこいいぞ！

それでよんで！！」

冗談交じりで愚兄といったのだが、明久は響きが大層気に入ったらしい。

漢字でこれが出てしまえば気がつくだろうが、百合子はふと、一つ疑問に思った。

「私が怖くないのかよ」

「こわくないよ？だってけんかちゅうだつてぼくを

まもってくれてたじゃない」

無意識の行動だったが、それはある意味では化け物扱いしない明久を失いたく無いが為であろう。

「化け物だぞ」

「いもうとでしょ？」

——このときの感情を百合子は今でも一言で表す事が出来ない。

感謝なのか、受け入れられている実感を与えてくれたのか、人間としてみてくれていたという感動なのか……

いろんな感情が混ぜこぜになっていて……

心の中でグチャグチャにかき混ぜられて……胸のざわめきの一片を理解できた気がした。

「おにいちゃんがさいしょにうまれたわけは、そのあとに生まれ
てくる

いもうとやおとうとをまもるためだ！」

「護って貰うほど軟じゃねエ」

そう言いながら明久がついて来ているのを確認し、帰路に差し掛かる。

何処と無く、百合子の声色は優しげだった。

「……ところでそのままか？」

「ぬげなくなっちゃった」

帰ってから家族総出で明久からスーツを脱がせました。

余談だが、そのスーツがその後数ヶ月ほど売れ行きが伸び、入院患者もそれに比例して増えたらしい。

過去問：3 百合子と明久・最後の大喧嘩！ その三（後書き）

……こんな結果になりました。

流石に飛び降りるほど勇氣は無かったみたいです。

さて、氣を取り直して、次回からコラボ……反応が怖いよ

最初は

レフェル様の「俺と彼女と召喚獣」とのコラボ

人様のキャラを動かすのが大変だという事は二次創作で
重々承知してたのですが、コラボは更に大変（汗）

ではまた次回！

特別問題：1 百合子召喚A（前書き）

タイトルが意味不明。

レフェルさんとその作品のファンの方々に怒られないように頑張りましたが、

どうでしょう？

特別問題：1 百合子召喚A

「今度という今度は堪忍袋の緒が切れたんだからー!!」

そう言つて、黒い魔術の本を開いて鬼のような形相で魔術を唱え始めるあかり。

目の前ではあかりの威圧に立ち尽くしている姫路……

そして姫路のいきすぎた拷問行為で気絶している明久が居た。

「ゆ、雄二よ……止めぬのか？」

「止めれるのか、あれを」

男子全員が首を横に振った。

正直誰が行つてもあの謎の霧でダウンするに決まっている。

流石にやりすぎだと止めようと勇敢に立ち向かったありすと島田はダウンし、

それぞれ雄二と終夜が介抱している状態である。

背後に霧島翔子というプレッシャーの塊が存在するが、

他の女子と交流する時よりは怒りが若干低めなので雄二も精神を削られてはいない。

もはや常識人はこの周辺に存在せず、誰も突っ込みを入れる事など不可能。

「来い！異世界の悪魔よ——!!!」

詠唱が完了したのか、あかりが両手を広げ、召喚したものを招き入れるような

姿勢をとり始める。

そして――穴が開き、一人の人間が落ちてきた。
目つきこそ違うものの、特徴が明久に非常に酷似している。

「よつとと……」

背丈も良く見たら似ているし、もしかしたら女装した明久かもしれない。

だが、当の明久は失神中であるしその推測はおかしいのだが。

「つたく、誰だよ急に、人のベッドに

パツクリ開くような仕掛けを施しやがったのはア」

そう言いながらその少女（少なくとも声色では少女）は辺りをキョロキョロと

見回し、あかり・ありす・綾菜の三人を見て怪訝な表情をする。

居ない筈の人間を人間を見ているような目つきだ。

「……！」

それはひとまず置いておいたのか、その少女は再び見回し見ていなかった後方を
振り返り、目を見開いた。

「オイ、雄二」

「マテ何で俺の名前を知ってるんだ」

「……………あア？」

背中に一瞬黒い噴射のようなものが噴出しかけたが、雄二の本当に知らないと言う声に反応し、攻撃態勢が止まる。

「……テメエら、私の名前を言ってみろ」

誰も答えるものはなく、少女——百合子はここが完全に別世界だと理解した。

「へえ、じゃあそっちの世界じゃえーっと」百合子で構わねえよ」

百合子は僕の妹なんだ」

「で、ありすにあかりはそっちには居ない、と」

世界で違う点を上げれば主に人物が居るか居ないかの差だろう。

「で、さっき出そうとしていた黒い噴射のようなものは何だ？」

「あれは出そうと思って出せるシロモノじゃねえんだよ。」

そうだな、この力を拡大制御させるだけだ」

そう言つて、適当に鋭利なものを拾い上げる。

鉄針のようなものであり、普通の人間では押し折れそうに無い硬度を持っている。

何でここにあるのかは不明である。

「……」

それを無表情のまま腕に突き立てる。

誰かが悲鳴を上げたが、血が吹き出る光景は発生せず、鉄針が逆に先端から内側に曲がるように潰れた。

「あ・と・は……」

教室の床を思いっきり踏みつける。

瞬間、クラスの卓袱台がすべて浮いた。

「ま、まさか……」

「ほオ？ 気がついたのか？」

ありすはその光景に――

「魔法なの？」

「……ンなオカルトみてエな能力じゃねエ、超能力だ。」

皮膚に触れたあらゆる”ベクトル”を操作制御する能力だよ」

「超能力も捉えようによってはオカルトの一種だと思っただけど」

両方とも常人では出す事の出来ない特殊な力であり理解できないという点であるなら

確かにオカルトの部類に入るかもしれない。

「あんまし驚いてねエめてエだな」

周りを見回して、恐怖の感情で見られていない事に怪訝に思いつつ、疑問を口にする、世界は違っても明久は明久だろうからと明久が驚いていないのは勝手に納得したのだが……。

「いや、だつてねえ」

「そういや、黒魔術使う小学生ぐらいのガキがいたんだっけか……」

「確かに私のせいだったかもしれないけど……その扱いはヒドイ！
それに高校生だよ！」

「いや、こつちじゃ小学生の葉っぱ娘が飛び級したぐらいだからこつちでも起りえたモンだと思ったただけだが？」

「「しょ、小学生じゃないもん……」」

「あかりにまでダメージが……」

からかう意味でなく、本心から小学生だったと認識された事に背の低い二人は落ち込む。

百合っ子のところでは葉月（百合子の教育の賜物だが）という前例があったためか、

努力で飛び級してきた小学生だと思ったのだ。

「小学生扱いした事は謝罪すつからよオ……早いとこ戻して欲しいんだが？」

「……………」

百合子の意見にあかりは気まずげに視線を逸らす。

ほとんど冗談に近い演出であつて、その後に薬を飲ませる算段だったので、

戻し方が分からないのだ。

「だ、大丈夫だよ。私が転移装置を作ってみるから？」

「聞いた限りだけでワリイが……今の科学力で、んな高等なモン用意出来ンのか？」

「え、うん……ちょっと時間が掛かりそうだけど」

学祭の時に机を多く用意して疲れた経験がある。

人一人を転送するほどの機械で、かつ異世界ともなると多くの力を使うのだろう。

「はあ、仕方ねエな……なんだ、あのバケモン」

「こーちゃん」

綾菜の出現に土屋はサツと退避した。

その折に転び、抱きついた卓袱台が破壊された……その光景を見ての出来事である。

そして百合子は人の事を言えないだろう。

「胸のデカサが有り得ねエ」

「……この世界は平等じゃないのよ」

「……そろそろ成長ホルモンのベクトルを戻すか」

「え？」

仲間が出来たと思ったら一瞬で裏切られた気がした島田であった。

学園側から許可を貰い、適当に学園の屋上で風の翼を作り出し空を舞いながら

時間を潰した百合子。

その後、数時間で機械は完成し、ありすの能力を聞いた後百合子は興味なさそうに

元の世界へと戻ろうとし……

「何でそんな最強ともいえる力を持つて――」

歪まないんだ？と聞こうとして止めた。

異世界とはいえ翔子の友人を傷つける可能性があるし、その影響でこの世界の翔子が傷つくのを見るのは本意ではない。

「何？」

「……何でもねエ、じゃあな……私みてエに歪まねエように頑張れよ」

最後の呟きは誰にも届く事無く、百合子は元の世界へと戻っていた。

特別問題：1 百合子召喚A（後書き）

自分なりにキャラを解釈して書いたけど……難しいorz

こんな展開になって、結局絡んでない……すいませんでした。

今回は「バカとテストと介入者」とのコラボ。

特別問題：2 バグ&「バカとテストと介入者」（前書き）

今回のコラボはバカとテストと介入者に百合子が居たら？のIF的な話。

最初の部分だけにほとんど絡めていないorz

風様やそのファンの方々に怒られないといいんですが（汗）

特別問題：2 バグ＆「バカとテストと介入者」

「私たちと言うイレギュラーな存在が居るせいで

Fクラスのメンバーが変わって無ければいいんだけど……」

「俺たちの人数分増えるだけだろ。栞も順当にいけばAクラスのはずだしな……」

つつても、一人ほど完全に俺たちのせいで増えたとは思えない存在が居るんだよな」

二人の少年がFクラスの前で何事かを呟きながら、変わっている点が無いかを検証しだす。

『力哉に薰ー！』

と、そこで少年の声が聞こえてきた。

二人がその方向を見るとちょうど少年と少女が走ってくるころだった。

といつても少女は手を繋がれて引かれてるという表現が正しいだろうが。

「二人とも見た？あのAクラスの設備。すごかったよね」

「ああ、たしかに凄かったな。一方通行」

「前から思ってたんだが、何なんだその”一方通行”ってのは……」

あの分だとFクラスも結構マシなのかア？（ま、それは有り得ねエだろうが）」

「そうだね。このクラスも外見だけがボロいだけだよ」

言い忘れていたが、少年二人の名前はそれぞれ力哉と薫であり、追記するなら

転生者（？）と呼ばれる存在でもある……？なのはいきなり来ているからであり、

寧ろ来訪者と呼ぶほうが適切かもしれない。

ともあれ、この世界の原点ともいうべき物語を別世界で”読んだ事のある知識”を

持つてして、あえて絶望に叩き落とすかのように希望を持たせる。

「だよねー。じゃあ入ろうか。すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

とガラツと扉を開ける明久。二人の知識が確かであれば……

「早く座れ、このウジ虫野郎」

やはり、起ったか、という表情とこれから起るであろう虐殺に対して雄二の冥福を祈った。

「聞こえないのか？ああ？……げえ！百合子！！？」

「雄二クウーン、ちょっと遊ぼうぜエ！」

笑顔が攻撃的とはよく言ったものである、雄二と呼ばれたガタイの

いい少年は、
一目散に逃げたが――

「知ってたか、墮天使からは逃げられない」

「何でその噴射が出る――」

雄二の言葉は最後まで続かず、そのまま百合子と共に窓の外へ飛び立ち、
空中案内の旅に移行された。

「先生が来たら戻ってきてねー」

「さて、席を探しにいくか」

席も決められていないらしく、適当に見繕い空いている席を確保した。

しばらくして担任の福原先生が入ってきた、雄二と百合子も戻ってきた。

心なしか雄二の顔色が青い気がする。

その後は順調に自己紹介が続いていき、島田の紹介の時に音速を超えた速度の

シャーペンシルが壁に突き刺ささり音速を超えた事による衝撃波で島田が吹っ飛んで途中で尻餅をついたが、何の問題も無いので割愛する。

「――コホン、えーっと、吉井明久です。」

気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

少年達が知っている限りでの原作どおりの明久のセリフ。

だが、その後に続く大合唱が続いてこなかった。

百合子がこれ見よがしに親指を首のところへ持っていて掻っ切るジェスチャーをしたためである。

「――失礼。忘れてください。これからよろしくお願いします」

何の反応も無いことに落胆しながらも座り込む明久。

寧ろこんな男しか居ない環境でそんな事を言われても吐きかけるだけだろう。

そして、続いて二人の少年にとって原作には無い紹介が始まる。

「石川力哉。得意科目は古文。趣味はモデルガンをいじる事。宜しく」

「石川薫。得意科目は現代国語。趣味は力哉と同じくモデルガンをいじる事。」

一年間よろしく願いますね」

石川薫の自己紹介でFクラスから歓声が上がる。

さきほど埋もれてしまった秀吉の紹介の時と同じであるが、美少女にしか

見えない外見で微笑みかけられたら男と認識していても落ちるだろう。

「吉井百合子、特技は超能力だ。明久に精神的無いし肉体的に攻撃する奴は

血流のベクトルをいじくって自主規制の内容が羅列されています>するンで覚悟しろ」

クラスから血の気の引く音がした……とある一角で一人の少女が気分が悪そうにしているのは気のせいだと思われる。純粹に気分が優れないだけかもしれない……多分。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

一人の少女が息切れしながら駆け込むと、誰からでもなくそんな声上がる。

その彼女はピンク色のやわらかそうな髪が背中の中まで伸びていて、

肌は透き通るように白くスタイルは胸も含め抜群。

その後ろから他の者が——薫達が反応している点を見れば恐らく知り合いなのだろう。

男だらけのFクラスで異彩を放っている彼女達。

そんな彼女達によりFクラス勢は啞然としている。

平然さを保っていたFクラス担任である福原教諭はその美少女たちに話しかけた。

「丁度良かったです。丁度自己紹介をしていたところなので姫路さん、

石川さんもお願ひします」

「あ、は、はい。姫路瑞希といいます。一年間宜しく願ひします」

「あ、はい。石川栞です。一年間よろしく願います。」

力哉と薫をいじめたら絶対許さないので宜しく」

彼女はただでさえ小柄な体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる。

……もう一人は全然緊張している風には見えないのだが。

『はい、質問です』

そんな彼女達に向けてFクラスのある男子生徒が右手を挙げた。

「あ、はいっ、な、なんですか？」

「なに？」

『吉井妹もそうですが……なんでここにいるんですか……？』

聞きようによつてはかなり失礼な質問になるのだが、これは今現在この教室で担任と

薫・力哉の三人以外が思っている疑問だ。

「そ、その……」

緊張した面持ちで体を硬くしながら姫路が口を開く。

「私、振り分け試験の最中に熱を出してしまいました」

「私は試験の結果に関わらず愚兄と同じクラスになるように理事

会権限

使っただけだ」

その言葉を聞き、Fクラスの生徒40人以上が『ああ、なるほど』
といわんばかりにうなずいた。

そして同様に百合子の意見に『権力乱用だ』、とも思った。
そして百合子の発言のせいで栞の事はうやむやになった。

「で、では、一年間よろしくお願いします」

若干クラスの空気に押されながらも姫路は自己紹介を終えた。

姫路を見て、教室を見回した後明久は雄二に話しかけた。

尚、福原教諭は先ほど教室の騒がしさを何とかする為に叩いて壊れた
教壇を持つてくる最中である。

「雄二、ちょっと話があるんだけど」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しづらいから廊下で」

「別に構わんが」

「んじゃあ私も話があるから良いかな？」

明久と薫と雄二はそんなやり取りをして廊下に出て行った。

そして、数分後話終えたらしい三人が戻ってくる。

ここで明久によやく気がついた姫路が見れば懸想しているのが
丸分かりなほど顔を真っ赤にする。

「さて、このクラス代表の坂本だ——ところで皆に聞きたい事がある。

このクラスは座布団にはろくに綿が入っておらず、卓袱台の脚は折れてるものが多く、

畳は所々腐っている……」

全員が確認する時間を稼ぐかのように一旦言葉を区切る。
その雄二の思惑通り、全員が雄二に注目する。

「そしてAクラスはリクライニングシートに、清潔な床、机はシステムデスクだ。

不満は無いか？」

『大有りじゃあああ！！！！』

「そうだろうそうだろう、この点においてはこの俺も憂いている

……

そこで代表として提案したい！俺たちFクラスはAクラスに対して……

試験召喚戦争を仕掛ける！！」

雄二は無謀ともいえる戦争を提案した。

特別問題：2 バグ&「バカとテストと介入者」（後書き）

どうでもよさげな設定。

百合子の点数は主席……当然、翔子はAクラス代表だが次席の立場。

百合子の交友関係が完全に明久依存で翔子との交友関係無し。
葉月ちゃん飛び級かつAクラス（↑オイ）
根本は非調教

うん、関係ないですね……

今回は「バカとテストと召喚獣」ツインズ」とのコラボ。

その次からが本編です

特別問題：3 triplets（前書き）

意味不明なタイトルかと思う人も居るかもしれませんが、

三つ子です。 今回は「バカとテストと召喚獣」ツインズ」から

吉井夕季の登場……こつちの世界観に夕季が居たららの内容ですが、

ほとんど動いていない上に絡み少ないorz

光閻雪様やファンの皆様方には先取りで謝罪します。

特別問題：3 triplets

「チツ、トロトロ走ッてンじゃねエぞ、愚兄」

「……百合姉、いい加減、その呼び方……やめたらどうですか？」

「良いよ夕季、小さい頃とは言え、約束した事だし」

通学路を走る三人の男女が居る。

一人は人相がバカな少年ともう一人は端正な顔立ちだが悪人面した少女。

そしてもう一人は某魔法少女似の銀髪の美少女。

会話からするとどうやら三人は兄妹のようだ——三人とも似ても似つかないのだが。

少年が前を向いて一生懸命走っているのに対して、少女は軽い動作で後ろ向きで走っている。

その地点で互角らしいのだが、少女は本気で走っておらず顔には余裕すら見える。

美少女の方は少年に手を引かれており眠そうな表情をしている。

「それと……そっちが早く起こしてくれないから遅刻してるんだろ！」

「まだ……眠いです」

「目覚まし止めてるテメエが悪いンだろうが、待ってやつただけでもありがたく思えよ」

「相変わらず仲の良い事だな」

言い争いをしているうちに、どうやら校門の前にたどり着いたようだ。

校門の前には、隆起した筋肉を持つガタイの良い先生らしき人物が立っていた。

「おはようございます、t……西村先生」

「オハヨウゴザイマス、二十八号センセエ」

「西む——じゃなくて、鉄人先生。おはようございます」

「吉井兄、何を言いかけた。そして吉井姉、お前は遠まわしに鉄人呼ばわりするな。」

吉井妹は言い直さなくて良いからな？」

呆れながらも、三人の分の封書を探し出し差し出す西村教諭。尚、この人物は生活指導教員であり、体育教師である。

「それにしても、吉井姉妹はともかく、吉井兄は珍しいなこんな早い時間に」

「え？」

「まだ七時三十分だぞ。そんなに早く結果を見たかったのか？」

西村教諭の話が一瞬理解できなかったのか思考が一時停止し、そのまま周囲を確認する。

流石に校門前には人は居ないものの（他の先生から受け取っている人が大多数）、

校舎内に入ろうとしている

生徒がちらほらと見受けられた、その光景を見て怒り任せに隣の人物を怒鳴りつける。

「百合子！！騙したな！！？」

「もう少し準備に時間をとれたじゃないですか」

「気がつくのがオセエ……ニュース番組も見てねエ奴に時間の指図をされる覚えはねエよ」

慣れた手つきで封書を破り、中身を覗きこむ吉井姉——吉井百合子。

ついでに紹介すれば怒鳴りつけた人物は吉井明久である。

眠そうにしながらも姉を非難したのは吉井夕季。

百合子は封書の中身の紙に書かれた表記を見て適当に鞆に突っ込むとギロリというのが似合う

眼差しで明久の封書を見やる。

「そういえば今だから言うがな、俺は吉井兄の事を

「ひょっとしてこいつ馬鹿なんじゃないか？」と思っていたんだ」

「くはは、暫く前までは正解だよ二十八号センセエ」

「スースー」

「いやいや二人とも節穴じゃないか……夕季、ここで寝ると危な

いよ」

「確かにな。こんな勘違いを起こすなぞ、俺の目は節穴だったとしか思えん」

そう言つて、鉄人は深くため息をついた。

百合子がせかし始めたので慌てて綺麗に封を切ろうとする明久が、中々苦戦しているようで開きそうに無い。

「そうですよ。そのうち、あだ名にふし穴が追加されちゃいますよ?」

結局、きれいに開けることを断念した明久は、端をビリビリと破り出す。

「……吉井、お前への疑いは無くなった」

そして、中から折り置まれた紙を取り出すとそれを開いて中を確認する。

当然とでも言うかのように横から覗き込む百合子。

「吉井明久…… Aクラス」

「よく汚名を返上するまで勉強したな」

「よ、よし!」

「夕季センセエの指導の賜物だな」

「確かに私は協力しましたが、明兄の努力の方が大きかったで

すよー」

そして思い出したかのように、二人の妹へ尋ねる。

「ところでそういう百合子は何クラスなのさ、夕季もだけど」

「あア？Aクラスだがそれがどうしたんだ」

「私もAクラスですよ」

そして学年主席と次席でもある。

尚、明久は残念ながら十位以内には入れなかった。

「——うわ、百合子に夕季！凄いよAクラス」

「そオだな」

「リクライニングシートにシステムデスク、個人用の冷暖房機に冷蔵庫がついてるよ」

「スクリーンもありますね」

これから所属するクラスの内装に明久は目を爛々と輝かせていた。百合子は途中で面倒くさくなって離れたが、夕季は明久の気が済むまで

付き合うようだ。

「……百合子、おはよう」

「ンア？何だ翔子か、おはよう」

そんな時に話しかけてきた黒髪の美少女――

坂本翔子、致命的な間違いを犯しているように思えるが、確定事項だと思われるので

気にしない方向でいいだろう。

百合子の友人であり、その関係である程度明久や夕季とも親交があり、

名前を呼び合う程度には仲が良い。

「やっぱAクラスか」

「……そして成績第三位」

「はあ……あ、おはよう翔子さん」

「翔子ちゃん、おはようございます」

「……おはよう明久と夕季」

「とつとと入るぞ愚兄と天妹」

そのまま教室内に入る百合子・明久、その後ろをゆっくりとついていく翔子と夕季。

学園最強成績保持者と元学年最低成績保持者、学年次席と学年三位が入ってくる光景に、

どうという反応を示せばいいのかわからないAクラスの面々だった。

明久にとって幸いだっただのは、誰も侮蔑や嫌悪の視線を送ってこないところだろう。

妹二人を同時に止めるのは難しいからである。

「皆さん、お早う御座います」

「才女センセエーが来たぞ、愚兄とつと背筋伸ばせ」

「うちのバグ妹がスイマセン」

「……百合姉がすいません」

「もう慣れてます」

「噂どおり怖いもの知らずね、あんた」

ちなみに、百合子の席は窓際であり明久はその隣。

その隣には夕季が座っており、その近くに木下優子が陣取った。

翔子は百合子の真後ろに座っている。

「本日から一年間、皆さんの指導をさせていただく高橋 洋子と申します。」

さて、皆さん。何かしら不備はありますか？」

不備があるようには見受けられず、

誰もが手を挙げず不備はありませんと言う意見が上がっていった。

「さて、自己紹介からしていただきますでしょうか。」

廊下側の方からお願いします」

「あ、はい私は――」

自己紹介の間、明久は頭を悩ませていた。

正直、馴染めるかどうかが不安だったからである。

妹である百合子&夕季と親交のあった翔子とは面識があるものの、他とは完全にほぼ初対面である、木下優子はそれなりに知っているが正直会話経験は無い。

まあ、嫌悪的な視線に晒されていなかったから大丈夫だとは思うが、少し不安である。

「……坂本翔子」

「思わず流しそうになりましたが、きちんと”今の”姓を言ってください」

「……霧島翔子、趣味は読書」

「オイオイ、微妙に担任公認になってンぞ」

「やっぱりあの噂の原因は一途に雄二を思い続けているのが原因なんだね」

明久はいつの間にか置かれていた明久専用ドリルをやらされていた。これの出来によって明日の小遣いが決まる為か、必死に解いている。尚、今日の分の小遣いは昨日の総合点数〓3120円である。

ちなみにそのドリルの最大点数は5000点、その点数を取ればかなり余裕なのだが、

明久には随分と少し長い事になるだろう。

「工藤愛子です、得意科目は保健体育です。皆よろしくね」

「何か問題難しくなってるない？」

「気のセエだろ」

普通に私語は認められない時間なのだが、口元を押さえている上に声の向かう先に

高橋女史は居ない……能力の無駄遣いである。

「あ、僕の番だ……えっと吉井明久です。一年間必死に勉強漬けでここまで登りつめました、よろしくお願いします」

「ネタ無しかコノヤロウ」

「その突っ込みはおかしいです百合姉。吉井夕季です、特技は料理で、趣味は読書、

明兄を傷つけた者への報復です。今年一年お願いします」

「久保利光です、皆さんよろしくお願いします」

久保が自己紹介した折、明久に微かに悪寒が走ったのと百合子が目つきを鋭くしたのは同時だった。

夕季はまだこの地点では完全に好意を持ってないと知ってるので特に何も無いが、

一応心の隅で警戒している……兄には普通でいて欲しいからだ。

「私は吉井百合子です。愚兄を傷つけたものには生きてる事を後悔させますので

くれぐれもご注意を。

皆様これから一年間よろしくお願いいたしますわ」

『『その話し方は違和感がある（あるわ）（あります）（あるよ）』』』

「オイ、才女センセエも声を揃えんな。ち、吉井百合子だ。

面倒臭エが一年ヨロシク……てかスルーかこのヤロウ」

敬語全開で自己紹介したら駄目だしされ、多少不機嫌になりつつもどっかりと座り込む。

その後、後ろの方の自己紹介も終わり、一人を除いて全員がそろった事を確認する高橋女史。

「あれ？姫路さんは遅刻かな？」

「愚兄、姫路は途中退出だ……つまり一人欠席か遅刻」

「（原作と違って教室は別だったらしいですね……」

まあ、百合姉が教えてたからあの娘でしょうけど、ここは黙っておきましょう）」

あと一人は誰でしょうかね」

「すいませーん、遅れましたー」

教室に慌てて飛び込んでくる小学生ぐらいの少女を見て、全員が呆気に取られた。

当然だろう、どう控えめに見たとしても小学生にしか見えない少女が入ってきたのだから。

「構いませんよ、連絡は来ていましたから。それでは島田さん一度イイタイミングですので

自己紹介をお願いしますね」

「は、はい。島田葉月、11歳です！愛しのバカなお兄ちゃんのために

頑張って飛び級してきました！！」

『『『吉井君、犯罪は駄目でしょ（だろ）』『』『』

「いやいやいや、そうじゃなくていくらなんでも小学生が飛び級してきた事実には驚こうよ！？」

「は、まさか貴様の仕業だな百合子！！」

「アン？ただ私はみっちりと飛び級できるように勉学を叩き込んだだけだぞ、

後はあの葉っぱ娘の実力だ」

「勉強面で私に明兄を押し付けたわけはそこですか」

自己紹介に飛び入り参加してきた島田葉月は、そのまま空いている百合子の席の後ろの後ろへとトテトテと駆けていった。その様子を微笑ましい笑みを浮かべて大半のクラスのものは視線を送る。

尚、明久をバカ呼ばわりしてるが初対面の印象がそのまま親しい者と呼ぶ名として

認識してるのか攻撃的な姿勢をとらない。

後、夕季が教える事になった最大の理由は百合子から葉月の望みを成就させたいとの事で、

飛び級なのにAクラス以外だと理由になりそうにないのでAクラス並に教え込み、

夕季は珍しく頼み込んできた姉に対して、明久の評価を変える事にも繋がると思い、

百合子の計画を手伝ったのだ。

「そういえば、吉井君あなたって”観察処分者”なんですって？」

「うん、このレッテルが貼られたら学年十位以内にでも入らない限り

取り消されないらしいし、今もそうだけどね」

「……葉月のせいです」

「落ち込むな、むしろそのお陰で愚兄は召喚技術最強クラスになったんだから

その辺は感謝してんだぞ？」

「百合姉は相変わらず子供好きですね」

優子の質問に侮蔑などの意思を感じ取らなかった為二人とも反応しなかった。

それはともかく、学年上位点数かつ学年最高の操作技術の明久はこの学園で

三人を除けば敵無しだろう。

三人とは百合子・夕季・翔子の事であり三人とも五桁以上の点数である。

明久の観察処分の理由が自分にあるせいなのかしょんぼりとした。

「Aクラスの点数で動かしたらすごい力になりそうだね。

あ、僕の事は愛子でいいよ」

「……………皆さん、葉月の事は葉月でいいです！」

「……………よろしく……………雄二、他の女の子にちょっかいを出すのは許さない」

「……………代表（翔子さん）（綺麗なお姉さん）は急に何を言ってるの！！？……………」

「オイオイ、雄二のクラスで愉快な事でも起こってんのかア？」

「なんとなく、予想はつきまずけどね」

ちなみに、久保は他の男子グループと話したため明久の方には来られなかった。

今の明久は傍目から見ればハーレム状態なのだが、それを腹立たしげに見る集団は居なかった。

これが他のクラスであればそうは行かなかっただろうが。ともかく、予想していたよりも三人ほど多く話す人間が増えてホッとした明久であった。

突っ込みのタイミングが一致した事も合わさってなんだか仲良く慣れそうな気もした。

ちなみに百合子と夕季は顔を見合わせて軽く笑っていた。

その頃、Fクラスにて

「すみません、遅れま」遅いぞ、とつとと座れうじむ……………すまん、

遅刻してきたバカだと思ったんだ悪気は無い姫路」……グス」

「『何で、姫路さんが……？の前に坂本！姫路さんを泣かせやがってクロス！』」

「ぐおおおお、マテ落ち着けええ！！！！！！って何か別の寒気があああ！！！！？」

「うう、何で妹に負けてるのよ、うちはあ」

会話中にこんなやり取りがあったそうなの。

特別問題：3 triplets（後書き）

プロローグ部分に夕季参入、Aクラスに入ろうと思った理由は多分、百合子や自分がいる点で原作とは違うだろうし

いつその事周りの生徒を見返すために百合子の頼みも合わさって明久を教えて自分もAクラス……って事にしてくださいお願いします。

もう、コラボなんてしばらくしないorz

百合子の貸し出しは自由ですので、適当にメッセージでも

送ってくれば使用可能です（こっちでやるかは気分しだい）。

さて、次回から本編……勉強会合宿前のプール編です。

みどころは秀吉は男扱いされるのか！？です↑え？

問：24 プール編・1（前書き）

ようやくプール！でもまだ水着描写無しですよ。

投稿遅れて申し訳ありませんでした。

問：24 プール編・1

「この時期って、どこも混んでるよね」

「仕方ねエだろ、今暑いしよオ」

安全かつ、人気の少ないプールを模索して適当に色々な地元の資料を広げて予定を立てている百合子と明久。

少し暑くなつて来た時期に、入るプールを探しているのだが、中々に見つからない。

人気の無いプールを探している理由はある意味では”秀吉”の為である。

プールも海ほどではないがナンパが多い、もし万が一にも男にナンパされまくったら精神的にキツイだろうとの配慮である。

「流れるプールにも入りたいです」

「最悪それは百合子にやつてもらえば良いと思うけど」

「私任せか」

「だって、ベクトル操作すれば出来るんじゃないの？」

水流のベクトルを操れば確かに出来るだろうが、最初から百合子依存というのが

なんとも言えない状態である。

「……いつその事、ここのプールを貸しきるって手もあるなア」

「え？」

思い立ったが吉日なのか、百合子はさっさと学園長室へと向かった。許可でも貰いに行くのだろう。

——百合子移動中——

「って言うわけで掃除するから貸切で使わせろ」

「唐突に來た理由がそれかい、こつちもあんまり暇じゃないさね」

「って訳で使わせてくれ二十八号センセエ」

「……ちゃんと掃除するのであれば週末に使っても良いぞ」

学園長と西村教諭が話をしているところに無遠慮に乱入。

本来なら補習室行きの罰を下すところなのだが、頼みが意外にも普通であった為、

いつその事それを罰としてくたしておいた。

ちょうどプールを清掃しなければいけなかった為、ある意味では渡りに船だったのである。

「了解了解、そオいや、あの計画は進んでんのか？」

「肝試し」仕様の事かい？それなら最終調整には入ってるさ。

ま、夏補習の時期を潰すって言うのもあれだが一般公開としては面白い試みさね」

オカルト要素が入ってるんだからいつその事オカルト重視の要素を入れたら

どうだと去年辺りから言ってみたのだが、今年になってようやく最終調整に

至れる段階にはなっただけ。

この召喚獣の仕様を見れば、それなりに企業にも使えるかもしれないという事を

”お化け屋敷” 限定ではあるが示せるだろう。

「ただし召喚獣がどうなるかは実際に行わないとわからないさね」

「ま、それは仕方ねえだろ……こっちの用事は済んだし、

週末の午前中あたりにでも鍵を受け取りに行くわ」

「俺がいない可能性もあるから、他の先生方にも通達しておこう

……

自由に使えるからといって羽目を外しすぎるなよ」

「了解了解」

「許可貰ってきたぞ、午前中は遊んで午後から清掃だ」

「じゃあ、雄二や土屋もプールに誘おうか（掃除に巻き込もうか）」

「秀吉と……一応あの二人もか」

「誘うのはこっちでやつとくよ、百合子は場所を確保したんだし」

「ン、了解……ちゃんと水流弄って流れるプールにするから安心しろ」

「ふ」

葉月はご満悦だった。

成績は高校上位レベルだが、年齢的には小学生である。遊べるなら遊びたいというのが普通だろう。

「後、優子」

「何よ」

「秀吉の水着の買い物に付き合ってやってくれや」

「何で………そうね、店員に任せて女物がくる可能性も捨てきれないわね。」

「ついでに私も買ってくるわ」

百合子がついていけばいいのだが、一応彼女である為、当日の楽しみにさせる為に
買い物でもするのだろう。

「バカなお兄ちゃんは何を着れば喜ぶかなあ」

「スクール水着でいいだ……いや、自分で悩んで選んだけ。

人に聞いて得た答えを実行しても自分の為にならねえからな。

……そっぴやア工藤も来るか？」

「え？……うーん、ムツツリー二君が行くつぽいから行ってみようかな？」

微妙に会話は筒抜けであり、誰が参加するかは聞こえていた。

まあ、もっともその後の掃除のこともあるので進んで自己申告で

参加する者はいないようだが。

「……この面子だと私だけ微妙にのけ者じゃない」

全員、想い人がいる及び形式上には恋人が二組。

片思いされている人物が二人、想いを寄せている人間が別だが四人恋愛の”れ”の字も見えない優子にとっては少し居辛そうな空間である。

「……ただいま」

「おかえり……………どういう状況だコラ」

「こ、転んだだけ！転んだだけだから！！」

「鈍兄、転ンで関節が折れるならまだしも、外れる訳ねエだろが」

翔子と秀吉に肩を貸された状態で運ばれてきた明久に百合子は目つきが鋭くなる。

実行犯はおそらく島田姉と姫路と踏んでいるのだが。

「……………姫路と島田は直接的には関係ない」

「FFF団の連中かよ」

予想が少し外れた。

姫路と島田を誘ったところを目撃して嫉妬で攻撃したのか。

「潰すか」

「だから転んだだけだつて！？」

「明久よ、庇う意味がわからんぞい」

百合子の攻撃具合を考えると倍返しじゃすまなくなる可能性があるのと、

あの施設を荒らして姫路の健康を阻害するのを避けるためである。人数が人数だけに施設破壊が起きてもおかしくは無い。

「そこまで言うなら今回は止めるが」

「ほ」

「命拾いしたの、須川達よ」

バカである為なのか、普通に攻撃中は百合子の存在を忘れていたFF団だった。

そしてその週末。

昨日の天気予報では大雨の予定だったのだが――

「絶好のプール日和だね」

「そうね、見事にプールと学園の上空だけね」

「円状にばかりとあいてます」

学園の上空だけ雲1つない快晴の青空の下、校門には雄二・翔子。島田姉妹に姫路、木下姉弟、工藤、土屋、明久が鍵を持ってくる百合子を待っていた。

「ムツッリーニ、何をして……」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情で、カメラの手入れをしているムッツリーニ。彼にしてみれば、ここは絶好の撮影チャンスでもある。

明久に構う暇などないと言わんばかりに、カメラに集中していた。ついでに言えば、百合子のバックアップによりいつもより高性能であり、

水に濡れようが学園の屋上から落とそうが壊れないカメラである。

「ムッツリーニ、準備は良いけど無駄になるだろ？」

「……………なぜ？」

「いや。だってムッツリーニはどうせ鼻血で倒れるだろうし」

「そうだな、姫路達のチャイナドレスで沈んだぐらいだ。」

水着なんぞ見たら最悪死ぬんじゃないか？」

という明久と雄二の言葉に、ムッツリーニは肩をすくめて見せた。そして大きなスポーツバッグを手に取り、2人の前に突きつける。

「……………甘く見て貰っちゃ困る」

と言いながら、そのスポーツバッグを開けて2人に見せる。

「……………輸血の準備は万全」

「どこで手に入れたかは聞かないが、ある意味準備が良いな？」

「うん、最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

抱いっぱいに入っていた携行用の血液パックをみて、とりあえず救急車は必要ないなと思う2人だった。

恐らくこれも百合子のバックアップの可能性もあるだろうが。

「……つくづく、異常なメンバーね」

「まあまあ。趣味は異様かもしれませんが、良い人たちですよ？」

「……姫路さんも、すっかりなじんでるわね？」

“朱に交われれば紅くなる”

その言葉を実感した優子だった。

が、姫路の場合交わらない方が良かった気もすると少し眉間を揉んだ。

「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買ったか言ってたよね？忘れずに買って来た？」

「うむ。無論じゃ。ちなみに買って来た水着じゃが……」

「……………！！（くわっ！）」

秀吉の言葉にムツッリー二が目をむく。

当然明久も表にこそ出さないが、興味津々。

男物をきちんと買ったのかどうか。

「……トランクスタイルじゃ」

「バカなああああっ!!」

「……何してるのかしら？私がついて行っただから変えたに決まってるでしょう。」

まったく、店員も店員よ」

買ったではなく変えたという表現におそらく上も用意されたのだろう。

「吉井妹はまだなの？」

「……あ、丁度戻ってきたみたいですよ」

姫路が校舎のほうを向くと、校舎の窓から百合子が飛んできた。もはや誰も突っ込みを入れなかった。

百合子に関しては常識で物事を見ては駄目である。

「天才のお姉ちゃん、おはようございます!」

「全員、揃ってるみてエだな」

目で数えながら全員揃ってる事を確認し、さっさと向かい始める百合子。

全員が全員、百合子の後についていった。

「おっと、男子更衣室の鍵は雄二に預けとくぞ」

「了解、男子はついてきてくれ、女子とはプールサイドで集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。

姫路と島田と優子と工藤と翔子は百合子に。

明久と土屋と秀吉と葉月は雄二に。

「……ん？　こちら、葉月ちゃんは向こうでしょ？」

百合子について行かないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

悪戯がばれたのか、舌を出して可愛らしく微笑む葉月。
そんな妹に呆れながら島田が近寄り……。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田！？　ワシは男じゃぞ！？」

完全に女子に女子扱いされている事に戦慄を覚える秀吉。

そう言えば自分を女子扱いしない女子は姉と百合子と翔子と葉月ぐ
らしいか

いなかったような、と冷や汗気味になる。

「ちょっと島田さん！　秀吉は……」

「あの……それなら、木下君は1人でどこか別の場所を着替える
ってというのはどうですか？」

「姫路までそんな目でワシをみるように！？」

優子が慌てて止めようとすると、おずおずと手を挙げて提案する瑞希。

というより、自分の常識がごとごとく無視されてる事に、優子は頭を抱える。

いくら何でもFクラスに染まりすぎな姫路に秀吉は更に落ち込み始める。

「……秀吉、あんた女って認識されてるって言う話、本当なのね」

「ふふふ、一応名目上は彼女持ちなのにこの扱いじゃ」

「元気出してください！綺麗なお兄さん！」

微妙に男扱いだが綺麗という言葉に止めを刺されたのかorz状態になる秀吉。

結局話し合いの結果、（約二名のせいで）別室を用意することになり、百合子がまた鍵を取りに向かい……

西村教諭がその話を聞いて何やら悩んだのは余談である。

問：24 プール編・1（後書き）

ちなみに秀吉は”男”なので、上半身裸になりますが

何も問題ないはず！

とやろうと思ったけど土屋が死にそうなので上に水用の上着

を羽織らせる予定。

男に見られるように頑張れ秀吉！

……………あれ？主人公って百合子だよね

問：25 プール編・2（前書き）

ある意味出血描写注意！

まあ、原作範囲だから平気だとは思いますが（苦笑）

問：25 プール編・2

「あれ？百合子早いね」

「女子は普通着替えに時間が掛かるのが普通だったと思うんだが」

「別に紫外線対策なンざしなくたって問題ねエ」

ようは日焼け止めに時間が掛からない分、他のメンバーよりも早いのだ。

ちなみに秀吉は男子更衣室で着替えれたが、微妙に隔離されていた。下は他の男衆と同じくトランクスタイプだが、上には簡単に胸を隠すかのように

パーカーを羽織っている。

一応、ギリギリで男に見える程度の状態である。

「百合子は本当に女かの？」

「腹筋割れてやがる」

「……おまけに胸が無い」

「んな脂肪の塊なンざ戦闘の邪魔だろ」

百合子は成長ホルモンのベクトルを弄くって胸が成長しないように調整している。

百合子の胸を見て約一名の女子が密かにガッツポーズを取っていたのは

内緒である。

「何だ？」

「いや、何故その格好なのじゃ」

今の百合子の格好はスキューバダイビングに挑む状態である。そもそも露出面などほぼ存在していない。

「私主観の統計学上、胸が小さい奴の露出なンぞ見ても面白くも

ねエだろ」

「……………にしてもいくら要らないと言っても絶壁に近い大きさはやりすぎだろう」

「問題ねエだろ、哺乳に必要な器官は保持されてンだからな」

「身長の高さも想定すれば男にしか見え……………いや女子じゃな」

身長は明久と雄二の中間ぐらいの高さ。

成長ホルモンのバランスを弄くって戦闘するのに最適な身長にした為の成果である。

ガタイも女子にしては良いが、顔や髪長さ・腰の括れ具合を考えると

女子にギリギリ見えるレベルである。

「ち、だったらボチボチ胸の方に栄養が行くようにして

Bくらいには成長させておくか」

「今お前は何人かの女子を敵に回したな」

「……少なくとも一人」

百合子が土屋の向いてる先を見るとそこには会話を聞いていたらしい島田の

落ち込む姿が！百合子の中ではBが許容範囲だそうだが、ちなみに、そのほか女子も次々と出てきているようで、その証拠に約一名が鼻血の海に沈んでいた。

「沈むのはええなオイ、掃除が大変だろが」

「冷静に突っ込んでないで手伝ってよ！！」

その後、蘇生に成功したが、どう考えても致死量以上の出血だったのに

疑問に思い、不死身なンじゃね？と百合子が心臓を破裂させそうになっていたので

明久が慌てて止めた。

さて、ここで女性陣の水着についてだが――

島田に関してはスポーツタイプのセパレート、

ほっそりとした体系にはそれなりに似合っている。

続いて優子、上はショートタンクトップ、下はトランクスタイルの水着……

おそらく最初に秀吉に出された水着であろう、シンプルさに惹かれて買ったようである。

工藤、買う暇がなかった為か水泳部で使用されている競泳用の水着。姫路は露出の多い薄ピンクのビキニとゆったりとしたパレオ……

清楚な雰囲気と違い、大胆にもその大きな胸が見えている。

翔子は白いビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた状態、それだけならそこまで

魅力的にはうつらないのだが、整った顔立ちや、艶のある黒く長い髪や白い肌が合わさり、

綺麗にも華麗にも見え、どちらにせよ魅力的に見える。

最後に葉月、ワンピースタイプの水着であり、小柄な体系ながらも年齢特有の柔らかさが感じ取られる肌や、子供っぽさを前面に押し出した

花柄・イルカの浮き輪浮き輪は可愛らしさを引き立たせ、

元気を現すかのようにいつものツインテールも少し高めの位置で括られている。

総合的に見ても元気が溢れていて、他とは違う魅力を感じ取れるだろう。

少なくとも可愛らしさという点においては他の追随を決して許さない。

「ウチの気のせいかもしれないけど、あからさまな鼻屑を感じただけだ」

「奇遇ですね美波ちゃん、私も感じ取れました」

不正はありません。

それはともかくとして土屋が鼻血に沈んだ理由も分かるだろう。

魅力的な女性陣を一気に見てしまったのだ、土屋の許容量を簡単に凌駕してもおかしくはない。

「康太君、大丈夫」

「……問題ない」

「さつて、葉っぱ娘の要望通り流れるプールにするかア」

そう言いつつ、百合子は水の上を歩いた。

ベクトルの反転により沈む力を浮く力に大幅に変換してある。

「いやいやいや、せっかくのプールなんだから泳ぎなさいよ!？」

「水流の計算はこんな感じか？」

優子の突込みを無視して演算で水流の流れを割り出し、変換し……
長方形の形であるが円状に水の流れを制御する。

「この勢いだと壁にぶつかんなア」

「プールの上で胡坐かいて浮くのってかなりシユールな光景ね」

突っ込みを諦めた優子が、大人しく待っているのだが、目の前のシユールな光景に
どうしても小声で突っ込んでしまう。

「うし、もういいぞ葉っぱ娘」

「わーい」

プールの中央で流れるプールの輪を小さめに作り、その周りは普通の水流に変えていた。

範囲を狭めて壁にぶつからないようにしたのと、後は他の人が普通に泳げるようにする為だろう。

イルカの浮き輪に乗りながらクルクルと円状に回る葉月を微笑まし

げに眺めつつ、

姫路は島田に泳ぎを教えてもらっていた。

「ところで、吉井君は何を食べてるんですか？」

「百合子の作ったワッフルだけど」

暫くして泳ぎ着かれたのか休憩中に姫路が明久に声をかける。

どす黒い色のワッフルを避けて、通常のワッフルより心なしかこげ茶色に

近いワッフルを摘みながら姫路に返事をする。

小腹がすいたようなので、少し食べているようだった。

「私も作ってきたんですけど、食べてみますか？」

「ごめん、姫路さん。それって苦い？」

「え？甘いですけど」

「ごめん、百合子との生活に慣れたせいで甘いものはちょっと…」

若干苦めで作られる料理に慣れたせいなのか、甘いものを食べるとなおさら甘く感じる舌になってしまったのでほとんど受け付けないのだ。

ちなみに、百合子の分だけは異常に苦かったりする。

百合子の分のワッフルはコーヒーの豆を磨り潰したのをそのまま突っ込んである。

「そうですか、味覚は人それぞれですし。では、皆さんに――」

「よし水泳対決だ！」

「……一番（最後）になった奴が食べる！」

「負けられぬぞい」

百合子作のワッフルを先に食べてしまい、ワッフルの味じゃない、と絶望し、かといって姫路のワッフルを食べれば三途の川を渡りかねない。

傍目から見れば女の子の手作りの食べ物と競争するという

ものだったが、当事者達にとっては死活問題である。

翔子が不機嫌そうに雄二を見ていた、が何やらおかしい事にも気がついたのである。

傍観気味である。

尚、葉月は我慢して百合子作の明久と同じワッフルをチビチビ齧っている。

そんなに嫌なら食うな、と百合子が言った物の、味を確りと覚えるかのように

噛み締めていた。

おそらく、来年の二月のイベントの為だろう。

「ゆりちゃん、掃除道具を持ってきてあげましたよ」

「……………キス魔ア、まさかその格好でここまで来たンじゃねエだ

ろくな」

「そうしなかったのは山々ですが、他の先生方に必死にプールの女子更衣室で

着替えなさいと言われました」

玲の格好は一見私服にも見えなくは無い服装だが、素材を見た限りではどう考えても水着である。

「高橋教諭も私と同じように疑問を抱いていたのですが」

「天然にもほどがあるだろうが才女センセエ!!!?」

それはともかく、玲が審判を務める事となり、必死な形相の雄二・秀吉・康太・島田と

面白そうだから参加した工藤による水泳勝負が行われる事になった。

「それでは、位置について……」

スタートと言ったところで全員が一斉に飛びこんだ、と思ったら雄二と土屋が殴り合っていた……運動能力の高い者を潰そうとしたのだろう。

「なんであんなに必死なんだよ」

「雄二！もう秀吉たちはターンしてるよー?」

「「何いい!!!!?」」

その光景を見て二人は一時休戦でもしたのか二手に分かれて島田と秀吉の妨害にうつった。

その間に普通に工藤はゴールしたのだが……

「あれ？プールが赤いような………ムツツリーニクーーーーん！………」

秀吉を妨害している際にパーカーを取ってしまい、土屋が片手を上に上げた状態で大量の鼻血を放出しながら「……我が生涯に一片の悔いなし」と逝った。

まだ死んでません。

「ちよつと！木下！いいからパーカーを羽織りなさい！」

「そうですよ！こんな公衆の面前でそんな格好をするなんて駄目です……！」

「そうは言ってもじゃな、土屋の奴がパーカーを握ったままなんじゃが」

まるで死後硬直の如く固くなった手からパーカーを奪おうとしているのだが、

秀吉が非力なせいか、開けない。

仕方なく、雄二が近寄って強引に拳を開き、秀吉がパーカーを再び羽織り、

土屋に輸血作業をし始めた。

その間、百合子はバケツを持って、水流のベクトルを操作し血液だ

けを抜き取り、

とりあえず、プールの清掃をはじめていた。

百合子がこうする理由は単純に土屋の生命力なら復活するだろうと信頼しての事で、

今のうちに他の全員が掃除に参加出来ないようなので掃除をしているのだ。

土屋の体力が回復した後プールを見てみると、そこには新築同然のプールの姿があった。

「吉井妹、確かに掃除すれば自由に使っていいとは言ったぞ？

だが、気合入れすぎだろうが！」

「んな事言われても、ちょっと事件があったから仕方ねエだろうが」

そう言いながら、新品同然になった経緯を話し出す百合子。

一回血で汚してしまったのだからそれ以上にきれいにしようとした、との事である。

その話に西村教諭は一言。

「今度の勉強強化合宿の時には木下の風呂は別にしないとな」

「あア、本人には不本意だろうが生徒……それもバカには特に

女子にしか認識されてねエからな」

バカで例外なのは明久だけである。

問：25 プール編・2（後書き）

更新がもうね、一日更新が無理になってきました。

なので、一から三日に一回に変更します。

エ？水着ノ描写ニ不正は無イヨ？ホントダヨ？

明久ニ対スルメインニナッタカラトカソウイウ理由ジャナイヨ

ホントダヨ？

それはともかく、秀吉の別室フラグは折れなかった。

さて、次回辺りから姫路や美波のファンを完全に敵にまわす事に

なりそうです………一応救済措置はありますけどね？

では、また次回

問：26 勉強会編・1（前書き）

脅迫事件・録音機事件は発生しません。

今回は最後にムツツリーニ大活躍（↑え？）

「まさかバスまで所持してるとはな……」

「しかも百合子カスタマイズだから燃料代は掛からないよ」

「冷房はどうやって動かしてるのよ」

「ソーラーパネルとタイヤを回している時に発生する運動量を

電気に変換させる機器を組み込んでるだけだ」

「モフモフしてますー」

運転席から百合子の声が聞こえる。

今日は学力強化合宿の一日目であり、移動日……

本来であれば明久・工藤・優子・葉月・翔子・百合子の六名は

Aクラス用のリムジンバスでの移動なのだが、

百合子が引率すらないFクラスを運搬する役目を担い、それに追隨する形で

他の五人も百合子の運転するバスに同席した。

ちなみに明らかに。コバスをモチーフにしており、窓ガラスが張つてある以外は

モフモフとした感触の室内である。

作った理由は明久が言った何気ない一言が原因だったらしく、

ブラコンすぎな妹に全員が少し呆れた。

ちなみにAクラス副担任の玲は教頭の代理をやっている高橋教諭の代わりに

Aクラスの引率である。

「……雄二と一緒に」

「マテ翔子、近寄るな。Fクラスの連中が狙ってきてる上に

Fクラスの連中の命が危ない」

「何でだ!!?」

「百合子が居るんだぞ」

雄二自体への攻撃には翔子や明久への攻撃よりも低いがそれなりの怒りを発揮する。

更に翔子の幸せな時間を壊す事につながり、精神的に攻撃したと見なされて、

そのまま攻撃が激しくなるだけだ。

「団長……!」

「……我々は暴力などに屈服しない!!……」

だが今回は行動を慎むとしよう」

ある意味敗北宣言である。

その光景を尻目に窓の外を眺める。

「あ、今Aクラスの連中が乗ってるリムジンバスを追い越したぞ」

「いや、何で下に見えるんだ」

「せめて道路使って百合子！飛行免許持っても絵的にまずい！」
手遅れかもしれないが、《ネ。バス、空を飛ぶ！？》なんて記事を読んだ日には、
当事者としては恥ずかしい状況である。

「ところで島田さんは何を読んでのの？」

「心理テストの本よ」

どうにか空中道路から一般道路に戻った後、落ち着いた明久がふと島田の読んでいる本が気になり尋ねる。

「面白そうだね、僕に問題出してよ」

「そうね……」

そう言いながらページを捲くっていく島田。
明久のほうを微妙にチラチラ見ながら探しているのを見ている限りでは

おそらく、恋愛に関する何かが無いのかを探しているのだろう。

「じゃあ、緑・オレンジ・青・白で思い浮かんだ異性を答えなさい」

「えーっと緑が木下さん、オレンジが葉月ちゃん、白が百合子で青が翔子さんかなあ」

「島田さん、何で破ろうとしてるの？」

「美波ちゃ……………えーっと」

本を覗き込んだ姫路は少し悲しげに目を伏せた。
可能性が物凄く低いような気がするという点から。

「ほうほう、面白いことをしてるな、えーっと緑が友達、オレンジが元気の源で……」

白が憧れて青が……………明久、百合子に憧れてるのか？」

「僕にとってはちょっと過激なところもあるけど小さい頃からの

スーパーヒーローだからね。ところで青は？」

「いや、私はスーパーヒーローじゃなくて、百歩譲っても

ダーティヒーローだろ」

「友達ねえ、まあ友情に月日は関係無いとはいえ……………」

「葉月は元気の源ですか……………頑張るです」

おもむろに本を閉じて、再び別の項目を探し出した。
ちなみに青は”好きな異性”である為、明久がまだ引き摺っている

のはみえみえである。

が、ここで掘り返す事でもないで即効で結論付け、別のゲームを探すように島田に提案していた。

優子はチラリと島田の方を意味深に見ていた。

ちなみに葉月の最後の一言は明久の耳には残念ながら届いていなかった。

「ところで色を選んだ基準ってなんなの？」

「え？うーん、緑は木下さんの眼の色が浮かんできたし、

オレンジは太陽って感じで元気な葉月ちゃん、青は静かなイメージで翔子さん。」

白は百合子が家では白系統の服を好んでいるからその影響かな」

ちなみに秀吉が上がっていない理由は百合子と交際している補正によるもの。

まあ、交際していると分かっているのに男子扱いしないものが学園には大勢いるのだが。

「結局青って？」

明久の疑問は黙殺された。

百合子はなんとなく答えが分かってたので追い詰める事になる答えを教えない事に評価していた。

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げてください』だって」

「……じゃあ、私は2・5」

「……10・3」

「僕は9・1かな」

「……4・9」

「私は3と9ですね」

「葉月は7と9です!」

「俺は5・6だな」

「ワシは2・7かの」

「僕は1・4だね」

『私は6・8だ』

「車内アナウンス使ってまで参加するな」

優子・土屋・工藤・翔子・姫路・葉月・雄二・秀吉・明久・百合子の順番で

数字を羅列していく。

ちなみに明久たちの席は運転席のすぐ後ろ。

「『最初の数字はあなたが普段、皆に見せている顔を表します』だって」

そう言いながら数字を挙げた順に指差ししつつ答えていく。

「落ち着いた常識人」「ふーん」

「スケベ」「……不本意だ」

「奔放で賑やか」「まあ、そうかもね」

「寡黙」「……あつてる」

「温厚で慎重」「慎重ですか」

「無邪気」「むじゃきつて何ですか、天才のお姉ちゃん」

「クールでシニカル」「なるほど」

「落ち着いた常識人」「常識人か」

「えっと……バカ」「……否定できない」

「不良」後でその本見せろ」「いやいや本当にそう書かれてるのよ！」

気を取り直すかのように軽く咳払いして先に進む。

「『次の数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だつて」

「ズボラ」「……いやー、間違ってるわねその本」

「スケベ」「……さっきと同じ、だと……？」

「見せたがり」「あはは……」

「意志の強い人」「……そう」

「意志の強い人」「意思の強い、ですか」

「意志の強い人」「うーん、よく分らないです」

「公平で優しい人」「微妙に違うな」

「色香の強い人」「お、男としてのじゃな！」

「熱血漢」「あ、マトモな答えだ」

「子供好き」「やっぱその本見せろ」

その後もいろいろな問題が出て盛り上がり、昼時の時間となった。

「えっと、今日の当番は百合子だったんだよねー」

「また苦い奴か？」

「ううん、食事自体は普通だよ」

そうやって明久が弁当の蓋を開けると、コーヒーの臭いと、焦茶色のおかずや真っ黒なご飯の山が。

「鈍兄、間違えた逆だ」

「百合子はどいうご飯をたべとるんじゃ！！？」

「見るだけで吐き気を催すんだけど！？」

ちなみに交換して戻ってきた弁当自体はわりと普通な感じだった。
他の人が少しつまんだ限りでは一般的な家庭料理となんら変わりが
無い。

オヤツ以外では割りと普通なようだ。

その弁当を見て、ワツフルの件もあり弁当をやんわりと拒否した秀
吉は

ちよっぴり後悔していた。

「もしかして超能力の動力源ってコーヒー？」

「やめて島田さん、今では平気だけどトラウマ思い出すから」

「お前の過去に何があった」

百合子と双子な点と百合子が超能力者であること、そして双子には
総合的ななんらかの接点があること。

その事から明久は過去に少しだけ百合子の好物であるコーヒーの
フルコースをちよつと危ない連中に攫われて投与されてた過去があ
る。

その組織は今では完全壊滅したらしいが。

「ところで土屋は何で伸びてるの？」

「あ、ああ、姫路の弁当のあまりのおいしさに独占して

喉でも詰まらせて失神したんじゃないか？」

「それは嬉しいんですけどせっかく皆さんの分を作ってきましたのに」

（特に吉井君の分には気合を入れて……）

「あ、あはは、残念だったわね瑞希」

心なしか、Fクラスメンバーが全員冷や汗だらだらな気がする。

土屋はある意味では姫路を庇ったのだらう。

姫路の料理の腕の事情を知り、百合子の性格を把握しているものは、土屋に敬礼し、事情を知らないメンバーは首をかしげ、

百合子の性格を完全に把握していないFクラスのメンバーは無茶しやがって、と

土屋の行動にのみ賞賛を送った……故に土屋が工藤の膝枕で看護を受けているのは

見逃したのである。

問：26 勉強会編・1（後書き）

さて、姫路と島田は名前すら挙げられなかったですが、

これは序の口……次回辺りから注意。

小山・清水・島田・姫路の四人辺りが一番酷い目にあいますので
該当キャラに思い入れがある方はここで撤収をお願いします。

問：27 勉強会編・2（前書き）

注意・次回辺り島田・姫路・中林・小山が酷い目に合います。

（まあ、島田と姫路だけは話の都合上弱めですが）

そして、真犯人の清水は発覚後に蹂躪される予定です。

前書きに書いた理由は警告の為二回言う為であり、

以上の五名に思い入れがある方はすみやかに退出願います。

一人増えてるのは気にしない方向でお願いします。

では、まだ平和な本編へ

「良かったよ土屋、無事に目を覚ましたみたいで」

「何でこんなものを用意していたかは知らないが、運が良かったな」

「商会が利用できないとなると何のために学園に来てるのか分からないからな」

明久の部屋割りにはAクラスには特別親しい人物が女子しか居ないと
の事で

もともとFクラス扱いなのだからFクラスのメンバーと集うという
理由で、

雄二の部屋に来ていた。

その際蘇生作業を手伝ったが。

そして、須川は反応が間違っていると思う。

「先祖と会話しておる時はもう駄目だと思ったのじゃがな」

「いくらおいしいからって独占は良くないと思うけど」

「……二人の人物を守る為だ」

「やべえ、今のムツツリー二が最高に格好よく見える」

「理由が理由だけに余計に感じるのう」

姫路の食物兵器の破壊力を知っている土屋は明久が食べた時に起りうる

未来を回避する為に自らがその兵器に単身で挑んだのだ。

「そついえば秀吉って風呂はどうなってるの？」

「……………栞を見たところ、ワシは個室風呂か男子浴槽で22:10分以降なのじゃ」

男子A B Cクラス	20	:00	21	:00	大浴場・男
男子D E Fクラス	21	:00	22	:00	大浴場・男
女子A B Cクラス	20	:00	21	:00	大浴場・女
女子D E Fクラス	21	:00	22	:00	大浴場・女
木下秀吉	20	:00	22	:00	個室風呂4
もしくは	22	:10	23	:00	大浴場・男

「……………これはちょっと……………」

「すまん、何て声をかけたら良いのか分からねえ」

プールのときの事件の折、百合子は土屋の情報網を通じて秀吉がどれだけ女扱い

されているのかを調査し、あまりに多い女扱いの状況に、西村教諭にその旨を

伝えて決行させたのだ。

「一応、先生方に聞いたところ雄二と明久だけなら同伴可能らしいのじゃが」

「確かにこんな機会に一人だけってのもあれだろうな」

「他の男子の反応が怖いけど、なるべく一緒に入るよ」

雄二と明久が許可されたのは学園の中で少なくとも2年男子では”唯一” 秀吉を

本当の性別で認識している二人だからだ。

「異端尋問会は抑えておく」

「だが、ムツツリー……今回は見逃そう」

流石に声を押し殺して泣いている秀吉を哀れに思ったのか、何やら秘蔵の写真を用意しだして備えている土屋……流石と一緒に入るという

選択肢は無いようだ。

須川は全員分受け取ってメンバーに渡す気満々である。そんなやり取りをしていると、突如襖が開かれた。

「全員、手を頭の後ろに組んで伏せなさい!!」

Cクラス代表の小山友香を筆頭に大勢の女子達が部屋に押し入ってきたのである。

「木下さんはこっちへ……その男子、窓から逃げようとしな
!!」

大人しく座っている吉井君を見習いなさい!」

「雄二たちはなんで咄嗟に窓に向かえるの!?!」

「鉄人だと思ったんだが……仰々しくぞろぞろと何の用だ？」

窓を閉めつつ、鞆を下ろし話を聞く態勢に入る雄二。

尚、秀吉は女子の輪には向かわなかった。

そして明久は大人しく座っているのではなく、単に反応が遅れただけである。

「ふん、よく白を切れるわね。あなたたちが犯人だって事はわかってるのよ」

小山の後ろに追隨していた女子たちもうんうん、と頷く。その中には姫路と島田の姿もあった。

「犯人ってなんのこと？」

「これよ」

そう言つて小山が明久達の前に機材をつきつけてきた。

「……CCDカメラと小型集音マイク」

土屋の知識は流石である。

少し疑問に思つた明久にもわかるように名称を説明していた。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたのよ」

なるほどと頷く、確かにもっている理由は分かるが――

「って盗撮じゃないか！誰がそんな事を！？」

「とぼけないで。あなた達以外の誰がこんな事をするというのよ。

”観察処分者”である吉井君とムツツリー二に怪しい集団の”FFF団”総帥の

須川、それらと関わりのある”A級戦犯”の坂本」

冷やかに明久達を見下す小山。

それに賛同するかのように多くの女生徒たちも明久達を睨みつける。ムツツリー二の渾名は女性との中では侮蔑を持って上げられる名である。

が、正直説得力などあるはずが無いのだが。

観察処分者は確かに馬鹿の代名詞としては出回っているが、騒ぎを起こした事など

処分者の烙印を押されてからは一度も無い。

FFF団はそもそも交際している男女に対する嫉妬による攻撃を目的とした集団である。

ムツツリー二は確かにそういう事をするだろうが、見つからずに隠す事ぐらいするだろう。

そして、雄二に対する意見は完全におかしい。

「……犯人であるはずが無い」

「そうだよ！土屋は今の今までここで食べすぎて失神して――」

「そんな安物を使わない」

『や、安物……』

女子の群集の中にいる一人が驚きの表情で呟いているが、この状況

ではかき消されていた。

土屋の装備は百合子の提供により格段に強化されており、最先端の諜報技術の結晶の品々で構成されており、中には一般人が手にする機会など皆無なものまで存在する。

「はあ？安物って……これってそれなりに高いものだと思うけど」

「——それに実行するなら見つからないようにする」

「ムツツリーニ！今の状況でそれは悪化させる要因にしかならぬぞい！？」

「木下さん、あなた、いつまでそこに居るの？」

今の秀吉の立ち位置は明久たちを庇うかのように前に陣取っている状態である。

「そもそもワシが疑われておらんのはどういう理由じゃ？」

「はあ？あなたがそんな事をするわけ無いじゃない」

「そうよね、どう考えても被害者側じゃない」

秀吉が一瞬声を押し殺したのは明久と雄二だけが気がつき、見なかった事にした。

遠まわしに女扱いされているのだから泣きたい事だろうが、今の秀吉はそれ以上に怒りと焦りの感情があった。

「ムツツリーニ達と関わりにあるのはワシも同じだと思っのじゃ

が？」

「友人なだけでしょ」

「……島田に姫路よ、疑いだけでクラスメイトを疑うのか？」

「こんな真似するの土屋しかないじゃない」

「そうですよ！大人しく素直に白状してください！」

先ほどから秀吉は誰かを探しているかのように気がつかれないように自然なしくさで

会話をしながら時間を稼ぐかのように立ちまわっているのだ。

女生徒達は男子を庇っているかと思っっているのだが、実際には違い……被害が最小限になるように女生徒達を庇っているのだ……特に洒落にならなそうな

姫路と島田の拷問器具のようなものを見ながら。

「……ワシがやった」

『『『は？』』』

女生徒達と明久達の間抜けな声が重なった。

「お主達は全員、ワシの事を女扱いしておるじゃろっ……」

なら、その立場を利用する事もあるとは思わんのか？」

「え？で、でも……あれ？」

そこでようやく秀吉の表情を見る……確かに演技をしているものの、秀吉は”卑怯者の悪役”をしていた。

話に信憑性を持たせ、全ての疑いを自分に向けるべく……
女生徒達と明久を庇うべく。

「そもそもワシは演技するのが得意で……」

少々失敗してもうたようじゃが、気がつかれずに設置するのは

土屋の演技をすれば結構簡単だったぞい」

「え？」

今の秀吉は自白する犯人そのものである。

演技と理解していても見破れないほどの風格を纏って。
だが……

「そう、残念だわ……あなた”も”首謀者なのね」

もともと完全に決め付けている人間には効果はなかったようだった。
秀吉の名演技に見入っていた人間もそんな小山の言う事で気がついたのか、

秀吉も敵に回した状態で先ほどの状況にまた戻る。

「やってしまいなさい!!」

そうして結局小山の号令で全員が抱き石の刑となった。
明久だけが逃れられたのだが、その理由が――。

「姫路に島田……や、やりすぎだろうっ」

「えっと、ウチと姫路は最初の一回しか極めてないんだけど……」

「起きろ！！まだまだ終わってないのよ！！」

若干声が震えているのは乗せられている石の重量のせいと

これから起るだろう……確実に起る悪夢のせいである。

雄二が見た光景、島田と姫路の二人の極め技による拷問で弱り、そこを中林がこれでもかというぐらい蹴りを入れたせいで気絶した為である。

何やら覗きに対する制裁とは別の感情で攻撃を加えているような気がする。

慌てて、姫路と島田が止めようとするが、生粋の体育会系と準体育会系・病弱では差があるのか、引き摺る事も出来ない。

「驚いたわね、こんだけ乗せても平気だなんて」

「あ、あのなあ、本当に俺らは――」

今の雄二達を正義の味方が助ける事は無い。

今、雄二の視界には漆黒の噴射状の翼を携え、圧倒的な殺意を抱いた状態の

百合子が見えたからだ。

学園……いや世界史上最強かつ最凶かつ最狂の破壊の権化が君臨していた。

「何やってるんだ、小山」

「あら？根本君……これよ」

何やら殺気立っている女子の集団を発見し、気になったので根本が話しかけると、小山の手には小型カメラが収まっていた。

「カメラ？」

その小型カメラを根本の横に居た菊入が観察する。
元彼女を相手にしても何の感情も浮かんでいないようだ。

「どうせFクラスと吉井が企んだに決まってるわ」

「待て待て、どうしてそういう結論になった」

いきなりの決め付けに根本は思わず突込みを入れる。
だが、その突込みを聞く事無く、女子たちに指示を回しさつさとその場を
後にし始めた。

「どうせ、止まらないだろうが昔の好で一つ言っておく……」

吉井には手を出すな」

その忠告は誰一人として聞いていなかった。

「律子から電話……女子たち全員が行っちゃったって」

「……西村先生に伝えておくか？」

「無理だと思っわよ」

——数分前

「……百合子、そろそろ」

「そうだな……この時間なら少し人数は少ない方だろう」

翔子に誘われ、百合子が立ち上がる。

半分うたた寝していた葉月を起こし、優子と

工藤を伴って風呂場へと向かう。

「……いくら何でも少なすぎねエか？」

そこには人っ子一人居なかった。

文月学園女子風呂と書かれた木製の看板を確認した限りでは間違っではないはずなのだが……

「あ、代表！」

そんな時、佐藤が走りよってくる。

「……どうしたの佐藤」

「皆が急に走り出したから何事かと思ってついて行ったら、

坂本さん達の居る部屋に押し入ったんです！」

そのとき、ふと百合子の視界に妙な機械が目に入った。

「ンだ、こりゃ……微妙に見覚えのあるものが見えるンだが」

「あ、これCCDカメラの破片だね」

ヒョイ、と拾い上げて観察し、その機器の特徴を告げる工藤。

百合子が知らずに見覚えがあるといった理由は、一つ。

そのカメラが安物過ぎて見覚えがなかっただけである。

「……まさか、疑って向かいやがったのかア？」

「他のクラスの女子も煽ってたみたいでたどり着いた時には

ほとんど全女子が終結しました」

その可能性が非常に高いのだろう、百合子は簡単に首をトントンと叩き、

一つの可能性を想定し、一瞬だけ葉月に目配せし……。

「壊さねエからな」

返事を待たずして、百合子は一気に走り去って行った。首をかしげている葉月がとても印象的だった。

たどり着いた先で百合子が見た光景……明久が倒れて一人の女生徒に何度も

蹴りを入れられている光景・その両脇には姫路と島田の姿もある。大分頭が沸騰したが、二人に対しての情報を収集しようとし……

『姫路に島田……や、やりすぎだろうっ』

『えっと、ウチと姫路は最初の一回しか極めてないんだけど……』

『起きろ！！まだまだ終わってないのよ！！』

そこで完全に切れた。

取りあえず、当面の目標は島田と姫路に対して十撃。約二名を除いて、床に叩きつける罰を執行。

残りの扇動者と明久を未だに攻撃している女生徒を完全破壊標的に設定し……

力を完全に解放させた。

問：27 勉強会編・2（後書き）

注意・次回辺り島田・姫路・中林・小山が酷い目に合います。

（まあ、島田と姫路だけは話の都合上弱めですが）

そして、真犯人の清水は発覚後に蹂躪される予定です。

以上の五名に思い入れがある方はすみやかに退出願います。

大事な事なので二回注意しました。

アンチ島田の方は物足りないかもしれませんが、

葉月ルートの為、少しでも攻撃が緩和されます。

後姫路も一応、島田の親友って事でちょっとだけ緩和。

まあ、それでも酷いことは酷いですがね

以上！

ちなみにこれ以外にも百合子は罰の執行を考えてたりする。

隔離問題5 無実裁きの制裁・前編（前書き）

恒例の百合子無双始まりますぜ。

当然、ちよつと注意して読んでくださいませ。

今回は……小山・中林・ハ姫路・島田^ヱが好きな人はタチサルノ
デス。

ハ内は制裁弱め

隔離問題5 無実裁きの制裁・前編

最初は些細な事だった。

小さな風が頬をなでてきた……多数の女生徒達は隙間風が何かだろうと

気にも留めなかった。

次の変化は奇妙な視界だった。

何故か、風が視認できるようになった。

何かおかしいと、女子たちは思い始めた。

砂も埃も無い状態で空気が固まり奇妙な違和感のある光景が見えていたのだ。

雄二達はその奇妙な光景を見ながらも一点しか見ていない。

そして、これが最後の変化……女子たちだけが部屋の外に引き摺られるように

風に押し出され始めた。

ついでにとうかのようにな雄二達の上に乗せられていた抱き石も含めて。

そして……

「ちょちょちよつと、私たちが一番早くない!？」

「あ……」

「どうしたの瑞希……え？」

姫路が見つめた先を確認するかのようにすべてのその場に居た女生徒たちが振り返る。

そこには、黒い噴射状の翼を纏い、背筋が震えるほどの笑みを浮かべた

百合子の姿があつた。

「まずは、てめえらからだ三下ア！！」

そう言つて姫路と島田の鳩尾に手をつ込む、肉を貫かず骨を砕かない
ような力加減で心臓を驚掴みにした。

「……………！！」

当然、血液を輸送する為に必要な器官を自身の肉越しとはいえ直接握り締められる

感触と呼吸が出来ない状況で必死にもがこうとするのだが、

体内の電気信号を制御されているのか、まったく動く事が出来ない。

一方他の女子生徒たちは不可視の力で押さえつけられており、無理やりに

その光景を見せ付けられていた。

見ているだけで心臓が締め付けられるような恐怖……もちろん映画やゲーム等ではなく、

現実の光景である。

どんなB級やC級の陳腐な恐怖も現実で視認すればそれはもはや特A級の恐怖だろう。

「ふん」

そのまま空中に放り投げる。

ようやく息が吸えた事により呼吸が荒い、窒息寸前だった為なのか、顔色も青く、涙や涎で顔面が穢れていた。そのまま頭を鷲掴みする。

「テメエらのように疑いだけで罰してるんじゃないねエ……」

どう状況を見ても現行犯だよなア」

「や、やりすぎじゃない!!」

「てめエらの物差しと私の物差しは違うんだよ」

女生徒の一人が悲鳴を上げて訴えるが、却下される。
この裁判は百合子の法典による弁護士無しの一方的な刑罰執行のみしか存在しない。

「とりあえず、てめエら……」

「「……」」

何もいう力が残っていないのかぐったりしている。
もともと、返事も何も聞く気は無いのだが。

「私が許可するまで未来永劫【吉井明久】に近づく事を禁ずる
”」

別に言葉にしくなくてもよい……ただ暗示の部分を強めるには効果的なだけである。

そう言いながらも脳を走る電気信号のベクトルを掌握し、操作し、演算を施し……

二人にとっては最も厳しいであろう……恋する対象と交流できない罰を与えられた。

そもそも、本来ならもつと制裁を加えたいところなのだが……あくまで二人は前菜に過ぎない。

扇動者と明久に執拗に攻撃を仕掛けたもの「メインディッシュがまだ残っているのだ。

もつともメインディッシュの後のデザートもあるのだが。

「さてさてさアて、わざわざ証拠も無エ癖に噂だけを鵜呑みにして

扇動した三下は何処のどいつだア」

そう言いながら廊下を歩いていく……当然廊下には女生徒が居る状態なので、

踏みつけながらである……この場合は完全に運である。

逃れられた者も居れば頭を踏まれた者も居る。

そうして、悲鳴をBGMにしながら小山友香の元にたどり着いた。

「てめエが仕切ってたから扇動者って事でイインだな？」

「な、なによ！こいつら以外に仕掛ける奴いないでしょう——」

「私はYESかNOで訊いてんだ三下……無駄口を叩くな」

小山は言葉を最後まで紡げなかった……小山の方を向いていた女生徒たちも

言葉も悲鳴もあげなかった。

——サッカーボールを蹴るような気軽さで小山の口元につ

ま先を突っ込み

蹴り上げたという事実にも誰かが目を疑った。

そして放物線上に落下し、驚くほど静かに横たわった。

「あ……あ……ああ……ああああああああああ……！！！！」

最初、痛みも何も感じなかったが体を起こしてそこに散らばっている自分自身の歯を見て……痛みが急激に襲ってきた。のた打ち回る様をつまらなそうに見て、そのままもう一度近づく。

「もう一回訊くぞ……てめエが扇動者か」

「あ……あえ……ひ……ほ、ほうひょ……」

前髪を掴み上げもう一度笑顔を貼り付けた表情で見てくる百合子の迫力に押されて、
自白する……。

生への欲求による直感から、もうばれているのだからここで拒否すれば
恐ろしい事になると分かっているからだ。

「よしよし、よく出来ました」

そう言っつていつの間にか拾い集めた歯を小山の前に見せ、もう片方の手で、

風の圧縮による高電離気体を発生させていた。

「ご褒美にきちんとは歯を戻してやろう」

「ま、まつふえ……！！」

絶叫すら上がらなかった……痛みが許容限界を超えて声を発する事すら出来なくなったのだ。

電気による熱で歯を溶かし、その歯を強引に捻じ込んでいき、更に口内で同じような行為を折れた歯の数だけ実行していく。

歯そのものを電気熱で融解させそのまま溶接させていく。

その悪夢のような時間は数分で終わったが……実際に受けた本人と見ていた者にとっては無限のような時間を感じ取れた。

「そオそオ、安心しろや……そのカメラを仕掛けた犯人はもつとヒデエ目に

遭わす予定だから……具体的には髪を引きちぎって口も裂けさせて、

二度と表に歩けねエ面にするぐれエにはなア」

その言葉を聞き……清水美春は恐怖したが、何の反応も起こさなかった。

周りも震えていたのでカモフラージュにはなったかもしれないが、とにかく……絶対にばれないようにしなければ、と。

それはともかく、小山は気絶していた……外見上は口の端を多少切っただけだが、

完全に顔が変形していない状態で。

「さアて、とりあえず……鈍兄を殴り続けていた阿呆は、とオ」

「こ、こないでよ……それに女子の顔を殴ったりするなんて、

酷すぎるとは思わないの！？私達がか弱い女子なのよ！！？」

中林が恐怖に震えながら、無駄かもしれないが、訴える。

中林が明久を攻撃した理由はいざ告白しようとした時に、自身の好きな人物が

明久の写真を悩ましげに見ていたたのを目撃した点での八つ当たりである。

ちなみに久保はその地点で既に明久への未練を断ち切っていたのだが、それは別の話。

「ほオ、女子だから手心を加えるべきだと……そう言いたいのかア？」

実に感動的だなア」

「そ、そうよ！」

そう言つて、くっくくくと晒う。

「だが無意味だ……今は男女平等の世の中だぜ？」

再び表情を不気味な笑顔を貼り付けた状態にし……中林に近づく。
逃げたくても逃げられなかった。

「だが、てめエの意見は尊重しよう……他の奴にその光景を見せて精神的に壊そうとしないたア、いい心がけだなア」

「ち、ちが……………！」

そして、二人の少女と一つのものがその廊下から消え去り……………
上空を疾走しはじめた。

音速に近いスピードで走っており、当然そのような空間では
目を開けることはおろか、息をする事もままならず、悲鳴をあげる
事すら

出来なかった。おまけに空気との摩擦熱で肌はどんどん焦げてい
く。

「……………！！！！？」

何かを叫ぼうと試みるものの、結局数分間のうちに日焼けを超越した
焼き加減に肌全体が黒くなり、おまけに……

「さて、後はこれで勘弁してやる」

そう言つて、妙な草を一瞬でミキサーでかけたように汁状にし、
ドラム缶に水を浸しその中に汁を入れ込む。

「さて、数時間の間てめエはこの薬用液になんどもつかり続ける
事になる」

「な……………なんなのよ」

「この薬用液はなア、今のてめエのように焼けた肌を元に戻す効
果があるんだよオ」

それを聞いて訝しげに眉をひそめる。

「そして、副作用だなア……染みるんだよ……全身を肉を僅かに切り裂き続ける

ようになア」

「え……！？きゃあ！！？」

そう言っただラム缶薬用風呂に投げ入れる。

瞬間、百合子の言った通りの痛みが中林を襲った。

あまりの激痛に中林は悲鳴も絶叫もあげる事が出来ない。

「あ、そうそう……痛みつてのは慣れるらしいんだが……

せつかくだからそういう脳内物質を分泌できねエようにしたからな」

絶望の言葉を聞かされた気がしたが、洗脳効果によりあがる事も出
来ず、

痛み数時間襲われ続ける中林には届く事は無かった。

「…………雄二、大丈夫？」

「あ、ああ……なんとかな」

数分後に翔子達が駆けつけてきた。

その間にほとんどの女子が逃げるように部屋に駆けて行った。

外見上痛々しい者は強いてあげるなら小山だけだったようで

百合子が自重でもしたのだろうかと思う反面、姫路と島田の姿が無いことに焦っていたが、離れた位置とはいえ無事で居る二人を発見し、

少しだけ安堵する。

後ろで縛られていたので、縄を解いている翔子。

他の人の縄も既に解いてある。

「そういや、翔子は疑わなかったのか？」

「……その場に居なかったのと、後は土屋がやるんならそもそも

百合子に一言言ってからじゃないと仕掛けないって知ってるから」

「それにどうせ、見つからないように仕掛けるんでしょ？」

聞いた話じゃ簡単に見つかるような位置に置いてあったそうじゃない」

ちなみにこの場に既に姫路と島田の姿はなく、少し離れた場所で自分自身の体に恐怖していた。

明久の方へ近づこうとしても体が拒絶してしまうのだ。

「いたたた……」

「馬鹿なお兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「あ、葉月ちゃん？うん、まだえーつと誰かわからない人に

殴られた部分が痛いけどなんとか……」

姫路と島田はまだしも、中林に関しては明久は面識がそもそも存在しない。

なんでやられたのかは明久も知らないのだ……まあ疑いのせいなのだろうと

ふんでいるのだが、それにしても攻撃が執拗だった気がするのだが。

「にしても……本当に容赦無しのね」

「……百合子も証拠があつて断罪するならまだ妥協はしていたと思う」

「いたた……その状態なら多分止まるだろうけど」

理性を持った暴走ほど末恐ろしいものは無い。

連れ去られた者の安否は少なくとも肉体的な死は存在しない。

「ところで、何で姫路さん達はあんな遠い位置に？」

明久が自然な動作で一步踏み出す。

……離れる。

何かの勘違いかと思い、近づく。

……離れる。

「ねえ、僕ってあんなに嫌われてるの？もしくは最初から嫌ってて

疑いのせいでああったの？」

「……いや、そうじゃないんだが」

「き、厳しい罰じゃのう」

自分の意志とは関係なく明久に近づけない姫路と島田。

明久が軽く落ち込むという軽やかな雰囲気の中……

目にして無い者は帰ったと思い、目にした者は無事な外見を晒せるのか不安になっていた。

「そういえば、どうでもいい事だけどあのカメラって

電波を受信して記録用装置に送り込むタイプのカメラだったんだよね」

「……スイッチを切ってれば……いやそもそも部屋に居るだけだったら

無害か？」

隔離問題5 無実裁きの制裁・前編（後書き）

隔離問題……………正直、姫路と島田に思い入れがあるせいか

ちよつと甘め、がそれ以外は容赦なし。

それに残る二人もフォローが入ってるしねえ……

ちゃんと折った歯は元に戻したし、焼けた肌も薬用風呂で

治してるしねえ……………ちよつと甘くしすぎたでしょうが

ご勘弁を、さて次は清水だ。

正直、原作で何の制裁も無かった事がおかしいと思ったので、

きびしめでいくかも知れませぬ、後ついでに物凄く挑戦的な

内容です……………カニバリズム描写って18レベルでしょうか？（
何をする気だ）

感想で意見をくれるとありがたいです。

隔離問題6 無実裁きの制裁・後編（前書き）

軽度ですがカニバニズム描写があるので注意してください。

清水美春ファンの方は速やかにプラウザバック！

隔離問題 6 無実裁きの制裁・後編

* 警告・過激表現があるためこれより先を読んではならない。

苦手な方は次の空白が見えるまでスクロールする事をお勧めする。

（か、考えてみれば美春が犯人だという証拠はあの場にはありませんし、

そんなに焦る必要なんて無かったですわね）

急いであの場を離れて部屋に向かっていた清水だが、冷静になって考えてみれば

いくら何でもカメラだけで特定できるなんて考えてない。

その考えからいくらか気分が軽くなり、今回の島田の撮影を断念し、次の事を考えて部屋に入る……土屋が安物だといった時には多少シヨックだった。

あれでもかなりの額をつぎ込んだものだったのに、と。
真っ暗であつた為電気のスイッチを入れるが、反応が無い。

「？おかしいですね」

部屋の中央に向かい電気を入れる為に紐を引く。
その瞬間……首に違和感がおき、ボトリと音が鳴った。

「……………」

音のなつた方向へとおそろおそろ振り返ると、そこには
サッカーボール状のものが転がっていた。

「な、なんですか？」

恐る恐るサッカーボールをひっくり返すと……………それは
サキホドユリコニツレサラレタナカバヤシノクビデアッタ。

「ひい！！？」

冷やりと濡れた手を見る……………その手は黒くなっていた。
今はくらいせいか色がはつきりとしないが……………おそらく真っ赤に染
まっているのだろう。
それがなんなのかなど確認するまでも無い。

「う、あああああああ！！！！？」

「はア…………部屋で大人しくしてるだけだつたら拳骨だけで済ませ
てやるオと」

思ってたんだがよオ」

絶叫を上げると、聞こえるはずの無い声が響いてきた。
いつの間に部屋に入ったのか、それとも最初から部屋に居たのか。

「あとついでに電源も切っておくべきだったなア……」

電波も簡単に探れたぞ？」

カメラの電源をつけて、電波を探り出し、向かう先があつたので辿
つてみれば

そこには玉野（見参加組）がおり、部屋に入れてもらえば清水のも
のと思われる

記録装置が置いてあつたのだ。

「ひ、ひああああ！！……あ？」

視線をずらしてみればそこには玉野の姿があつた。

三人および四人で組をつくり、相部屋となるのだが、
清水の組は一人欠席しており、二人となっている。

そしてEクラスまでは部屋に机が備え付けられていて、
その机に向かって何かをしていた。

「た、玉野さん！何をしてるんですの！！」

返事が無い、一心不乱に手に持っているものに頬を摺り寄せている
ように見える。

百合子のアクションは無い。

ただクチャクチャと何かを噛んでいるような動作で窓側を陣取って
いる。

おそらくドアの方は出れるようになっていないのだろう。

「た、助けてください!!」

助けても無駄だろうが、追い詰められている人間にはその事を思考する余裕が生まれてこない。

そして、玉野の傍に来たときに……言葉を発する事を忘れ、息を呑んだ。

「な、なにを……してますの……た、たま……きさん……」

「ん、んふ……」

弾力のある細いものを頬擦りしている玉野の姿に清水の背筋は震えた。

どう見ても人間の腕にしか見えないのだ。

もう片方の手で何か書いているのが見え、その文章を少し見てみる……。

【かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい

かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい

かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい】

「ひいひい!!?」

気が狂つてるとしか思えない文章、冷静に考えればいつも通りの事だと

気がついたかもしれないが、冷静な判断力を奪われた清水には

恐怖の文章にしかうつらなかつた。

「調理すりゃアマシだろうが……マジなこりゃ」

百合子が口から小さなものを吐き出した。
人間の指と思わしきものである。

「うあああああ！！あああああ！！誰か、誰かあああああああ
！！！」

ドアをドンドンと叩きつけ、ドアノブも何度も何度も回し続ける。
無常にもドアは開かない。

後ろから軽い音でトン、トンと百合子が歩み寄ってくる。
気のせいかな、床に転がっている中林の首と目があったような気がする。

そして、百合子が近づき、その口を清水の腕に向けた時……清水美
春の意識は

恐怖で限界を超えて失われた。

*警告終了

「おい、もう聞くの止めていいぞ」

「ああ！！魅惑のアキちゃんボイス集の音声か！！？」

玉野が何か叫んでいるのだが、却下した。

しばらく聞いてると押し付けた、明久が罰ゲームで録音されていたものを

聞かせていたのだが、予想以上に没頭していて軽く引いていた。

中学生の頃の変声期前の女子に近い音声を聞かせていたら、色々妄想でも

掻きたてられていたのか、危ない衣装や危ないシチュエーションが描かれていた。

特にかわいいと連続で書かれている部分には軽くめまいを覚える。

「あれ？清水さんとの話は終わったの？」

「あア、ちょっと話してたら眠っちまいがった」

「つて、なにこのペンキの臭いは……うわ、真っ赤なボール!?とウィッグ?」

「不快な臭いと印象を与えた賠償だ。」

そのCDはてめエにくれてやる」

「お掃除はお任せ下さいませ、吉井妹様」

「変わりすぎだろうてめエ!!?」

そう言いながらも吐き捨てたものの回収に向かう。

百合子の手には魚肉ソーセージが握られていた。

「ンじゃ、邪魔したな」

「うん、じゃあね」

そのまま百合子はさっさと清水の部屋を出て行く。

……翌日、清水はいつもの時間に起きたが、人格が変わるほどの恐怖だったのか……。完全に別人と化していた。

そして、暗闇と赤を嫌うようになり、絶叫し錯乱していたとの事で急遽精神病院に入院となったのだが、入院する前に百合子が設定を直し忘れた事を

思い出し、幻覚を見る脳内物質を停止させ、簡単な暗示をかけて治療した。

暗示の内容は「島田美波に近づけず、吉井明久に危害を加える事が出来ない」で、

破る場合姫路達のように離れ、明久に危害を加えようとするれば、今回の出来事をフラッシュバックさせるのである。

隔離問題 6 無実裁きの制裁・後編（後書き）

：次回予告

覗き騒動………引き起こされます。

ただし、疑いを持たれた組は不参加ですが。

………ついでに意外な人物が活躍します。

問：28 勉強会編・3（前書き）

なんてこつたいな今回の話。

ちょっとだけ清水が壊れて、

「この周辺に女子が近寄って来なくなったな」

「……雄二の話を聞く限り仕方ないと思う」

今現在合宿最終日前日、百合子の蹂躪制裁のせいでかなりの女生徒達がボイコットしていたが、流石にこの日ぐらいはやらないと感じたのかようやく復帰した為、一泊二日の勉強合宿なのである。

他の日は無かった事にされた。

AクラスとFクラスは合同授業なのだが……

下手に明久に接触したら、小山や中林の二の舞になるのでは、という恐怖心から、制裁未参加組の女子以外が離れた位置で勉強していた。

まあ、姫路と島田は別の理由によって離れているのだが。

「犯人は清水だったらしいな」

「うん、そうみたいだね……少し別人になってたけど」

「男子連中に愛想良くなってるなんてどういう壊れ具合だ」

治療を施されたとはいえ相変わらず暗い場所や赤いものに恐怖感を感じるようで、雄二の頭を見るなり過呼吸気味になっていた。

小山はCクラスで居場所が無くなり、中林は居場所が残っているが、高所恐怖症になったらしい……。

「そーいや、百合子が男子連中に何か持ちかけてたが、

何か知らないか？」

「ううん、知らないけど」

百合子は暴力行為が咎められ、反省文を書いていたのだが、フランス・英・ドイツ・中国語など20言語で同じ文章を書いて、抽象文字・点字まで使用し始め、教師が解読するのに疲れて、解放された。

もともと、合宿後には停学になる予定だそうだが。

百合子は解放されたその日から男子連中に対して何かを言っていた。

「……帰りもあのネコ。スかと思うと微妙に鬱になるな」

「渋滞の時以外は飛ばないらしいけど」

ある意味では夢の車だが、実際に乗るのと想像するのでは大違いである。

「葉月ちゃん、「○肉○食」これの中に漢字を入れて熟語を作ってみて」

「わかりました「牛肉三食」です！」

「いやいや、葉月ちゃん。「焼肉定食」だよ」

「……どっちも間違い」

「肉が食いたいののは分かったが、「弱肉強食」だぞ」

今現在、現代国語の四文字熟語の勉強中。

まだ昼時のピークではないものの、お腹がすいていたようだった。そんな時、土屋が何か差し出してきた。

「ん？隠密行動の時に食べてるもの？」

「（コクリ）」

「えーっと、「カロリーメイド」……」

包みの袋はメイド服を纏った少女がプリントされており、中の食べる部分は少女の形をプリントしたようなクッキーのようなものだった。

「……間違えた、本当はこっち」

「ムツツリーニ、さっきのは何だったんだ！？」

「今度はマトモな携帯食料だね」

ちなみに玲は、ちょっとした職員会議のようなものに出席しており、ちよつと落ち込んでいたそうなの。

お昼時になり、旅館食堂へと向かう。

「旅館食堂の食器、今日は赤なんですわね」

「ええ、そうです。食事時毎に色を変えるようにしているのですよ」

『あ、あかあかあかかかかかk k k k k k k k k k k k……』

今の清水には
何の意味ももたらさない。

「あ、百合子」

「ちィ、少し荒療治が甘かったか」

その後、百合子が完全に脳の電気信号を操ったが、精神や魂に根付いているらしく、

発狂はしないが、恐怖に震える事だけは消えなかった。

そんなこんなで平和（？）なひと時は終わり………

「故障、ですか？」

「そうですね、少し離れた銭湯を使わせてもらう事になっているので

ついてきて下さい」

「姉さん、もう突っ込まないからね」

優子の疑問に玲が答え、明久は玲の服装に眩暈をおこしていた。

何故か旅館の女将の服装である。

明久にも着せようとしていたらしいが、玉野から妙な視線を感じ取り止めた……今度はがっかりとした雰囲気だったらしいが。

「……………何か差別的なものを感じるんだけど？」

「そういえば、男子は俺達だけで女子は一人除いて俺たちに疑いを持って接してきた奴”以外”だな」

佐藤・玉野・清水（前日および先程の発狂事件のせいで玉野以外に腫れ物扱い）・工藤

翔子・岩下・菊入・優子・秀吉・明久・雄二・根本・土屋・須川・葉月、と見渡してみても言う雄二。

ちなみにこの銭湯も百合子が貸し切っており、常連客達にも金銭を渡してお引取り願うように
通達を前日に出しておいた。

一人頭五十万円分、番頭にも二百万円……常連達は一日ぐらいいいか、と金銭を受け取り、

初めて訪れた客はそのお金で別の場所へ入りに行けばいくのとタクシーを使えばいいかとの

感覚で不満が上がらなかったそう。

ちなみに向かう途中、清水が明かり完全装備なのが気になるものの、「暗闇は嫌いです」の一点張りですそれ以上話そうとはしなかった。

「……………何かやらかす気なのかなあ？」

「十中八九何か仕出かすわよね」

「……………雄二、混浴」

「ん、本当だな」

「……雄二と明久と木下は一緒に入る」

てつきり一緒に入ると言ってくるだろうと思って身構えていた雄二は一瞬、呆氣にとられたが。

「ああ、そういえば」

「流石に一人で風呂つても寂しいよな」

「どうせ、他の男子は女子扱いしそудしね」

須川、根本、土屋の三人が一斉に目を逸らした。
根本はその後で菊入に抓られていた。

「全員集まったよオだな」

「まさか、女子風呂を覗く作戦を女子が立案するとは思わなかったよ」

……これが君の制裁かい？」

「そオだよ……まさかクソ真面目なてめエが参加するとは思っても見なかったがなア」

三階の学習室に全クラスの男子が集結する。

今現在、大浴場は嘘の告知により男子大浴場・女子大浴場ともに、女子だけが入っており、男子達は女子達が出てから三十分後に入る事になっている。

その影響によりすべての女子が風呂に入っている状態である。

「オ女センセエは学園、つまり一番厄介な防衛に当たっているのは、

二十八号センセエだけだ」

「確か先生方の召喚獣は吉井君のものと同じようにつくりと聞いたが」

「そオだ、もつとも召喚獣自体は同じ召喚獣で消耗させれば済む話だ……」

警戒度は明久達が覗き騒ぎを起こしていない為、低いのだが……

西村教諭だけは明久達が参加しなくても騒ぎを起こす者が居るかもしれないという事から

どっかりと待機していた。

「ま、どうせ停学処分を覚悟する身だ。

思いつきりやってみよう……E・Fクラス男子は吉井妹に続き、

西村教諭の守護する

エリアへ…… A・B・C・Dクラスは僕と共に元男子大浴場の
間へ！！」

「おおおー！！！」

男子全員（一部除く）が立ち上がり、一斉に咆哮を上げ……

女子たちが入浴している大浴場へと駆け出していく。

百合子に決行する日程を聞かされ、この日のために下心の力を解放した

142名が出撃した。

「さあ、最終仕上げだ。三下ども」

百合子もE・Fクラス男子の先頭に立ち、付いてこれるように調整しながら

女子達が暢気に入っているであろう大浴場へと向かっていった。

問：28 勉強会編・3（後書き）

＼（＾０＾）／ 原作ではBBAが居たけど、今回は

教頭が居なくてその穴を埋める引継ぎ＋覗き騒動が連日で

起ってないので様子を見に来てない。

ちなみに浴場の使用方法是百合子が理事長を脅して無理やり

変えました。明久に危害加えたからってやりたい放題！

でも自重しない。

さあ、教師達よ！戦力の貯蔵は存分か（↑その台詞はおかしい）

問：29 勉強会編・4 (前書き)

やっちやっ
たぜ

「久保隊長！教師が待ち構えてました！」

「やはり誘き出されたか」

「な、何だこのでたらめな人数は」

「EクラスやFクラスは居なくてAクラスの男子達が……！」

覗くなら堂々と凱旋しろとの事で大声を上げて先生方を誘い出したのだが、

見事にその作戦は成功を収め、今この旅館に居る全ての教師が西村教諭を

リーダーとする防衛組みとそれ以外に分かれ、その比率は1：3である。

西村教師の戦力の大きさと聞こえてきた歓声の数からFクラスは確実で、

他にも数人混じっていると予想したが（百合子のベクトルでその程度しか送り込んでいない）。

実際には数名を除くすべての男子生徒が向かってきていた。

「それぞれの得意科目の諸君はそれぞれの教諭にかかれ！

後の男子は切り開かれた道を進むんだ！」

Aクラスの男子2・3人を筆頭に数名のB・Cクラスの生徒が久保の指示に

徒党を組み相對する。

全体を良く見渡し、的確に指示を送り込む二年男子生徒最強の点数保持者。

「く、久保君まで！」

「くそ、坂本と吉井め。一体どんなトリックを」

「残念ですが、先生方の予測は外れですよ」

「何？」

「この事件の首謀者は吉井の妹なのですから」

「女子が女子風呂の覗きの手伝いだとおおおお!!?」

「その注意散漫さが命取りですよ!!」

先生が呆氣に取られ、絶叫している隙に、善戦していた者達が一斉に教師達の

召喚獣を撃破し、尚且つ数人がかりで先生を取り押さえ、捕縛する。

「さあ、これで、また一步樂園への道は開かれた。

総員、このまま進むぞ!!」

『Yes sir! 久保隊長!!』

この騒ぎは男子にとって幸いにも女子風呂までには響いておらず、その後待ち構えているであろう教師陣を数の暴力と統率力で撃破

して行つた。

そして最後に待ち構えていた教員も撃破し、息を整える。

「な、何故……君のような真面目な生徒まで……」

「真面目だ優等生だと言われている……間違っているといわれ
ても構わない！」

僕達は男子だ！女子の裸に興味を持って何が悪いというのだ！

これは人間が元来所持している三大欲求の一つ”性欲”に基づ
かれた行動です！

何も触れるわけではありません、見るだけです！そう、ただ見
るだけ！

それだけでも我々男子は満足なのだ……」

『そうだ！どうせ俺はモテナイのだから肉眼で女子の裸を見る事
なんて

あるわけが無い！ならばこの時、見るぐらいであれば許される
行為だと

思っている……！』

『『『いや、一応許されない事だからな』』』

許されない事と自覚しつつも、覗く行為を止めようとしない男子達
であった。

「全員、ついてきてるかア？」

『このぐらいでへばる俺たちじゃない！』

と、FFF団〃Fクラスのほぼ全員が。

『くそ、負けるな！部活に入っていない奴に体力で

負けるなど恥だと思え！！』

Eクラスの体育会系の部活所属生徒が。

『俺、文芸部だぞ！』

少し弱気な文芸部員が。

『甘ったれるな、茶道部の俺でも付いていけてるんだ！！』

プロレスやっているとしか思えないガタイの良い男子生徒が。

『『『そんなガタイの良い茶道部がいるか！！』』』

『ちなみに新体操にも属しているぞ！』

『貴様、さては小暮先輩目当てだな！』

『何故ばれた!』

「何をしているんだ君たち………わあああああ!!?」

教師の予想通りにE・Fクラスの男子生徒と………ありえない姿を目撃した。

「吉井妹だと!!」

「は!すまねエな二十八号センセエ、ここは通らせてもらっぜええええ!!」

「は、西村教諭!援護します!」

「流石の吉井妹も召喚獣には勝てないはずだ!」

「待つんだ、吉井妹の力は召喚獣では………!!」

出現と同時に教師達の召喚獣が百合子自身の力で粉碎されていく。その光景に百合子はにんまりと笑う。

「召喚獣への攻撃なら暴力じゃねエよなア?」

フィードバックは全部が返ってこないとはいえ、百合子の攻撃は明らかなオーバーキル攻撃。

自身の身体能力を向上させ、スピードを加速させ、放たれる拳にも地球の重力以上の力が加わった威力が追加され、一撃のもとに粉碎する。

まさに、百合子は一騎当千……いや、一騎当軍である。

教師は西村教諭を除いてフィードバックの影響で全滅していた。

「……坂本や吉井兄の姿が見えんな」

「は！まだ女子の奴が謝罪してねエからなア……」

この圧倒的な騒ぎに参加して無かったなら間違いだったと気がつくだろうが」

「だ、だが……私たちが”居た”と言えば……！」

「そんな事はいわねエよなア」

「そうだな……我々教師がそんな小細工を弄するわけにはいかん

……

来い、敵わぬとは言え教師が生徒に背を向けるわけにはいかんからな！」

「……それでこそ、私が惚れていた漢だ」

教師最強と生徒……いや世界最強。

勝敗など、相対して地点で始めから決している。

「——堕ちろ」

一瞬で間合いを詰め、一撃で痛みも苦しみも味あわせる事無く、昏倒させた。

首を軽く慣らし、片腕を上げる。

『『いざ、行かん！我等が樂園へ！！』』』

その瞬間を待ちわびたかのように、隣のフロアの男子達も突入し始め、

女子たちの悲鳴と男子達の大歓声が響いてきた。

「結局、吉井達は覗きに来ませんでしたね」

「うう、これ幸いに暴力をふるいに行ったのは間違いだったわ」

「ほら中林代表、しみる場所はありませんか？」

中林の後ろを軽くさすって洗えるかどうかを確認していく三上。

「う……今触つてるところがまだお湯だとしみる」

「はいはい、ここは水で洗いますね」

中林は代表としての権威は失っていない。

扇動していなかったと言うのが一番大きな要素なのだが、

普段、宥め役に徹している三上の尽力もあって居場所は潰れていないのだ。

ちなみに、湯に対して恐怖があるためなのか、湯船につかうとすると、

急激に体が痛みを思い出すのでシャワーでしか暫く入れそうに無かった。

「小山さんよりはマシだと思うけど、ね」

肉体的要素は酷く齒は欠け、繋げ合わされ、神経も繋げられたよう
で、

いつもの状態に戻るのが直接制裁を加えられた三人の中では一番マ
シだったのだが、

Cクラスに居場所を無くしてしまっていた。

真犯人は清水と分かっているとは言え、扇動したのは小山である。

その為、女子のほとんどが避けており、男子生徒も小山の性格を知
っているので

最初からあまりいい感情を持っていなかった。

「えい」

「みぎゃあああああ！ー三上染みる、染みるうー！ー！」

「私は”三上染みる”では無いですよ。中林代表”三上美子”で
す。

それに荒療治した方が回復が早いと保険医に言われましたよね」

「でも、ゆっくり治した——三上様？ナンデスカソノオケノリヨ
ウハ」

「皆、代表の肌を治す為よ！心を鬼にして協力しましょう！」

「待つて、皆落ち着いて——ひゃあああああ！ー！？」

これは虐めではなく、善意でのお湯かけである。

その証拠に顔や頭部には一切かかっていない……若干S気味の女子（三上）が

ピンポイントで染みる場所を狙っているのはきつと気のせいである。

「……吉井君に近づけなくなっちゃいましたね」

「……そうね、でも今考えてみたら確かにウチらは証拠も無しに疑ってかかったちゃったんだし」

謝罪をしようにも近づけない今の現状ではまずは百合子の許しを待つしかないのである。

手紙やメールで謝罪はできるのだが、それでは意味が無いだろう。中林が楽しそうにお湯の掛け合いをクラスメイト達と行っているのを覗いていた。

A・B・Cの一部とD・E・FとCクラスの余りの構成で浴室にかつている状態である。

ちなみにこの浴室では直接制裁を食らった女子は全員この場に居た。誰にも話しかけられず、イライラしているのが見て分かる小山。

さきのような光景を繰り広げている中林。

そして、湯船につかりながらもう恋は成就しないと諦めている姫路と島田。

「暫くは引き摺っちゃいそうですけど」

「人生はまだ長いんだし……気長に探そっか」

容姿の事を考えれば貰い手など引く手数多である。もっとも本人達にはあまり自覚が無いのだが。

「あれ？この気配……？」

疑問に思った次の瞬間。

『『『ここが楽園だ………眼福なりいいいいいい！！！！』』』

何が起こったのかわからなかった。

ただ、一ついえる事は中林がシャワーを全開にして男子に吹き付けるまで

女子たちは啞然とし………

『『『いやあああああああ！！！！？』』』

ここに百合子の描いていた最後の制裁は形を伴った。

男子への報酬は勿論、女子の裸を生で見る事。

「うおおおおお！！あいつら！何故俺を誘わなかったあ！！」

須川が事件の詳細を聞くなり雄たけびを上げた。

証拠も無しに女子が疑いに向かってきた時に居合わせてなければ須川も参加できたのだろうか。

「本当に聞かされてなかったようだな」

「ああ、そもそも百合子が居る地点で成功率100%なのに

参加しないのはおかしいだろう、マテ翔子、別に見たいといつ
てる訳では——」

「……見たいなら私のをいつでも見せる」

雄二が咳き込んだ。

「まあ、それならこの文章はどのように訂正しておく」

<文月学園男子生徒：吉井明久・坂本雄二・木下秀吉・根本恭二・
土屋康太

須川亮を除き、一週間の停学及び後の一週間の間”観察処分者”
に認定する。

また、吉井百合子も”観察処分”を除いて同様の処分を受けるも
のとする>

——とある男子生徒の手記。

ムシャクシャしてやった、
今では反省している。

問：29 勉強会編・4（後書き）

ちなみに観察処分者……とある事件の伏線です。

百合子が免除された理由はフィードバックが反転まで作用させる
事が

分かったためである。

さて、そろそろ葉月と明久の絡みを書かなければ。

秀吉と百合子は相変わらずな事になりそうですが（^^……）

では、また次回

問：30 召喚獣補完計画・前編（前書き）

アニメオリジナル話。

ちなみに百合子の出番無し……………アニメと違って恐ろしい事になっ
てます。

問：30 召喚獣補完計画・前編

停学処分一日目の学園にて、Aクラス――

「い……居づらい」

「男子が吉井君一人になっちゃったからねえ」

「吉井さんも停学処分になってるみたいですし」

Bクラス

「風通しが涼しいな」

「反根本派が居ない状態だしね」

「恭二、律子。今授業中」

Fクラス

「が、学級閉鎖してもいいと思うのじゃが」

「このクラスが一番打撃が痛すぎるぞ」

「須川君も自主停学しているみたいですし」

我が団員だけに処罰を与えさせるものか！と犯行に及んでないものの自分の意志で土下座してまで停学を頼み込んだ須川。FFF団の結束が強まったらしい。

他のクラスは男子がいなくなっただけ。

「で、停学中の僕たちを招集した理由は何ですか藤堂学園長」

停学中の男子生徒を突如急に体育館へと召集し、明久もその輪に加わるように指示。

そして、学園長室に明久・久保が学園長の話を聞くために集っていた。

尚、明久以外の無停学組は事件のあらすじを知らされているようで、テレビを

見れる教室にそれぞれが待機していた。

尚、一年・三年も同じような状況である。

「……今朝、公式の監視網を掻い潜って不法侵入者が押し入り、わが学園のシステムを

弄ろうとしたのさ……結局、結果的には成功したらしい」

「それで？」

「非公式の網には掛かったらしく、すぐさまその連絡網で吉井妹に通達、

犯人を捕縛し、今は警察で秘密裏に取調べを受けているらしい」

犯人の特徴が分かっていたれば、百合子から逃れるすべなど存在しない。

「だが、ウチの学園のシステムが制御室共に暴走して直そうにもその制御室にまで

向かえないのさ」

「……もしかして”観察処分者”のシステムは独自で無事だったという事なのでしょうか」

「その通りさね……そっちの吉井兄は分かっていたかい？質問は無いようだが」

「分からないから黙ってます」

学園長室に沈黙が走った。

が、今は緊急事態なので説明を省き――

「つまり、僕達”観察処分者”の召喚獣達でサーバルームの室内に潜入。」

総動員でシステムの修理を行うという形ですね」

「そうさね、電源を落とそうにも一月は持つようになってるし、教師用召喚獣は

システムのコアに近いからフリーズ状態。」

吉井兄だけでも良かったんだが、急を要するからね……

汚名返上の機会という事で停学も免除にしようじゃないか」

学園の壁を壊すわけにはいけないのと明日の午後にはお披露目があるとの事で

急を要し、観察処分にある生徒を全員召集し、人海戦術で作業を終わらせるという魂胆らしい。

「分かりました。そういう事でしたらお受けしましょう」

「吉井兄への報酬だが、吉井妹の停学処分でどうだ？」

「はい、それをお願いします」

百合子が主導で行ったのはほとんど自分の責任なので、

この機会に罰がとかれるのであれば、このくらいお安い御用なのだ。

「非公式のカメラの映像で指示を送る。」

「しっかりと修理道具や作業準備を整えたか？」

『『『はい！』『』』

「では、全員出陣せよ！！」

『『『召喚獣召喚！！』『』』

西村教諭の号令で全員が召喚を始める。

感覚がリンクしているのが珍しいのか、ほぼ全員が感触を確かめていた。

そして、三分間の確認作業の後、第一部隊が出撃。

システム冷却用の通気口を伝って侵入していく………そこで。

「敵影を確認！！」

「これは敵召喚獣です！！」

「相手は………なん……だと」

「システムの野郎、いきなり”大ボス”を投入してきやがった！
」

―― Aクラス・島田葉月：数学 1520点

V S

Dクラス男子三名：数学 平均点 102点

『あわわわ！葉月の召喚獣さんです！？』

『葉月ちゃんが操作してるのとおんなじ動きだけど……動かしてないわよね？』

『動かさせません！！』

召喚システムの暴走の一つなのだろう。

フィールド自体も勝手に何通りにも分裂しておりパターンが存在しない。

その召喚獣に有利なフィールドを選んで投入しているのだろう。

「くそ、もっと大勢で掛かって足止めするんだ！その間に他の部隊を投……」

いや、全員一丸となって行動だ！！」

『『Yes sir！！』』

「ねえ、久保君……」

「言わないでくれ、吉井君」

絶対に奥に居るであろう存在の事を考え、学園長達も絶望していた。翔子はまだしも百合子は絶望的な点数である。

「何回か挑めば勝機はある筈だ……点数だって無限じゃない。

そこを突いて高得点を連発してぶつければ……」

「問題は気力が持つかどうかなんだけど……」

目の前で葉月の召喚獣の攻撃によるフィードバックで痛み、怯える生徒の姿を見て、

百合子の召喚獣が君臨した時の事を考える。

おそらく、誰も参加しなくなるだろう……。

「先生！！作戦参加組み以外に補給試験を受ける許可を！！」

「木下姉か、一体どういう……なるほど」

優子の提案を聞いて、全校生徒が名前だけ記入で0点で提出する事を考える。

「よし、吉井妹にも連絡をつけろ！最優先で、だ！！」

「葉月の答案です！！」

いち早く交戦状態にある敵側についてしまっている葉月が名前だけの答案用紙を持ってくる。

それをいそいで受理する高橋教諭、全員が画面を見るが……

「点数が……変わっていない……!!」

「なんて、事……」

希望を持ってしまった分、絶望が大きくなってしまった。
そして――究極の絶望が君臨する。

「しょ、翔子さんの召喚獣……!」

「ひ、姫路さんの召喚獣も居るぞ!」

「総合科目フィールド……」

学園生徒二強が君臨し、突入した全員が絶望した。

フィードバックで体の感覚がリンクしているから余計に感じ取れる
絶望感……敵側の召喚獣が皇帝を迎えるかのように道を大幅に開け、

その間を翔子の召喚獣が歩いていた。

完全なバグレベルの召喚獣は奥に配置されているのだろう。

最初のダンジョンでラスボスに遭遇したかのような絶望感が明久達
を襲ってきた。

――Aクラス代表・霧島翔子&Fクラス・姫路瑞希：総合科目
15725点 & 5324点

V S

Aクラス在籍Fクラス・吉井明久&Aクラス・久保利光&男子
連合×130:

総合科目 1004点&4210点&平均点150
0点×130

『……いつもより出来が良かった』

「あー!!!?3000点の召喚獣が一撃で!!!?」

「これでは人海戦術は関係ないじゃないか!!」

防御体制をとったとしてもその防御ごと切り崩し、一矢報いて攻撃
を当てたが、

鎧に阻まれ逆に点数が減る始末。

姫路の召喚獣はまだ打倒できるレベルにあるのだが、翔子の召喚獣
は文字通り桁違った。

数も能力も操作性性能もすべて押しつぶす圧倒的な攻撃力。

——だが、このラスボスですら前座に過ぎないのだ。

——Aクラス代表・霧島翔子&Fクラス・姫路瑞希:総合科目
13125点 & 3324点

V S

「く、絶望的過ぎる」

しかも追い討ちをかけるかのように他の女生徒の召喚獣や、雄二・秀吉の召喚獣まで出現し始める。

「か、囲まれた」

もはや逃げ場など無い。

いくら生徒の中で一番操作性に優れているとはいえ、数と点数の差で圧倒的に不利な状況である。

明久はなす術も無く、数の暴力に沈んだ……気を失う前に見た光景に疑問を抱きながら。

問：30 召喚獣補完計画・前編（後書き）

無理ゲーだよ／（＾０＾）ノ

主人公なのに百合子は今自宅でコーヒー飲んでノンビリしてます。

さて、この先どうなってしまうのか（＾０＾）

問：31 召喚獣補完計画・中編（前書き）

絶望から希望へ

問：31 召喚獣補完計画・中編

「葉月ちゃんの召喚獣が向かってこなかった？」

「うん、僕に召喚獣が一齐に攻撃仕掛けてきたんだけど、一番近くに居た筈の

葉月ちゃんの召喚獣が攻撃してこなかったんだ」

「それって、混戦を避けるためじゃないのか？」

現在、第二突入作戦を練っている途中だが、人数は激減している。理由はフィードバックのダメージを恐れ、多くの生徒が戦線離脱したためである。

明久・久保（男子筆頭の誇り）・平賀（クラス代表の意地）の三人とちよつと特殊な性癖（ドM）のFクラス数名。対して、敵側は少々戦死者は出ていたようだが、未だに最強格二名は健在。

「動きを模倣しているって言うのもあるかもしれないからな、

あるいはその影響かもしれんぞ？」

操作性が一番低いので、同士討ちを避けるために混戦から遠ざけた可能性が大きい。

明久もその意見を否定する案が浮かばず、取りあえずは引つ込めた。

「それはともかく、補給は普通に出来てよかったな」

「確かに、補給自体が封印されていたらあの地点で作戦は失敗だ」

「一点突破して辿りついても隠しボスが居るんじゃないあ、どうしようも無いな」

全員が補給し終わり、若干上乘せの点数になっている。

「何回も繰り返して数を減らすしか無いな」

「幸い、久保が居るからな。それで編隊を組めば雑魚相手は楽だろ」

「一体何万回突入すればいいんだろうね」

一部の感覚がおかしい奴を除いて全員が表情を曇らせた。

ラスボス格の翔子の召喚獣を突破できたとしても、その後には無敵といっても過言ではない百合子の召喚獣が待ち構えている。

唯一、点数補充が無いという弱点があるが、53万は途轍もない数値だ。

「それでも、やるしか無いんだ……かなりの数の問題に抱え、

システムにまで大幅な異常が見られてしまえば、学園は崩壊、

全員別々の高校に向かう事になるだろう」

百合子は明久か翔子の高校のどちらかに必ず配属されるか、高校そのものに通わないようになるだろう。

別に働かずとも、雇っているメイド達や家族を含めても

一生涯遊んで暮らせる程の大金を稼いでおり、ずっと引きこもる事も可能だからだ。

「第二ラウンド……気合を入れていこう」

「……あんたらに賭けるしか手段は無いんだ。

むごい事を言っているかもしれんが頑張ってくれ」

第二次作戦——開始

「敵影視認、霧島翔子の召喚獣は居ない模様」

「嘗めて掛かってきてるな」

「D・E・Fクラスの編隊か……！」

先ほどの戦いからあまり驚異で無いと感じているのか、強力な能力を持つ召喚獣は存在していない。

Fクラスの召喚獣は島田・秀吉・須川・土屋だけであり少数だが、教科によってはやっかいな召喚獣があり、確実にシステムは得意教科のフィールドを形成させるだろう。

『やめて……美春の召喚獣……吉井に攻撃する……あああああ

光景が映されていた。

「雄二、貴様！こんな時に惚気か！！」

「坂本、貴様を異端者として裁く……！」

「……なるほど、普段の光景に似ている。」

吉井妹の性格は………そうか」

雄二の狙いに気がついた久保。

伊達に男子筆頭をやってはいない。

「気がついたか、そうだ……この状況を見る限り、百合子の召喚獣が

明久の召喚獣を攻撃することはあり得ない！！」

「……あれ？って事は葉月ちゃんの召喚獣が攻撃してこなかったのって……」

「システムの暴走を上回る意思が混ざってたんだろうな、

好きな人を攻撃したくないって意思がな」

その頃、その台詞を聞いてAクラスのH・Sちゃんが顔を真っ赤になり、

優子や工藤にからかわれていた。

「そうと決まれば一点突破で吉井君を奥まで送り届けるとしよう」

「ならば、俺達は吉井を守る壁となろう（攻撃は全部受け付けるぜ）」

「吉井妹の攻撃は俺に任せろ（その痛みが俺を更なる高みへ導いてくれる……！！）」

「そして、他の（吉井妹に比べれば）雑魚は僕達で狩っていく」

「一番の不安要素は三年の召喚獣だが」

「それも俺たちに任せろ、壁となってやる（質より量だ！！）」

『何故でしょうか、Fクラス生徒の数名が不安すぎるのですが』

『気にしたら負けさね』

そうして、作戦と覚悟は決まり……とりあえず、戦力を整える為にもここで数を減らし、点数を再補充する為に奮闘する事にした。

「久保、まずは清水の召喚獣を撃破してくれ、最優先でだ。」

でないと、廃人が一人誕生しちまう」

「別に構わないが……廃人！！？」

V S

Aクラス・久保利光：化学 374点

『ありがとうございます。本当にありがとうございます!!』

「涙声になってないかい？」

「内容は知らんが、明久に無闇に攻撃するとトラウマが

フラッシュバックしてくるようになってるらしいんだ」

尚、姫路と島田も試験召喚戦争に限定して明久に近づく事が可能。
だが、触れ合える位置には本体は接近できない。

「姫路さんの召喚獣だ！」

「点数は大分削られているな……吉井君から離れて行ってるぞ？」

「明久、姫路や島田はお前を嫌ってるわけじゃないからな」

「え、うん……でもあの行動を見てるとそう思えないんだけど」

『……っう』

『大丈夫よ、瑞希。仲間はこちらに居るから』

——姫路と島田の友情が深まった♪

「何か変なメッセージ流れなかった？」

「気のせいだろ」

結局いくつかの対決を経て、全滅した。

勿論、ただで負けるはずもなく、D・E・Fクラスとその後に出てきたCクラスの大半を撃破していた。

「と、言うわけでして西村教諭……他の者達もかりだしてください」

「……それは分かったが、かなり厳しい状態だ」

全員、フィードバックのダメージを怖れて出撃しようとしていない。一応補給試験は受けていたようだが。

「Eクラスの体育会系は一応、戦線に復帰できそうだがな」

「何故部活動中？」

スポーツをして気分を落ち着かせたいと言ってきたのでやらせている。

全員、恐れが顔から消えているので、戦線復帰は可能だろう。

「問題はA・B・C・Dクラスか」

「あれ？Fクラスは？」

『そういう事なら任せろ！』

『その報酬の為なら命を賭けよう！』

「……聞かなくても分かりました」

土屋が何やら写真を渡していたので、その影響だろうとスルーした。一応戦力は整ってきたのだが、四クラス分の男子は戦線復帰に難色を示している。

「仕方ない、無理強いは止めよう」

「そうだね、急がないといけないし」

そう言つて、Eクラス・Fクラス男子&明久・久保はさっさと戦闘開始位置についた。

全員先ほども点数は上がっており、作戦のために明久の壁になる事を快く引き受けた。

いざ、作戦開始といったところで……

「なあ、うまくいけば吉井妹の攻撃を受けずに済むんだろ」

「なんだかんだでこの学園には愛着があるんだ。」

こんな形で終わらせるわけにはいかねえよ」

「今までの騒ぎで一番大きかったのは覗き騒動だ。」

吉井妹の主導だったとはいえ、俺たちも学園の危機に一役買っ
ちまってるんだ

「ここで怯えるだけよりやるだけやってみるさ」

Aクラス男子が参入してきた。

「……正直助かるよ、これで成功率は50%から90%になった」

「よし、みんな行こう!!」

『『『おう!!』『』『』』

そして、作戦は最後の段階に入る。

突入と同時に召喚獣が大勢襲い掛かってきた。

全ての学年の召喚獣が一斉に襲いかかってきたが、一年生の召喚獣は
一年の年数の差を見せて圧倒し、点数に関係なく難なく撃破。

だが、二年・三年の召喚獣はそうはいかない……。

「やはり霧島の召喚獣は坂本の召喚獣に構っててこつちを無視し
ている」

「羨ましいが、今は感謝だ（後で異端尋問にかけてやる）」

「ああ、すべてが終わった後に御礼でもしよう（処刑という名のな）」

Fクラスの台詞が丸分かりである。

ともかく、システムにとっても予想外の翔子の召喚獣の戦線離脱。雄二ならあまり戦力として当てになってないだろうが、翔子は別である。

点数が減っているとはいえ、まだ一万点越えであり、ある程度の高得点でも

一撃で殲滅できる攻撃力を持っているのだ。

おまけに葉月の召喚獣も明久の召喚獣が抱えたら大人しくなってしまう、
強力な札が減ったのだ。

「よし、葉月ちゃんのフィールドは数学のままだ」

進行方向を妨げる召喚獣達を葉月の召喚獣が一撃で葬っていく。
可愛さとは裏腹に単科科目最強（バグ除く）は伊達ではないようにで
攻撃力は凶悪だ。
敵を仲間にして進む光景はシニールであるが、今の段階ではありがたい。

「まずい、三年の召喚獣達だ！」

「しかも数学フィールドが消えてるぞ！！」

葉月は数学以外が壊滅的で、残りの科目は30点台、
悪くて一桁という悲惨な点数である。

Aクラスに入れた大きな理由が数学特化のお陰である。

明久の召喚獣に殺到し始めた瞬間――

「風？」

召喚獣のフィードバックで風を感じた……瞬間的であれば腕輪の能力と思うのだろう。

このように断続的に風を発生させる真似が出来る召喚獣など一体しか該当しない。

「皆！召喚獣を僕の召喚獣の後ろへ――！」

「……分かった、全員吉井君の召喚獣の後ろへ――！」

風に気をつける――！」

明久の指示に従い、久保が全軍に通達。

そして全員が風に備えた――まるでその瞬間を見

計らったかのように

強力な暴風が吹き荒れ、三年の召喚獣はその風で全滅していった。

その風は明久を避けるように通過し、久保の召喚獣たちも風に備えてかがんでいた為

難を逃れていた。

「久保君、他の召喚獣が来ないように少し離れた位置で足止めお願い」

「……これがゲームだったとしたら酷いバグがあったものだ」

ラスボスを遥かに凌駕する”隠しボス”が主人公達の仲間になるなど、

ゲームとしては致命的なバグだろう。
百合子の召喚獣が威風堂々と明久”だけ”を迎え入れるように立ち塞がっていた。

問：31 召喚獣補完計画・中編（後書き）

「たとえ暴走状態だろうが鈍兄に攻撃するわけねエだろうが」

やってしまいました。

無理ゲーからヌルゲー状態に変化。

システムのほうでも制御不可状態中。

後編はこのまま修理作業と？？？です。

問：32 召喚獣補完計画・後編（前書き）

やっと主人公の百合子の出番。

一瞬で終了（^^;）

問：32 召喚獣補完計画・後編

「結局……楽勝状態だな」

近づいてくる敵召喚獣はほとんどが百合子の召喚獣に消し飛ばされており、
久保達にも何体かの召喚獣が向かってきているのだが、その全てが逆の数の暴力で殲滅されていく。

「でも、正直楽勝だからこそいいんじゃないか。」

下手打てば間に合わない可能性のほうが大きかったのだからな」

明久の召喚獣は現在先生たちの指示により修理作業に入っている。
その間、百合子と葉月の召喚獣は明久の召喚獣の動きを観察したり、近づいてくる敵召喚獣を殲滅したりと大人しく？している。

「あれ？変な命令文が出てきましたよ？」

「……………」明久と翔子のバーカ”？」

「生徒全員分の名義だな……もしかして暴走させるつもりか？

いくら吉井妹の召喚獣でも……………」

「吉井妹の召喚獣に黒い噴射状の翼が出現しました！！」

「幼い状態だから、ちょっとした事でも反応するんだ！」

そうして、今度こそ絶望の戦いが始まった。

「ちょ、直撃しなくても体力が吹っ飛んだぞおお!!?」

「敵味方関係ねえ!!このままじゃおしまいじゃねーか!!」

「範囲も射程距離も段違いだ!!」

百合子の召喚獣が風のベクトルを操って風の塊をぶつける度に直撃した召喚獣はもとよりかなり離れていた位置に居た召喚獣も吹き飛び、

近くに居た召喚獣も点数が一気に0になったりと大損害。

また、フィードバックも直撃したものは顔に血の気がなくなり、床に倒れこみ、頭をうつなどの怪我を負う生徒も多発した。

「いかん!召喚獣を撤収させろ!!」

「!!!?」

『な!俺はともかく明久の召喚獣や翔子の召喚獣にまで!!!?』

暴走状態の百合子の召喚獣をシステム側がのっとってしまい、ほぼ唯一といっていい弱点を克服してしまった。

攻撃するときに点数は発生せず、近づこうにも風のベクトルによる防壁で近づくだけで点数が削られていく。

まさに、無敵の召喚獣が発生してしまった。

「やれやれ、油断したかねえ」

「このような防衛手段に出てしまつとは……」

撤収できたのは後衛に居た数名。

他の召喚獣は壊滅状態であり、尚且つ直撃による戦死の該当者は保健室および、病院に送られている始末。

「こうなれば、もはや猶予など無いさね……吉井妹を呼ぶしかないか」

「……扉をこじ開けるのですか」

幸いにも百合子の召喚獣は観察処分のような設定を行っていないため、生身であれば驚異にはなりえない。

が、万が一も考え、能力的にも対抗可能な百合子を召集せざるを得ない。

「この換気口のサイズは……と」

「待て、確かに前前の体格なら入れるだろうが、身動きが出来ないだろう」

百合子が電話で呼び出されて数分、明久が気を失っている光景を説明するのに二時間。

翔子の説得よって宥められる事、数分。

百合子は現在、扉の前には立っておらず、召喚獣突入のために使われていた換気口の前に立っていた。

「穴を開けるのも扉が無いのも見た目的に悪いんだろオが……

だったらこの換気口以外に何処から入りやイインだよオ？

……あ、すまねエが誰かサラシ持ってねエか？」

「ワシが持っておるが……どうかしたのかの？」

「胸を成長させてたの忘れてた」

バストの起伏が無い状態からAとBの中間にまで成長させていた事を思い出し、口にする。

一部女子生徒が雄たけびを上げ、百合子がパパッと目にも留まらぬ早さで着替えた時に

一人の男子生徒が血の海に沈んだ。

秀吉がもっていた理由は劇の時に服の前をはだけさせるシーンの時に使われる用である。

「さつてと、鈍兄の敵討ちとイキマス力」

跳躍し、一本の線になるようにして換気口に飛び込む。

皮膚自体を弾力を内側に内側に押し込むように制御し、進むスペースを確保し、

つま先で掻くような動きをし、そのベクトルを強化させ、進む。あつという間に制御室へと入り込んだ。

「早速のお出迎えのようだが……」

百合子が入り込んだと共に超暴走状態の百合子の召喚獣が風のベクトル・地球のベクトルなどのベクトルを収束させた一撃が放たれてきた。

『観察処分の設定が備わってるだど!!?』

カメラなどが壊されている光景から設定が付与されている事が伺える。

だが――

「――データ如きが私に勝てるわけねエだろオが」

百合子の召喚獣が一瞬のうちに自滅で消え去った。

一瞬で事が終わってしまった事に対して、すべてのおきている人間が何が起きたのか分からないといった表情をしている。

『……もしか、召喚獣自体のベクトルを解析して攻撃させたのかの?』

「スパコン代わりに何回が使われてンだぜ。解析なンぜ、とつくの昔に

終わってンだよ」

そもそも学園のコンピュータのスペックは百合子の脳の演算能力を下回っている。

ゆえに百合子の能力を完全に再現できるはずも無く、先ほど放たれた一撃も演算しなおして露散させた。

「つと、管理パスワードは」

『光を屈折させて見えなくさせやがった』

『腕の動きで分かりそうなものじゃが……叩いた場所と

違う場所から音が聞こえておらんか？』

ただいま、百合子による修復作業中。

百合子の召喚獣は戦死したのだが、今は補習は免除中である。

何故なら、戦死者の中には命に別状は無いものの病院にいかなければならぬほどのダメージを負った生徒もあり、それどころではないからである。

「終了っ」

『最初っから百合子に任せておけば解決してたんじゃないか！』

『あそこまで規格外だと思ってなかったんだから仕方が無いさね
！！』

今までの苦労は一体なんだったんだ、と復活した男子生徒たちは語ったという。

問：32 召喚獣補完計画・後編（後書き）

さて、次回は原作では玲が来訪する時期ですが……

出番がほとんど無いとは言え玲は既に来ているので、

補完的なオリジナル話になります。

お楽しみに！

問：33 期末考査・1（前書き）

期末考査の話。

明久の勉強の理由が変化……………弱点扱いの時に武器が

木刀なのを気に病んでいて、それを改善したい為に

勉学に身を入れるという設定です。

……………明久らしくないのは気にしない方向で

問：33 期末考査・1

朝の登校風景、もはや日常とかしてしまつた雄二と翔子二人の登校。

「……雄二」

「なんだ翔子」

「……携帯電話を見せて欲しい」

「いきなりどうした」

機械オンチの翔子が見せて欲しいといった事に眉を多少ひそめながらも、面倒になりそうだったので壊さないように念を押しながら携帯電話を渡す雄二。

「……朝のテレビで浮気の証拠は携帯電話によく残つてると聞いた」

「それで携帯を見せて欲しい、ねえ」

「……雄二、女の子の友達居ないの？」

アドレス帳の欄を検索したのだが、女性と思わしき名前が翔子と百合子および

雄二の母親しか登録されていなかった。
いくら何でも少なすぎである。

「あーっと、たまに声かけられても交換しようという気は起きなかったからなあ」

その度に一人の少女の顔が頭をよぎったという事は口に飲み込んだ。何故だか言ったら負けのような気がしたようだ。

「……………明久の方がメールの数が多い」

浮気という点では見ていないが、なんとなく悔しい感情に襲われている翔子。

自身の機械オンチは自覚があるとはいえ、直すのが難しいのである。このように差をつけられていると少々複雑なのである。

「気は済んだか？」

「……………うん、今度百合子に携帯の早打ちを教えてもらう」

「張り合っな」

「戦争中止だア？」

「そうですね、先日の騒ぎでシステムがまだ本調子ではないそうですので

修復のために一時中止だそうです」

HRでの伝達事項を聞き、百合子が眉をひそめながら聞くと、玲が比較的

丁寧に答える。

「うーん、雄二達のクラスにとっての痛手だと思うけど」

「代わりとしてはなんですが、どうやら期末考査で装備の更新も

行われるそうです」

それを聞き、明久が少しやる気を見せるようになった。

本来なら学年末試験でしか更新される事の無い装備の変化につられたようである。

「木刀から開放される……！！」

「素手の私よりマシだと思うんだが」

「百合子の武器は”ベクトル操作”でしょうが」

意外と気にしていた装備の質。

点数が上がっても木刀ではなんだか強くなった気がしないので装備の更新はありがたいのだ。

「葉月ももつと格好良い武器になるでしょうか？」

「魔法攻撃が出来るようになるんじゃない？」

八卦炉で今まで殴りつけるだけだったが、そのような遠距離攻撃手段が

行えるようになれば戦争での戦略の幅が広がるようになるだろう。

「「というわけで教えてください百合子（天才のお姉ちゃん）」」

「やる気になるのはいいがなあ」

「私も何が変わるか楽しみだけど……一週間でどこまで点数を上げれるの」

武器の質はほとんどが点数依存。

大幅に武器や防具を上げるには点数も大幅に上げる必要があるだろう。

しかも、期末考査は来週である……百合子の実績を持ってしても厳しい期間ではないだろうか。

「そういえば、ゆりちゃん。体育館でのテストは期末考査の日の放課後

です、テスト終了後、待機しててくださいね」

『『『体育館！！？』』』

「つつても反映されるのは期末テストのときだけらしいがな」

この間の暴走の時に百合子の点数が余りにも高すぎたので、対抗できるように

下げる為の処置として、点数は見るが一般生徒と同じ速度でのテスト形式に切り替えられた。

……一応、シャープペンシルではなく、Gペンやインクの使用許可はあるようだが。

「ま、チイツとばかり本腰をいれるか……教えながらも頭に入るから

二重の勉強になるだろうし。翔子達も来るか？」

「うーん、私は自分の力だけで挑んでみたいし……教える時に自分に身に付くんなら

私は葉月ちゃんに主に現代国語と古典を教えるわね」

葉月の苦手科目である。

帰国子女である為、日本語が中々読みづらいという弱点によるもので、

それを克服すれば、点数はまだまだ跳ね上がる可能性がある。

優子は参加するが、教えを請うよりも教える側に立ちたいようだ。

「……雄二も呼んでいい？」

「構わねエよ……ちつとFクラス行ってくらア」

「え？別に雄二には翔子さんが……秀吉か」

いまどきの若者のような交際はしていないとはいえ、二人の仲はそ

れほど悪くは無い。

両者共に恋愛感情に至るまでの感情は無いようだが、少なくとも好意的な感情はあるらしい。

「……じゃあ、私も雄二に伝えるためについて行く」

携帯でメールを送ろうと思ったのだが、打ってる間に百合子がFクラスに

たどり着きそうだったので諦めて同行することに。

「今回は別荘じゃなくて普通に明久の家か」

「こっちの家だと人が少なエからな」

メイドがぞろぞろ居る屋敷では勉強に身が入らないだろうと予測しての

選択である。

せっかくの勉強会なのだから教室や図書館よりも誰かの家で集まる
うとの事で、

最初は明久の家に集合という事になった。

「いざとなりやア、キス魔も教える側に回せる」

「なるほどのう」

今居るメンバーは、明久・雄二・秀吉・翔子・優子・葉月・百合子の7人である。

教えられる側に強制されるのは明久と葉月。

数学であれば葉月は問題ないが、明久は全科目かなりの壊滅状態である。

「なんとかして鈍兄の武器を模造刀にしてやろう」

「いや、そこは刀でしょう」

「……………何年小学生に分かる様な教え方で失敗したと思ってやがんだ」

「あ、明久、今の話はホントかの？」

「……………言葉もございません」

実際、理解できたと油断して知識から抜け落ちる事が多々あるのだ。ぶつちやけその理由のほとんどが直後にゲームをやってしまったという事の方が

理由として大きく占めているのだが。

百合子としても明久の成績を上げる為に努力はしたのだが、やる気の無い者には

強要しても逆効果だとあまり熱心には教えておらず、明久がやる気になった時だけ

付き添って勉強していたのだ。

「まア、一度集中状態にはいりゃ鈍兄も勉強に期待できるからなア……」

そこだけが未知数であり、希望だな」

誰かの為という点が加われば尚良いのだが、今回に限ってはそのような事態は

発生しづらいだろう。

そう言いながら、大量の問題集を運搬してくる百合子。

「教師の癖や言動などをリサーチした上で出やすいであろう問題を纏めた問題集だ。

これをやれば少なくとも伸び代のある鈍兄と葉っぱ娘は点数強化はまず間違いねエ」

去年出せなかった理由は、教師の性格把握に努めていたのと、テストの傾向を

上級生達に聞き込みに向かったのが主な理由で、どうしてもテスト作成者にある癖を

見破り、それを踏まえたうえでの授業での教え方や動きまで観察した上での

予想問題集なのである……一冊目ではテスト一枚目ではまず間違いなく出るだろう問題がズラリと

羅列されており、中盤の問題は同じ内容でヒント付き、終盤は回答込みの答え合わせようのものが印刷されている。

「ず、随分本格的ね」

「さすがにテスト作成風景にまでは乗り込んでねエが、十分出る筈だぞ」

「不正行為だと言いたいのが、これをするにも十分苦勞がいる筈じゃから」

「なんとも言えんのう」

成績下位の者にとってはのどから手が出るほど欲しい問題集だろう。ちなみに百合子のテストの点が高い理由の一つがこの予想力である。九割方予想の範囲内で出てくる問題をその人物の行動や性格から演算で叩きだした事による

問題先読み能力……ある意味テスト問題を盗み出して解いているようなものである。

ちなみに100%じゃないのは別に盗んでないと証明する為ではなく、ただ単にテスト作成最中の心理まで計算に入れる事が出来ないからである。

「一応総合教師役にはしばらく私がついて……翔子は雄二と、優子は葉っぱ娘と、

私は基本的に明久と秀吉を教える。

「そだ雄二、Fクラスの人数分いるか？」

「止めておこう……ありがたく貰っておきたいが、そんなものを与えたら」

「むしろ勉強しそくに無いぞ」

ほぼ答えのようなものを一夜漬けで読むだけで済ませそうなクラスメイトを思い、
そのためだけに持って帰る苦労が水の泡になりたくないので拒否しておいた。

「私で不満かもしれないけどよろしくね葉月ちゃん」

「ふ、不満じゃないですよー」

「……雄二、分からない事があつたらなんでも聞いて」

「頼らなくなつて解いてみせらあ」

「さて、私が教える＋鈍兄がやる気になったんだ……生半可な量で済まさねエから覚悟しとけ」

「頑張るよ！目指せ日本刀！！」

「ん？……ワシトバツチリじゃー！？」

そんなこんなで勉強会がスタートし……ダウンしたのは秀吉だけだったという。

問：33 期末考査・1（後書き）

秀吉、とばかり！

次回の勉強は雄二の家……………”あの”母親を見て百合子は
どう思っているのでしょうか

問：33 期末考査・2（前書き）

ところで今気がついたら四巻に相当する話が抜け落ちてた。

まあ、いいかなあ……今現在一人の少女が戦闘不能状態だし。

そして、ようやく百合子の暗示が今回から緩くなってます。

ただし、危害を加えようとすると明久を中心として半径10メートル以内に

近づけません（試験召喚戦争を除く）。

そして、二人とも葉月の応援に回りました。

問：33 期末考査・2

「雄二の家に行くのって、はじめてだねそう言えば」

「そういえばそうだな……ま、今日はおふくろは居ないはずだし
気楽なんだがな」

「それはそうと……人数増えてンなア」

昨日のメンバーを含めて、暗示を弱めた状態の島田と姫路に工藤と
康太が混ざっている。
かなりの大所帯になってきていた。

「さて、ここが居間なわけだ……が……」

家に入り、居間の扉を開け中を覗き込むと、一人の女性が
一心不乱にプチプチを潰している光景が見えた。
その光景を見ながら雄二はゆっくりと扉を閉める。

「ゆ、雄二……？ 今の、山ほどあるプチプチを潰していた人っ
て――」

「……赤の他人だ」

「さ、坂本の母親なの……？ なんだか、随分と凄い量を潰して
いたわよね……」

「すごい量ってものじゃないわよあれは」

「あわ、わ、大変な量でした」

「う、うむ……あれほどの量。費やした時間はおそらく

1時間や2時間では無理じゃな」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか？」

「……姫路、それは無い。あれはお義母さんの趣味なだけ」

様々な議論が行き交う……ちなみに百合子は呆れて何も言えない状態だった。

「恐らく、精神に疾患のある患者がなんらかの手段でこの家に侵入したに違いない。」

なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っている筈だからな」

「おい、見苦しいぞ。さっき翔子に暴露されてただろオが」

どんな時でも詐欺師のように人を騙せると評価していた百合子だが、さきほど翔子に

暴露された上に、自信なさげに言う姿勢からは説得力が欠けていた。そして、中から雄二曰く赤の他人の声が聞こえてきた。

『あら……？もつこんな時間。さっき雄二を送り出したと思ったのに』

どうやら八時間近く作業をしていたらしい……確かに精神に疾患があるのは
真実味があるようだ。

『続きはお昼ご飯を食べてからにしましょう』

しかもまだ続ける気でいたらしい、先ほど見たときはまだ大量に残ってたので、
更にかなりの時間が掛かるだろう。

「おふくろっ！なにやってんだ！？」

ついに耐え切れず、雄二が扉を開け放って突っ込みに向かう。

「あら雄二。お帰りなさい」

「お帰りじゃねえ！なんで家にいるんだよ！

今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのか！？」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パッと見ると

数字が似ているから困るわね」

「何処が似ているんだ！数字どころか文字数すら合っていないだろ
！！？」

「こら雄二、またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いして！」

「サラツと図々しい台詞を抜かすな！あんたの黄金期は10年以上前に終わっているはずだ！！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから人の話をきけえ！！」

目の前で繰り広げられているコントのような光景に、雄二が母親を見せなかった理由が判明した。

「翔子ちゃんと……皆さんいらっしやい。うちの雄二がお世話になってます。私は雄二の母の

雪乃と言います」

柔らかな微笑で明久達に挨拶する雪乃。
その態度だけ見れば雄二の母親である事が疑わしいのだが、百合子のような明らかにおかしい前例があるのでそこは誰も気にしなかった。
むしろ気になっていたのは……

「雄二のお母さんって若すぎじゃない！！？」

「確かにとても子供が一人居るとはおもえんぐらいに若い外見じやのう」

「坂本お兄さんのお姉さんかと思いましたです」

全員の言うとおり、年齢の離れた姉という印象の方が強い。
紹介されずに並んでいたら姉と弟としか思えないだろう。
……実際はいくつなのだろうか？

「と、とりあえず見なかった事にして俺の部屋に来てくれ」

「そオだな……それじゃ、邪魔すンぞ」

「お、お邪魔します」

頭を下げて上の階にあるらしい雄二の部屋に向かいだす一行。

「皆さん、あとでお茶を持っていきますね」

居間からはそんな声が聞こえてきた。

若干変わってるようだが、若くて綺麗かつ優しそうな母親だろう。

「つつても、この部屋じゃせめエだろ」

「確かにそうだな」

総勢11人もの大人数では流石に個人の部屋では狭すぎる。

「居間じゃ駄目なの？」

「駄目だ、おふくろがいたら勉強に集中出来ない可能性があるからな」

本当に嫌そうに（嫌っては無いようだが）、苦々しい顔をする雄二に珍しいものを見たといわんばかりに明久が観察していた。

「さて、百合子の鞆の中身には突っ込まない方がいいのか？」

「へ？そういえば大荷物だなあとは思ってたけど、なんなの？」

昨日の時に勉強に参加しなかった組は首をかしげて百合子の持つてきていた鞆を

改めて見る。

かなりの大きさがあり、さぞ重いのだろう。

「予想問題集だ、繰り返し勉強には一番の方法だからな」

ドサリと二人二冊分の辞書ほどの厚さがある問題集が11セット出てきた。

「えーつと……」

「ああ、ちなみに島田に対してはドイツ語翻訳も乗つけてやってるから

ありがたく思えよ」

「あ、本当だ……って、すごい手間なんじゃないの！！？」

よく見ると「秀吉用」やら「明久用」など個人個人専用に作られたと思われる

文字が書き込まれていた……一晩で書いてきたのか。

「あれ？島田さんや姫路さん、工藤さんや康太が参加するって知らなかったよね」

「前者二人は葉っぱ娘が勧誘するだろうし、後者二人は今日参加するって昨日

言ってたからな」

下手打てば最初の二人分に関しては無駄に終わる可能性があったらしい。

「その問題を見てテストの傾向の参考するもよし、実際にやって

ほぼ問題先取りにするもよし、自由にやってくれや」

「ウチはありがたく解いてみるわ」

「お姉ちゃんには葉月が教えるです！」

葉月の点数は全てにおいて島田を上回っており、特に数学は巨象と蟻程の

差がある……姉としての尊厳がズタズタだ。

案の定両手を床についてorzの格好になっている。

「じゃ、両者共に分らないと思われる文系は私と姫路さんが

監修するという事で」

「頑張りましょうか、美波ちゃん、葉月ちゃん」

「」「」

両者共に弱点科目であるため反論できない。

葉月は数学以外は優子を遥かに下回っており、島田に至っては全科目で敗北しているのだ。

「じゃ、康太君には僕が教えるね。保健体育以外は」

「……なん、だと……」

「いや、当然の選択だと思うのじゃが」

保健体育以外では明久に劣る土屋に教えるのは工藤愛子。保健体育でこそ敗北を喫しているのだが、それ以外の科目では圧倒的に工藤の方が上である為この配置は良き配置だろう。

「さつて、ここは昨日とは逆の配置になったわけだが」

「昨日の地獄を俺が味合うわけか、翔子助けてk」

「……明久、木下、分からないところがあつたら聞いて」

雄二の為だとあっさり見捨てた。

これもかなり珍しい光景である。

学力向上の為の勉強を承諾したのは雄二。

雄二なら耐え切れると信頼した上での見離しである。

「だ、誰か助け——」

「みなさん、お茶ですよ……？あら雄二、もう寝てるの」

「……………化学式……………このベクトル数列は……………」

「夢に逃げてでも勉強が襲ってくるなんて」

「いい睡眠学習だろ」

誰もがその学習方法を受けたくないと心の中で思った。

せめて夢の中でぐらい勉強から逃げたい。

ちなみに今現在の雄二は翔子の膝枕である。

悪夢を見ている苦々しい表情と翔子の膝を枕にして寝ていると直感で分かっているのか

無防備に笑顔になりかけているのが混ざり合ってなんとも言えない顔になっている。

ちなみに明久も経験したのだが、まったく効果が無かったのだが、九割以上の人間が効果があつたので思い出して話したところ、雄二がその実験に参加したのである。

葉月も多少疲れたらしく、明久の膝にチョココンと乗っかって、スヤスヤと安眠している。

こっちも勉強は襲ってきているのだが、得意な数学ばかりで問題ない。

勉強だけで科目を選べないのが難点である。

「……おい、そのオバサン、その麵ツユのビンは何だ」

「あら？アイスコーヒーと間違えたかしら」

「おふくろ……臭いや色で判断しろとは言わない……」

せめてラベルを見てくれ……」

「寝言で突込みが出てる！？」

夢の中にも会話は届いているらしく、その世界から現実世界へと突っ込むほどのパワーを持っていた突込み力に明久達は驚愕した。

「いや、まだ飲めるものを持つてくるだけ、母よりマシか？」

「………そういえば洗剤を普通の水だって渡された事あったっけ」

その水？を明久や百合子の母親も飲みかけており、ベクトル操作出来る

百合子以外が病院送りになったのは余談である。

幸い、母親であったのと明久が許したのもあって制裁は無かったらしいが。

「雄二があわせたくなかった理由が良く分かったよ」

「母親がおかしいのはどの家も共通なのか……」

自分の家の母親の事を思い出し、百合子は溜め息を付いた。

問：33 期末考査・2（後書き）

次回は翔子の家！泊りがけの合宿。

原作と違って婚姻届が無いから進入騒ぎとかが起きない（苦笑）

次回もお楽しみに！

問：35 期末考査・3（前書き）

短め

問：35 期末考査・3

「代表の家って大きいわねー」

「……みんないらっしやい」

今日からは翔子の家でしばらく泊り込みの数名による強化合宿のような勉強会が行われる事になっており、全員が翔子家の前に集合していた。

「なんで姉さんも付いてきてるのさ」

「……早い段階から来たのに出番が無いからでは

ありませんよ、ええ決して」

「使いどころがなかったらしいから仕方ねえだろ」

「そこ、危なそうな発言は止めなさい」

ともかく、教師役として玲が付いてくる事になり、昨日よりも人数が増えた。

教師同伴だにより合宿のイメージが強くなる。

「にしても部屋の数が多いわね」

「……それぞれが用途別」

「ふーん、スクリーンのあるあの部屋は？」

「……鑑賞部屋」

小型のシアタールームのようなつくりになっている。
ドリンクサーバーもおりてあり、完全に映画館である。

「あの部屋は？」

「……書斎」

書斎どころではなく、どう見ても図書室。

漫画の類は無いようだが色々な種類の本が置いてある。

「あのダブルベッドのある部屋は？」

「……雄二との愛の巣になる予定の場所」

結構質素なつくりになっており、部屋も洋風と和風で
半々になっている。

将来結婚した後になどどちらかに決めるのだろう。

「婿入りするんだ」

「まだそんな気はねえ！！」

「あの男物しかなさそうな部屋は？」

「……雄二の部屋・霧島邸支部」

「最近使われたような形跡が見えるんだが」

「……………最近泊まったんだよ、悪いか」

「異端審問に——」

「えい（チラリ）」

「スパッツでは俺は倒れな————なんだと【ぶしゃあああああ】

」

工藤がスカートを軽く土屋にだけ見せるように捲くり、土屋が血の海に沈んだ。

「今日はスパッツじゃなくしてみた」

何故だか工藤が本気で土屋を落としかかっているような気がした。ただ、流石に恥ずかしかったのか顔がかなり真っ赤になっている。

「……………勉強会の前に血の掃除だな」

百合子がたんたん、と足踏みしてベクトルで血の成分だけ浮かして、その部分をティッシュで回収。

「葉月、最近出血系のものを見ても平気になってきました」

「そりゃ、こんだけ血を見続けてたらそうなるわよね」

というよりも輸血だけで復活するのが納得いかないのが百合子の心

境であつた。

「さて、キス魔も教師役に加わったところで教え——」

「姉さん、色々分らないところがあるんだ！教えて！」

明久が玲に飛びつくように……余り効果が無く効かないと分かつてても

百合子のスパルタ授業は回避したい一心で——

「翔子、今日はどんな体勢でも許可するから教えてくれ！」

雄二が翔子を膝に誘うような形で……一回味わった恐怖をもう一度体験するなど嫌に決まっている。

尚、翔子は喜んで膝の上に座った——

「姉上、ここの文法が不安なのじゃが！」

秀吉が参考書を開きつつ優子に突撃し……

あの鬼のような授業は補習よりも厳しく、耐え切れそうに無い——

「工藤、教えてくれ」

土屋が寡黙さを忘れるほど必死で……

なんとしてももう一度スカートの中を覗き込もうと――

「姫路お姉さん！教えてくださいです！」

姉の先手を取るように葉月が姫路に飛びついて……

身長のせいからか胸に埋まってちよつとだけ呼吸困難に――

過去に受けて耐え切った事があるが、一つの目標が原動力だった為耐え切れたのだが、今は無理である。

「……は！？」

全員が百合子の教えから逃れるかのように（一人だけ明らかに違（が）移動を開始した。

そして、出遅れた哀れな女子生徒が一人。

「……ウチ、この勉強が終わったらアツアツのピザを食べたるわ」

「勉強如きで死亡フラグのような台詞を吐いてるんじゃない」

――島田は犠牲となった。

「アキくん、誰ですか、この”征服王イスカンドル”というのは、イスカンドルだけならまだ場所によって名前が変わる為、正解だというのに。」

余計な文字を入れないで下さい」

「……小説と混ざっちゃって」

学校のテストではよほど理解があつてノリの良い先生で無い限り丸は貰えないだろう。

ところどころ正解しているのがあるから困ったものである。

日本史での戦国時代や世界史での三国志に該当する部分での正解も目立ち、

明らかにゲームに影響されてるものが多い。

「……雄二は大分成長した」

「まあな、昨日のあの特訓は伊達じゃない。次のテストでは翔子の点数でも

追い抜いて………スマン忘れてくれ」

「……？」（総合科目15000点オーバー）

自信満々だったのだが、翔子の点数を思い出し、軽くへこむ雄二。これが4800点代だったらまだ大口を叩けたかもしれないが、五桁は壁が厚すぎる。

「秀吉……この答えは無いわよ」

「……能や狂言をやらないから必要ないのじゃ」

”【はべり】の已然形を用いた例文”で

『以前食べたケーキはvery deliciousでした』

……古典の問題で英語を書くなー！ー！！

せめて書くにしてもカタカナで表しなさい！！」

他にも古典の問題で酷いレベルでのミスが目立ち、優子はどうしてこうも間違うのだろうと頭を抱えた。

「康太君、スカートを覗こうとしないで問題を覗く努力をしてよ」

「……覗いていない……！」

「カメラ構えて転がってたら説得力ないよ！！」

こっちは勉強をしようとしておらず、必死の攻防が繰り広げられていた。

お前ら勉強しろ。

「【汚名挽回】ではなくて【汚名返上】が正しいですよ」

「あう、でもでもここの作者さんも——」

「葉月ちゃん、それ以上いけません」

日本語表現、それも漢字部分や熟語などのミスが多く、それを指摘していたらすごい量にまで束ねられた。

問題集の数学部分はほぼ完璧なのだが、それ以外の部分でミスや誤字が

非常に目立つ……特に古典や現代国語などは酷いものがある。

「……………いやあ、漢字が襲ってくるうー」

「ちょうど国語か」

薄情だが、全員が島田の現状をスルーした。

余談：夕食

夕食は島田の遺言（注意：死んでません）どおりピザとなった。

「……………あのピザ屋は一体何なんだよ、コーヒーピザなんてものが

置いてあるとは」

「メニューにはおいてなくて百合子専用だったからねえ」

三種類のピザのうち値段が安く、距離が近いところから注文しようとしたのだが、

百合子が奢るとの事でさっさと値段もメニューが置いてあるところ中間の値段のピザ屋で

注文し：、その時にコーヒーピザを頼んだので全員が「え！！？」

という反応を

示したのだが、実際に送られてきたのを見て乾いた笑いを浮かべていた。

「百合子の無茶な注文に職人魂の火がついてコーヒーピザを作り続けているらしいよ」

「そ、そうなのか」

問：35 期末考査・3（後書き）

段々スランプ気味に……

次回は勉強の息抜きに少しゲームをさせる予定です。

王様ゲームをやらせるのですが……どうなる事やら。

問：36 期末考査・4（前書き）

この小説の雄二は翔子への好意が原作よりも漏れています。

問：36 期末考査・4

「さて、少しは息抜きしないと詰まっちゃまうわけだが」

「んな物体用意しといて勉強するって言われた方が驚くぞ」

雄二が用意したものは棒クジの様なものであり、明らかに王様ゲームと

世間一般では呼ばれるゲームをやる気満々である事が伺える。

「まア、確かにガツガチにやってたンじゃア、常人ではあつと
いう間に

パンクするだろうし、別に構わねエが」

「よし、人数分のクジをかき回してつと」

玲も止める気は無いようで、ゲームに参加する気満々な状態であり、
全員が息抜き程度にやる気満々である。

『『『王様だーれだー！』『』『』

「あ、私が王様ですね」

王のクジを当てたのは玲のようである。

「では、”3番”か”8番”は私にキスをしてください」

「マテ、キス魔。何でピンポイントで狙撃できんだよ」(8番・百合子)

「どういう勘してんのさ!？」(3番・明久)

恐ろしいほどの勘である。

(ン?マテよ?)「私が行ってくらア」

「え?でも百合子、はや!？」

「……そう来ましたか」

ササツと玲の手を取ってそこに口付ける百合子。

さつきから鼻血の噴出音が鬱陶しいのは気のせいだろう。

「さて、次行くぞ」

「あっさり流したか……じゃあ、混ぜてつと」

『『王様だーれだー!!』』

「私か………」

「百合子が王様？」

「一部以外に暴政な王様だな絶対」

「その一部に危害加えた地点で拷問フルコースの後に処刑しそうね」

「どんな暴君だそりゃ……まんま私じゃねエかよクソツタレ」

どうやら自覚はあるようだ、もっとも直す気はさらさら無いようだが。

「さつてと……そオだな。5番は何か一曲歌え」

「あ、僕か……うーん、突然言われてもなー……」

じゃあ、○nl○y○a○ogu○」（工藤・5番）

「………こんだけ隠しても分かる奴には分かるンだろオな」

声優ネタ、つか最初の隠し文字はあんまり意味を成さないだろう。
閑話休題。

「上手かったな」

「まあ、本人だしなア」

「そこ、それ以上いけない……愛子が終わったんだから次行くわよ」

「ちなみに後五回ですよ」

いくら盛り上がったからといってあくまで息抜きの為なのでだらだらと

延長させる訳にもいかない……最初に回数を決めて置けばよかったのだろうが、
忘れていたらしい。

『『王様だーれだ!』』

「あ、私ね。ここは定番として3番は6番と、

2番が7番と、1番は8番と一緒にポッキーゲームで」

「お、俺が3番かよ!？」

「……雄二、今すぐ準備する」(6番)

「しよ、翔子か……じゃない!何安堵してるんだー!!？」

慌てて6番の相手を探して翔子だった事に一瞬安堵し、すぐに首を振った。

そして雄二にしては珍しく本音が大暴露されていた。

「葉月2ばーん」

「あ、僕7番だ」（明久、7番）「はうあ！？心の準備が！！？」

一方、葉月は誰になるか、明久だといいなと思うながら2番である事を大宣言したのだが、

明久であった為、ポツキーゲームでの起りえる可能性と顔が必然的に近くなる事に

関して想像してしまい、顔は真っ赤になり動悸は激しくなる。

流石の鈍感の明久でも常日頃から好きだと公言し、また態度でも慕ってくれている様子の

葉月の想いを知っているからか、多少紅潮し、頬を掻いていた。

「……私、とんでもない爆弾を放り込んだのかしら……」

つて、1番と8番は誰よ……」

全員が行方を捜そうとして固まった。

「なんだ？1番だったから実行しただけだぞ」

「8番じゃったから相手をしただけじゃぞい」

既に終わった後のようだったが……見間違ひ出なければ普通に両者共に

ポツキーを完全にかじり終わり軽い接吻をしていた。

「そっういや、これがマウス・トゥ・マウスの意味ではファースト

キスカ」

「……そんな事を今暴露されても困るのじゃが……本当に百合子は
雰囲気を見殺すのう」

「……雄二、もっとスゴイのをする」

「マテ翔子、落ち着け。そういうのはきちんと手順を踏んだ上で
雰囲気のあるときにするもんなんだよ」

「雄二、それだと明らかにキスする気あるって台詞にしか聞こえ
ないんだけど」

「は！くそ、孔明の罠だ！」

「何でもかんでも孔明のせいにすんじゃないやねエ、ぜってエ

孔明が天の国が草葉の陰で泣いてンぞ」

その後、ポッキーゲームはキスをするに至らない程度に途中でおり、
王様ゲームはお開きとなった……主に百合子と秀吉のお陰で。

「秀吉、あんた雰囲気はどうしたの」

「……百合子と付き合っていると、イチイチ気にしておいたら埒
が明かぬ」

どこか達観してしまった弟に優子は少しだけ世界を恨んだ。

「……さて、勉強も終わって風呂も済んだしそろそろ寝るか」

「そうね、まだ日にちはあるもの……また明日にしましょうか」

葉月がうとうとしだし、明久にもたれかかっているのを見て、良い頃合だと打ち切る事となった。

「部屋割りはどうすんだ？」

「……男子はあっちで、女子はこっち……雄二と私は雄二の部屋」

「ま、妥当よね」

「まて木下、三つ目の部屋割りに疑問を持ってくれ、まだ恋人でしかないんだから」

「一緒の部屋ってのはまずいだろっ」

「あれ？康太は珍しく襲おうとしないの？」

「……………性も根も尽き果てた」

ただ単に出血多量による貧血気味なだけだった。

――翌朝

「あ？葉っぱ娘がいねエな……………花でも摘みに行つたか？」

「随分と朝早いわねえ」

「……………さっきまで百合子は外に居た」

「地震が起きかけたからそのエネルギーを殺しに向かつてただけだ」

「……………今眠くて突っ込む気力も無いわ……………ん？足音？」

「……………何か事件でも起きた？」

他愛も無い朝の会話の途中、女子の部屋へと駆けてくる足音があった。

そして、扉が開かれ、葉月を抱えた明久が飛び込んできた。

「どうしよう百合子、僕責任取らないといけないかもしれない」

「……………何があつたア！！！！？」

問：36 期末考査・4（後書き）

注意：18 禁的な行為は一切行われておりません。

……やけに話の数が多くなったような気がする。

まあ、いつか、次回のテーマ：明久の勘違いはなんなのでしょう
か？

問：37 期末考査・5（前書き）

更新が少し遅れたorz

スランプ気味です。

誰か私の才能を拾ったら交番に届けて置いてください

↑錯乱中

勉強会の筈が、何やら妙な話になってきたぞ？

問：37 期末考査・5

数十分後、勉強会に来ていたメンバーが起こされ、事情の把握に努めていた。

「……………つまり朝起きたら葉月ちゃんが隣で寝ていて、両者共に服が乱れていたと……………」

「年齢的にアウトですねアキ君」

起っていた状況は驚くことにそれだけ、だがそれだけでも十分に既成事実が

成り立っているとおかしくないと玲は断言する。

……………どう考えても判断材料がまだ少ないと思うのだが。

「いやいや待ちましょうよ吉井先生、まだそっという行いを

したと決まっては――」

「年齢的に間違ってるだア？ 違うな間違ってるのは鈍兄じゃねエ

――法律だ」

「待ちなさい！！？ 何処行く気！！？ 何する気！！？」

「国会と裁判所、その他もろもろの施設を襲撃して話して（脅して）くる」

「……百合子、ついでに結婚可能年齢の改善もお願い」

「マテ翔子！お使いのついでに頼むかのように恐ろしいことを

依頼してるんじゃないええ！！」

百合子は時々、ねじが飛んだようにバカになる時がある。

——ある意味では流石は双子と言うべきなのだろうか。

「落ち着くのじゃ皆の衆、まだ葉月の意見を聞いておらぬぞ」

「えっと、トイレに行った後で部屋を間違えちゃって——」

「……偶然にしては出来すぎな気がするわけだが、仕方ねエ。

普通に監視カメラで確認すつか」

「最初からそうしなさいよ」

「ふらふらしてるから寝ぼけてるのは確かね……あ、坂本君が寝返りうつて

吉井君に一撃を」

「わざとじゃないからな、わざとじゃないからな！」

「起きてる時ならいざ知らず、寝てる時まで干渉しねエから

安心しろ」

「ならばその骨を鳴らすのは止めぬか」

バキバキと明らかに折れてるような音もなっているが、どういう理屈で

鳴らしていたのだろうか。

「葉月ちゃんが巻き込まれてすっ転んで吉井君の上に」

「あ、吉井君が坂本君に殴りかかろうとして拳を握ったら葉月ちゃんの服まで

巻き込んだじゃいました」

「……………蓋を開けてみれば偶然に偶然が重なり合っただけじゃねエか」

「そうね……………ってあ」

優子が見た光景、それは明久が乱闘が終わった後で葉月を抱き枕を抱くように抱きしめる光景だった。

「はっはっは、明久、言い逃れ出来ない状況だな」

「……………実は雄二が私を抱き枕にしたVTRが」

「セーフだ、抱き枕代わり程度ならセーフだ」

明久をからかおうとしたら自分にも飛び火してきた為か、
あっさりと言動を撤回する雄二……たまに泊まりに来る時に
何があったのだろうか。

ちなみにVTRを編集したのは百合子。

「……………夢だと思ったんだ」

「やっぱ法律変えてくる」

「ストップ、まだ完全に手を出してるわけじゃないんだし、犯罪
でもないんだから

セーフよセーフ……………ところで吉井君、夢だから抱きしめたっ
て事は

葉月ちゃんの事気になってるって受け取っても良いのかしら？」

百合子を止めつつ、明久に向く優子。

百合子が本気でないからこそ止めれると分かっているので、
明久に向く余裕があるのだ。

「え？あ、うーん……………」

「真剣に悩むことなのか」

「えっと、好きの感情がどの種類なのか把握できてなかったり……
…」

「一緒に居たいという意味の”好き”と小動物を可愛がる類の意味での

”好き”で迷ってるってどこか？」

「多分」

どう考えても年齢が問題あるとしか思えない。

葉月がもう少しだけ……例えば中学生に該当する年齢であればまだはつきりと分かりやすい感情になっただろうが。

小学生という年齢に囚われて正確な感情の判断がつかない状況なのだ。

「……あんまり急かすのもアレだし、鈍兄はソレ宿題な……まア、今は

テスト勉強に集中しようぜ」

何やら微妙に重い空気になった為、話を変える為に、今行っている合宿の

主要目的である勉強に入りだす百合子。

二名ほど浮かない顔になりつつも、勉強する態勢に入った。

「秀吉」

「ワシの意見は参考にならぬぞ」

「雄二」

「こっちも参考にならないと思うが」

「万策尽きた」

男子と女子に分かれており、百合子は今現在質問に対する問だけに専念し、問題を適当に作成中。

「どオした、葉っぱ娘。数学がたった342点しか取れてねエぞ」

「あう、天才のお姉ちゃん」

「残念だが、色恋沙汰は専門外だ、私の経験じゃア役に立たねエだろ」

「……………私も同じ」

「万策尽きたです」

約二名ほどが勉強に集中できておらず、別のことを考えていた。

明久は自分の感情について、葉月は本心ではどう思われているのかについて。

この中で正式な恋人関係にあるのは百合子と秀吉のカップルだけだが、

何故だか、付き合いだてホヤホヤのバカカップルではなく、何故か倦怠期の真っ只中の

ような様子であり、参考にならない。

雄二と翔子も一応カップルだが少しタイプ違いのカップルであるのか、

助言を出せるような位置には居ない。

そして、そもそも他のというか、優子は経験どころか相手の候補すら居ない。

「いつその事、お試しで付き合ってみれば……」

「葉月よ、それは止めた方が良いぞい」

「そうよ、秀吉と百合子が偶然成功しただけで、普通は長続きなんて

しないんだから」

「吉井の気持ちが始まるのを待つほうが良いわよ」

「そうですよ、幸いにも葉月ちゃんは私や美波ちゃんと違って好意が

伝わっている状態ですし」

「え？他にも僕に好意寄せてた娘って居るの？」

「「……………」」

「最低でも葉っぱ娘以外に四人は居るな、いや居”た”な」

二人は戦線離脱。

一人は未だに告白のシュミレート止まり中。

そして、もう一人は葉月が奮闘中なので自重中。

「ま、恋人でもなく告白したわけでも無エのに嫉妬心全開で拷問加えるなンぞ、遠まわしに嫌いと言ってるしか見えねエしなア」

「もう許してあげなさいよ」

「そういえば、愛子と土屋君は？」

「あ？別の部屋で保健体育の実習をしてンぞ」

葉月・翔子を除く全員が噴出した。

葉月は意味不明気味に翔子は事情を知っているの。

「マッサージのつぼの箇所の確認を私がテキストに書き漏らしたから

疲れをとるのを兼ねてやらせてるンだよ」

普通に考えて保健体育でそんな事はやらないだろうが、気にしてはいけない。

「あ、ああマッサージね」

「そうですね！分かってましたよ！」

「だが、問題はどっちがやってるかによるんだが……」

「あ？確か土屋が工藤に対してだったなア」

「あー、吉井さん、終わったよー」

「……………順調に作製できた」

「そおか、端に付着してる血については突っ込まねエぞ」

空気が変わった為か、一旦葉月と明久の気持ち関係は保留となったが、

今度は工藤と土屋のマッサージの様子になり、昼食の時間になるまで

少々波乱があつたのは当然の事かもしれない。

問：37 期末考査・5（後書き）

期末考査はまだ先！

ちなみに明久は名前ミスをしないので、原作よりも点数上になる
予定。

—— さあ、そろそろ明久と葉月をくつつけるか。

次回もお楽しみに！

問：38 期末考査・6

勉強合宿は順調に続き、その後に問題が起る事無く一時帰宅。そして、今日ついにテスト初日に入った。

「百合子」

「あ？どうした愚兄」

「懐かしい呼び名だねそれ」

明久に想いを寄せていた二人の女子が戦線離脱したことを確認した為、

明久と交流のある者でかつ好意を持ち、実の姉を除き、明久自身が好意を

知っている人物しかいなくなったので、呼び名が戻った。

「やっぱりコッチの方が呼び慣れててシックリくらア」

「過去の僕に殴り込みを仕掛けたい」

響きがかっこいいと思ってしまった過去の自分自身を恨んだ。

「それよりどオしたンだ。朝5時に起きるなんざ愚兄らしくねエ」

「誰かに言って決意表明をしておこうと思って」

「決意表明だア？」

眠気覚ましとは関係無しにコーヒーを飲む百合子。
ちなみに玲はこんな時間から何故か学園……。

「テストが終わったら葉月ちゃんに告白しようと思うんだ」

「ブウフオ!!?」

テストで好成績を残すというと思っていた百合子、実際に明久の口から

出てきた言葉は予想の斜め上だった。

あまりにも予想外の一言に百合子はコーヒーを噴出した。

ちなみに噴出した一撃は机を貫通していた。

「く終わったら」系統の死亡フラグであるとか、ロリコンであるとか
いろいろんな事が

百合子の頭を過ぎったが。

「テストはどオした」

「うん、だからテストに集中できるように誰かに話しておきたかったんだ」

「……………それなら昨日帰った時にでもまとめときゃアよかっただ
ろオが」

「あ」

一晩分の時間を無駄にした事に気がついたのだが。

「でも、本当に悩んでいたわけだし……………だから」

「はア…………ま、世間の目は厳しいだろオが応援しよう。

ま、成功する事は火を見るよりも明らかかなわけだが」

「ありがとう百合子」

「…………いざとなりやあ、法律変えてでも」

「落ち着くんだ百合子、それは駄目だ」

健全な付き合いであれば文句は言わないだろうし、
付き合っていると知らなければ兄妹が歩いているようにしか見えない
だろう。

「よし、最初のテストは何だ！」

「来て早々凄いやる気ね」

「…………何か他にも目標が出来た？」

「さて、な。ま、それよりテストだテスト」

——教室に有り得ないほどのプリントを運び込んできた英語教師にほとんどが百合子や翔子に消費されるのか、と生徒達は遠い目をしていた。

英語

【Don't / my eyes / I / close / .を正しい順番で並べ替え、

一つの英短文を作り、日本語に訳しなさい】

【次の日本語を英語に訳しなさい。

a . あなたは今まで食べたパンの枚数を覚えていますか？

b . あなた達が戦う意思を見せないのであれば、私はこの星を破壊します】

Aクラス

（この問題どこかで……………ああ、百合子の問題集に載ってたな）

（ちょっと……………八割方百合子の問題集の問題じゃない！）

（あはは、テスト問題を先に盗み見た気分だよ）

Fクラス

（複雑な気分じゃの、筆がスラスラと進むぞい）

（ある意味合法的カンニングだなこりゃ、というか問題がおかしいか）

（（坂本と木下、ムツツリー二の解く速度が早い……カンニングか！！？））

今回百合子はペン戦法ではなく普通の書き込みを行っていた。

ベクトル操作によって力加減や摩擦の力を散出させて、人間には決して出せるはずの無い

スピードによる書き込みと、問題が出た瞬間に頭の中で演算が終わり回答を書き込んでいく。

翔子は翔子で力加減の調整を覚えているのか百合子ほどではないが、かなりの早さで問題を

解き進めていく。

それによりAクラスでは二名の人物が書き込むスピードが半端なくテストが終了する頃には

大量にあった山が、二名の生徒により壊滅していた。

数学

【次の問題を計算しなさい。

$$a \cdot 1 + 1$$

$$b \cdot (x + 5) (x - 4) (x + 2) \text{】}$$

【素数を二十番目の数まで羅列せよ】

Aクラス

(最初の問題嘗めてるですかー！ー！)

(そうだ、素数を数えて落ち着くんだ……2、3、5、7――)

Fクラス

(問題集には載ってなかったな……ていつか普通載せないか)

(そもそも間違える者などおらぬしのう)

((素数は、1・2・3・5・7……))

初歩的な足し算はまだしも、その後の素数で致命的なミスを起こした生徒多数。

Aクラスは相変わらず壊滅状態……おまけに今回は葉月も力を発揮し、

更に消耗率が跳ね上がっていた。

社会

【クラス： 名前：】

【天下無双と呼ばれた三国志時代の武将の名を書け】

Aクラス

（何でだろう、何故かここで名前欄にアレクサンドロス大王って書きそうになった）

（うう、百合子って書きそうになったわ……………時間のベクトルって操れるのかしら？）

Fクラス

（呂布、と…………ある種のサービス問題じゃな）

（（（吉井百合子）））

（何故かクラスの大半が百合子って書いてるような感覚が）

テスト、終了！

「職員室を少し覗いたが、紙で埋め尽くされていたぞ」

「本当に自重してなかったわ」

一枚辺り百点の答案用紙が一時間で100枚以上一人の生徒で消費されるとは

夢にも思わないだろう。

おまけに数学の時間が絶対地獄だった、と数学担当教師は語る。
参考までに保健体育では土屋や工藤が五・六枚だった。
そして、普通の人間は平均で二枚……よくて三枚である。

「ま、普通的方式でいきやアあれが限度だな、今回は遊び無しで
やったし」

「ガリガリじゃなくてガーーーーーって音だったよね」

音が鳴り止む前に音が発生し、途切れる事が一切無かったという。

「ま、総合科目十万以上はかてエわな」

「……私は多分1万6千点」

「何故だろう、百合子の点数を聞いた後じゃと霧島の点数が

可愛く思えるのじゃが」

「ま、まああくまで予想だし、少し低いんじゃないの?」

ちなみに勉強会参加メンバーは軒並み点数が伸びた。
特に苦手科目を克服できたのは大きいだろう。

「ところで、葉月と吉井は何処行つたの?」

島田と姫路はAクラスに秀吉・雄二とともに来ていた。
お礼を言つたのである。

「あア、愚兄が屋上に誘つてる筈だ」

「屋上に……？」

「まさか、告白？」

「いやいや、それは無い「正解だ優子」だ、ろ、う」

何となく会話を聞いていた交流の無い生徒達も絶句した。

Fクラスの数人が偶然廊下を通っており、当然そいつらもフリーズ。

「ふむ、放課後に屋上か……理由付けは知らぬが

シチュエーションとしては中々じゃの」

「一応、マイクを切って見るが、てめえらも見るか？」

百合子はからかう為ではなく、万が一誘拐が起きないかを心配して
みるだけ。

まったく他意は無い。

以外にも硬直が解けたのが早かったFクラス男子はすぐさまFクラ

又、に駆け込み、

定例会議中のFFF団に声をかける。

「すすすすすすすす S S S S S S S S S S 須川会長
おおおお!!！」

「どうした、近藤」

「よい、吉井明久が！島田の妹に告白するとの情報が！！」

FFF 団、フリーズ。

そしてすぐさま会議。

「……異端者だな」

「いやマテ、攻めようにも究極の迎撃戦力が居るぞ?」

「我々FFF団は暴力になど屈しない——！」

「でも、俺。中学の頃、吉井妹がヤクザの組を一人で壊滅させた光景を見たんだが」

「あ、俺は反董卓連合を一人で全滅させていた夢を見たぞ」

「前者はともかく、夢の話をここで出すのはおかしいぞ」

「諸君！静肅に！！」

須川の一喝によりFFF団のざわめきが消える。

これから下す判断に今か今かと待ちわびているようだった。

既に、百合子に対する恐怖感は何故か消え去った。

「今回は出撃しない」

『『『………どういう事だ！！須川会長！！』』』

「まさか、吉井妹に屈するのですか！！」

「違う！……あえて茨の道を突き進もうとする吉井の判断に敬意を表したまでだ」

「敬意？」

「そうだ……あの年の差ではロリコン扱いが関の山であり、世間の目が厳しいだろう。

ならば、我々が手を下すまでも無く世間という力で制裁が

加わる筈だ……それを分かった上で茨の道を突き進もうという

信念に敬意を表するのだ」

「会長………」

「だが、目の前でいちゃついたら制裁を加えるがな」

『『『全面的に同意』』』

最後の最後で色々と台無しである。

問：38 期末考査・6（後書き）

テストシーンが、短い。

そして、どうしてこうなった^^；

作者が早く明久と葉月を恋人関係にしたいくてムシヤクシヤしてや
った。

割りと反省しているが後悔していない。

——最後の演説もどきが詰まりに詰まって更新が遅れました。

おのれFFF団め（↑それはおかしい）

次回もお楽しみに……………さて、告白シーンをどうしよう。

問：39 明久と葉月と告白騒動（前書き）

もうテスト関係無くなったのでタイトル変更。

そして、最後の長文？を書いたのはきつと気の迷いです。

いますぐ少佐に土下座しなければ。

視点がころころ変わる為、空白多いので注意。

問：39 明久と葉月と告白騒動

「馬鹿なお兄ちゃん、屋上に来て話ってなんですか？」

「えーつと良い天気だよね」

「曇ってるです……………あ、急に晴れていました」

空はあいにくの曇り空だったのだが、急速に有り得ない速度で晴れていった。

「……………お疲れ様」

「クソツタレ、楽じゃねエなア雰囲気作りも」

秀吉や土屋が読唇術で読み取り（前者は役者・後者は不明）、百合子が地球の自転ベクトルを数秒間奪ってまで雲を吹き飛ばしていた。

「む、話が始まるぞい」

「葉月ちゃん、君が好きだ!」

「「「「直球だ――!!?」」」」

「……………私の時と一緒に」

「原稿用紙十枚分の告白文考えてたって―のに、緊張で
度忘れしやがったんだよなア」

今日の時とは違い、中学の頃の噂の告白スポットに呼び出して、夕焼けが綺麗に映る時間帯に呼び出しての告白だったのだが、てんぱり過ぎて今日の時と同じ台詞を言ったのだ。

「原稿用紙十枚分！！？」

「あア、一ヶ月かけてしかも前日には丸暗記していたんだけどな」

「完全に黒歴史モノじゃねーか」

「……ちなみに読ませてもらった」

「読んだのかよ」

「ははははははいー！！？」

葉月は一時停止状態に陥っていたが、先ほどの明久の言葉を思い出して、

思考回路が直接焼かれたような錯覚に陥る。

頬は紅潮———それどころか顔全体が真っ赤になっている。まさか告白されるとは思ってもみなかったのだろう。

流石に屋上での告白というシチュエーションは知っているのだが、明久の方からしてくるとは予想だにしていなかった。

「ええええええ、えつとととと、私は鋤じゃないです!!?」

じゃ無くて……あつうつうつ」

「……………」

ちなみに明久は混乱している葉月の返事をさつきからずっとまっている。

微妙に頭の回転が良くなっているようで「私は鋤じゃないです」をきちんとした

意味で捉えていた。

本来だったら「私は好きじゃないです」と勘違いしていた事だろう。

「……………58603……………59219……………10
4729!!!!」

ふう……………馬鹿なお兄ちゃ……………明久さん!!」

「!っん」

「結婚を前提にお受けします!!」

「え、あ……………不束者ですがよろしく願いします!!」

「……………おかしいな、会話が」

「……………恋人じゃなくて婚約になってる」

「一種のコントになっとるのじゃ」

馬鹿にするような意味での笑いは無いが、微笑ましい者を見る笑いで構成されていた。

「って吉井君から告白したのに何で最終的に吉井君が承諾してるの！！？」

「気にしたら負けだ」

「あれ、切っちゃうんだ」

「これ以上見るのは野暮だろオが」

その代わりに屋上へと続くすべてのルートを映し出していた。万が一明久を狙う者が居ても対処できるように。

「あ？何だこの一団……FFF団か？」

「違エな、格好はそオだが動きが統率されすぎてンぞ。向かう先

は屋上……?」

「吉井明久ああ!!」

「ひゃわ!!?」

「え!!?」

黒尽くめの怪しい格好をした集団が入ってきた。

FFF団かと思っただが、頭巾の頂点部分にFではなく、【LC】
【paedo】【CM】と三つの集団に刻まれている。

「貴様、われらのアイドルに何たる事をしようとしているのだ」

『『『そうだそうだ!!』』』

「え、え?ええ!!?FFF団の皆さん……じゃないです」

「われらをあんな低俗な集団と一緒にするな!!」

格好だけ見ればどっちもどっちなのだが、明久はさっきから頭の

イニシャルが気になって、突っ込まなかった。

「おい、須川ア居るかア？」

「ん、どうしたんだ吉井妹。告白妨害なら向かわないぞ？」

「……………お前らじゃ無さそオだな、全員揃ってやがる」

「はあ？」

「我らは穢れ無き幼女を敬い、崇拜し、愛でる集団である。

その名も”Lolita Complex”」

「同じく” paedophilia”」

「そして” commercial”」

「一番目と二番目はまだしも、三番目は何だ!？」

「違います総長” child molester”です」

「ひい!!？」

三番目の集団の名前を知った途端、意味が分かったのか葉月は明久の後ろに隠れた。

その行為からろくでもない意味だと察した明久が、葉月を安心させるかのように

半身状態で葉月を抱きとめて集団を睨む。

人数は15名ほどで、それぞれ5名ずつに分かれている。

「で、何のつもりなんだ」

「決まっている、天才美少女の葉月ちゃんを学園の面汚しのバカが

汚そうとしにきたのを阻止する為だ」

「てめエら、これ知ってるか？」

「ん？こ、これは……！！？」

「今話題沸騰中で全国レベルの知名度を誇るアイドルのメイド姿写真だとおおお！！？」

「ちつと、今日はめでてエ日なンでな。あんまり血の結末で終わらせたくねンだわ。」

「他にも表やムツツリー二商会に出回らないようなレア写真がある」

「……………依頼内容は？」

「屋上に向かった馬鹿な集団を殲滅して来い。人数は最低十五。」

愚兄と葉っぱ娘に危害が及ばないように向かえ。

その写真は前払いだ。

成功すれば先ほど言った写真を十種類、倒れた奴にも与えてやる」

一も二も無く承諾していた。

「諸君、我々は幼女が好きだ

諸君、我々は幼女が好きだ

諸君、我々は幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

幼女が好きだ

アメリカで 日本で

イギリスで ドイツで

オランダで ロシアで

フランスで イタリアで

エジプトで 中国で

この地上に存在するありとあらゆる幼女が大好きだ

幼稚園に向かう時にならんだ幼女の一斉行動を遠くから眺めるのが好きだ

高い高いで空中高く放り上げられた幼女が喜びの声を上げる時など心がおどる

水鉄砲の打ち合いでビショビショになるのを眺めるのが好きだ
悲鳴を上げてお化け屋敷から飛び出してきた幼女を
母親が抱きとめる時など胸がすくような気持ちだった

手を挙げた幼女の一団が道路を横断するのを見るのが好きだ
半泣き状態の幼女が既に抵抗しない親を何度も何度も小突いて
いる様など感動すら覚える

手にぶら下がるうとする幼女を高い位置に吊るし上げる様ななどはもったまらない

泣き叫ぶ幼女達が一人の大人に軽く押されてばたりと尻餅つくのも最高だ

諸君、私は肅清を……幼女を汚そうとする者に対しての地獄の

様な肅清を望んでいる

諸君、私に付き従う小隊戦友諸君……君達は一体何を望んでいる？

聖なる肅清を望むか？

情け容赦のない糞の様な者を滅ぼす肅清を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界のゴミを殺す嵐の様な肅清を望むか？

『『『肅清！！幼女！！護衛！！』』』

よろしい、ならば肅清だ

我々は満身の力をこめて今まさに裁きの鉄槌を振り下ろさんとする握り拳だ

大肅清を！！一心不乱の大肅清を！！

我らはわずかに一個大隊 15に満たぬ敗残兵にすぎない
だが諸君は 一騎当千 の古強者だと私は信仰している
ならば我らは我等で総兵力は一万と五千の軍集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり、軽蔑する連中を無視しよう

幼女を汚す愚か者どもの髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開かせせ思いしらせよう

愚か者に恐怖の味を味あわせてやる

愚か者に我々の肅清の恐ろしさを思いしらせてやるのだ

さあ征くぞ、諸君………肅清だ」

「く！？」

『『『そうはいかんぞ！！』』』

長い演説に呆気にとられ行動が遅くなりもはや逃げられないから腹をくくる明久だが、

扉が開き、そこにはFFF団の姿が現れた。

「薄汚い屑どもめ、何をしにきた」

『『『うるせー、あんな演説をする奴らに薄汚いと言われる筋合いは無いわー！！！！』』』

そのまま数に物をいわせて15の集団に突貫していくFFF団。
何がなんだかわからないがチャンスだったので明久は葉月を連れてその場から立ち去った。

「……………明久、おかえり」

「えっと、ただいま？」

「FFF団が全滅した」

「しかも14人も残っておるぞ」

「意外と強エな、おい」

確かにあの演説の内容の一部は誇張表現だろうがそれなりに意味を持っているらしい。

『何をしておるか貴様らーーーー！！！！』

『何！？鉄人だとーーーー！！！？』

『さっきの演説が全校放送されてたぞーーーー！！』

阿呆である。

これで世間体はほぼ死んだに違いない。

「最初から鉄人を呼んどけよ」

「変態には変態をぶつけたかったただけだ」

そう言いながらも百合子はササッと写真を封筒詰めにして、Fクラスの名前を書いていた。

失敗しても参加すれば与えると言ったので、その約定を果たす為である。

問：39 明久と葉月と告白騒動（後書き）

明久と葉月交際成立！

後は少しだけこの騒動が継続して、

次は夏休み突入！！

オカルト騒動編・開始です。

問：40 明久と葉月と告白騒動・終（前書き）

投稿ペースが早くできない。

中々ネタが浮かびませぬ……三日以内投稿から何回も遅れましたが、

投稿です。

問：40 明久と葉月と告白騒動・終

「あのあの、明久さん。大丈夫なのですか？」

「うん……今まで貯めていたお小遣いが残ってるし、今日少し貰ったし」

その後、すぐにデートに向かった明久。

葉月と明久の荷物はそれぞれ島田と百合子が持って帰ることになり、二人は制服デート中。

ちなみに明久は百合子にデート資金だと言って五千円ほど渡してきた。

あまり多く渡しても困ると言った事があるのでその影響だろう。一瞬だけ小切手を出そうとしていたのは気のせいだと思いたい。ちなみに喫茶店の名前は「ラ・ペデイス」

入店までに少し騒動があった――

「いらっしやいま――吉井明久あ――!!?」

「あれ？ここって清水さんの家なのですか？」

「あら、吉井君に島田ちゃん、いらっしやい」

入った瞬間、ウェイトレスに驚かれた。

丁度アルバイトでもしていたのか、玉野の姿も見受けられた。

「みみみ、美春は他のお客様の相手をするので玉野さんよろしく
おおおお

お願いします」

そのまま他の客に対応する為にそそくさと退散して行った。

「えっと………」

「お二人様ですか？」

「あ……はい」

それを聞きながら、それなりに空いている席で禁煙席を探してそこに案内される。

「では、注文が決まり次第お呼び下さい」

「はい」

「ところで何で二人だけで来たの？」

「え、えっと………」

「葉月と明久さんの初めてのデートだからです」

玉野の体勢が若干崩れ、少し離れた場所では他の客が会話が聞こえていたらしく、

その席を見て口に含んでいた飲み物を噴出す事態に陥っていた。

「アキ……じゃなくて吉井君！それ本当！！？」

「今、何を言おうとしたの玉野さん！！？」

何故だかアキちゃんという言葉が耳に入ってきて気が動転する明久。ちなみに数名の客が何故か110に連絡を入れていたが、警察は来ない。

「もしもし、店にロリコンが！！！」

「——いきなり何を言っているんですか——」

「本当です！！【ラ・ペディス】という店に小学生ぐらいの少女に

学園の制服を着せた高校生ぐらいの少年が店に入ってきてるんですよ！！！」

明久が変態扱いされていて（世間的にみればそうかもしれないが）、葉月が

席を立て慌てて止めようとする。

「そうです！確か男の方は吉井という苗字で……………」

『この電話は現在使われておりません、まことに残念ながら

吉井という方に関して警察では対応しておりません』

『対応してないってどういう事だ――！！！！……ん？吉井…

……

すいません、冗談です冗談、あっはっはっは』

何があつたのだろうか。

「署長、吉井という男が小学生ぐらいの少女と交際しているらしいです」

対応はしていないが一応、上司に連絡を入れる部下。

「交際しているぐらいじゃ警察は動かんし……」

吉井明久であるならその少女と交際していても馬鹿だが節度ぐらいは

守るだろう」

「署長、本音は」

「……世界の命運と天秤にかければ些細なことなのだよ」

「……………規模がでかすぎて冗談に聞こえるんですが」

「へー、吉井君から告白したのねー」

「うん、まあね」

「そして何故か色々と思回路が吹っ飛んで婚約になったの」

「は、はい」

一瞬、玉野の脳内に光源氏計画という単語が浮かんできたが、いくらなんでも明久が実行するとは思わないので即刻打ち消した。

「恋人同士であるならカップル限定メニューにしますか？」

「んー、じゃあそれで……少し高いな」

そして、冒頭に返るのである。

「じゃあ、店長ー、カップル限定セット入りましたー」

大声で言いながら厨房辺りに駆け込んでいく玉野。
何故だか、フライパンで人を殴ったような炸裂音が鳴り響いてきた
が気のせいだろう。

「さて、どんなものかな」

「うーん、ハート形状の物がたくさんあると思うです」

「後は、飲み物がストローが共用タイプのものだったり」

メニューが来るまでそんな事を考えながらのんびり待っていた。
ちなみに葉月の両親には遅くなる旨と夕飯がいらぬ旨は伝わっている。

そのまま十数分後。

「お待たせしましたー」

「本当にハート形状の物が多いよ」

「よくみたらご飯粒までハートです……」

手が込んでるにもほどがある。

カップルだけが大勢来店した場合かなり厳しいと思うのだが。

「大丈夫よ、その部分は私からのサービスだからね」

「玉野さんが？」

「私なりのお祝い」

余り面識の無い人物に祝福され、少しくすぐったい気持ちになっていた。

『吉井と義妹が婚約………は！？てことは美春がお姉様と結婚し

たら

悪魔の吉井が義妹に！！！？』

それは有り得ないと思うが、清水は恐怖で振るえ、勘違いした父親が暴走し、

玉野がフライパンで殴りつけた。

「なんというコンボ」

「ところで明久さん……食べるのが勿体無いのですが」

特にご飯部分が手間が掛かっているのが分かっているので食べづらい。

「記念写真、撮っておこうか」

「そうですね」

カメラは持ってなかったなので、携帯で撮影し、保存しておいた。

「百合子」

「なんだ秀吉」

「ワシはマナーは余り気にせぬし、箸の持ち方だったりフォークやスプーンについては

言及しないのじゃ」

明久と葉月のデート中、百合子と秀吉もデートを敢行。

焼肉屋で煙をベクトルで皮膚などに掛からないようにしており臭いが服や皮膚に付く可能性はほぼ無し。

「じゃが………アツアツの肉や野菜を!!」

素手で引つ掴むとはどういうことじゃ!!

せめて道具を使わぬか!! 熱いじゃろ!!!!」

「必要な熱量以外は反射されっから火傷の心配はねエぞ?」

「百歩譲ってそれはよしとする……真似する者が続出しておるのじゃ!!」

他の席を見てみれば、子供が親に必死に止められていたり、少し頭の悪い者達が真似をして肉や野菜が空中を舞ったりと大変な事になっていた。

秀吉もあまり気にはしない方だったのは自分でも言っているのだが、微妙に機嫌が悪いのには理由があった。

『なあなあ、そこのお嬢さん達い！俺たちと一緒に食わないかあ？』

『二人とも可愛いね？そこのお嬢ちゃんは何で男装してるの？』

またである………この焼肉屋に来るまでに二十組、入ってから席に向かう途中で三組。

そして、今のもあわせて食事中に訪れたナンパは六組目である………しかもその内の一組は移動中に声をかけて断ったはずの男であった。

「ワシは男じゃ」

「秀吉とは恋人関係だ、さつさと向こうにいけ」

そう言つて、さつさと肉を焼く百合子。

『おいおい、つれないねー……男っぱい名前つて萌えるね何か』

『そつちのお嬢さんの名前はなんなのかなー？』

「吉井百合子だ」

そう言つて机を軽く叩き、肉や野菜を宙に浮かせてひっくり返す。名前とその光景を見て恐れをなしたのか、ナンパ達はイソイソと退却していく。

「しっかし………全裸で歩き回らせねエと完全に女扱いじゃねエか？」

「変態にはなりたくないのじゃ………どうしたものか」

さっきから聞こえてくる会話の中に百合やらレズビアンやら明らかに百合子達の方角を見て話しているのが多数ある光景を見て百合子や秀吉が眉間に皺を寄せる。

とりあえず百合子は箸を使うようになった。

「あれ？百合子、帰り？」

「愚兄か……まア、秀吉とデートしたからその帰りだ」

実は途中、上空で明久を発見し時間帯が時間帯であるので、念のため護衛用に降りてきた。

「百合子？何か悩み事？」

「秀吉の女扱いに関してどうしたモンかなアと」

「ああ…………それは凄い難題だね」

その後、二人とも無言になり、家への帰路をゆっくりと歩いていく。

月明かりの夜、静かな雰囲気で歩く二人はカップルに見えなくもない。

もともと双子なので当然ながら、恋人ではないのだが。

「…………百合子」

「なんだ？」

「秀吉のこと、好きなの？」

「…………嫌いじゃア無エな」

そう言つて月を見上げる百合子。

満月になつており、月の光の中で一番輝く状態。

その光を見ながら百合子はかつて好意を抱いていた対象の西村教諭と秀吉に関して比較する。

——ガタイの良い漢に対し、女子に見えて第三の性別の”秀吉”とまで呼ばれている。

——高橋教諭に匹敵する天才頭脳に対し、Fクラスでようやく上位。

——体育会系に対して基本的には文科系。

「わっかんねエなア、ほぼ正反対じゃねエか」

「そーいや百合子の初恋相手は鉄人だっけ」

「オオヤケじゃアな」

「え？」

「なんでも無エ……ところで夏季補習はどオすンだ？」

「参加する予定だけど……というより実際にはAクラスで受講って形で」

「ま、最後の方にはでっけイベントがあっから退屈だけはしねエと

思っぞ」

予定を確認しつつ、どんなことが起るのか楽しみで仕方ない顔で笑う百合子だった。

問：40 明久と葉月と告白騒動・終（後書き）

次回から肝だめし編。

明久が組む相手は固定・百合子も固定。

………優子は誰と組ませよう^^・次回もお楽しみに。

問：41 肝試し編・1 開幕の前（前書き）

肝試し編スタート！

まだ判明させるのは明久と秀吉だけ。

ちなみに翔子・工藤・優子はAクラスで夏期講習の受講中。

問：41 肝試し編・1 開幕の前

夏真っ盛り、七月もあと僅かという時期に蝉の鳴き声や入道雲、アイス売りのおじさんの大きな声が響き渡ってくるいつもの道路。

海では海開きも終わって泳いでいる家族や恋人達が夏休み特有のひと時を過ごしているだろう。

もしくはナンパを行って出会いを求めている者もいるのかもしれない。

（というわけで脱走をしよう）

（ああ、そうだな……教室自体の暑さに加えて冬に見ても暑苦しい鉄人を

こんな時に見るなんて正気の沙汰じゃないぜ……おまけにあの一带は特に

見ていて暑い）

「明久さん、あの字は何て読むですか？」

「えっと、”ていこう”って読むんだよ、あの字は」

明久と葉月、所属する教室はAクラスだが、明久は成績自体はFクラス。

葉月も数学で補っていてAクラスであるもののそれ以外は壊滅的に自主的にFクラスの補習に参加。

ちなみに百合子の姿も見えており、黒板の字をノートに書きつつも

う片方の手で

団扇を適当に回していた。

明久と葉月は同じ机を使用しており、おまけに葉月は明久の膝の上に乗って

勉強している状態。

少々独特な空気を発しており、Fクラスの教室には似合わない甘い空気なのだが、

見ている者は熱いじゃなくて暑い。

「——ここで元の高さを h とした時、位置エネルギーが全て

運動エネルギーに変換されたとするとこの時の速度 V は——」

教科書を開きながらも若干注意をしている者が居るのか、警戒を怠っていない西村教諭。

（おい、てめえら何してんだ？）

（止めるなよ百合子、俺達はこの教室からの脱走を計ろうと——）

（ンなに翔子に会いたいなら休み時間まで待てばいいだろ）

「それは違う！！？」

『『『坂本——！！！！！！脱走の理由はそれか——！！！！！！』』』

百合子の言うことについていっさい大声で反応してしまい、他のFクラスは、

大声を上げたことではなく、百合子のいう事を真に受けて異端尋問会を開く。

が。

「静かにしろ！」

当然、今は授業中である上に担当しているのは西村教諭である。

「貴様ら、授業放棄とは良い度胸だな……お前らがそこまで退屈している

とは気がつかなかった。

これはつまらない授業をしていた俺の落ち度だな」

西村教諭の意外ともいえる言葉にFクラス全員がきよんとする。

ちなみに百合子は既に察知しているのか、鉛筆を机に置き、教室に居る明久、

秀吉・葉月・島田・姫路の位置を探って音の振動を伝える為の通路を遮断する為の空気を制御するようにベクトルを操作する。

「侘びといったてはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやろう」

一体全体なにが始まるんだ？という空気と急に音が聞こえなくなって戸惑う数名が印象的だった。

「そう。あれは十年以上前の夏――」

ちなみに百合子は音を聞き取るようにしている。

「——俺がブラジルの留学生とレスリングをやっていた時のことだ」

『『『ギヤああああアア！！？』』』

話の終わりを探る為である——それに耐性はある。

耐性の無い者は暑苦しい言葉で精神をやられた——

暑苦しい環境の教室に暑苦しい話レスリング談義をし始めるなど、処刑や拷問と同じだ。

話も悲鳴も聞こえていないが、動作によって察したのが明久・島田・秀吉は

苦笑を浮かべている。

葉月と姫路は意味が分からないといった感じだ。

「相手は身長195cm、体重120kgの巨漢、ジョルジーニョ・グラシエーロ。

腕の太さは女性のウェストぐらいはありそうな男だった。

だが、俺とて負けはしない、188cm、97kgの鍛えに鍛えた肉体で奴と

正面から激突しそのまま——」

『やめろ！やめてくれえーっ！！』

『脳が、脳が痛えよー』

阿鼻叫喚の地獄絵図……精神の崩壊する音ががらと聞こえてく

るようだ。

「しかし、奴はレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひしぎを

」

『目を閉じれば最悪の場面が写る————!!』

『誰か、助けてく……れ……』

既に死屍累々、生き残っているのは片手でも数え切れるほどしか残っていなかった。

「——そして、制限時間一杯まで使った——なんだ、もうダウんしたのか」

意識を保っているのは雄二だけだろう……その雄二もかろうじて、という状態なのだが。

「やれやれ仕方が無い。十分間だけ休憩を入れましょう。」

大声で私語をした自分達を反省するように」

「小声ならいいのかよ」

そう言いながら百合子は話が終わったので先ほどの音の層を切り替える。

ようやく明久達に日常の音が戻ってきた。

「あの、坂本君。何があったのですか？」

「皆さん苦しそうにしてみましたす」

「はっはっは……言葉の体罰というか精神攻撃というか、とにかくそんなものだ」

言葉で説明しようとするれば先ほどの話を鮮明に思い返さなければならぬ。

それはさすがに勘弁して欲しいのだろう。

「まったく、西村先生の補習中に大きな声を上げるからよ。」

先生だって怒って当然じゃない……しかも脱走しようとしてたみたいだし」

生徒のほとんどが大声を上げた拳句に脱走を企てていた事を暴露したのである。

普通にとって当然かもしれない。

「そうは言うが……体中の水分が枯渇して干からびるぐらい酷いんだ。」

脱走を企ててもおかしくないだろ」

「そうなの？ウチの席はそこまで暑くないからわからないんだけど」

「私も柱の影ですし、結構風通しはよかったですよ？」

何処かの誰かが風のベクトルを弄っていたのだが、誰も気がついていない。

「そうは言ってもだ……俺のところも風通しが悪いにも関わらず風通しが良かったのは

僥倖なんだが、それ以上に日当たりが最悪なんだよ。

本当に酷いと言いたいようが無いぐらいにな」

「酷いつてどれぐらい？」

「百合子の成績の真逆だ」

「人間に耐えられるレベルじゃないわね」

「……………もつてめエに風を送ってやんねエ」

この日、雄二は地雷を踏んだ。

百合子は聞こえないほどの声量で呟いており、誰も聞こえるはずも無い。

「ところで雄二、康太が死に掛けてるんだけど」

「ああ、康太の想像力は常人の比じゃないからな。

さっきの恐ろしい話……………って聞いてないんだっとな。

暑苦しいレスリングの話を聞いてその内容が鮮明に脳内に

写し出されたんだろう」

「それは……ひとたまりもないね」

話の内容は聞いてはいないが、予想は出来るのでその話を再現した土屋の

脳に同情した。

想像力の豊かさが仇となり脳を焼き尽くすとは恐るべし。

「そういや、召喚獣の武具の更新があつたみたいだが、どうなってるんだろうな」

その話を聞き百合子が眉間に皺を寄せる。

その様子に気がついた明久がすかさず突っ込む。

「百合子、何か知ってるの？」

「……あー、今日の放課後に発表があるんだが……」

武器の更新自体には問題ねえ」

「……ほう、召喚獣に何か細工でもあるのか？」

「はア……仕方ねえ、百聞は一見にしかずだ。召喚してみろ」

目で西村教諭を見ながら雄二の腕輪を指差しさっさと召喚しろと手で促す。

「じゃ、僕が召喚してみるよ」

「んじゃ、試してみつか……起動！」

雄二の喚び声に反応して白金の腕輪が起動する。
教師以外でも召喚獣を喚び出せるフィールドの出来上がりだ。

「召喚獣召喚！」

明久の召喚、おなじみのキーワードと共に魔方陣のような幾何学模様
様が浮かび、
召喚獣が召喚される。

「あれ？」

「随分と贅沢な装備になったな……どれだけ点数を上げたんだ？
甲冑装備に——」

「剣ね、木刀よりも強くなってるじゃない」

「背も随分と大きくなってますね」

「わわ、明久さんの召喚獣さん、格好良いです！」

「ところで試験召喚戦争が本物の戦争になると思うのじゃが」

確かに、今までも血飛沫などが飛び交う戦争だったのだが、デフォ
ルト状態であつたので

少しだけ現実的ではなかったのだが、これでは実際に戦争をしてい
るようにしか見えないので、

厳しい人には厳しいだろう……もしかしたら戦死以前に保健室送り
になる人が発生するかもしれない。

「見れば見るほど明久そっくりだな、そりゃ」

「あ痛っ」

雄二がしげしげと眺めながら、パソコンと明久の召喚獣の頭を小突くすると、叩かれた頭は胴体からはなれていき重力に従い転落、そのまま暫く

転がっていき、机の脚にぶつかった。

絶句してみる明久達を前にしながらそのまま少しだけ回り明久達を見た状態で動きは止まった。

「『きゃあああー！！？』『』」

「えええー！！？何これ！僕の召喚獣がいきなりお茶の間にお見せ出来ない姿に

なってるんだけど！！？」

体は仁王立ちのままで頭だけが転がっている状態だ。

「……デュラハン、か……あア、システムにまでそういう目で見られてンのかよ」

事情を把握している百合子が呟く。

「え？どういう事？」

「放課後に発表する予定だったんだがなア………イメージアップ戦略の為の

召喚獣を使ったパフォーマンスの為の予行演習を行う予定だっ

たんだよ。

まず、愚兄の召喚獣は戦死してねェだろ？」

「アレ？本当だ」

――Fクラス：吉井明久：総合科目 2049点

「おい明久、お前もうハンデじゃねーだろその点数じゃ」

もともと操作技術がありハンデといっても名ばかりのものだったのだが、

ここに来てこの点数は凄まじいものがある。

今まで以上にAクラスは強固になってしまっただろう。

「で、どうなってるんだ？」

「今呼び出される召喚獣は”肝だめし”の為のオカルト仕様になってるんだよ。

そして化け物の類になるってわけだ」

化け物と聞いて今の明久の召喚獣の状態からどんなモノになったのかを考える。

「僕のはデュラハンか……あれ？何でデュラハンなんだろう。

日本には

まだ他にも妖怪とかが居る筈なのに」

「召喚者の特徴や本質が影響するって話だぞ」

「特徴や本質……………なんで平均点以上は取った筈なのにバカなの？」

「は？……ああ頭がない」バカか……………ってそれじゃほとんどの奴が

デュラハンになるじゃねーか」

Bクラス代表の根本がだいたいこのような点数だった筈なので、明久のバカを表すなら、その点数を取れなかったものもバカと見なされる可能性が非常に高い。

「ふむ、それならばワシも試してみるかの……………男らしい召喚獣が出ますように……………」

召喚獣召喚！」

割りと切実な願いを言った秀吉の期待に沿ったのかどうかは知らないが、

召喚獣が姿を現し……………

「猫娘ですね」

「猫娘だな」

「猫娘です」

「どうすんだ秀吉、システムにまで可愛いという本質に見られてンぞ」

「鬱じゃ、死のう」

その後、クラスメイト数名が目覚めたのと秀吉が元気を取り戻したのは同じだった。

問：41 肝試し編・1 開幕の前（後書き）

明久の点数公開！テスト問題事前に知ってる効果は伊達じゃないぜ！

次は他のメンバーの召喚獣をチヨクチヨク出して、肝試し開始です。

問：42 肝試し編・2 肝試しバレ（前書き）

タイトルが自分でも意味不明に^^；

葉月と百合子の召喚獣はこれでいいか微妙ですが……

予想が当たった人はいるでしょうか？

問：42 肝試し編・2 肝試しバレ

「吉井に坂本、随分とおもしろそうな事をしてるな」

「これ召喚獣か？そっぴや本質や特徴がどうか言ってたな」

「なるほどだから吉井のには頭がなくて、木下のは可愛いのか」

秀吉がまたもや沈み込んだ。

心なしに「可愛い」という文字が実体化して突き刺さっているような印象を受ける。

「お前ら、点数を見る」

「「「は？」「」」

——総合科目 2049点

「つまり下手したらもっとバカなモノか酷いモノが出る計算になるわけだが」

点数的な馬鹿というわけではないと思うのだが、その点を説明しなければ
気がつかないだろうと突っ込んだわけだが。

「そ、そんな筈ない！」

「そうだ！俺達の本質はジェントルマンなんだ！酷い召喚獣なわけがない！！」

「「「召喚獣召喚！！！！」」」

現実から逃避するかのように渾身の力を込めて叫ぶ。
そして現れたのは――

「リアルバイオハザード、無限バンダナが必要だな」

「ゾンビだな」

「腐ってる＝根が腐ってるって意味か」

「「こ、怖いです」」

「ちょちよつとはは、葉月が怖がってるじゃない！！その汚いモノを消しなさいよ！！」

本質が汚いといわれて召喚した三人は肩を寄せ合い泣いた。

他のクラスメイト達も召喚しようとしていたのだが、三人の召喚獣を見て

嫌な予感がしたのか召喚しなかった。

「……ま、まあ木下の例があるわけだし可愛いモノも出る可能性はあるのよね」

秀吉は今度は堪えた。

「な、なら私も可愛いモノを出してみます」

「は、葉月も出してみます」

「「召喚獣召喚！」」

そして現れた召喚獣は……まず葉月の召喚獣だが、以前召喚した狐耳の召喚獣とは、まったく変わってしまい、日本人形のような姿かたちの召喚獣に変わっていた。
髪の色が葉月と同じなのは分かるのだが髪形や服装などがそのようになっているのだ。

「座敷ワラシです？」

「可愛いというのと一名に限定する話だが幸福をもたらす点ではあつてな」

全員が全員、ある召喚獣から眼を話して会話中。
召喚した当の本人である姫路は硬直していた。

姫路の召喚獣はサキユバスである、大胆な格好で目のやり場に困る召喚獣だ。

「きゃあああああああ！！！！？」

「落ち着くのよ瑞希！フィールドから出せば消えるわ！！」

「あ、そそそうですね！」

いそいで操作してフィールドから離れて召喚獣を消す。

「姫路の本質は……………」

「胸か？」

ちなみに大胆さもあるのだが……………いろいろと起っていないためか、胸の部分だけに本質が表れたとしか推測されなかった。

「ち、違いますよ！確かに全体的に太ってますけど、特徴になるほど大きくありません！！」

「ふ、ふふん、そ、そんな大きな胸をしてるからあんな恥ずかしい召喚獣が出たんじゃない」

島田が心なしか血の涙を流しているような気がする。

ちなみに復活したばかりの他のFクラスの面々は姫路の召喚獣を見て鼻から

血を流して悶絶していた。

「さあ、見てなさい！ウチはその点は心配ないから妖精とか戦女神とか

そんなのが出るはずよ！！召喚獣召喚！！！」

——壁が出現した。

ぬりかべである。

「そういえば百合子の召喚獣はどうなってるのかな？」

「葉月も気になるです」

「そうじゃの、ワシも気になるぞい」

自然な流れで極力見ないようにスルーした。

「ンじゃ、召喚獣召喚」

そう言つて召喚したのは――

「あれ？百合子そのもの？」

「てつきり九尾とかそんな感じの妖怪かと思つたんじゃが」

「……システムに化け物扱いされたのか？」

最強の妖怪と考えて最初にすんなり出てくるのは九尾の狐……もしくは

三大妖怪のどれかが出てくると予想していた全員は少しだけ拍子抜けしていた。

予想に反して出てきたのは百合子そのものの姿の召喚獣。

「―― a d s f g t h n m k t r e c v b h g r e d c」

「ん？百合子、どうしたのってえ！！？」

意味不明な言葉の羅列を呟きだしたかと思うと、黒い噴射状の翼を展開させる……

ソレと同時に百合子の召喚獣にも変化がおとずれる。

「白面金毛九尾の狐か……………そオいや玉藻前には別の解釈があるンだったなア」

孤独を恐れ、愛情に溺れ、運命に弄ばれた悲劇のヒロインとの見方も存在している。

孤独は恐ろしい——今の自分が確立しているのは誰かが傍にいないとしてくれたから。

愛情に溺れる——理解してくれる者に対して尽くしすぎる面があり、行き過ぎている事が多い。

運命に弄ばれる——この世界において有り得ない能力を与えられ、怖れられた。

「（……………いや、無理やりだな）普通に国を潰すような化け物って事が打倒だろ」

「いやいや、他に何かある筈だよ……………それより百合子……………その羽」

「制御できるようになった」

今まで以上に百合子が厄介になってしまった瞬間である。百合子が翼を消すと、召喚獣も元の姿に——

「狐耳と尻尾が残ってるじゃねエか。半端だなオイ」

「——ねえ皆……………この召喚獣はウチに何を言いたいのかしらね」

誰も何も言えなかった……………全員が全員島田のある部分を極力見ようとしていないのも

印象的である。

「自分で思ってる通りだと思っぞ」

百合子の発言に島田は教室の隅っこに移動して声を押し殺して泣いた。

「ふむ、康太の召喚獣はどのようなものなのじゃ？」

先ほどの光景を完全に無かった事にし、土屋に話しかける秀吉。

「……………召喚獣召喚」

土屋の召喚獣は吸血鬼だった。

「ほオ、女好きと血を求めるのが影響されたみてエだな」

「さすがムッツリーニの渾名……………って気化し始めてるぞ!？」

「日光だ！吸血鬼は太陽に弱い!!」

そこまで再現しなくてもいいのに、と思いつつも土屋はいそいで召喚獣を

フィールドから出した。

「ここまで来ると雄二の召喚獣も気になるね」

「そうだな……………鉄人、許可をくれ」

やれやれと言いつつも雄二が腕輪の効果を切ったのを見て、フィ

ールドを形成する。

授業が既に潰れているので半ば諦め気味である。

「雄二の召喚獣はどんなのかな？」

「攻撃的じゃからな……意外と――」

「召喚獣召喚」

ライオンの頭をした人間が出現した。

しかも何故かマッスルポージングをしている。

「ちよおつと待てー！ー！！？」

「狼男ならぬ、獅子男か………そんなの居たっけ？」

「記憶にある限りじゃアねエな」

「ならば雄二の召喚獣は新種じゃな、ついでに本質は野性味という点じゃの」

ポージングに関しては誰も突っ込みを入れなかった。

寧ろその優しさの方が雄二には辛かった。

「……………で、今日の放課後発表する筈だったイベントってのは何なんだ？」

「お盆の時に向けた肝試しだ、準備や片付けは必要だが……………」

参加者は脅かし役・テスターに関わらず補習免除が入る」

『参加しなかった場合は』

「補習生は全員が肝試し中に二十八号センセエと補習だぞ――
補習室で」

誰も参加拒否を起こす筈も無かった。

自分だけが補習を受けているのに周りでは楽しそうな行事に参加しているのだ。

その事を考えれば補習が無くなるというメリットだけでデメリットが準備と片付けだけ。

しかも補習生徒だけじゃないというのであまりデメリットにはなれない。

「ちなみに参加資格のある奴は今日補習か夏期講習に参加してる奴だけだ」

百合子が予定よりも大幅に早く暴露したせいで昼過ぎから通達があり、

二年生の夏期講習・補習参加生徒は全員参加した。

問：42 肝試し編・2 肝試しバレ（後書き）

百合子のオカルト版召喚獣のイメージはF a o e / E x t r a の

狐耳キャスターで、髪の色が明久より鋭い目の状態です。

雄二の召喚獣が更に野性味溢れるものにしたかったので獅子男にしてみました。

問：43 肝試し編・3 準備押し付け作戦じゃないけど押し付け完了（前書き

あまり長くしてもグダグダになりそうなので、さくつと終わらせま
す。

……小説はまだ続きますよ？

問：43 肝試し編・3 準備押し付け作戦じゃないけど押し付け完了

「へえー、肝試しに来た人に対してはその場で簡単なテストを数分間受けてもらって

その点数で挑戦してもらう形なんだ」

「一問ずつの配点が違うようにしてからほとんど私達と同じような状態で来れるわけね」

肝試しルールの詳細を覗き込んでいる工藤と優子が感想を漏らす。
一般人向けの項目だが、今回行われるテストによっては修正が入るのだろう。

その間にも手を動かして提灯作りに勤しんでいる。

『おい、暗幕足りないぞ』

「搬入されてっから受け取りに行け」

『佐藤さん、肝試しの時、俺と——』

『須川会長！異端者を発見しました！！』

『あいつは近藤！おのれ裏切り者が！！』

FFF団が近藤を追跡しながらも暗幕を貼り付けているのは何故だろう？

答え：鉄人&百合子の監視体制。

「にしてもFクラスはほぼ強制だが、Aクラスまで参加するとは思ってなかったな」

「……皆息抜きがしたかった」

「そうか、お前もか？」

「……うん、雄二が参加するから私も参加する」

ちなみにFFF団は八つ当たり気味に近藤への攻撃を激しくした。理不尽だが、雄二に攻撃 翔子が悲しむ 人生＼（＾０＾）／になる。

ちなみに当然だが百合子は止めようとしない。

「そろそろ作業に集中しなさい」

「てめーらうるせーんだよ!!」

流石に止めて作業に集中させないと人手が足りなくなるので優者が止めようとしたら扉が蹴り開けられ、ズカズカと大人数の男子生徒が入り込んできた。

「騒がしいと思ったらまたお前か吉井!!」

「どっちに言ってるんだ？」——おい、その先頭の男誰だ。

「常夏先輩コンビ」

「まとめるな!!」……3-Aの茂武だよ茂武」

「モブ先輩？」

そういえばその先輩が現れた頃から心なしか葉月が震えている気がする。

原因は葉月自身にも分かっているのだけど、本能的に何かを察知しているのだろう。

——その光景のせいで教室の気温が心なしか下がったような気がする。

具体的には百合子周辺。

「モブじゃねエ」もんべ”だ”もんべ”！！ち、さすが吉井明久だな。

脳の用量が小さすぎるぜ……………あ痛あ！？な、なんで提灯が！

？」

「気にすんな」

「そうです、ただセットが偶然崩れてきただけです」

百合子が壁に手に触れている地点で絶対偶然じゃないという突っ込みは封じられた。

気を取り直すかのようにモブ先輩は咳払いを一つ。

「夏期講習の邪魔なんだよお前ら！」

『受験前の大事な時期だったのに…………俺たちへのあてつけか！！』

そんなモブ先輩に賛同するかのように数名の三年生が声を荒げる。

「……あれ？でもこの学園って確か試験召喚戦争の為に防音が

しっかりしてる筈ですね。お姉ちゃん」

「そうね、旧校舎ならまだしもここは新校舎だし上に響く筈が無いわ」

「大方勉強に飽きてフラフラしてたところを楽しそうに催しをしているのを見て八つ当たりを

しに来たってところだろ」

三年生全員が気まずそうに目を逸らす………凶星らしい。

「それじゃあ言わせて貰うがなー！！お前らの学年は迷惑極まりないんだよ！！」

学年全体での覗き騒動に男子全員が停学処分だぞ！！「いえ、数名は停学無しです」

学園の評判が落ちて俺たちまで馬鹿だと思われて内申に響いたらどうするんだー！！」

途中で割り込んだ台詞はスルーされ、二年男子のほとんどが目を逸らす。

ちなみに覗き騒動の元凶である百合子は腕を組んで何か考え事をしていた。

「しかも出来が悪い連中が多いんだよ、馬鹿の代名詞である”観

察処分者”だつて二年にしか

存在してねーし、FFF団や吉井妹のような騒ぎばかり起こす連中だらけだろ」

「それを言ったら学園転覆の片棒を担いだ阿呆なンぞ、三年にか居ない訳だが？」

第一、私が暴れたところで内申には影響ねエはずだぞ」

教頭が学園を潰そうとしていた計画があつたことは新聞部で報道されており、

その事は周知の事実……常夏コンビは気まずそうにしている。

百合子が騒動を起こしても警察・自衛隊や外国の軍隊は諦めているので、

ああ、またかとしてか反応しない。

学園側には抗議などが起らず同情の意見しか寄せられない為百合子の行いは

学園そのものの内申には意外と響かないのだ。

基本的に百合子が動くのは明久や翔子関連だと認知されているものもあるが。

「それにほとんどの奴が点数低かつたつて話じゃねーか」

「都合の悪い所は聞いてねエのかモブ野郎」

『『『……言い返せない』『』』

「お前らテスト期間中何してた」

「つか、何で知ってんだよ。点数の事なンぞ、二年ならまだしも上級生に伝わる訳ねエ筈だが」

「……………3 - A担任がノリノリで話してたんだよ」

Fクラスのほとんどが気まずそうに目を逸らし、おまけにDクラスも大会などに

出場してた生徒は勉強できてなかったので点数が悪かったらしくほとんども目が目を逸らす。

点数をばらしていたのは3 - A担任だったらしい、常村が暴露していた。

しかし、ここで監督しながら作業していた玲が話を聞いていたのか暗幕を持つてきながら割り込みをかけてくる。

「でも平均では上がっておりましてよ、振り分け試験の時よりも

特に数学は」

「あの辺りの生徒だよな」

葉月と百合子と翔子に目を向けられた。

53万点なのは試験召喚戦争の時だけであり、期末試験時には自重されていたものの、点数を大幅に上げていた。

葉月も翔子も似たようなものであり……………勉強会に参加した面々は大幅に点数を上げて

平均点アップに貢献していた。

「ところで、気になったんだがあの点数は本物か？」

「あア、正真正銘愚兄の点数だが？」

観察処分者である為、力作業に徹していた明久の召喚獣を指差して夏川が質問する。

『『『は？』『』『』』

明久の召喚獣によつやく気がついた三年の面々が点数表示を見て目が点になる。

2000点越え……三年生たちが二年の頃、これよりも下の点数だった者はうろたえ始めた。

以外にも常夏コンビは落ち着いていたが。

試験召喚戦争の時にはもう少し……いや、かなり低い点数だった筈だ。

「ちょ、ちょっと待て！！なんで馬鹿の吉井がそんな点数を取ってるんだ！！」

「は！もしかしてカンニングか！！」

「俺がそのような行為を見逃すと思ってるのか？」

カンニング説は西村教諭に否定された。

少し打ち合わせをしていて抜けていたところから戻ってきていたらしい。

「正真正銘、不正無く愚兄が実力でもぎ取った点数だよ。

集中した状態ならこのぐらいの点数上昇は当たり前だ」

この状態がずっと続けばもつと上を狙えるンだが、と百合子が呟くが、

三年全員が呆然として明久の召喚獣の点数を見ていた。

「ほらほら、邪魔だからとつとどっか行け」

「参加する気があるんなら別だがな」

「……そうだな、お灸を据える意味で参加するのも悪くないな」

さつきから都合の悪い話をまったく聞こうとしないモブが雄二の冗談に反応して急に何か言い出した。

「俺たち三年が参加してもいいんだろ？」

「………参加するなどはなってねエから参加可能だが」

「だったら参加させる……こつちが驚かす役で」

肝試しで驚く様を見てニヤニヤしようという魂胆なのだろう。というか受験勉強はどうした。

百合子は適当に教室に居る全員を見回した。

「どオする？少なくとも準備は向こうが勝手にやってくれらしいが」

「いいんじゃないか？楽できるわけだし」

「……むしろ望むところ」

驚かされる側ならペアの可能性がある。

よって翔子はそっちの方が良いと判断した。

明らかに押し付けられた事に気がついていない。

百合子はその反応を受験勉強でピリピリしてたということにしておいた。

「あらかじめ決まってたルールがある。後はカメラ持参で

発した声の大きさが一定以上になった場合に失格というルールだが、

質問は？」

「いや、無い」

「そんじゃ、準備の方頑張れよ」

三日後に行われる予行肝試しまで暇になった全員は体育館に集まりレクリエーションでバスケットボールなどを行っていた。

「つー訳で参加するか？」

「んー…………でも」

「準備の方は終わらせてある、最悪最後まで雰囲気を楽しむだけでもいいだろ」

「…………そうですね、なら参加してみます」

問：43 肝試し編・3 準備押し付け作戦じゃないけど押し付け完了（後書き

最後の人物は別にクロスキャラとかじゃないです。
肝試し中に明らかになる予定です。

さあ、次は肝試し本番だ！

問：44 肝試し編・4 Bクラス地点・1（前書き）

今回オリジナルキャラが登場。

……… 前回の百合子と会話した人物です。

名前に対する突っ込みは無しで^^；

それではどーぞー。

「随分と気合を入れたモンだな」

「本当だね、いくら学園側のバックアップがあるとはいえ、これは凄いよ」

準備期間が終了し、機材も設置し、ルールも確認し、いよいよ肝試しが始まる。

その設備に関して簡単に覗いただけなのだが、完全なお化け屋敷となっており、

本当に準備期間だけで終わらせたのかと思うぐらいの出来栄だった。

「こ、こんなに気合をいいいい、入れなくても良かったです」

「そそ、そうよそうよ」

「文句は三年連中に言え」

雰囲気満点の設備に葉月と島田が声を振るわせつつ意見を言う。

その意見に百合子は至極まっとうな事を言った。

ちなみに、事前にせっかくだからなるべく男女ペアで組むように指示した為か、

様々な場所でペアを組もうと話しかける光景が目立っていた。

そして、その中で百合子の視線は一人の少女に目を向けていた。

『もし、その君、私とペアになってくれませんか？』

『は？……………はいよろこ——』

『須川会長！横溝が裏切ろうとしています。しかもかなりの美少女です』

『よし、生爪の刑に処す！捕らえよ』

その少女はイベントに対して目を輝かせながらペアを探しているのだが、対象が悪かったらしく、悉く（第三者の手により）全滅している。そのたびに涙目状態になりオロオロとまたペアを探し始める。

『ところであの娘、変じゃない？』

『確かに……………糸吊るして火の玉を周囲に浮かせてるって危ない趣味よね』

『脅かし役じゃないのに……………味方を驚かす気なの？』

訝しげな視線を集められていた。

頭や腕にわっかをつけてそこから針金のようなものを吊るし、先っぽに火がついていた。

お化けになりきろうとしているように見えて女子たちは哀れに思いつつも

ほとんどが声をかけようとしない。

『あのあの、その君私とペアに——』

『『『近藤————！！！！！！！！！！』』』

その少女は見事にorz状態になってしまった。
あまりにも哀れすぎる。

その時、百合子の様子を見ていた翔子が百合子に声をかける。

「…………百合子、知り合い？」

「ンア？まアな…………どオして分かった」

「…………さつきからずっと見てた」

「…………翔子、お前それは百合子をずっと見てたと同義だぞ」

「…………大丈夫、私が好きなのは雄二」

「いや、嫉妬したわけじゃないからな！？」

こんな騒がしい中でも普通に設置作業を黙々とこなしている土屋の姿が非常に印象的だった。

組み合わせは何とか決まり、明久は葉月・翔子は雄二、百合子は秀吉。

ちなみに幽霊変装少女は須川と組むことに成功した。

——アミダクジで。

そして、第一陣がスタートした。

尖兵として出て行ったのはBクラスの男女ペアであり、そのペアが

所持している

カメラによって映像と音声拾われている。

『ね、ねえ。あの角怪しくない？』

『そ、そうだな……何か出てきそうだな』

画面を食い入るように見ているのは百合子・明久・雄二・土屋・秀吉。

他の面々は少し離れていたり、目を隠しながらもチラチラと見たり、目を輝かせながら見たりと様々な反応を示している。

古めかしい江戸時代をモチーフとした風景であり、光量が絞られボヤけた感じの

その風景は映像を見ている側でもスリルがあった。

『そ、それじゃあ……俺が先に行くから』

『うん………』

見るからに怪しい角へと映像が切り変っていく。

「おおおお、お姉ちゃん。あの陰……何か居るように見えるです」

「ききき、気のせいよ葉月。なななにもうつうつ映ってないわ。」

ねねねー！瑞希」

「こそ、そうですよー！」

三人の少女が怖がりながらも身を寄せ合いつつ見ている。

対照的に翔子は酷く落ち着いた感じで見ており、幽霊変装少女は相変わらず目を輝かせていた。

「お、角を曲がったな」

「なんにもいねエじゃねエか」

葉月他、ほとんどの女子生徒たちが胸を撫で下ろした次の瞬間。

『ぎゃあああああ！！？』

「「「ぎゃあああああ！！！！？」」」

カメラの向こう側から大きな悲鳴が響き渡り、ソレを聞いたほとんどの女子生徒が恐怖の悲鳴を上げる。

「ぎゃああああ」

「……………？？？」

……………幽霊変装少女と翔子の反応だけが違っており、前者は嬉しそうな悲鳴で、後者は何処が怖かったのか分からないらしく何度も葉月達とテレビを交互に見比べていた。

「……………失格」

見なくても分かる事だが、映像は音量が限界を超えた事を示す赤で

表示されていた。

「いきなり最初の角で失格か」

「さすがは上級生だけあるって事か」

「これじゃあ、最初に何があるか分からないね」

これではむしろ余計に身構えさせる結果となり恐怖を助長させる事しか出来ない。

案の定、二組目はまだ出発していなかったのだが、先ほどの映像を見たせいなのか身構えてしまい、固い動きでBクラスポイントへ入っていった。

「少しくらい何か情報が欲しいね」

「そりゃ、難しいだろオよ」

「百合子の言うとおりだな」

「え？」

百合子と雄二の意見を肯定するかのよう――

『『ひゃあああああ――!!?』』

開始早々失格となった……曲がり角に差し掛かっておらず、タイミングをずらしている……中々に巧妙だ。

「ねえ、百合子。もしかして」

「あっちも持つてるぞ、それもルールの一つだからな」

顔はモニターをしっかりと向いていたが明久と話す時だけ片方の目だけを

明久に向けて話していた。

勿論、もう片方の目はモニターを睨みつけている……器用な真似をするものである。

ルールなら仕方が無い……そもそもこちらだけが相手の構造を把握できるなど反則のようなものだ。

それに画面を見れるなら相手もタイミングを計りやすいだろう。

『ち、血まみれの生首が壁から突然出やがった』

『後ろに口裂け女が立っているなんて……』

「そオいや、愚兄の召喚獣以外は物理干渉無しだったな……」

種別妖怪に対するレポートに書けるな」

「ババア長は仕事なか？」

雄二の質問に百合子は首肯だけをしていた。

どうしても抜けれない予定が入ったらしく、お化け屋敷としてどれだけ機能するのかを

まとめて伝えてくれと百合子に頼んだらしい。

「これなら普通のお化け屋敷とは違った演出も可能、と」

「……それはいいけど、このままじゃこっちが不利」

「よし、百合子を投入しよう」

「こんな初っ端から投入してンじゃねエ」

雄二の意見に百合子が呆れた視線を送る。

勿論冗談と分かっているので少々ギャグ調の睨みだ。

本気で百合子に睨まれた場合、下手すればそれだけで精神が死ぬ。

……中学生の頃、誰かがそれを「エターナルフォースアイズ」とか命名してた。

いかにも厨二病である。

まあ、裏の住人にしか使っていなかったのだが、表世界にもその名が知れ渡ったのは、

今でも百合子が首を傾げる現象の一つだ。

「よし、順番変更だ……Fクラスの有働&朝倉・福村&近藤が向かってくれ」

「……よっしゃ！任せろ！！」

そう言いながらまずは福村・近藤ペアが進入して行った。

『カメラは俺が持つぜ』

何も無いように映しながら進んでいる為なのか、それほど恐怖は伝わってこない。

そのため、怖がっていた女子たちも目を覆う事無く画面を見ることが出来るようになった。

『お、あそこの曲がり角だったな』

『何が出るかな、何が出るかな』

……肝試しをしている筈なのに終始明るい雰囲気で行っている。まさにこれは酷い状態だ。

角を曲がり、何気なく隣を映すと、血みどろの生首が浮かんでいた。
——同時に教室の片隅で一人の女子生徒が目が虚ろになつて座り込んだ。

「「「きゃああああ「「「

そして、つづいて後ろにカメラを向ける。
そこには口裂け女が立っていた。

「「「きゃあああ！！きゃああああ！！！！「「「

「きゃあああ」

葉月達は何処からそんな声を発しているのか疑問に思うほど大きな悲鳴をあげ、

他の女子たちも悲鳴を上げていた。

悲鳴の中に嬉しそうなのが混じっていたのは気にしない事にした。

「ところで百合子、あの嬉しそうに悲鳴を上げている幽霊コスプレ少女って誰？」

「一応の知り合いで、鈴科小百合って名前だ」

……何故だか知らないが百合子に物凄く関係がありそうな名前な気がするのはいそおいた。

肝試しの後にも詳細を聞こうと思ったのか、明久も他の面々もとりあえず肝試しに集中した。

「な、何で吉井や坂本は平気そうなのよ」

「何でって言われても命に別状があるわけ無いしな」

「……あの程度百合子の制裁を見慣れてる俺たちにとっては大した事無い」

「小さい頃に心霊スポットで見た時の方が怖かったよ」

明久の言葉の方が恐怖を感じたらしく、心なしかほとんどの生徒が後ろに

移動して距離が少し開いた。

「……そおいや聞いてねえ連中の方が多いな」

「そおいや、いくつ潰したんだ」

「この学園以外の心霊現象発生場所は潰した」

……聞き逃せない単語が見つかった為、教室中の人間は顔が真っ青になった。

平然としているのは百合子と嬉しい悲鳴を上げている鈴科だけであった。

問：44 肝試し編・4 Bクラス地点・1（後書き）

最後の百合子の発言の方が他よりも怖い件。

脅かす側と現在進行中のペアだけが真相を知らず、

絶賛行動中。

まあ、オカルト現象の一つが心靈現象発生と捉えても

問題ないですね、多分。

ところで作中にも書いた厨二病的な名前以前に

百合子の能力が小学生レベ――

デハマタジカイオアイシマショウ、ミナサマサヨウナラ。

問：45 Bクラス地点・2 〃 Dクラス・1（前書き）

さくさく進むよー。

ちょっと別のアニメの影響を受けてるシーンがありますが

スルーの方向で。

一部、ある意味グロイ表現注意。

問：45 Bクラス地点・2 Dクラス・1

先ほどの発言は全員が必死に記憶から消していた。

『それにしても暗いな、何かに躓いて転びそうだ』

『それなら、あそこにある明かりを借りていこうぜ』

提灯を拝借しようと二人が近づくと――。

「「「きゃあああああ!!?」「」」

「きゃあああ」

「あれは本物が……二セモノか……」

提灯お化けが出現し、先ほどの百合子の発言のせいで恐怖が高まった全員が

悲鳴を上げ始める。

恐怖に耐性のある面々も真偽の程を検証し始めた。

「ゾンビを呼び出して掴ませた……うん、召喚獣だよね」

「ああ、召喚獣だ。断じて本物ではないな!」

「特殊な磁場が見えねエから召喚獣だろ」

「百合子よ、頼むから今回は黙ってくれなのじゃ」

真剣な表情で懇願され、百合子は溜め息をつきつつも、先ほどの発言が拙かった事を

思い出し、面倒くさそうに後頭部を掻いた。

『あー、畜生。どうして俺が福村なんかと』

『お前がもてない上にアミダクジで落選したのが悪いんだろ』

モニターから不満そうな声が聞こえてくる。

確かにこういうイベントなのだから女子と組んでみたいという気持ちに分かる。

『なんだと近藤！お前だって二十人ぐらいに声をかけて全滅していたではないか』

『違う！あれは断られたわけではなく、向こうにも事情があっただけで断じて』

もてない訳ではない！！』

『俺だってそうだ！！！タイミングが悪いだけでもてないわけじゃないんだ！！！！』

モニターが真っ赤に染まった。

「……失格」

「あいつらは何をやってやがる」

そう言いながらも別のモニターを見る雄二。

顔色が戻ったのは、流石にこういう時にお化けなんて出ないと割り切ったからだろう。

他の者達も徐々に落ち着き始めた。

（さつきから画面端にチラチラと映ってるんだが、言わねエ方がいいな）

「む、チェックポイントに到達したみたいじゃぞ」

——三年Aクラス 近藤良文&大竹貴美子 化学 326点&263点

V S

二年Fクラス 朝倉正弘&有働住吉 化学 59点&61点

「やっぱり配置されるのはAクラスか」

「予備校通いのものもあるじゃろうに」

「きつちり点数の高い人物を配置できる辺り油断ならないね」

とはいえ、これでチェックポイントまでの道のりは分かった。

「点数に自信がある奴はどんどん向かってくれ」

『『俺達に任せろ!!』』

「てめエらは打倒出来る点数じゃねエだろ」

何故か最初に自信満々に立ち上がったのはFクラス男子だった。

『Bクラス制覇できたよ!』

『やったね真一君!』

七組が向かい、恐怖をギリギリで耐え抜き、順番に挑んで、さきほどの二人が撃破したわけである。

この勝負では補充など出来ず、いかに成績優秀者を無事に送り込めるのが勝負の鍵となる。

「これでBクラスは行かなくてもいいんですが、少し残念です」

「鈴科さん、生き生きしてるわね。さっき百合子が恐ろしい事を言っただけなのに」

「へ?見慣れてますから平気ですよ」

「え?」

「いやー、夜の病院って出る事多いんですよー」

：病院嫌いが増えました

「それよりようやく別のクラスだな」

「Dクラス地区はどうなっておるのかの？」

先ほどから映像を見ながら怖がりながらも雰囲気を楽しむ者、ノートをとりながら対策を練るもの。

言っているものかよくないのか悩んでいる者、多種多様にこのイベントを楽しんでいるようだ。

『怖かったらいつでも言えよ真美。俺が守ってやるからな』

『うん、ありがとう真一君。あなたが居てくれるならもう何も怖くないわ』

「ねえ、百合子。気のせいだと思うけど死亡フラグが立ったような気がする」

「真美って奴の方にな」

何も関係はありません。

『きゃああー!!』

『どうした真美……ヌイグルミが真美の頭にかじりついてる!!』

噛り付いてるわけではなく、すっぽりとヌイグルミの口が真美の頭に覆いかぶさった

だけなのだが。

「……………ぜってエ影響受けてやがる」

「メタ発言は止めるのじゃ百合子」

と、ここでもモニターからまた失格を告げる絶叫が。

『うわあああ、上から蛇が』

『カ、カエルだ、カエルが降ってきやがった!!』

「直接的手段にでたな」

視覚の効果に慣れたところで今度は触感による刺激で恐怖を煽る作戦に出た三年生。

流石に考えてきているようだ、年季の違いというものだろうか。

「……………なら話はえー。Fクラス第二陣、出撃準備だ」

『『おう!!』』

気合の入った四組八名の声が聞こえてきた。

『ここだな、カメラに映ってたヌイグルミが覆いかぶさってくる
ところ』

『ふ……華麗に回避完了』

ヌイグルミが寂しげに垂れ下がっている。

「初見ならまだしもわかってれば避けやすいね」

「完全に設置型だからなア」

無駄な動きで回避した二人に対してコメントはしなかった。

『ところで、俺は一つ対策を思いついた』

「ほオ？」

百合子が興味深そうに聞き入り始める。

既に脳内ではかなりの数の対策が練られているのだが、
自分自身で探した方が楽しいだろという雄二の意見により公開され
ないでいた。

………もともとプランの一つである触覚反射というのが出た地点で、
全員が突っ込みを入れて、断念したのが大きいのだが………どう考え
ても百合子専用である。

『対策？』

『突然触られて恐怖で叫ぶのは、それが何なのか分からないから

だ
』

「まあ、そうだね」

気がつけば教室で待機している全員が聞き入り始めていた。
メモを取り出しているものまで居る。
これはうかつな事を言えないのだが――。

『だから、その触れてくるものを【俺と手を繋ぎたいんだけど恥ずかしくてそこらのものを

使ってくる美少女】で変換すればいい』

『なん……だと……それはあまりにも妙案すぎるぜ……武藤、俺はお前の頭脳が恐ろしいぜ』

『へ、よせやい』

「ねえ、吉井君に坂本君。あの二人、これが絶賛生中継中だと分かっけて言ってるのかしら」

「分かん」

「そうだね、何せ恐ろしい頭脳の持ち主だからね」

「……確かに駄目な方向に恐ろしいなこりゃ」

Fクラスの評価は下げられるだろう……
そのまま二人の行動を見守る事数分、方向転換したときにカメラに

丁度コンニャクが映りこんだ。

そのままぴたりと二人の首筋に当てられる。

「ふおおおおもたまんねえええええええ！」

「失格」

「須川、すまないが始末しておいてくれ」

「了解、残念だ。また隊の者を手につけねばならぬとは……」

「こ、このクラスの皆さんは見てるだけなら怖くないですね」

「はいです。これなら葉月も平気です」

「そうね、安心して見れるわね」

口ではそうは言いながらも悲鳴が上がる度に肩を振るわせる三人が可愛らしい。

「今の二人はともかくとして、他の者達は随分と順調に進んでおるの」

「そうだな、突然の接触には驚いているが、悲鳴を上げる程繊細な神経をしている」

「連中じゃないからな」

声が出たとしても失格にはならない程度の小さな声であり問題ない。ならば、そろそろ三年側でも動きがあってもおかしくない頃合だ。

「どっちも臨機応変に対応できるしどんな手を――」

「…………暗くて分かりづらいが広い場所に出ている」

雄二の言葉をさえぎりながら土屋がモニターの映像の違和感を伝える。

「中央に証明設備が見えてるな…………誰か中央に居ンぞ？」

「どういう視力してるのよ」

百合子の指摘どおり、中央には証明設備と暗くて分かり辛い人が立っていた。

『なんか不気味だな』

『まあ、先に進まなきゃわからないし、行ってみようぜ』

罨であろうが、踏まなければ詳細は分からない。

罨の詳細を伝える役目を担っていると理解している二人はまずは中央に位置している

人物の詳細を探ろうとカメラをその地点に向けながら歩き始める。

中央に差し掛かるうとした地点で、照明がついた。

常夏コンビの片割れである夏川がそこに立っていた。

——ミニスカートかつ、魔法少女チックなゴシツ
クロリータファッションで。

『ぎゃあああああああ!!?』』』

『『『いやあああああ!!?』』』

男子も女子も関係なく大絶叫を上げた。

「坊主野郎！やりやがったな!!」

「汚い、やり方も汚ければ映ってる絵面も汚いよ!!」

「うう、絶対に夢に出てくるです……」

「……………気持ち悪い」

画面越しですらこの破壊力なのだ、実際に目の当たりにした人間は
正気ではいられないだろう。

——しかもスカート自体が見えそうで見えないというあり
がたくないおまけつきだ。

耐性の無いものは失神したり吐き気をもよおしているものも。

『なんだ、今こっちの方で悲鳴が——ぎゃあああああ
!!?!!?』

『おい、どうした、ぎゃああああ!!?』

「しまった雄二！早く手を打たないと」

「駄目だ、突入してる奴らは救出のしようが無い……!」

「そ、そんな。見殺しにするしかないっていうのか!?」

そして、他の突入部隊も見るに耐えない光景によりダウンし、とうとう全滅してしまった。

直視してしまった者達はしばらく社会復帰が出来ないに違いない。

「今の殿方達はあのような服を着る傾向にあるのですか?」

「……………居たとしても一部だけだ」

どこかずれてる鈴科の発言に百合子は呆れ気味の溜め息しかつけないかった。

問：45 Bクラス地点・2 Dクラス・1（後書き）

中々執筆スピードが上がりませぬ。

……おまけに書きたいものが増えてきた罫。

自分をもう一人作りたい。

では、また次回。

問：46 Dクラス・2 〽 Cクラス・1（前書き）

大大大スランプ中。

問：46 Dクラス・2 Cクラス・1

「坂本、仇を……アイツラの仇を討ってくれ!!」

「このままじゃ散っていったあいつらに合わせる顔がねえよ」

クラスの全員が涙ながらに雄二に懇願する。

他のクラスの者達も同意するかのように雄二を見る。

「分かっている……向こうがあいつた手段で来る以上、こっちだって全力だ。」

突入準備している連中を下げろ、康太と工藤を投入する!!」

『『おおおお!!!!』』

二人の名前が呼ばれた瞬間、教室中に希望の歓声が上がる。

「ははは、期待されてるね康太君」

「……………悪くは無い」

そんな状態でも緊張する事無く自然体で居る二人。

先ほどの映像を見た時に動揺する事無かったうちの二人だけに期待できる。

……………おまけにDクラス門番の教科は保健体育……………このまま突破し、Dクラスを封印する事も可能だ。

「任せたぞ二人とも」

「おっけー任せてよ、ね、康太君！」

「……問題ない」

自信満々に答える工藤と小さくうなづく土屋。

「……………奴には本当の恐怖を教えてやる」

「総員、衝撃映像に備えよ！そろそろ到着の筈だ！」

当然のように順調に突き進む二人を見ながら、そろそろ例の地点に到達する。

精神的に耐えられる者達だけが目を開けて見ている状態となっている。

「これで駄目だったら、百合子を投入するしかないよね」

「止める、可愛くされても困る上に全部突破する可能性が高くてつまらなくなる」

百合子が何やら準備していたのは頭から振り払った。

『ここだっけ、あの面白い先輩が待つてるところって』

『……準備は出来てる』

土屋は何かを抱えた状態で歩行していた。
それが対策を示すものらしいのだが……。

「来る……！」

暗くなっている。

いきなり出現した方がインパクトが強いと分かっているからだろう。
そして、先ほどのような地点にたどり着いたところで明かりがついた。

『……今だ』

明かりがついた瞬間に大鏡を置き始めた土屋。
それと同時に夏川は床を汚す行動にはしった。

『ぶふおお！！？てめえらなんてもんみせやがる！！』

『……その反応は恥ではない、人として当然の事だ』

『くそ、えげつない格好だぜ、道理で着付けをやった連中が』

鏡を見せようとしないうけだ』

着付けをやった連中はこういうコンセプトを目指したのだろうか。

『ところでお前らなんで携帯のカメラで撮影してるんだ……？』

『海外の本物サイトにアップした後で吉井妹さんに教えてもらった週刊誌の編集長の』

パソコンに転送しようかと』

百合子名義（秘密のパスつき）で投稿すれば、次の号には乗っているという仕様。

『じよ、冗談じゃねえ！覚えてろ……！！』

夏川は慌てて走り去っていった。

そして夏川の走り去って行った方向に歩き出す二人。
もうすぐチェックポイントである。

「さつてと、これで多分、土屋の正体はバレルだろうから

次のクラスが正念場になるな」

既にこのクラスの勝敗は見切っているらしい。

全員が疑問に思っていたのだが……これから見る光景で理解した。

『んー、先輩達強いね』

『……………何の問題も無い』

03点&301点

V S

2 - A : 工藤愛子 : 2 - F : 土屋康太 : 保健体育 89
5点&1025点

これは酷い点数差だ。

先輩達も技術力が明久並でないと対抗できない点数。

1000点オーバーできる生徒が増えたという事態に三年生二人が口を開けたまま硬直していた。

その隙に土屋の召喚獣が手を突き刺し血を吸って撃破。

残るもう片方も工藤の召喚獣が良く見えない動きで倒していた。

「くそ、吉井妹一派は化け物揃いか!？」

「妙な派閥を作り出してンじゃねエよ」

「そう言えば、攻撃見えた？」

「工藤の召喚獣は一瞬で服を脱いでボコボコにしてまた着なおしたぞ」

「そうだな、よく見えなかったがそんな攻撃だった」

その台詞の後、雄二の睨が抓られたのは不可抗力なのに哀れである。

「明久さんは見えたです？」

「そこまで動体視力は良くないかなー」

集中すれば話は別だろうが、そこまで集中していなかった為、明久には攻防が見えなかったのだ。

『そういえば康太君、どうしてティッシュを鼻に詰めてるの？』

『……出血性花粉症だ』

そんな種類の花粉症は恐らく存在しないはずだ。

少なくとも、今この場において花粉症は起るはずが無い。

誰もが先ほどの百合子の意見と照らし合わせて、見えてたなこの男、と一斉に心の中でシンクロをしていた。

『あれ？この二つ口があるお化けは何？』

『……ふたくち女』

順調に進みつつ、余裕があるのかお化けの種類を解説する土屋。ちなみに女性型だけしか答えていないのは気のせいではない筈だ。

『じゃあ、あの井戸から出てくるのは……貞。さんだっけ』

『……………今見てる奴、ビデオをすぐにダビングしろ』

「誰の召喚獣なのかしら」

「いや、召喚獣じゃないと思いますよー」

そっちの方がおもしろそうですよーと笑顔で言い切る小百合。

「鈴科さん、洒落にならないからやめて!？」

(出たがりめ、呪いは掛けないみてエだが)

百合子が口には出しては居ないものの、表情で何か悟ったのか、またクラスで恐怖に震える生徒が増えてしまった。

しばらく進んでいくと、ついに土屋「ムツツリー」と認識した三年側の対策らしき存在が見えてきた。

「あ、あれが康太対策なん……………だ」

「吉井君急に視線を外し……………葉月ちゃん、外したんだから勘弁してあげなさいよ?」

『『『眼福じゃあああ!……!』』』

明久がササツと視線を外し、葉月が多少むくれ、男子一行が歓喜の絶叫を上げていた。

クールな表情や長い手足、翔子に近い雰囲気的女性。

そんな人物が着物を崩した状態で着ているのだから絶叫も間違っていないだろう。

「み、見てないぞ！見てないぞ翔子！！」

「……私だつて着たらあんな感じになる」

翔子が膨れていた。

自分と同じタイプの人物に対抗意識を燃やしているのだろう。

「ふむ、康太が意外と耐えておるの」

「……膝など地につかせぬ」

「……康太君？つく寸前までになつてるけど」

「……どこの世紀末覇者だ、それと愚兄。戦略の為なんだから一応見ろ」

康太が耐え切る状態を見て、ほぼ勝ちを確信する後方に居るメンバー達。

が、百合子はその女性に何か見覚えがあるのか溜め息混じりに勝負を捨てていた。

『ようこそいらつしゃいましたお二方。私、三年A組所属の小暮葵と申します』

艶っぽい声に濡れた瞳、伏し目がちに頭を下げて挨拶しながらも着崩した着物は
それ以上はだけさせない。

「やっぱ向こう向いてる愚兄、この先輩二つの部活に属してる」

「最初からそっちに向いてないけど」

おまけに葉月に目を塞がれている始末。

過剰すぎるが、その反応は正解だと百合子は心の中で呟く。

『——茶道部に所属しております』

『ふーん、着方はエッチだけどユニフォームみたいなものなんだね』

『はい、ユニフォームを着ているのです』

明久達が会話している間にも画面では会話が進行している。
土屋は耐え切りすぎて表情がものすごい事になっている。

『そして、実はわたくし——』

「雄二、目が大事なら画面から目を逸らしてろ」

「ん？お、おう」

『——新体操部にも所属しておりますの』

雄二が後ろを振り向いたと同時に小暮先輩が着物を脱ぎ捨て、レオ

タード姿となり、

画面と音量レベルを示すモニターが真っ赤に染まった。

「……雄二、後ろ向いちゃ駄目」

「アイツラの反応で何が起こっているのか丸分かりだ」

「ちなみに今向いても真っ赤に染まってっから意味ねエけどな」

百合子の言つとおり土屋の鼻血によってカメラの画面が見えない状態だ。

「ねえ、百合子。ほとんどの戦力が土屋君を助ける名目で突っ込んでんだけど」

「……………馬鹿ばっかしだ」

百合子の呟きと共に、画面から叫び声と失格のアラームが鳴り響いた。

問：46 Dクラス・2 Cクラス・1（後書き）

誰か落とした私の文才を知りませんか？

……次回も遅くなるかもです……ネタが浮かんでこない

問：47 Cクラス・2（前書き）

久保が正常な方向に壊れました↑マデ

問：47 Cクラス・2

「さて、秀吉、悪いが木下姉と組んでくれ」

「仕方ないの、百合子を投入するわけにはいかぬし」

「異性に興味があっても秀吉のタイプじゃないし反応しないでしょ」

百合子とペアを組んでいた秀吉のペア変更、色香で攻めてくる相手に対する

牽制としては有効だろう。

ついでに怖がらないという点も踏まえると適任が余り居ないというものもあるのだが。

ところで、教室に残っている戦力としての生徒が大分減ってしまっている。

残っているのは雄二・明久・久保・百合子・翔子・葉月・姫路・島田・中林・小百合。

チェックポイントで撃破された者や驚いて失格になってしまったという者、そして先ほどの

愚かな特攻によってこれだけしか残らなかった。

「御二方、頑張ってくださいねー」

「期待してるぞ」

「まっかせなさい」

「うむ、見事に突破してみせるのじゃ」

『姉上、いきなりセツトの唐傘お化けの脚を踏んでおるぞい』

『あら本当、壊れてないかしら？』

悲鳴を上げる事無く、更に色仕掛けにも掛からない。
確かにこの場合、適任であるといえるだろう。

『あら？あなた方は……なるほど、女の子同士の組み合わせで来ましたか』

『秀吉、気をしっかり持ちなさい』

『何故じゃ、三年生にまで……』

『冗談ですよ、これで叫んでもらえれば御の字だった訳ですが』

『作戦なのかな？』

「御の字って言うてっから出来たらってところだろ」

にしてもあつさりと通しすぎている感がある。

先ほどのように着物を着ているのだから、もう一度脱げばそれなりにダメージは

与えられそうと思うのが普通であるはずなのに。

「秀吉対策でも練ってんのか？」

その事を裏付けるかのように、一人の男子生徒が突っ立っていた。
常夏コンビの片割れであるモヒカン頭の常村だ。

「…………おぞましい衣装も着てない」

「どういう魂胆だア？」

画面には映ってはいないのだが、きっと秀吉と優子も疑問に思っているはずだ。

『来たか、秀吉。待っていたぞ』

『なんじゃ、ワシに何か用なのか？』

『さつさと済ませて欲しいわね、先に行かなきゃいけないんだから』

画面の中で常村が秀吉に真剣な顔で近づく。

「まさか、また勘当させられて百合子に協力して欲しいって秀吉に頼み込むのかな？」

「いや、勘当は多分ねエだろ。見た感じ普通の家族だったしな」

「ところで百合子、モニターに罅が入ってるから、何を怒ってるのか知らないが、

せめて力のベクトルだけは解除しろ」

モニターの予備はあるとはいえ、資源の無駄は減らすべきである。そして、常村が言葉を発した。

『木下秀吉。お前が好きだ』

画面から秀吉の絶叫が響き渡ってきた。

おそらく、秀吉の人生最大の恐怖だったのだろう。

「マテ、待つのじゃ！ワシは男じゃぞ！！？」

「お前の為にポエムも製作したんだ聞いてくれ」

「聞く気無いみたいね」

優子はどうやってこの場から退散しようか悩んでいた。

「太陽と向日葵」

出だしはやはりポエムのタイトルから。

やけに真剣な表情で読み進めているのがシニールである。

「気がつけばいつもおまえの姿を追っている」

二人とも退散しようとしたのだが、そのフレーズが聞こえてきた瞬間、固まってしまった。

「思い出せばいつもお前の笑顔を求めてる

木下秀吉

たとえるならば俺は向日葵で

お前は俺を照らす太陽だ」

全身に鳥肌が立った。

逃げ出したいのだが、あまりのおぞましさに体が硬直し、身動きが取れない状況である。

「お前の輝きを追いかけて、俺は大輪の花を咲かせよう」

芝居掛かった口調ではなく、本当に真剣な想いを届けようとしているのは

理解できる……出来るのだが、物凄い拒絶反応が発生する。

「この気持ちを上手く言葉に表す言葉を知らないが」

出来れば伝えなくてくれと、秀吉は残された思考回路を全開にして退散しようと

体中の神経細胞に呼びかける。

「それでもお前に伝えたい、好きだ木下秀吉お前のことが――

MAJ IでZOKKON、LOVEしてる」

その瞬間、秀吉の中の決定的な何かが切れた。

「すまぬ……」

「気にするな、同姓かつ醜悪な面に迫られて真剣な表情で告白されたら誰だって

悲鳴を上げるに決まってる」

「おまけにポエムまで聞かされてた訳だし」

【お前は俺を照らす太陽だ】というフレーズが聞こえた瞬間、ほとんどのものが意識を手放したのだ。

直接聞かされていた秀吉や隣で聞いてしまっていた優子のダメージは計り知れないだろう。

「隣で聞かされててあまりのおぞましさに硬直しちゃったわ」

「まあ、その後の秀吉の発言で泣きながら退散しちゃったわけだけど。

点数を上げたから実力を試したかったのに」

「…………あの発言については忘れてくれ、頼む」

「『ワシには百合子という心に決めた女子が居るのじゃ』」

教室に居た全員が一斉に復唱し、秀吉が頭を抱えて悶絶した。百合子の態度が普段と変化してない点もなんだか微妙であった。もともと、明久と翔子だけが何かに気がついていたようだが。

「で、どうすんだ。この状況」

「順当に考えて久保を投入するべきだな。頼まれてくれるか？」

「まあ、構わないが……行こうか、中林さん」

「え、ええ!!」

久保のペアの相手は中林だった。肝試しのペアを決める時に中林が突貫して、特にこだわってなかった久保が了承した為である。

「久保なら男子からの告白も無い上に叫び狂うような事態も起きないだろう」

「常川先輩もいないしね」

「おい、明久。常川じゃなくてモヒカン先輩だろ」

「どっちも違いますよー木戸さんですよー」

混ざってる 見た目 誰？のコンボ発生。

「鈴科さん、それも違うわよ。しかも何で木戸なの？」

「……………し、知り合いに似ていたので間違えちゃいましたあ」

世の中には三人同じ顔が居するというが、間違える要素がおかしい気がする。

「……………意外ですね、二年の男子は雄たけびを上げるだけだと思いましたか」

「まあ、魅力的でしょうが叫ぶほどではないので」

「そ、そうよ。久保君は他の男子とは違うのよ」

「むしろ全裸を覗いたんですよ、その程度で理性を崩せる訳がない」
『い』

久保が壊れた……………微妙に正常な方向へと。

ちなみに百合子は多少罪悪感を感じている（明久の事を除けば真面目だったという点は評価していた）。

中林は思い出して叫びそうになったのだが、口を手で塞いで堪えた。

『……………さ、流石に見せるのは躊躇われますね。どうぞお通り下さい』

『では、遠慮なく』

クールにその場を後にする久保だったが、先ほどの台詞のせいで色々台無しである。

その後も色々脅かす為の攻撃が行われていたのだが、まったく意に介さずあつという間に
チェックポイントに到達していた。

「なんとか突破したみたいだな」

「後は、撃破してくれるのを祈るばかりだよ」

雄二の安堵に対して明久が同意する。

もし、これが上手くない場合、翔子と百合子での突入を敢行しなくては

もはや勝ちの目が見えなさそうである。

雄二が（翔子に）説得をする必要がある為、あまり頼りたくない手である。

『葵を突破する男子が居るなんて』

『もしかしてブス専なのキミ』

『いえ、魅力的でしたが叫ぶほどではなかっただけですよ』

『仕方ない、キミを撃破しておけばほぼ勝ち確定しそうだし……
召喚獣召喚』

『『『『召喚獣召喚』』』』

四人の召喚キーワードと共に召喚獣が姿を現す。

―― Aクラス：寿湊：Aクラス：中曽根みさお：現代国語 28
7点 & 277点

受験用に特別難しかったのか、はたまたトップクラスが不在だったのか、300を超える

点数の持ち主はどうやら居ないようだった。

召喚獣も一般的な雪女とハーピーである。

後は、久保と中林の点数次第なのだが……。

―― Aクラス：久保利光：Eクラス：中林宏美：現代国語 48
5点 & 68点

中林の点数はあまり期待していなかった、だが、久保の点数が思いのほか高かった事に驚いた。

『ちよ、ニア500つて、キミも吉井妹一派なの！？』

『いえ、自力ですが……坂本や吉井が奮闘するって情報を小耳に挟んだので努力しただけです。』

……… なんとなく、男子トップの座は渡せないのよ」

雄二・明久・土屋も大分点数を上げていたとはいえ、まだAクラス戦時の久保の点数の

領域には至っていない。

それでも、トップの座に少しこだわりがあるのか、努力をしていたらしい。

とはいえ急激な全体的な点数上昇には至らなかったらしいが。

召喚獣は久保が鳥の羽を纏った山伏姿の自分自身の姿で中林が橋を担いでいる姿である。

「久保君のは天狗で………」

「中林のは橋姫か？」

「せ、戦力にならない」

橋を重そうにしながらも抱えているシユールな召喚獣に一同啞然。しかもどれだけ操作しても降ろそうとしない酷い性能だった。

『ちよつと、何で私の召喚獣がこんな扱いなのよ!!』

小声で叫ぶという器用な行動をしながらも中林は自身の召喚獣について突っ込む。

ちなみに勝負は久保の腕輪の効果で一気に決まった。

問：47 Cクラス・2（後書き）

ヒッハー、やってしまった。

……てか、あまり人数が残ってない状況になってしまった。

Aクラスではギミックが少ないし別にいいかな？

では、また次回ノシ

問：48 Aクラス・1（前書き）

やっと投稿できた……話の内容を何度も試行錯誤しましたが、

これ以上は無理と判断したので、一旦これで投稿。

絶賛スランプ中。

ではどうぞ

問：48 Aクラス・1

「Aクラスはただ広いだけだから迷路か」

「手を施す暇が余りなかったんだろうな」

それでも途中で道が動いたり、壁から召喚獣がすり抜けて出てきたりと

様々なギミックが施されている。

もはやそれぞれの地点での対策は練られないとっていいだろう。

『上から来るぞ、気をつけろ！』

『いや、下からだ！』

『いやいやいや、正面から来るぞ！』

『後ろに決まってるじゃないか！』

かく乱目的なのかもしれないが、どこか間抜けな雰囲気で会話が響いてきている。

『『横』』

『何！？何故ばれた！！？』

「横以外の場所に意識逸らそうとすれば、必然的に横からの警戒するだろ」

そんなコントのような事を行っているうちに広いスペースでライトアップされたバトル場が見えてきた。

どうやらチェックポイントに辿り着いたらしい。

待ち構えていたのは、茂武と常村…… 本当なら常村の位置には夏川だったらしいのだが、傷心中で参加不可能。

『やっと来たか、まったくおせーんだよ。』

ま、お前らが最初の相手か、年季の違いを見せてやるからかか
つてこい』

『……常村先輩、体格がおかしく不是吗？制服がパツツンパツツンですよ』

『……気にするな、太ったんだよ』

どう足掻いても数分間だけで太る事などほぼ不可能だと思うのだが、明らかに中に何かを着ている状態……

「……脱げなかったのかよー！」「……」

「阿呆が」

それでもあの格好よりはビジュアル的にはマシである。

……パツツンパツツンなのはどうしても気になってしまっののだが。それはともかくとして、待機している先生は木村教諭…… ならば物理の勝負となる。

「さて、点数はどの程度かな？」

「確か、物理は得意科目でしたよ、あの二人は」

「姉さん、出番がないからって無理やり割り込まないで」

「得意であってAクラスなら300点はかていな。中林は期待で
きない事だし、

久保は文系だから厳しいだろうな。次の突入者は――」

―― Aクラス：久保利光：Eクラス：中林宏美：物理 288点
& 72点

「流石に苦手科目は上がりにくいのか――全員で向かおう、ど
うせ最後なんだからな」

いくら久保が優れた点数であっても、中林が大幅に足を引っ張って
いるので、
対抗出来よう筈も無い。

《鈴科さん、付き合ってください》

《死んでくれたらいいですよ》

「今、酷い遠まわしな拒絶を見た」

本人は毒舌的な意味合いで言った訳ではないだろうが、あつという間に撃沈し、

その後妙な集団に連行されていった。

言うまでも無くFFF団である。

「百合子ちゃん百合子ちゃん、相方さんが消えてしまったのでお願いしますー」

ちなみに先ほどの出来事のせいではなく、小暮のレオタード姿を見る為に特攻して撃沈した為である。

「こつちも居ねエから、別に構わねエよ」

画面の中では既に召喚が行われており、茂武の召喚獣は吸血鬼……

……どこかで見たような服装である。

常村の召喚獣は牛頭。

「モブの癖にD I。とは随分と間違ってるな」

「坂本、隠せてないわよ。○ I Oじゃないと」

「メタな発言かましてンじゃねエ」

―― Aクラス：茂武丁麻：Aクラス：常村勇作：物理 769点
& 412点

「高！？百合子や翔子さんには劣るけど高あ！！？」

「比べる対象がおかしいのはおいといて、妙に自信満々だったのはこの為か」

『ふん、精々粘るがいい後輩ども』

『お前、物まねしてるつもりだろうが、威圧感とか出せてないかな』

腕輪の効果を使うまでもなく、あっという間に沈めた。
点数差がアレでは明久の操作技術がないと対抗できないから仕方がないだろう。

「こっちにや翔子や百合子が居るんだ。負けは無い筈だ」

「けど、何かしら対策は練ってる筈だよ。相手も二人の事を分か
ってるんだから」

「数学だったら葉月も頑張れたのですが」

葉月は数学に点数を割かれているので他の科目は低め。
それでも理系科目である為200点以上は獲得しているのだが。

「よし、瑞希。行くわよ」

「は、はい」

（（不安だ））

百合子の特訓で強化された姫路と島田は点数的には大戦力だろう。だが、精神面にかなり不安がある。

「明久さん、頑張りましょう！」

「う、うん。葉月ちゃん大丈夫？」

明久と葉月、葉月の膝が笑っているのは武者震いなのか？

「……雄二、私たちも」

「仕方ない、行くとするか」

坂本夫妻、それ以上に言う事なし。

「私達の戦いはこれからだーですね」

「そこ、終わらせようとすんな」

二人揃って鈴科百合子——断じてこれがやりたかったただけではない。

念のため。

「さっそく分断されただけだ」

「なるほどな、失格になりやすそうな奴と組ませて脱落させよう
って魂胆か」

Aクラスに入って数分経った時に、四方の壁が動き回り、分断され
た。

その上であたりを確認したところ、島田しかいなかった為に、
百合子は島田と組みなおさざるを得ない状況になった。

ベクトル操作で破壊しながらいけば余裕だろうが、設備破壊は御法
度な上に、
破壊する時の音で失格になる。

「音のベクトルとか操作しないの？」

「本気で言ったら潰すところだが、んなチート技使ってクリアす
るなンぞ、」

大人気ねエだろオが」

確かにそうだ。

「そっちが怖いンなら、てめエだけ一時的に全部の感覚を遮断す
る事も可能だが？」

「いやいやいや、そんな反則行為はしたくないわよ」

怖がりである事を指摘されたのだが、大声で反論する事だけはなんとか堪えた。

一番戦力である百合子をこのような下らない理由で脱落させるのは駄目だと認識しているからだろう。

ついでに出来るだろうけど、冗談半分である事が見て取れたというのも理由の一つだ。

「そオいや、何か思う事ねエのか？」

適当に道なりを歩いていき、召喚獣が現れるたびにびくびくする島田を横目で見ながら、話しかける。

百合子自身、既に何も感じていないのだが。

「無いわけじゃないけど……ねえ」

百合子は自身に対する危害や侮蔑に対しては鈍感と言っていいぐらいに無関心だが、翔子と明久に関しては沸点が著しく低くなる。

「言ったところでどうこうなるわけでも無しだし……」

気にしすぎても葉月が気にしちゃうでしょ……それに」

「？」

「未来の義理の妹になるんだし、ギスギスするのもねえ」

完全に明久と葉月が籍を入れること前提になっているのだが、確か

によほど大きな

食い違いが起きない限り入籍確実だろう。

「あア、そオいやそうなるな」

「えーっと………」

「どど、どうしましょう」

一方、姫路と葉月は困り気味だった。

組んでいた相手とはぐれ、違う者同士なし崩し的に組みなおした。両方とも怖がり組みである、それもかなり重度な。

「チエ、チエックポイントにたどり着くまで頑張りましょう」

「そ、そうですね、姫路お姉さん」

このペアは精神力との勝負になりそうだった。

「……例え妨害があっても私と雄二は引き離せない」

「いきなり何を言ってるんだ翔子」

迷路の道が何度も変化する事に対してめげず、見事撃退する事に成功した翔子。

うやむやのうちに逸れても良かったのだが、しっかりと腕を組まれていた為、

出来なかった。

関節技ではないので無理にやれば解けただろうが、力尽くで振りほどくほど

嫌ではないので好きにさせているのだ。

「あらー逸れてしまいましたー」

「葉月ちゃん、大丈夫かなー」

せっかく、コンビ名を考えていたのに分散させられるなんて、と小百合は溜め息を付く。

鈴科百合子……ほとんど小百合が名前を吸収しているだけにしか思えないのだが。

「鈴科さん、とりあえず先に進んでいこう。どうなるにせよこう

なつた以上楽しむしかないし」

「うーん、葉月さんに申し訳ないですねー」

そう言いながらも道を進んでいく二人だった。

問：48 Aクラス・1（後書き）

次回はそれぞれの戦い。

多分、次もかなり時間が空く可能性が大です。

書きたい事が中々浮かんでこない現状……。

次回もお楽しみに

問：49 Aクラス・2（前書き）

今回、とうとう鈴科の実力が明らかに！！

ちょっとだけ明久に改変が入ってるけど、

これぐらいの怒り具合は許容範囲かなー。

問：49 Aクラス・2

「つ、着きました」

「と、到着です」

限界ギリギリの精神状態で到着した姫路と葉月。

落ちなかったのかよ、という考えをしながら茂武は二人を見る。

更に後ろには百合子と島田、雄二と翔子のペアまで揃っている。

一番落としたかった百合子・翔子を落とせていない事自体に歯噛みしつつ、

一行を睨みつけていた。

「よくたどり着いたな、褒めてやるよ」

「観察処分者や出来の悪い部類の癖に突破できたのはスゴいな」

「ちよつと待て、茂武！」

百合子が居る事に絶望しながら常村がラスボスっぽい台詞で話し出すが、

その流れをぶった切るような茂武の言葉に戦慄を覚える。

横目で百合子の様子をチラチラと伺いながら。

「つつても、一部の連中は十分に優秀だから一部を除いて落ちこぼれと言った方が

妥当だろうけどな」

意外にも百合子は落ち着いていた。
特に周囲が歪んだり、妙な現象が発生する事態は起こっていない。
その代わりに、ただただ顔に薄い陰のある笑顔を浮かべているだけである。

「あまり仕掛けがありませんね」

壁から飛び出てくる召喚獣に驚きもせず小百合はスタスタ歩いていく。

明久は置いていかれないようにカメラを持ちながら大きな音を立てないように歩き、小百合の横を確保し続ける。

「でも迷路が入り組んでいて、壁が動いてずっと同じ場所だけ

回らされてるような感じがするよ」

それ以前にこの迷路自体が入り組んでいるので、かなり迷っているのだが、

それにしても、まったく怖くないのだろうかと明久は疑問に思う。

先ほど、教室内では嬉しそうに悲鳴を上げていたので幽霊に対してはかなりの耐性があるのだろうか。

入院中とっていたので、入院中にずっとホラー映画でも見ていたのかもしれない。

想像するとかかなり怖い状況である。

「ん、ようやく出口だね」

そして、同時に会話まで聞こえ始めてきた。

『よくたどり着いたな、褒めてやるよ』

『観察処分者や出来の悪い部類の癖に突破できたのはスゴいな』

『ちよつと待て、茂武！』

「僕、まだ突破してないよね」

観察処分者はゼロの筈なのだが。

「ほうほう、酷い殿方ですねー。人を馬鹿にするのは構わないですけど」

普通は心だけにとどめておくのが礼儀ですよ？」

「この位置から言っても聞こえないと思うんだけど」

明久は苦笑する。

楽しいイベントに水を差されたようで鈴科は多少不機嫌になっている。

とぎられてしまったが、常村の言葉の演出自体は最終決戦という感じだ。

盛り上がる事間違いなかっただろう。

陳腐な言葉だとしても、祭り効果ではそれが楽しい意味合いに変わるのだから。

『つつても、一部の連中は十分に優秀だから一部を除いて落ちこぼれと言った方が』

妥当だろうけどな』

「百合子とか翔子さんとか姫路さんとか」

「成績だけ見るなら優秀な方はたくさんいらっしゃいますよねー。

葉月ちゃんもそうですし」

平均点近く獲得できて落ちこぼれである事は見返しているはずなのに、

こうまで馬鹿にされ続けているのが納得いってない明久だが、言葉よりも実際に行動で示した方がいいだろうと、心で整理して完結させていた。

『まったく、あんのクスFクラスのような底辺と観察処分者は迷惑以外のなにものでも』

『『どうしてそんな酷い事言えるんですか（のよ）！！！！』』

「葉月ちゃん？」

「姫路さんと島田さんも怒鳴ってますね」

鈴科と明久が顔を見合わせる。

明久やFクラスの全員の為に怒っているという事を実感しつつも、あんなに声を上げるとは思えなかったという感覚で。

『点数以外にももっと色々な部分があるじゃないですか!』

『確かにウチも含めてFクラスは皆頭が悪いかもしれないわよ、でもだからって。』

底辺呼ばわりする事無いでしょうが!』

『明久さんやFクラスの皆さんの事をよく知らないくせに馬鹿にするな!』

『おい、お前ら気持ちは分かるが大声を出すと失格だぞー!』

棒読みで大声を出す人をはじめて見た気がする明久と鈴科だった。

「姫路さんや島田さんは、怖いものが苦手っぽかったよね」

「そうですねー。でも、皆との思い出を残したいという意味でしょうか」と

チェックポイントまでたどり着いてましたね。途中の様子は分からなかったですが」

明久の様子をチラチラと見つっ、既に敵対者以外は誰も居ない空間を見る。

雄二も翔子も百合子も、ただ一人の人物に決着をつけさせる為だけにわざと失格になっていたのだ。

姫路と葉月、島田は言わずもがな、怒りの感情に任せて咆哮しただけだ。

『おい、常村！こいつら全員失格で良いよな』

『もう……………どうにでもなれ』

心なしが常村がやつれているような気がする。

百合子が行いそんな事を想定しすぎて精神が死亡寸前なのだろう。

……………見逃す対象である事は間違いないのだが。

「勿体無いよね、せっかく頑張ったのに」

「茂武さんは相方が味方じゃないという現状に気がつかれてるの
でしょうか」

通路の隙間から見えた光景、雄二が島田を、翔子が姫路を、百合子
が葉月を連れて
離れているところだった。

「……………やっぱり根っこの部分で完全に立派な兄妹ですよ、お
二方は」

「そう？誰だって頑張ってる人の努力を踏みにじるような奴は

嫌いだと思うけど」

そう言いながら明久は気を引き締めてチェックポイントへと向かう。
そんな明久に遅れないように鈴科も駆け足気味に同伴する。

「ようやく登場か、馬鹿だけに迷路で何度も迷ったのか？」

「……………」

明久と茂武は互いに視線を交わす。

「動く迷路って新鮮ですけど、お客さんに見せるには労力的に厳しそうですね」

「……………純粹な評価だな」

「だって一般のお客さんを驚かす時には二年生が中心ですよ？」

「一般公開にはまだ時間あるんだ、そこはオイオイ考えておけよ。」

僅か数日だとこれが限界なんだよ」

緊迫した空気とは対象に、こちらは純粹に迷路に対しての評論だった。

まあ、三年生自体は受験勉強の為に勉強しなければならない為、参加する暇は無いだろう。

今回の参加はあくまでも受験勉強の息抜きのような意味合いが強いのだから。

「御託はいいからさっさとはじめましょうよ先輩」

「そうだな、とはいえ少しハンデでもやろうか？お前物理は高くないんだろ？」

明久は全体的には高くなっているものの、流石に700点取れてる科目など存在していないのだ。

「ハンデ？別にいらないよ。アンタが馬鹿にした底辺に潰される

悔しさを味あわせてやるんだから、

全力でてくださいよ……まあ、わざとそうやって言って負けた時の言い訳にでもするんでしょうけど」

「……よく言った、操作技術じゃ越す事の出来ない圧倒的な實力を見せてやる」

「おい、吉井兄が吉井妹に見えてきたぞ」

「双子の兄妹ですしねー、根本で似てるんじゃないですか？」

二箇所で完全に空気が違ってきていた。

むしろ、明久と茂武の放つ空気が異常事態なのだが、突っ込む勇氣など無い。

「常村さん、空気を読んで邪魔しないようにしましょうか」

「ああ、こっちはこっちでやるか……いくぞ」

四人共に戦闘する準備完璧だった。

物理の教師が、召喚フィールドを形成する。

「」「」「召喚獣召喚！」「」「」

3 - A : 茂武丁麻 : 物理 769点

3 - A : 常村勇作 : 物理 412点

「消耗は無いみたいですね」

「は、当然に決まってるだろ」

「最初の戦いはほとんどワンサイドゲームですし、その後も戦ってませんかー」

三年二人の点数に変化は無い。

2 - A : 吉井明久 : 物理 201点

点数だけで見るなら明久が圧倒的に不利である。

「私の中々表示されませんね」

「鈴科さんの姿のままなのが気になるんだけど」

「普通に幽霊だと思いますよ？足が無い状態ですし、あ、出てきた出てきた」

1972年没 : 鈴科小百合 : 物理 416点

——その瞬間、時間は正常に動いているのだが、全ての時間が静止した。

問：49 Aクラス・2（後書き）

予測できた人、そうです！鈴科ちゃんは幽霊だったのです！！

ちなみにどうでもいいですが、学園長とのクラスメイトでもあります。

まあ、伏線を入れていたしね登場時とかに。

さて、次回からちょっと苦手な戦闘シーンだ。

頑張って執筆だースランプが中々直らない！。

ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079o/>

バグ&バカとテストと召喚獣

2011年4月16日22時18分発行